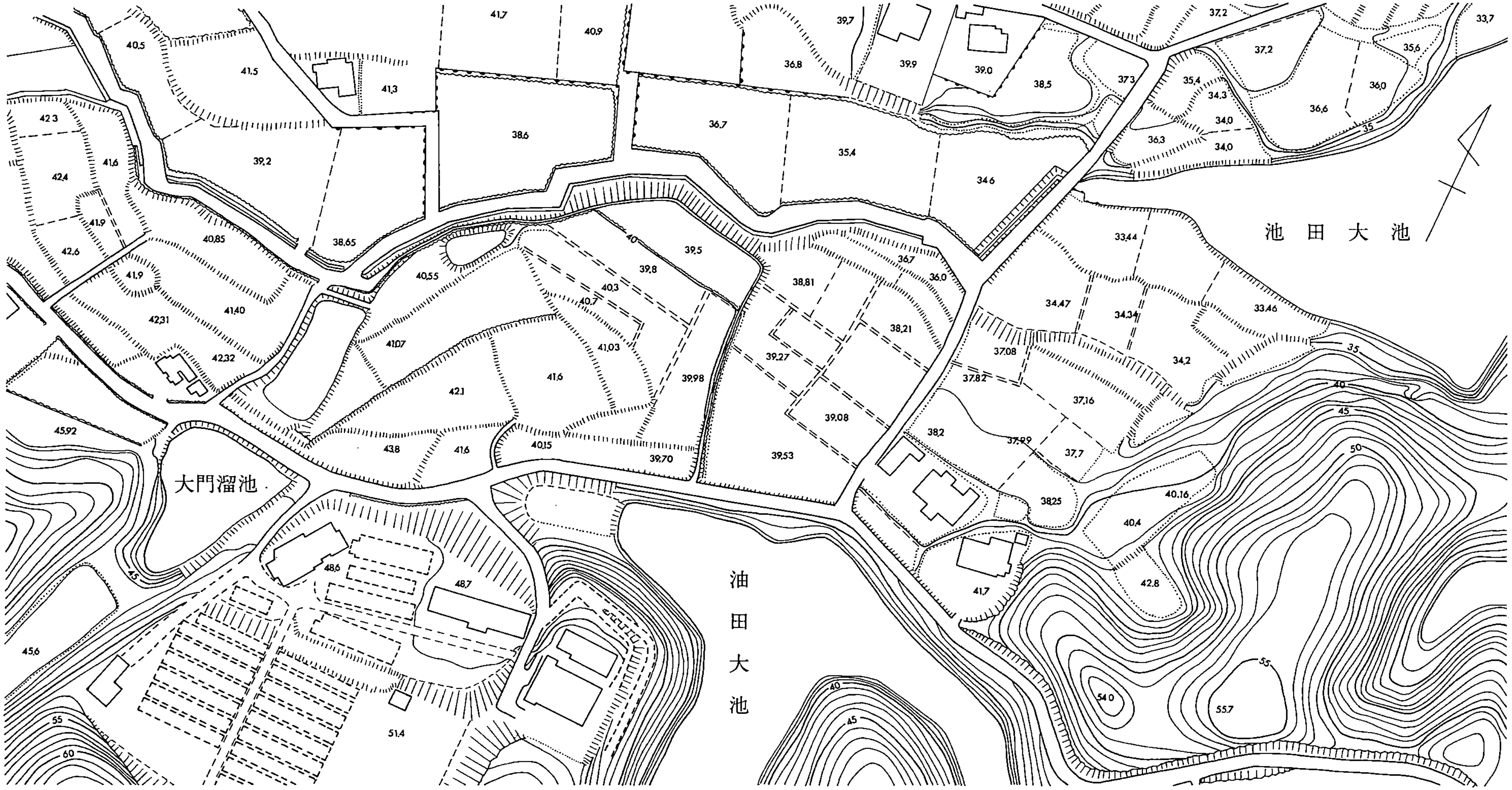
八木山バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

嘉穂郡穂波町所在遺跡群の調査

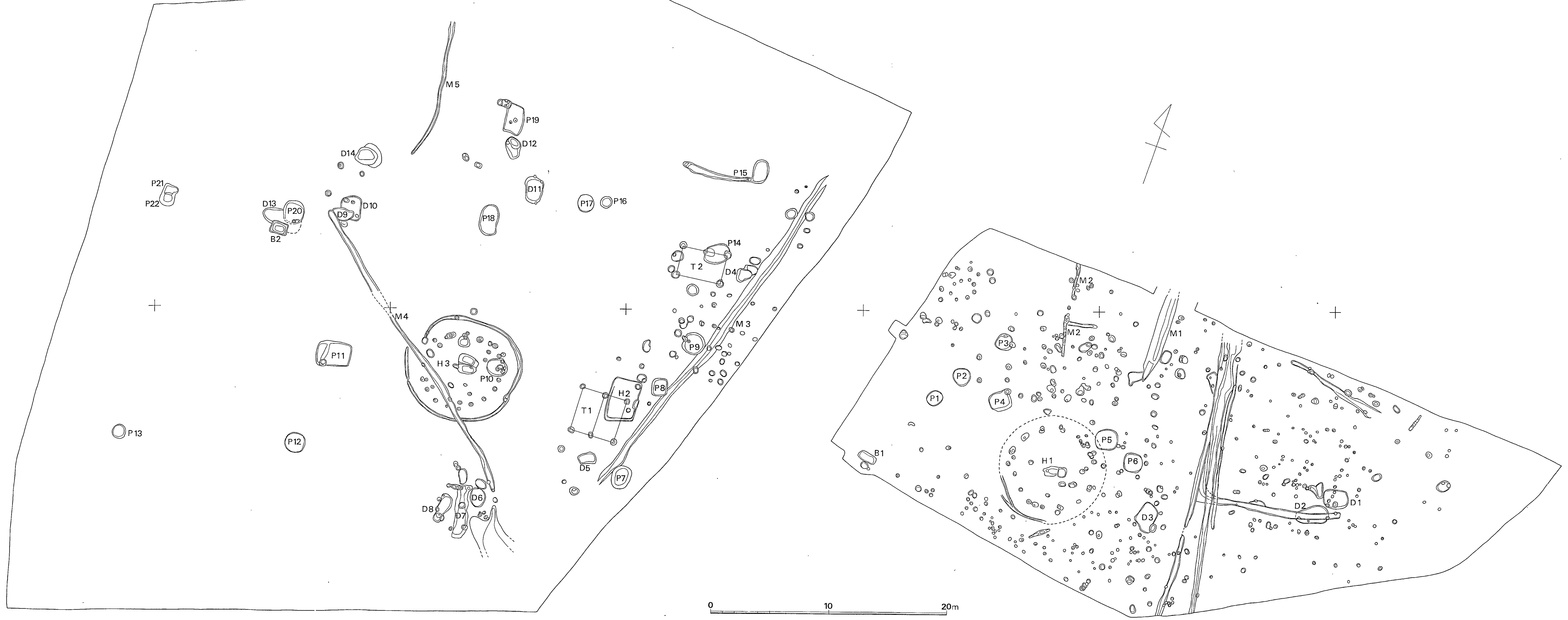
1983

福岡県教育委員会

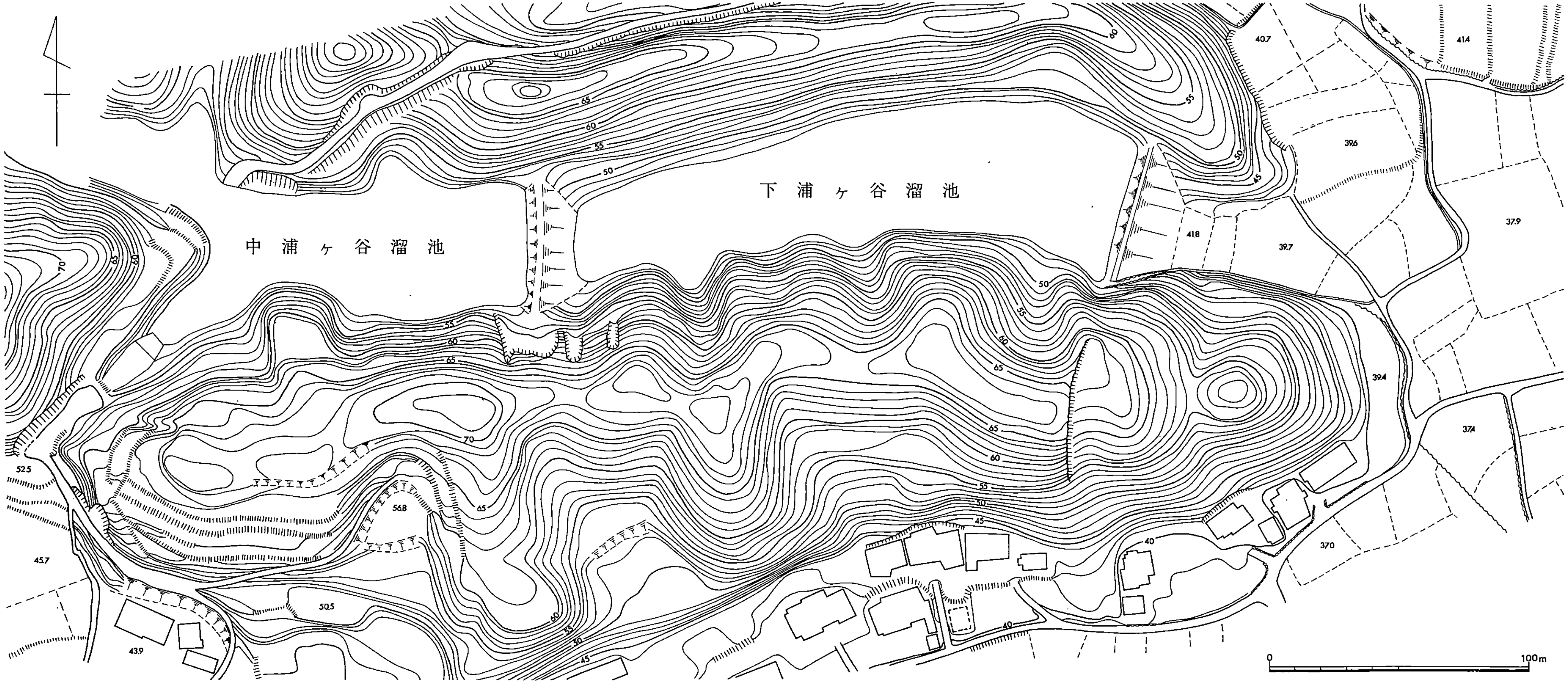


付図1. スダレ遺跡地形図（1/2,000）

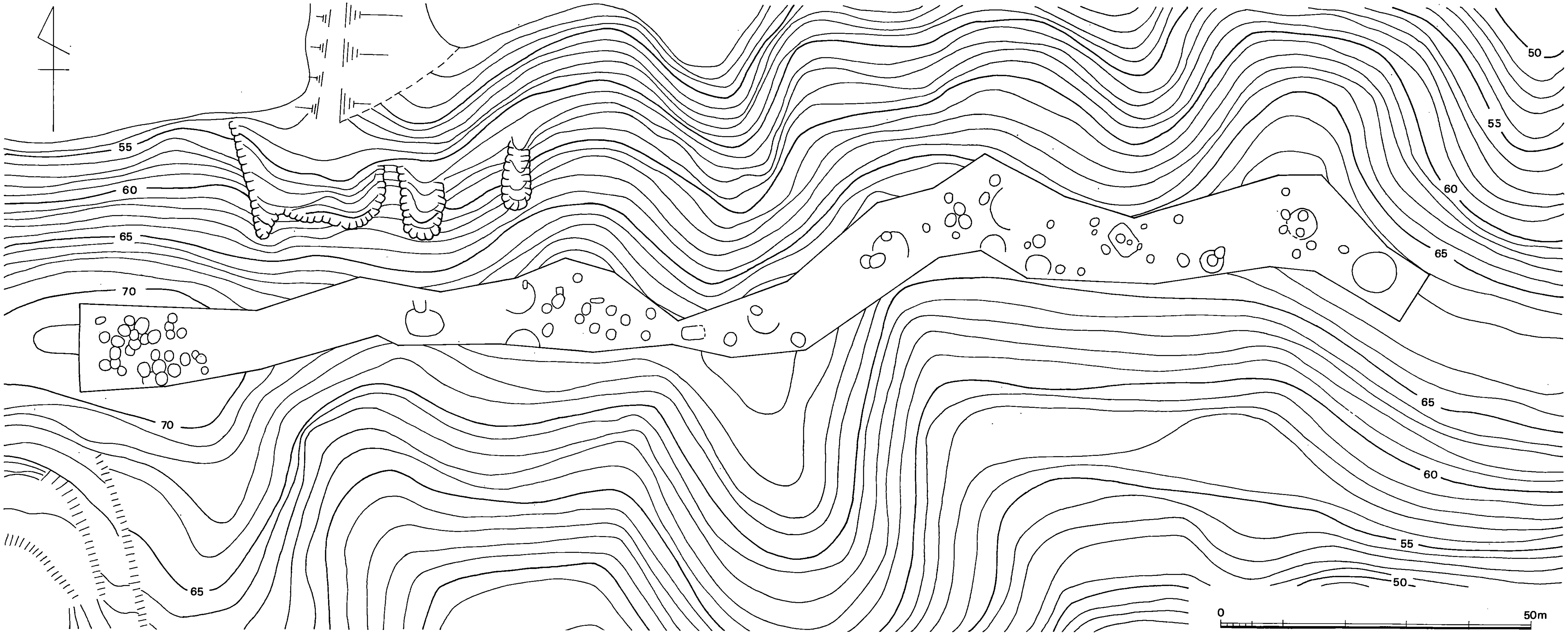
付図2．スダレ遺跡調査区（1/600）



付図3. スダレ遺跡遺構配置図（1/200）



付図4. ウラン山遺跡地形図（1/2,000）



付図5. ウラン山遺跡調査区（1/600）

付図6. ウラン山遺跡遺構配置図（1/200）

八木山バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

嘉穂郡穂波町所在遺跡群の調査

序

八木山バイパスは，国道 200号線バイパスの一部で，将来筑豊横断道路として，筑豊地区の産業や経済の発展に大きな期待を寄せられている主要幹線道路で，早くからその建設が望まれていました。

昭和53年度に路線が決定し，日本道路公団が建設計画を進めてこられたものであります。この間に，県教育委員会は協議を重ね，昭和57年度に公団から委託をうけて，この道路建設用地内に分布する埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

この報告書は，嘉穂郡穂波町に所在する２遺跡の発掘調査の記録であります。その内容は，弥生・古墳時代の集落跡や墓地等であります，本報告書が，学問研究ならびに文化財愛護の普及等にご活用いただければ幸甚に存じます。

また，本文中に記名した方々はもとより，種々ご協力いただいた関係各位に深く感謝いたします。

昭和58年6月10日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　　　　言

1．この報告書は，国道 201号線八木山バイパスの建設により破壊される遺跡の発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は，昭和55・56年度の予備調査を礎に，日本道路公団の委託事業として，昭和57年度に福岡県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は，福岡県教育委員会管理部文化課の浜田信也が担当し，付は同課の伊崎俊秋が担当した。

4．掲載図の実測図は，浜田と調査補助員の日高正幸が担当し，栗原和彦，石山勲,中間研志,新原正典ならびに高田一弘，平島文博の各氏に援助願った。遺物の実測は浜田が担当した。製図にあたっては，浜田のほかに手柴淳子，塩足里美の多大な援助があった。

5．掲載写真は，浜田が撮影し，遺物の一部は，九州歴史資料館の石丸洋氏にお願いした。

6．本書の編集は，浜田が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ．調査の経過……1

Ⅱ．位置と環境……3

Ⅲ．各遺跡の調査……17

1．スダレ遺跡……17

1．はじめに……17

2．遺跡の概要……17

3．遺構……18

1）.住居跡……18

2）.掘立柱建物……31

3）.竪穴……34

4）.土壙……46

5）.甕棺墓……57

6）.土壙墓……59

7）.溝……61

8）.小ピット群……63

4．遺物……65

5．結び……76

2．ウラン山遺跡……81

1．はじめに……81

2．遺跡の概要……81

3．遺構……82

1）.住居跡……82

2）.袋状竪穴……94

3）.土壙墓……125

4）.石蓋土壙墓……125

4．遺物……127

5．結び……132

付．穂波町所在長浦横穴の調査……135

図　版　目　次

スダレ遺跡

図版１　（１）　彼岸原丘陵俯瞰写真（南東から）
　　　　（２）　スダレ遺跡俯瞰写真（西から）・中央台地
図版２　（１）　調査区東側全景（東から）
　　　　（２）　調査区東側全景（西から）
図版３　（１）　調査区中央南半部全景（西から）
　　　　（２）　調査区中央南半部全景（東から）
図版４　（１）　調査区中央３号溝周辺（南から）
　　　　（２）　調査区中央北半部全景（東から）
図版５　（１）　調査区西側全景（東から）
　　　　（２）　調査区西側全景（西から）
図版６　（１）　１号住居跡（北から）
　　　　（２）　３号住居跡と４号溝（南から）
図版７　（１）　４号住居跡（北西から）
　　　　（２）　５号住居跡（北から）
図版８　（１）　６・７号住居跡（北西から）
　　　　（２）　８号住居跡（北から）
図版９　（１）　６～10号住居跡（北西から）
　　　　（２）　９号住居跡（北西から）
図版10　（１）　10号住居跡（北西から）
　　　　（２）　11号住居跡（北から）
図版11　（１）　12号住居跡（西から）
　　　　（２）　12号住居跡中央溝（東から）
　　　　（３）　12号住居跡中央溝西側溜桝（北から）
図版12　（１）　１号掘立柱建物と２号住居跡（南から）
　　　　（２）　２号掘立柱建物と14号竪穴
図版13　（１）　３号掘立柱建物（南から）
　　　　（２）　11号住居跡東側柱穴群（西から）
図版14　（１）　１号竪穴
　　　　（２）　２号竪穴

	(3)	3号竪穴
	(4)	4号竪穴
図版15	(1)	5号竪穴
	(2)	6号竪穴
	(3)	7号竪穴
	(4)	8号竪穴
図版16	(1)	9号竪穴
	(2)	10号竪穴
	(3)	11号竪穴
	(4)	13号竪穴
図版17	(1)	15号竪穴
	(2)	16号竪穴
	(3)	17号竪穴
	(4)	18号竪穴
図版18	(1)	19号竪穴
	(2)	20号竪穴
	(3)	21・22号竪穴
	(4)	23号竪穴
図版19	(1)	24号竪穴
	(2)	25号竪穴
	(3)	26号竪穴
	(4)	27号竪穴
図版20	(1)	4号土壙
	(2)	5号土壙
	(3)	6・7・8号土壙
図版21	(1)	9・10号土壙
	(2)	11号土壙
	(3)	12号土壙
	(4)	13号土壙
図版22	(1)	16号土壙
	(2)	17号土壙
	(3)	18号土壙
	(4)	20号土壙

図版23	（１）	15号土壙
	（２）	19号土壙
	（３）	甕棺墓（北西から）
図版24	（１）	１号土壙墓（北から）
	（２）	２号土壙墓（北から）
図版25	（１）	１号溝（南から）
	（２）	５号溝（南から）
図版26		弥生式土器
図版27		弥生式土器
図版28		弥生式土器
図版29		弥生式土器および土師器
図版30	（１）	打製石鏃
	（２）	磨製石鏃
図版31	（１）	石庖丁
	（２）	石庖丁
図版32	（１）	石剣
	（２）	石剣
図版33	（１）	石剣未製品
	（２）	片刃石斧
図版34		石器（石庖丁・石斧・砥石）
図版35		石器（砥石・石皿・磨石）
図版36	（１）	鉄斧
	（２）	鉄製品
	（３）	甕棺
図版37	（１）	１号土壙墓副葬品
	（２）	２号土壙墓副葬品

ウラン山遺跡

図版38	（１）	ウラン山遺跡調査区全景（西から）
	（２）	調査区全景（東から）
図版39	（１）	１・２号住居跡周辺遺構群（東南から）
	（２）	３号住居跡周辺遺構群（西から）
図版40	（１）	５～８号住居跡周辺遺構群（西から）
	（２）	９号住居跡周辺遺構群（東から）

図版41　（１）　10・11号住居跡周辺遺構群（西から）
　　　　（２）　調査区西端遺構群（東から）
図版42　（１）　１号住居跡（北西から）
　　　　（２）　２号住居跡（東から）
図版43　（１）　３号住居跡（西から）
　　　　（２）　４号住居跡（南から）
図版44　（１）　５号住居跡（南から）
　　　　（２）　６号住居跡（東から）
図版45　（１）　７号住居跡（南から）
　　　　（２）　８号住居跡と32～34号袋状竪穴（西から）
図版46　（１）　９号住居跡と37号袋状竪穴（北から）
　　　　（２）　10号住居跡（西から）
図版47　（１）　11号住居跡（西から）
　　　　（２）　12号住居跡（東から）
図版48　（１）　１号袋状竪穴
　　　　（２）　２号袋状竪穴
　　　　（３）　３号袋状竪穴
　　　　（４）　４号袋状竪穴
図版49　（１）　５号袋状竪穴
　　　　（２）　６号袋状竪穴
　　　　（３）　７号袋状竪穴
　　　　（４）　８号袋状竪穴
図版50　（１）　10号袋状竪穴
　　　　（２）　11号袋状竪穴
　　　　（３）　12号袋状竪穴
　　　　（４）　15号袋状竪穴
図版51　（１）　16号袋状竪穴
　　　　（２）　17号袋状竪穴
　　　　（３）　18号袋状竪穴
　　　　（４）　19号袋状竪穴
図版52　（１）　21号袋状竪穴
　　　　（２）　22号袋状竪穴
　　　　（３）　23号袋状竪穴

（４）　24号袋状竪穴
図版53　（１）　25号袋状竪穴
（２）　26号袋状竪穴
（３）　27号袋状竪穴
（４）　28号袋状竪穴
図版54　（１）　29号袋状竪穴
（２）　30号袋状竪穴
（３）　31号袋状竪穴
（４）　32号袋状竪穴
図版55　（１）　33号袋状竪穴
（２）　34号袋状竪穴
（３）　35号袋状竪穴
（４）　38号袋状竪穴
図版56　（１）　39号袋状竪穴
（２）　40号袋状竪穴
（３）　42号袋状竪穴
（４）　43号袋状竪穴
図版57　（１）　44号袋状竪穴
（２）　45号袋状竪穴
（３）　46号袋状竪穴
（４）　47・48号袋状竪穴
図版58　（１）　49号袋状竪穴
（２）　50号袋状竪穴
（３）　52号袋状竪穴
（４）　54号袋状竪穴
図版59　（１）　55号袋状竪穴
（２）　55・56号袋状竪穴
（３）　57号袋状竪穴
（４）　58号袋状竪穴
図版60　（１）　59号袋状竪穴
（２）　60号袋状竪穴
（３）　61号袋状竪穴
（４）　62号袋状竪穴

図版61	（１）	63号袋状竪穴
	（２）	65号袋状竪穴
	（３）	67・68・73号袋状竪穴
	（４）	69号袋状竪穴
図版62	（１）	70号袋状竪穴
	（２）	71号袋状竪穴
	（３）	73号袋状竪穴
	（４）	74号袋状竪穴
図版63	（１）	75号袋状竪穴
	（２）	77号袋状竪穴
	（３）	78号袋状竪穴
	（４）	79号袋状竪穴
図版64	（１）	80号袋状竪穴
	（２）	81号袋状竪穴
	（３）	82号袋状竪穴
	（４）	83号袋状竪穴
図版65	（１）	28・29・35号袋状竪穴
	（２）	45・46号袋状竪穴
	（３）	76～79号袋状竪穴
	（４）	81・82号袋状竪穴
図版66	（１）	55～61号袋状竪穴群（南西から）
	（２）	75・80～82号袋状竪穴群（南東から）
図版67	（１）	土壙墓（南から）
	（２）	石蓋土壙墓（南から）
図版68	（１）	石蓋土壙墓の石蓋除去後（南から）
	（２）	石蓋土壙墓の石材除去後（北から）
図版69		弥生式土器
図版70		弥生式土器
図版71		石器（石錘・石庖丁・石斧・砥石）
図版72		石器（石錘・磨石・砥石・石皿）・土製紡錘車

長浦横穴

図版73		長浦１号横穴と出土遺物

挿　図　目　次

第 1 図　穂波町周辺遺跡分布図（1/50,000）……………………………… 4
第 2 図　周辺遺跡分布図（1/15,000）……………………………………… 5
第 3 図　彼岸原出土の土器（1/6）………………………………………… 6
第 4 図　日上遺跡出土の土器（1/6）……………………………………… 7
第 5 図　彼岸原出土の石器 1（1/2）……………………………………… 8
第 6 図　彼岸原出土の石器 2（1/2）……………………………………… 9
第 7 図　スダレ遺跡出土の土器 1（1/6）………………………………… 10
第 8 図　スダレ遺跡出土の土器 2（1/8）………………………………… 11
第 9 図　スダレ遺跡出土の石器・鉄器（1/2）…………………………… 12
第 10 図　油田遺跡出土の土器 1（1/6）…………………………………… 13
第 11 図　油田遺跡出土の土器 2（1/6）…………………………………… 14
第 12 図　裏の谷遺跡の石棺（1/30）……………………………………… 15
第 13 図　ウラン山古墳石室（1/60）……………………………………… 16

スダレ遺跡

第 14 図　1号住居跡実測図（1/60）………………………………………19
第 15 図　2号住居跡実測図（1/60）………………………………………20
第 16 図　1・3号住居跡出土土器実測図（1/3）…………………………20
第 17 図　3号住居跡実測図（1/60）……………………………………折り込み
第 18 図　4号住居跡実測図（1/60）………………………………………22
第 19 図　5号住居跡実測図（1/60）………………………………………23
第 20 図　5号住居跡出土土器実測図（1/3）……………………………24
第 21 図　6・7号住居跡実測図（1/60）………………………………折り込み
第 22 図　6号住居跡出土土器実測図（1/3）……………………………25
第 23 図　8号住居跡出土土器実測図（1/3）……………………………25
第 24 図　8号住居跡実測図（1/60）………………………………………26
第 25 図　9・10号住居跡実測図（1/60）…………………………………27
第 26 図　9・10号住居跡出土土器実測図（1/3）………………………28
第 27 図　11・12号住居跡実測図（1/60）………………………………29
第 28 図　12号住居跡出土土器実測図（1/3）……………………………30
第 29 図　1・2号掘立柱建物実測図（1/60）……………………………32

第 30 図　3号掘立柱建物実測図（1/60）……33
第 31 図　2号竪穴出土土器実測図（1/3）……34
第 32 図　竪穴実測図1（1/60）……35
第 33 図　7号竪穴出土土器実測図1（1/3）……36
第 34 図　7号竪穴出土土器実測図2（1/3）……37
第 35 図　9～11号竪穴出土土器実測図（1/3）……38
第 36 図　竪穴実測図2（1/60）……39
第 37 図　14～19号竪穴出土土器実測図（1/3）……40
第 38 図　21～23号竪穴出土土器実測図（1/3）……41
第 39 図　竪穴実測図3（1/60）……42
第 40 図　24号竪穴出土土器実測図（1/3）……43
第 41 図　26・27号竪穴出土土器実測図（1/3）……44
第 42 図　土壙実測図1（1/60）……47
第 43 図　1・4～6号土壙出土土器実測図（1/3）……48
第 44 図　7・8号土壙出土土器実測図（1/3）……49
第 45 図　11号土壙出土土器実測図（1/3）……50
第 46 図　12・14号土壙出土土器実測図（1/3）……51
第 47 図　土壙実測図2（1/60）……52
第 48 図　15・16号土壙出土土器実測図（1/3）……54
第 49 図　20号土壙出土土器実測図（1/3）……55
第 50 図　甕棺墓実測図（1/60）……57
第 51 図　甕棺実測図（1/8）……58
第 52 図　土壙墓実測図（1/60）……59
第 53 図　1号土壙墓出土品実測図（1/3）……60
第 54 図　2号土壙墓出土品実測図（1/3）……60
第 55 図　溝出土土器実測図（1/3）……61
第 56 図　小ピット出土土器実測図（1/3）……62
第 57 図　小ピット出土および表採土器実測図（1/3）……64
第 58 図　石器実測図1（石鏃）（2/3）……66
第 59 図　石器実測図2（石剣）（1/2）……67
第 60 図　石器実測図3（石庖丁・片刃石斧）（1/2）……68
第 61 図　石器実測図4（石斧）（1/3）……69
第 62 図　石器実測図5（砥石等）（1/2）……70

第 63 図　石器実測図 6 （砥石等）(1/3) ………… 71
第 64 図　石器実測図 7 （石皿等）(1/3) ………… 72
第 65 図　石器実測図 8 （磨石）(1/3) ………… 75
第 66 図　鉄器実測図（1/2） ………… 75
第 67 図　嘉穂地方の磨製石鏃（1/2） ………… 77
ウラン山遺跡
第 68 図　1 号住居跡実測図（1/60） ………… 83
第 69 図　2・3 号住居跡実測図（1/60） ………… 84
第 70 図　4・5 号住居跡実測図（1/60） ………… 85
第 71 図　4・6 号住居跡出土土器実測図（1/3） ………… 87
第 72 図　6 号住居跡実測図（1/60） ………… 88
第 73 図　8 号住居跡実測図（1/60） ………… 89
第 74 図　7・9 号住居跡実測図（1/60） ………… 90
第 75 図　10・11号住居跡実測図（1/60） ………… 91
第 76 図　9～12号住居跡出土土器実測図（1/3） ………… 92
第 77 図　12号住居跡実測図（1/60） ………… 93
第 78 図　袋状竪穴実測図 1 （1/60） ………… 96
第 79 図　袋状竪穴出土土器実測図 1 （5・8・9・13号）(1/3) ………… 97
第 80 図　袋状竪穴実測図 2 （1/60） ………… 98
第 81 図　袋状竪穴出土土器実測図 2 （14号）(1/3) ………… 99
第 82 図　袋状竪穴出土土器実測図 3 （17・20～24号）(1/3) ………… 101
第 83 図　袋状竪穴実測図 3 （1/60） ………… 102
第 84 図　袋状竪穴実測図 4 （1/60） ………… 105
第 85 図　袋状竪穴出土土器実測図 4 （25・26・28～30号）(1/3) ………… 106
第 86 図　袋状竪穴実測図 5 （1/60） ………… 107
第 87 図　袋状竪穴実測図 6 （1/60） ………… 110
第 88 図　袋状竪穴出土土器実測図 5 （39・44・48・55号）(1/3) ………… 111
第 89 図　袋状竪穴実測図 7 （1/60） ………… 112
第 90 図　袋状竪穴実測図 8 （1/60） ………… 114
第 91 図　袋状竪穴出土土器実測図 6 （63号）(1/3) ………… 115
第 92 図　袋状竪穴実測図 9 （1/60） ………… 117
第 93 図　袋状竪穴実測図10（1/60） ………… 120
第 94 図　袋状竪穴出土土器実測図 7 （76・78・79・83号）(1/3) ………… 121

第 95 図　土壙墓実測図（1/30）……………………………………………………… 125
第 96 図　土壙墓出土土器実測図（1/3）…………………………………………… 125
第 97 図　石蓋土壙墓実測図（1/20）………………………………………………… 126
第 98 図　石器実測図 1 （1/2）……………………………………………………… 127
第 99 図　石器実測図 2 （1/3）……………………………………………………… 128
第 100 図　石器実測図 3 （1/3）…………………………………………………… 129

長浦横穴

第 101 図　長浦横穴実測図（1/60）………………………………………………… 135
第 102 図　長浦横穴出土埴輪実測図（1/3）……………………………………… 136
第 103 図　長浦横穴出土玉類実測図（1/1）……………………………………… 137
第 104 図　鉄器実測図（1/2）………………………………………………………… 138

付　図　目　次

付図１　スダレ遺跡地形図（1/1,000）
付図２　スダレ遺跡調査区（1/600）
付図３　スダレ遺跡遺構配置図（1/200）
付図４　ウラン山遺跡地形図（1/1,000）
付図５　ウラン山遺跡調査区（1/600）
付図６　ウラン山遺跡遺構配置図（1/200）

表　目　次

表　1　竪穴一覧表……45
表　2　土壙一覧表……56～ 57
表　3　石器計測一覧表……73～ 74
表　4　袋状竪穴一覧表……122～124
表　5　石器計測一覧表……130
表　6　玉類計測表……138

Ⅰ．調 査 の 経 過

一般国道 201号線は，福岡市を起点として筑豊地方の飯塚市・田川市を経て周防灘に面する行橋市に至り，北九州市を起点として南九州に至る一般国道10号線に接続する。いわば福岡県の北部を横断する重要な幹線道路である。近年の車社会の発展は，いうまでもなく交通の混雑をまねき，その対策として交通網の整備を図る必要が生じた。高速道路や一般国道バイパスの建設などはその対策の一つである。

ところで，今回建設する一般国道 201号バイパスは，九州縦貫高速自動車道路福岡インターから東に延び，将来には行橋市にまで延ばし，筑豊横断道路とし筑豊ならびに京築地区の産業，経済の高揚を図ろうとするものである。さらに，現国道は難所の一つである八木山峠を越えなければならず，冬季には積雪や凍結により，しばしば交通が規制されるなどの欠点があり，その改良が望まれていた。

建設省では，福岡県や地元の要望にそい，国道バイパスの建設を計画し，同バイパスのうち粕屋郡篠栗町と嘉穂郡穂波町間を有料化し，当区間を八木山バイパスとして、日本道路公団(以後道路公団）が建設することとなった。

昭和51年，福岡県教育委員会（以後県教委）は，道路公団の依頼により，同バイパス周辺の文化財等の分布調査を実施し，これをもとにルートの選定協議を重ね，昭和53年度に路線協議を県教委を通じ，文化庁に通知した。文化庁では，おおむねルートについては了承し，ルート内に遺存するものと考えられる８ヶ所の文化財包蔵地については，十分な事前調査を実施するよう回答してきた。これをうけて，道路公団と県教委では，本協議に入ることとなるが，昭和54年度初め，道路公団より同バイパスの事業計画等の説明を受けた。同年５月には，８ヶ所の包蔵地が広大であり，かつ大半の地区が山林や原野であるため，予備調査を実施して包蔵地の内容・規模（範囲）等を把握し，本調査に必要な資料を得ることで協議が進められ，トレンチの設定個所や面積を提示した。しかしながら，用地の買収が遅々として進まず，当該地区の立ち入りについてもままならず，その後現地に赴き，文化財行政サイドからの説明会などを開くなどして，予備調査の実施に向けて地元の協力方をお願いした。この結果，昭和55年１月には最終的な協議行い。３月に県教委が道路公団から委託をうけて予備調査を実施することとなった。

予備調査は，昭和55年３月10日から３月19日に，スダレ遺跡を中心とする椿地区と津原・舎利蔵地区の平地部にトレンチを設定し予備調査を実施した。その後，同年９月１日から９月６日の間にウラン山地区の丘陵で，４地点８本のトレンチを設け，さらには舎利蔵集落の南西丘

陵頂部に２本のトレンチを設け予備調査を実施した。この間，地元の方々に文化財に関する資料の収集に努めた。

この結果，本調査を必要とする個所は，スダレ遺跡，津原遺跡，ウラン山遺跡の３個所にしぼられた。調査対象の面積はなおかつ広大であったが，県教委は本調査を実施する必要がある旨公団に通知した。

しかしながら，用地の買収は進捗せず，その後公団との別途工事の件で交渉はあったが，八木山バイパスに関しては本調査に向けての進展はなかった。

昭和56年度の後半に至って，道路公団より県教委に対して，昭和57年度に発掘調査を実施して欲しいとの依頼があった。その後数回にわたり協議を重ね，道路公団の要望にそい，本調査は，昭和57年度に道路公団と福岡県の間に，発掘調査の委託契約を締結し，県教委が調査を実施することとなった。

調査は，用地買収の終了した個所から実施することとし，津原遺跡から調査を始めることとした。調査は，昭和57年６月中旬になってからであった。まず，表土（耕作土）除去の作業を重機の投入によって始めたが，遺構に当らず，ついで数ヶ所にわたってトレンチ掘りを試みたが，遺構は検出されず，先の予備調査で得られた資料は，非常に浅いくぼ地に二次的に堆積した極めて少ない資料を得ていたもので，いずれも器面が磨滅した土器の小片であった。この様に，何ら遺構は検出されず，全面調査するまでもなく当遺跡の調査は終了した。

その後，７月５日にスダレ地区の調査に入った。調査対象地区は，ほとんど買収されていたが，約半分ほどの面積には稲が植えられ，この地区については，稲刈り後実施することとし，９月18日までに，おおむね東半部の発掘調査を実施した。

その後連続してウラン山地区の発掘調査に入ることとしていたが，例年にない長雨で立木の伐採・除去等の作業の進捗が思わしくなく，当遺跡の発掘調査に入ったのは９月29日からであった。当遺跡のある丘陵は細尾根で，平坦部は少なく，遺構は多くはないものと考えられていたが，住居跡や袋状竪穴等が多数発見され，調査期間も当初よりも長期になり11月16に終了した。

引き続き11月11日からスダレ遺跡の西半部の調査に入る。この地区は，東半部よりも比較的遺構の遺存度がよく，住居跡や竪穴・土壙等が検出された。発掘調査は，昭和58年１月８日に終了した。

この後，遺物の整理に専念し，報告書発行の準備に取りかかり，報告書の発行は昭和58年度頭初とした。

調査の関係者は次のとおりである。

総　括	福岡県教育委員会	教　育　長	友野　隆
	福岡県教育委員会管理部文化課	課　　　長	藤井　功

庶　務	福岡県教育委員会管理部文化課	庶務係長	内山　正
	〃	主任主事	長谷川伸弘
調　査	〃	調査二係長	栗原　和彦
	〃	主任技師	浜田　信也
	〃	調査補助員	高田　一弘
	〃	〃	日高　正幸

また，先の予備調査には，上記の者に加え，主任技師石山勲，同新原正典，同小池史哲，技師伊崎俊秋が実施した。本調査期間中には，主任技師中間研志および別府大学卒業生平島文博君の援助をうけた。

なお，発掘調査の作業員の斡旋にあたっては，椿区の佐伯悟，津原区の小室金男の両氏に多大な援助を願うとともに，作業にあたっても道路公団ならびに地元の方々に援助を受けた。記して感謝の意を表するところであります。

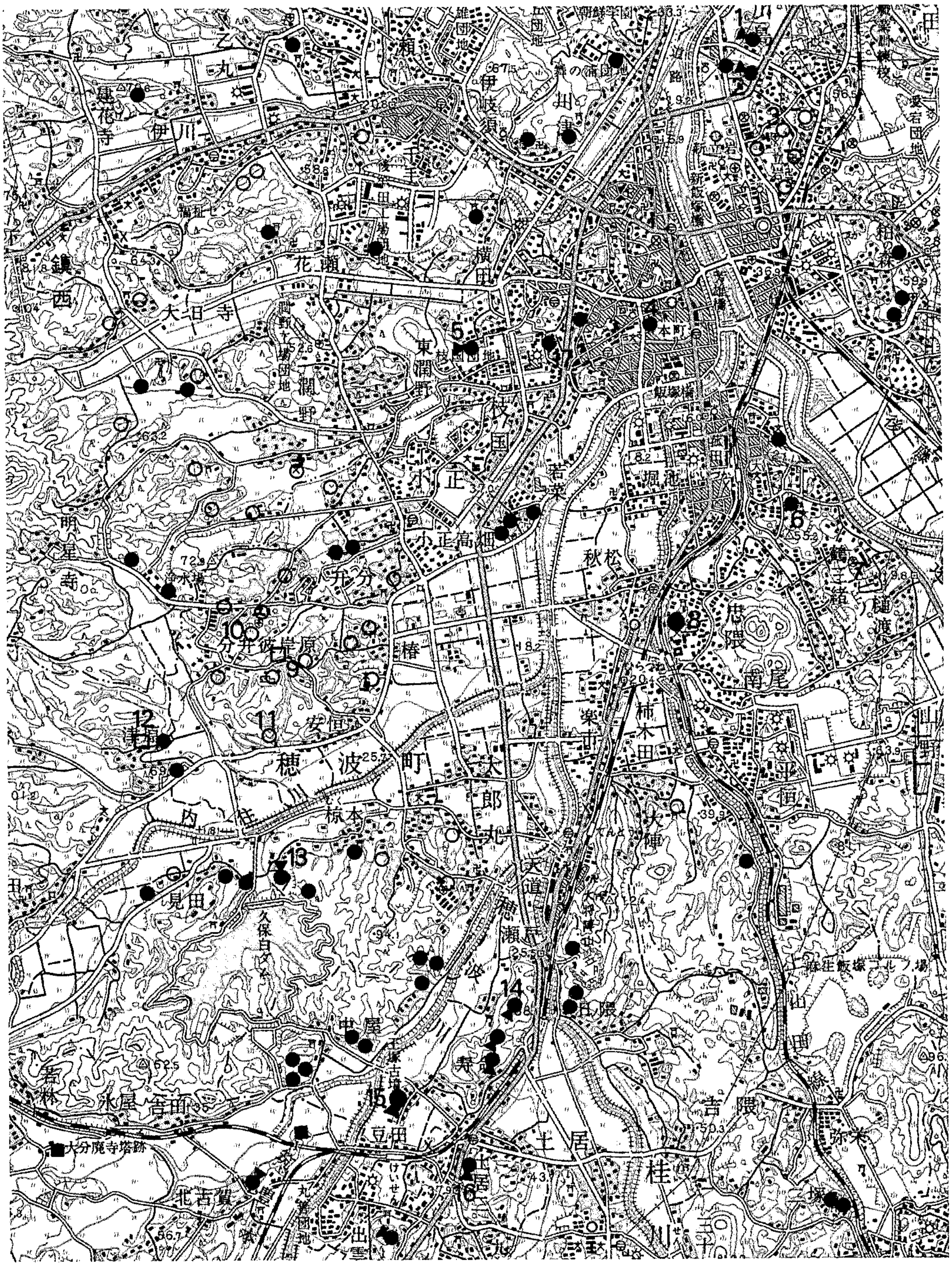
II. 位置と環境

今回，発掘調査を実施したスダレ・ウラン山の両遺跡は，福岡県嘉穂郡穂波町大字椿・同津原に所在する。

両遺跡の所在する嘉穂盆地は，ほぼ四方に山塊が走り，遠賀川の流域が開口部となる。遠賀川は玄海灘に流入し，その上流はいくつもの支流に分岐するが，当盆地では大きく穂波川と嘉麻川に分かれている。盆地の平地部は，両支流のつくる沖積地より成る。

当盆地における遺跡地は，それらの多くが丘陵地に所在する。例えば，弥生時代遺跡では，前漢鏡10面等を出土した立岩掘田遺跡，故中山平次郎博士によって報告紹介された立岩下の方の石庖丁製造跡があり，また弥生式土器編年研究で知られる東菰田遺跡，弥生期のものとしては本邦で初めての子持ち壺を出土したスダレ遺跡等がある。古墳時代では，前期の三角縁波文帯三神三獣鏡を出土した忠隈古墳や盤竜鏡・画文帯神獣鏡のほか多くの副葬品を出土した山の神前方後円墳がある。両者とも穂波町所在のものである。このほか特別史跡の王塚装飾古墳を中心とし，５基の前方後円墳を含む桂川町所在の古墳群や稲築町の石釧を副葬し割竹形石棺の沖出古墳等がある。

スダレ ・ウラン山遺跡群の所在する 丘陵群は，穂波町大字弁分，小正，椿，安恒，津原に広くある。龍王山塊の裾部から東に延びる丘陵端部にこれらの集落は所在する。東に延びる丘陵



第 1 図　穂波町周辺遺跡分布図（1/50,000）

1.寺山古墳　2.宮脇古墳　3.立岩掘田遺跡　4.櫨山古墳　5.山の神古墳　6.池田横穴群　7.鶴三緒横穴群
8.忠隈古墳　**9.スダレ遺跡**　10.日上遺跡　11.油田遺跡　**12.ウラン山遺跡**　13.森原古墳　14.金比羅山古墳
15.王塚古墳　16.天神山古墳　**17.長浦横穴**

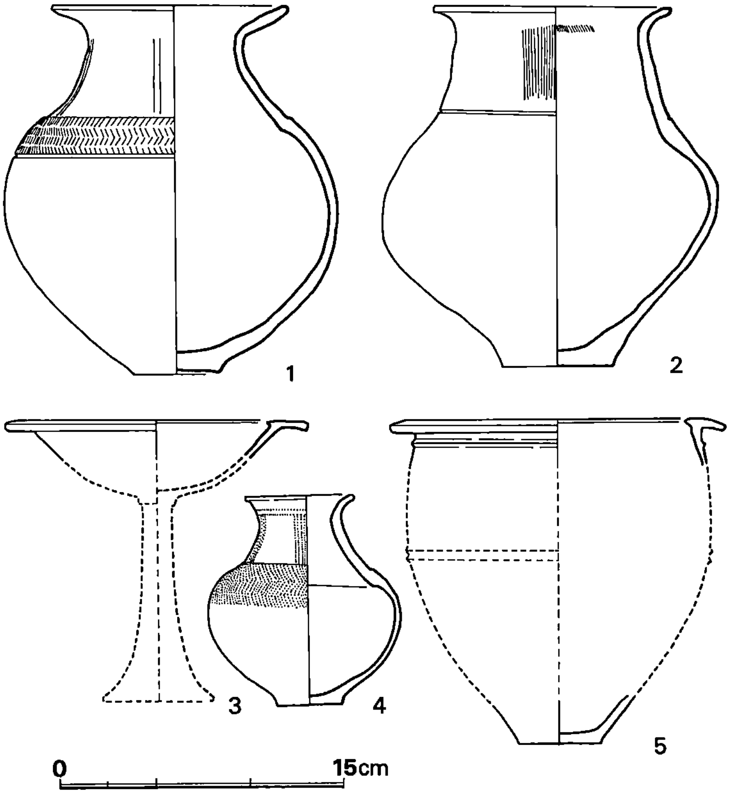
第 2 図　周 辺 遺 跡 分 布 図（1/15,000）

1.堂畑遺跡　2.かにが坂遺跡　3.労災病院遺跡　4.公舎遺跡　5.日上遺跡　6.弥生散布地　7.上ノ原遺跡　8.天神森遺跡　9.椿神社西方遺跡　10.弥生甕棺群　12.穂波西中学校遺跡　13.スダレ遺跡(墓地群)　14.スダレ遺跡(集落跡)　15.弥生散布地　16.大門遺跡　17.油田遺跡　18.弥生散布地　19.ウラン山古墳　20.ウラン山遺跡　21.津原古墳群　22.津原遺跡　23.裏の谷遺跡

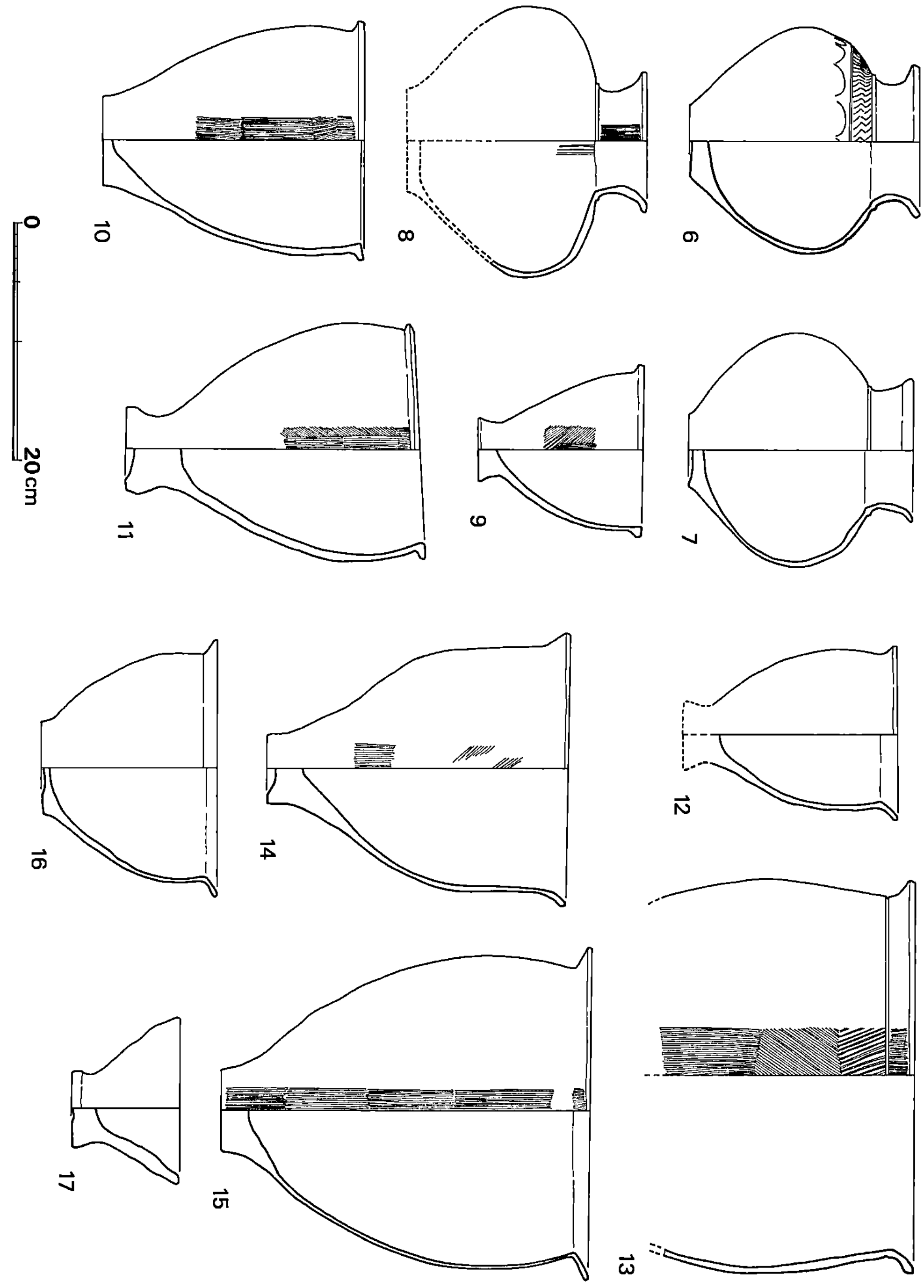
上は通称彼岸原といわれ，標高60～70mの台地状となり，この先端の弁分などは低台地状になる。これらの南面する丘陵上には多くの遺跡があり，上ノ原遺跡や労災病院遺跡などがあり，大きな谷地を狭んで南には，大字椿・安恒にある標高60m前後の丘陵群が独立丘状に広く展開し，南側は内住川のつくる沖積地を広く眺望できる。これらの丘陵群や裾部には，集落跡や墓地跡が所在し，北側の谷に面する丘陵や低地にスダレ遺跡が所在する。また，この丘陵群の西には，内住川の支流である明星寺川を狭んで，龍王山塊裾部から派生する津原の丘陵群があり，丘陵や裾部には集落跡や墓地があり，そのうちの一つが，今回調査することのできたウラン山遺跡である。当地域は，弥生前期から後期の遺跡が多数あり，飯塚市の立岩遺跡群と対比される貴重な遺跡群であり，立岩地域との相互関係が注目されるところであり，当地域の方が時期的にみてやや早くから生活場として開かれていたのではないかと思われる。

当地域では，これまで次の遺跡が知られている。

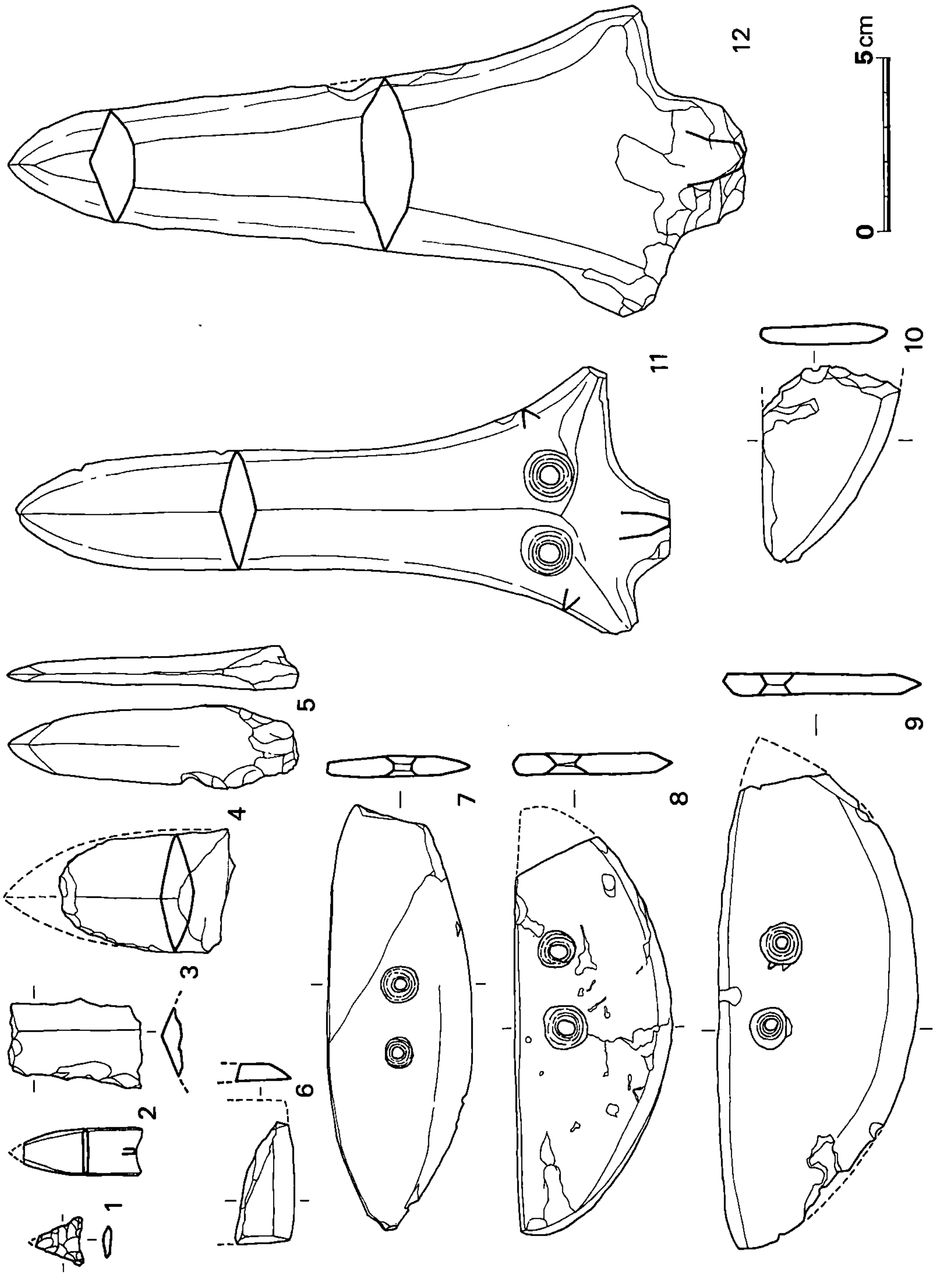
堂畑遺跡　大字弁分字堂畑に所在する。標高約24mの低丘陵の先端部に所在する。包含層より綾杉文を有す弥生時代前期の土器片が採集されている。このほか玄武岩製の石斧片が出土している。



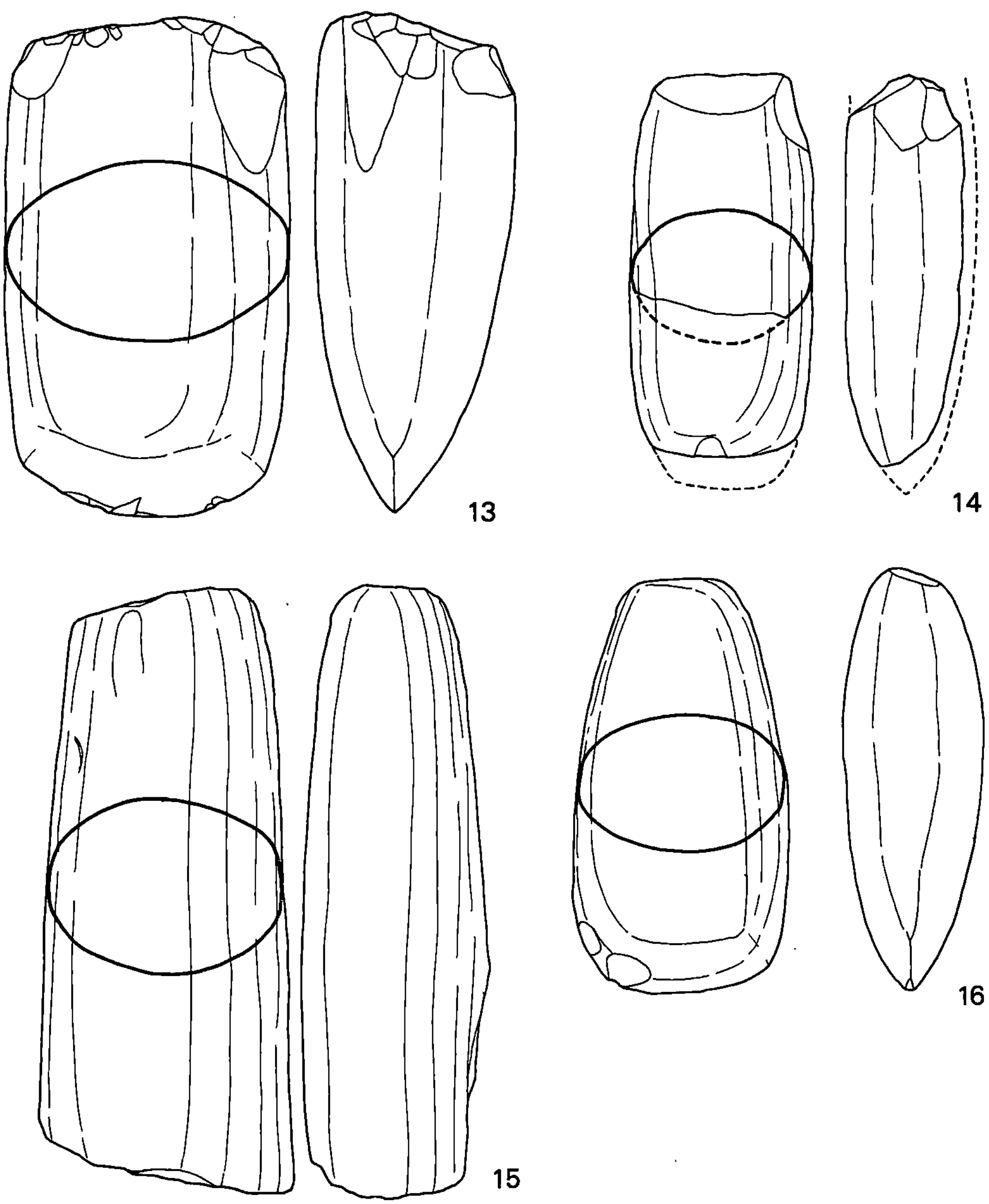
第 3 図　彼 岸 原 出 土 の 土 器 (1/6)



第 4 図　　日 上 遺 跡 出 土 の 土 器 (1/6)



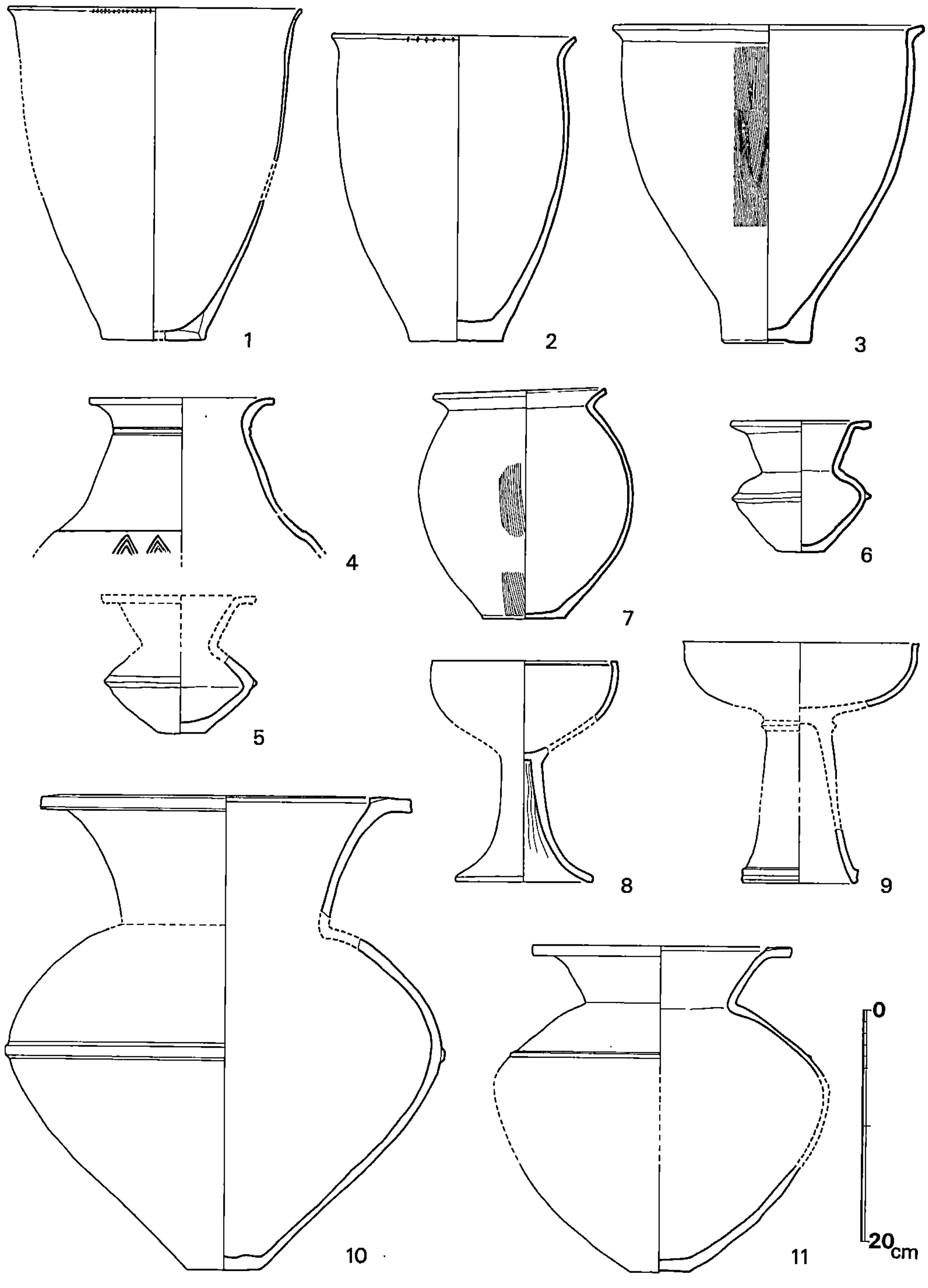
第 5 図　彼岸原出土の石器 1 (1/6)



第 6 図　彼 岸 原 出 土 の 石 器 2 (1/2)

かにヶ坂遺跡　大字小正字かにヶ坂に所在する。標高40～50ｍの丘陵のかにヶ坂溜池に面す南岸斜面に遺物包含層があり，弥生土器片が多数出土。

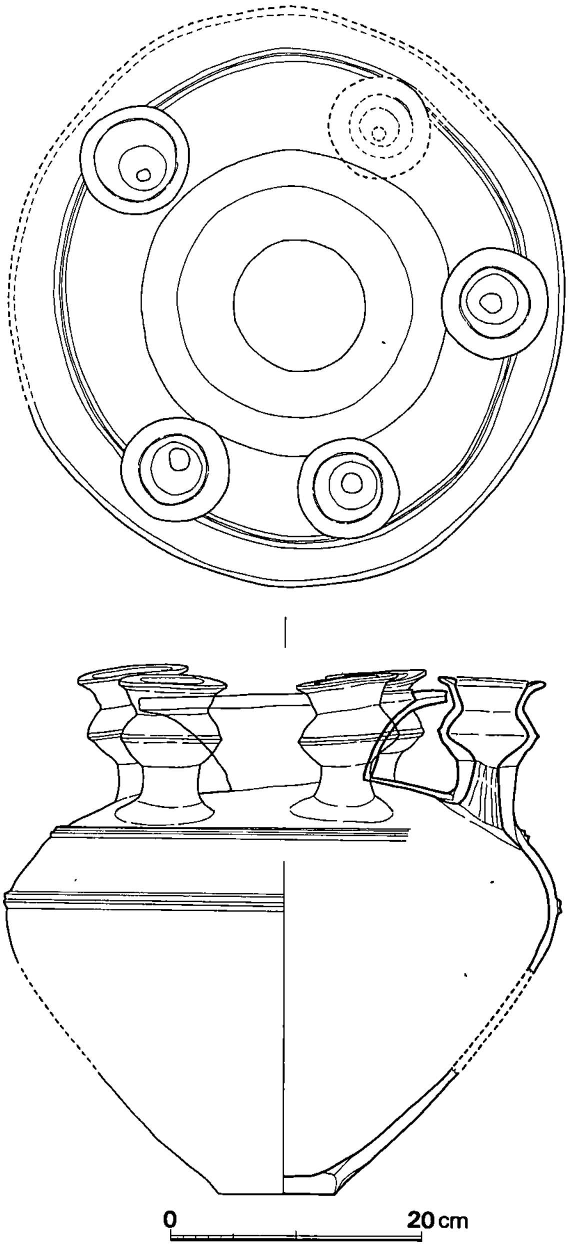
労災病院遺跡　大字弁分字献上に所在する。標高約60ｍのおおむね平坦なところにあり，南斜面には小谷が入りくんでいる。病院建設に係る整地工事の際に住居跡が確認された。弥生時代前期から中期の土器や石庖丁（第５図９）が出土している。



第 7 図　スダレ遺跡出土の土器 1（1/6）

公舎遺跡　大字弁分字献上に所在する。労災病院より 100mほど西の丘陵頂上付近にあり，病院宿舎建設の際に多くの遺物が発見された。前期の壺（第３図１）が出土している。

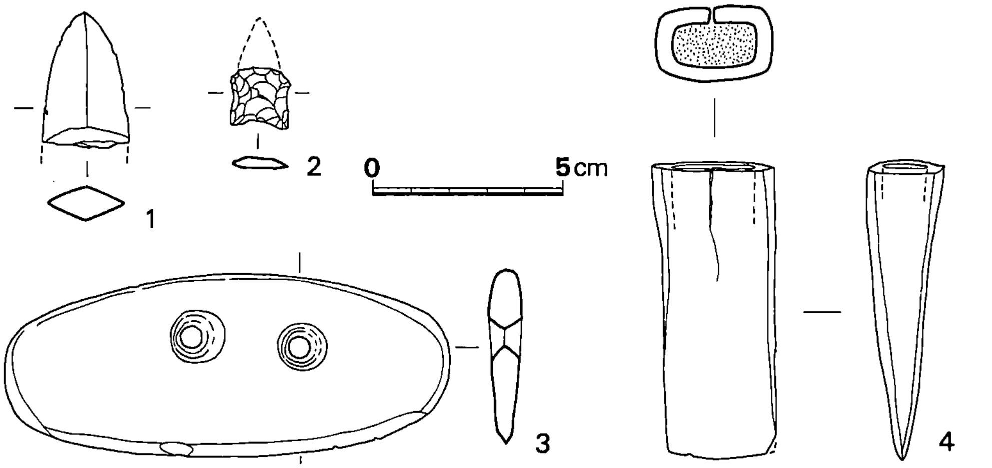
日上遺跡　大字椿字日上に所在する。昭和45年３月に採土工事に伴い県教育委員会が発掘調査を実施した。労災病院遺跡から南に延びる標高66mの丘陵頂部と緩斜面に遺跡が所在した。弥生時代前期から中期前半の住居跡（１）や貯蔵穴（17），木棺墓（３），土壙墓（５），甕棺墓（１）と円墳ならびに鎌倉末期から室町初期の火葬墓（５）が発見されている。遺物は弥生式土器((第４図）や石器（第５図１～８）が多数出土している。円墳は特殊な内部主体（平石敷の粘土床の長方形壙）であって副葬品等はなく，墳丘下より発見された楔形鉄斧が墳丘築造の上限を示すものと考えられ，古墳時代前期に属するものと考えられている。この他付近の傾斜面より前期の壺（第３図２）や小児用甕棺等が発見されている。



第８図　スダレ遺跡出土の土器２（1/8）

上ノ原遺跡　大字椿字上ノ原に所在する。谷部奥の南に面する丘陵平坦面にあり，標高約60m前後である。以前は整然とした茶畑が広がっていたが，現在は団地等が建設され，往時の環境はあまり残さない。団地建設の際に多数の袋状竪穴や遺物包含層が発見された。袋状竪穴等から弥生時代前期から中期の土器（第３図３～５）が出土している。

天神森遺跡　大字椿字有本に所在する。標高約36m前後の北に延びる丘陵の稜線にて，昭



第 9 図　スダレ遺跡出土の石器・鉄器（1/2）

和42・43年に袋状竪穴（5）や土壙墓（5），甕棺墓（1）と小ピット群が発見されている。弥生中期後半の土器が竪穴から，甕棺は中期後半の甕を2個あわせたものであった。

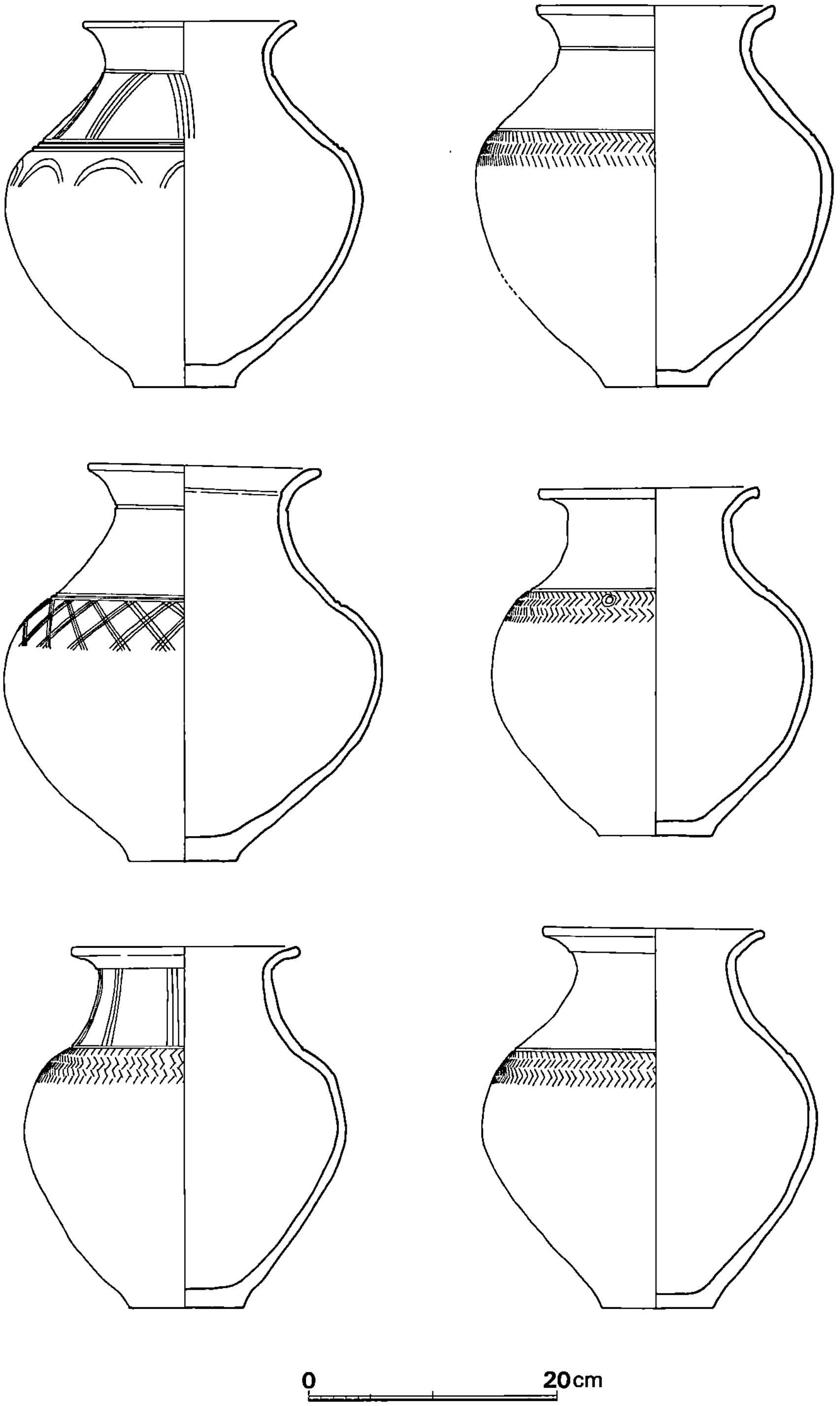
椿神社西方遺跡　大字椿に所在する。椿神社の所在する丘陵稜線の西側で，納骨堂附近の採土工事の際に，袋状竪穴や壺棺墓（中期後半）などのほか多数の弥生式土器片が出土している。

穂波西中学校遺跡　大字椿に所在する。標高約45mの丘陵東端に広く展開していたものと思われる。発見されたのは古く，学校敷地造成の際に弥生時代の遺物が発見されている。

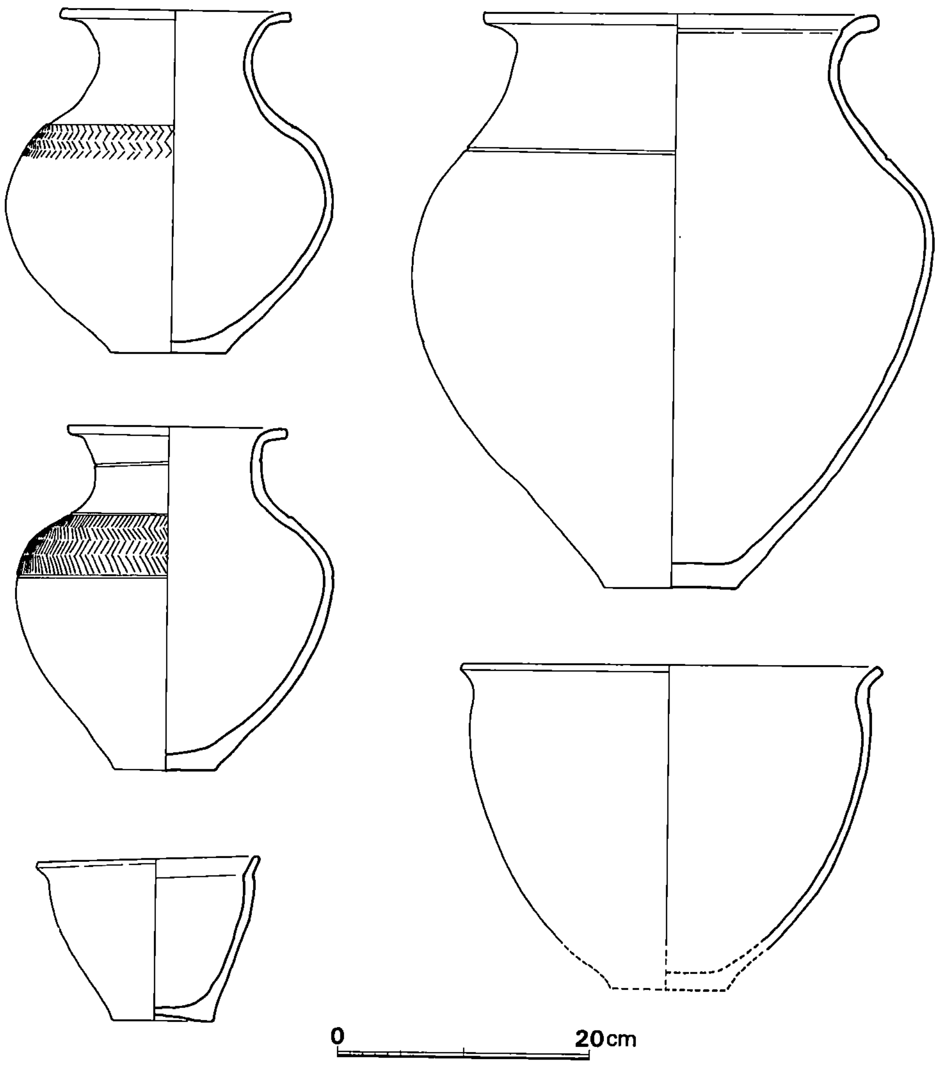
スダレ遺跡　大字椿字スダレに所在する。標高約52mの丘陵の西斜面とその裾部に展開する。昭和50年に採土工事により甕棺墓が発見され，穂波町教育委員会が発掘調査を実施した。発見された遺構は，住居跡2，貯蔵穴3，土壙墓・木棺墓55，甕棺墓15等である。弥生時代前期の集落と同中期の墓地が営まれ，その後中世になってV字溝が造られている。当遺跡では，埋葬人骨に石剣の切先（第9図1）が嵌入していたという。考古学的には稀少な出土例を見ることができた。また，土壙墓の供献土器として予持壺（第8図）が発見された。これは，弥生時代のものとしては，日本初例のものであり大いに注目を引いた非常に貴重な遺品である。また，弥生中期前半頃の鉄斧が採集されている。今回発掘調査した地区は，この遺跡に隣接する西側台地で，同じ字地区に所在することなど，地形的にみて同一遺跡として取り扱い遺跡名も同名とした。

大門遺跡　大字椿字大門に所在する。スダレ遺跡の西側の標高約70mの丘陵斜面遺物包含層で石戈（第5図11）が発見されている。また，この一帯から弥生後期の土器が発見されている。

油田遺跡　大字安恒字油田に所在する。内住川のつくる沖積平野に面する標高約50mの丘陵上に所在する。昭和40年に採土工事の際に発見されたもので，数基の袋状竪穴と弥生式土器



第 10 図　油田遺跡出土の土器 1（1/6）



第 11 図　油田遺跡出土の土器 2 (1/6)

や数少ない須恵器片も発見されている。中でも竪穴内に壺9，鉢2（第10・11図）の完形に近いものが環状に配した状態で発見されたとのことや黒曜石の剝片を多数出土した竪穴が発見されたことが，当遺跡の特徴といえよう。

ウラン山古墳　大字津原に所在する。津原の集落の裏手に東西に延びる丘陵の東端南緩斜面に所在する。墳丘の周囲はほぼ平坦をなす。開口部側はわりあい急な斜面となる。墳丘高約2m，径約10mほどの円墳である。石室は南に開口する複室の横穴式石室である（第13図）。その規模は，全長5.2m，奥室は長さ2.2m，幅2.2m，高さ1.8mを測る。

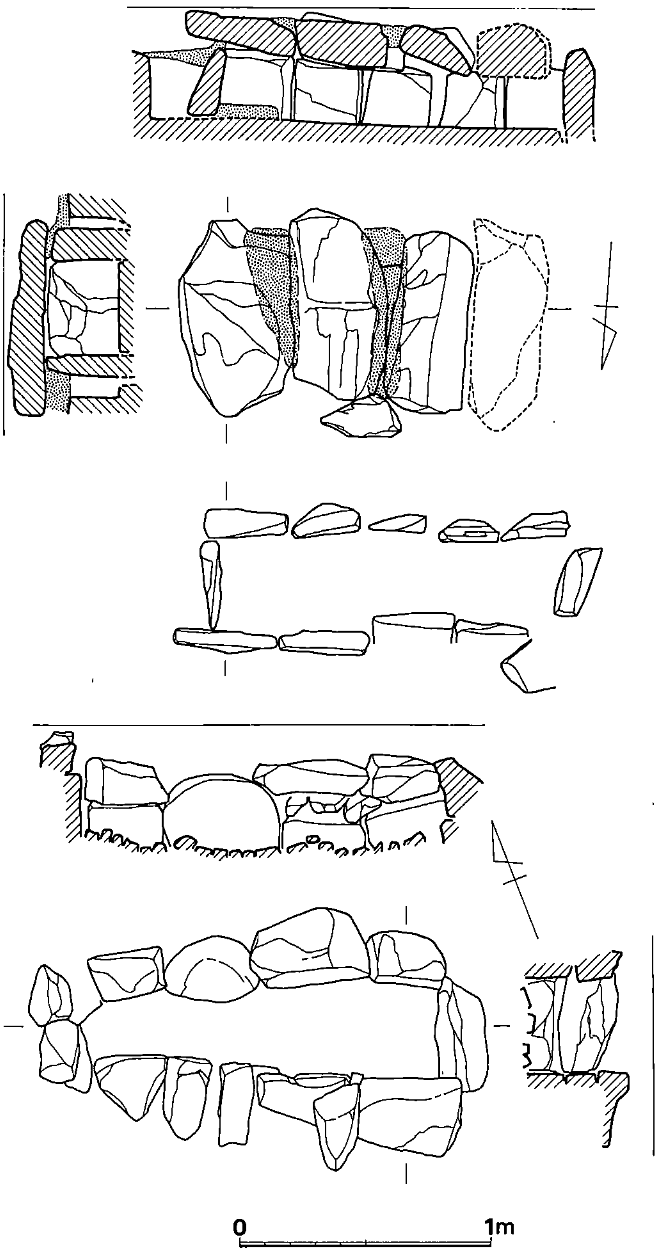
裏の谷遺跡　大字津原字裏ノ谷に所在する。通称ウラン山の丘陵西端の頂部で開墾中に

多数の石棺を発見した。昭和45年夏に残存する石棺の調査を実施した。２基の石棺内には副葬品はなく，１号棺より中年男性の人骨が発見された（第12図）。今回発掘調査した地区とは同じ丘陵線上にあり，一連の遺跡と思われる。今回の調査でも石蓋土壙墓１が発見されている。

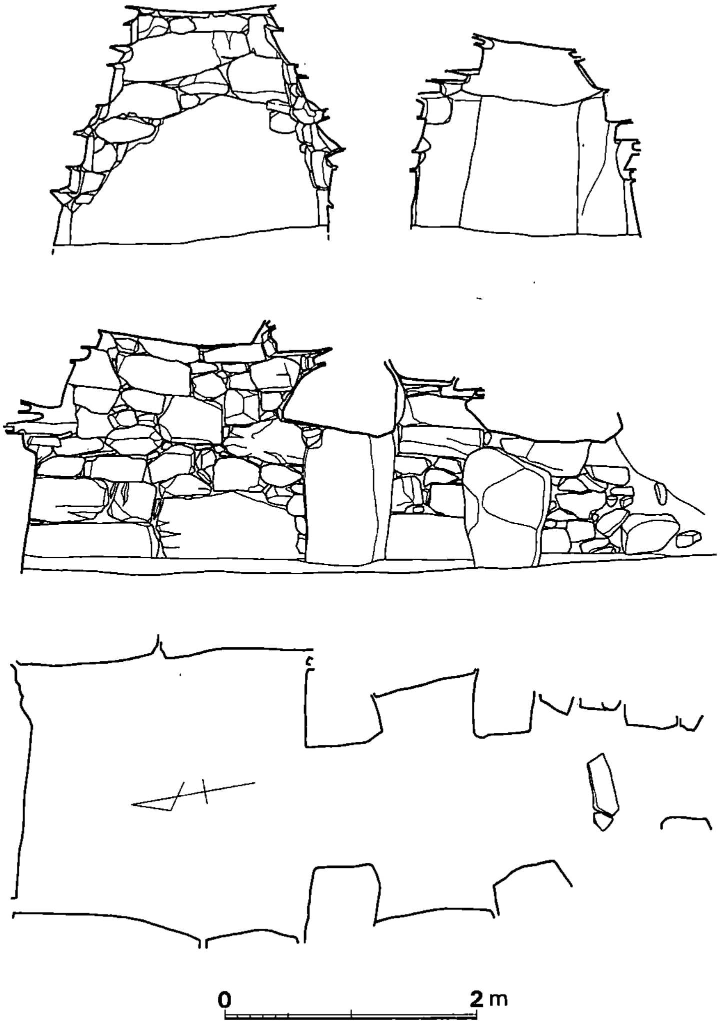
津原古墳群　大字津原の内住川に面する東西に延びる丘陵に所在する。７基の円墳群が確認されていたが，近年の団地造成工事により，全て破壊された。このうち３号墳は横穴式石室であったことが確認されている。

津原遺跡　大字津原に所在する。昭和33年津原古墳群の所在する丘陵の南裾部に県道付替工事を行いこの際，丘陵東端裾部で石蓋土壙墓３基が発見されている。土壙墓は長方形の壙を掘り，これに平石を数枚覆せ蓋としたものである。

以上，彼岸原周辺の主要遺跡の概要を記したが，この他にも未だ埋れた古代の生活跡が遺存するものと思われる。周辺では，あちこちで採土工事が行われており，それらの遺跡の発見があると思われる。十分な調査をして，それらの保護を図りたいものである。



第 12 図　裏 の 谷 遺 跡 の 石 棺（1/30）



第 13 図　ウ ラ ン 山 古 墳 石 室 (1/60)

なお，概要の記述にあたっては，下記の文献を参考とした。

「穂波町誌」　穂波町　1969年

「日上遺跡」　福岡県文化財調査報告書第48集　福岡県教育委員会　1971年

「スダレ遺跡」　穂波町文化財調査報告書第１集　穂波町教育委員会　1976年

Ⅲ 各遺跡の調査

1．スダレ遺跡

Ⅲ．各遺跡の調査

1．スダレ遺跡

1．はじめに

スダレ遺跡は，穂波町大字椿字スダレ・大門に所在する。池田大池のある谷を北に望む標高37～42mの低台地上にある。この台地により，北側の東西に延びる谷は，南に開口する油田大池のある谷と分断される。台地の北側の谷との比高差は，現況で3m程である。台地は西側が高く，東に徐々に低くなり，西端と東端の比高差は，約5m程である。現況は水田や畑地で，かなり開墾され，幾段にも整地されている。

周辺の遺跡では，北側の谷を挟んだ彼岸原の丘陵には，労災病院遺跡や日上遺跡があり，油田大池の西側丘陵では遺物包含地が確認されている。また，調査区の東側に隣接する丘陵（標高45～54m）では，先年発掘調査を実施したスダレ遺跡がある。

このさきに調査されたスダレ遺跡は，弥生時代の木棺墓や土壙墓などの埋葬施設を主体とする遺跡であるが，今回調査されたものと同時期の住居跡や竪穴もあり，位置的にも近隣するものであることから，今回調査地区も同名遺跡とした。いわば，今回が二次調査といわれるものであって，調査の対象が集落を主体とするところになった。

調査地区は，開墾をうけ，かなりの削平をうけ，各遺構の遺存状態はそれほど良好といえるものではなく，調査区東側地区の遺存状態がよろしくない。今回は台地の大半を発掘調査することになったが，台地の北側にも同様な遺構の所在は間違いないものと思われる。

2．遺跡の概要

今回の発掘調査では，住居跡，竪穴，土壙などが多く検出された。いわば集落跡であるが数基の埋葬遺構もある。

すでに記述したように，遺構の所在する台地は，西から東へ徐々に低くなるもので，これにあわせて，畑地を開墾し段畑状を呈し，さらに数回の町なおしや水路の掘さくにより台地の形状は大幅にかえられている。ために遺構の遺存状態もよくなく，住居跡は周壁が遺存していないものが多い。

遺跡は，弥生時代の住居跡や竪穴，土壙が全体的に認められ，これらの集落跡に続き，やや遅れて甕棺墓が台地の南側縁に施けられている。その後時期をあけて，古墳時代前半の住居跡や掘立柱建物などがつくられ，その後は中世代に至って土壙墓が施けられている。数条の溝は時期を判定しがたいが，中世代のものかと思われる。

遺跡は，弥生時代から中世までと続くが，その間にいくつかのブランクがあるが，これについては，隣接の遺跡との関連を充分に考慮する必要があろう。

3．遺　　構

遺構は，住居跡12，掘立柱建物3，竪穴27，土壙21，甕棺墓1，土壙墓2，溝4と小ピット群がある。これらの遺構は，それぞれが集中して遺存せず，全体的に散在するものであるが，土師器を伴う住居跡については，調査区の西にある。また，溝は数条が確認されているるが，農業水路が多く，古代のものは4条であって，これについては番号を付している。

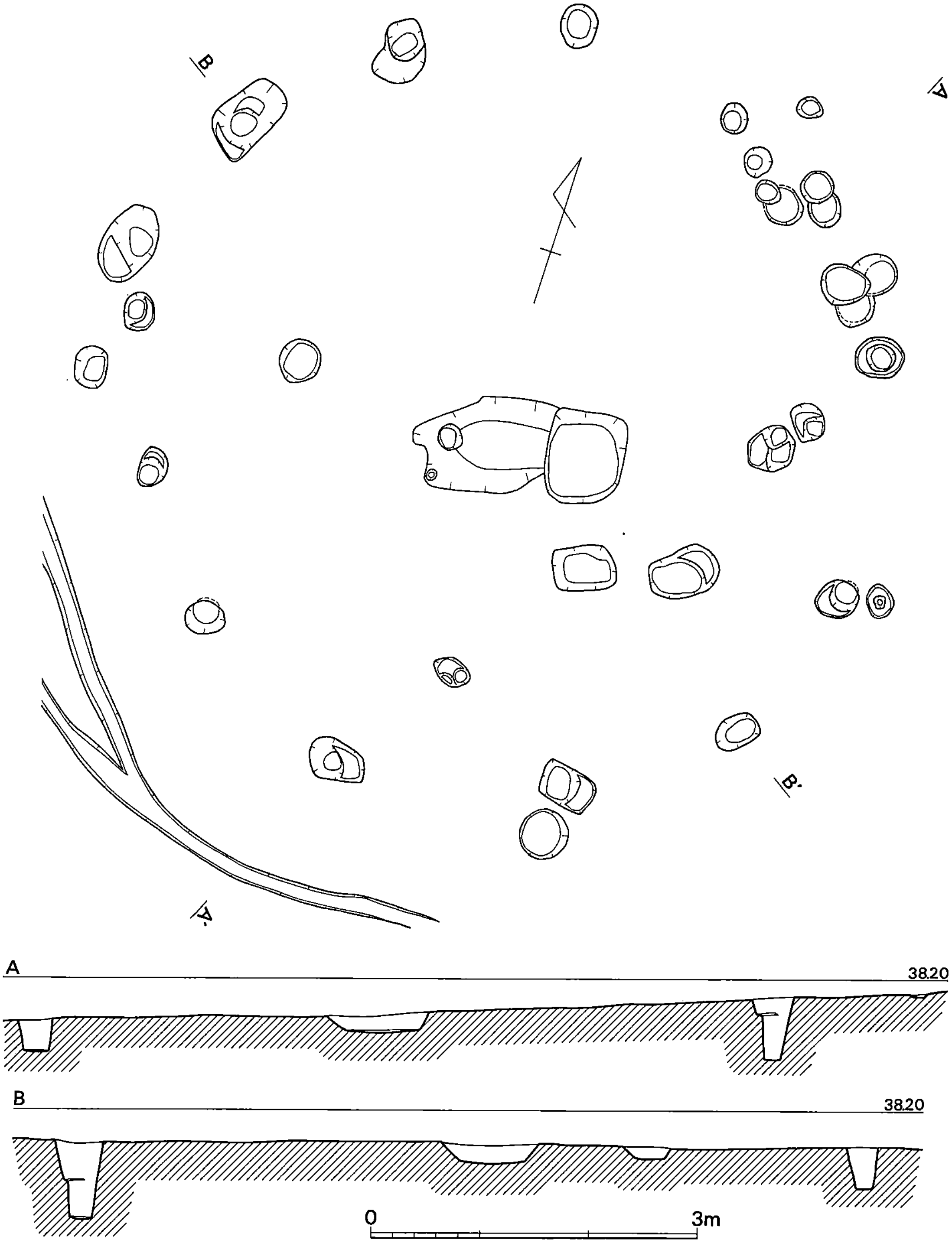
以下，各遺構について記述するが，住居跡や竪穴・土壙については，各遺構ごとに出土土器の記述を加え，他の遺物については，次の遺物の章で別途記述することとし，末尾に出土遺物の番号を記載することにとどめる。

(1)　住居跡

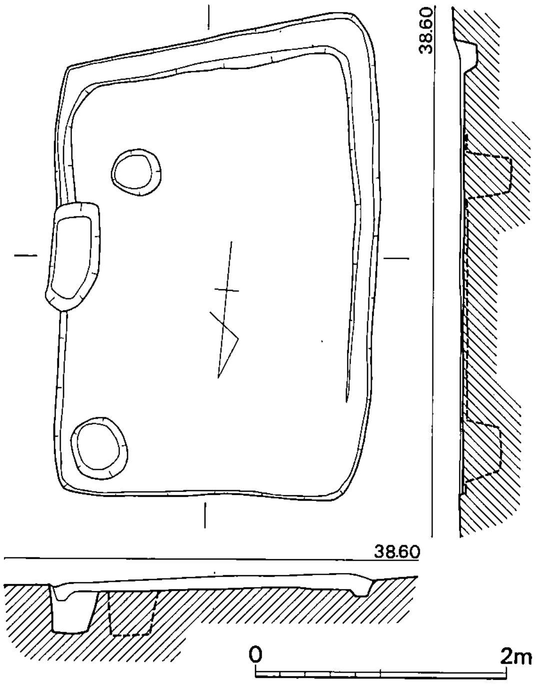
住居跡は，調査区の西側に多く検出されている。全体的にみて，調査区の東側が削平をうけており，住居跡の壁が遺存しておらず，消滅した可能性もある

住居跡は，円形と方形プランのものがあるが，これは時期的に異なるもので，前者は弥生式土器を，後者は土師器を伴う。円形住居跡は7，方形住居跡は5の計12軒を検出しているが，小ピット群のあり方などから，この他にもいくつかの住居跡が考えられる。例えば，23号竪穴の南側のピット群，24号竪穴と15号土壙間のピット群，4号住居跡と5号住居跡の間のピット群や6号住居跡の西側のピット群の中に住居跡の遺存を思わせるものがあり，いずれも円形プランを想定するものである。これらは，付図にその範囲を破線で示すに留め，詳しくは報告しない。

1号住居跡（第14図，図版6－1）　　壁はなく，南西側に孤を描く浅い溝により住居跡の所在を知ったものである。ほぼ中央に浅い方形壙があり，これを中心に13本の主柱穴がめぐるものと考えられる。柱穴の深さは30～70cmとやや異なるが，これは削平をうけ北側の柱穴群が浅く残っているためである。浅い周溝は2条に分かれるが，これが何を意図するものかわから



第 14 図　　1 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)



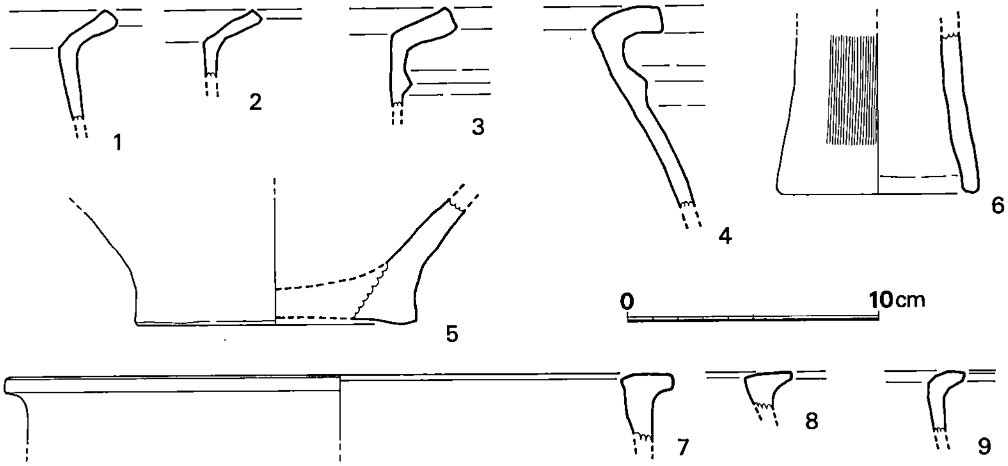
第 15 図　2 号 住 居 跡 実 測 図（1/60）

ない。少くとも拡張のためではないようだ。この周溝と主柱穴の間隔から，当住居跡の径は約 9.8mである。大型の円形プランを呈するものである。

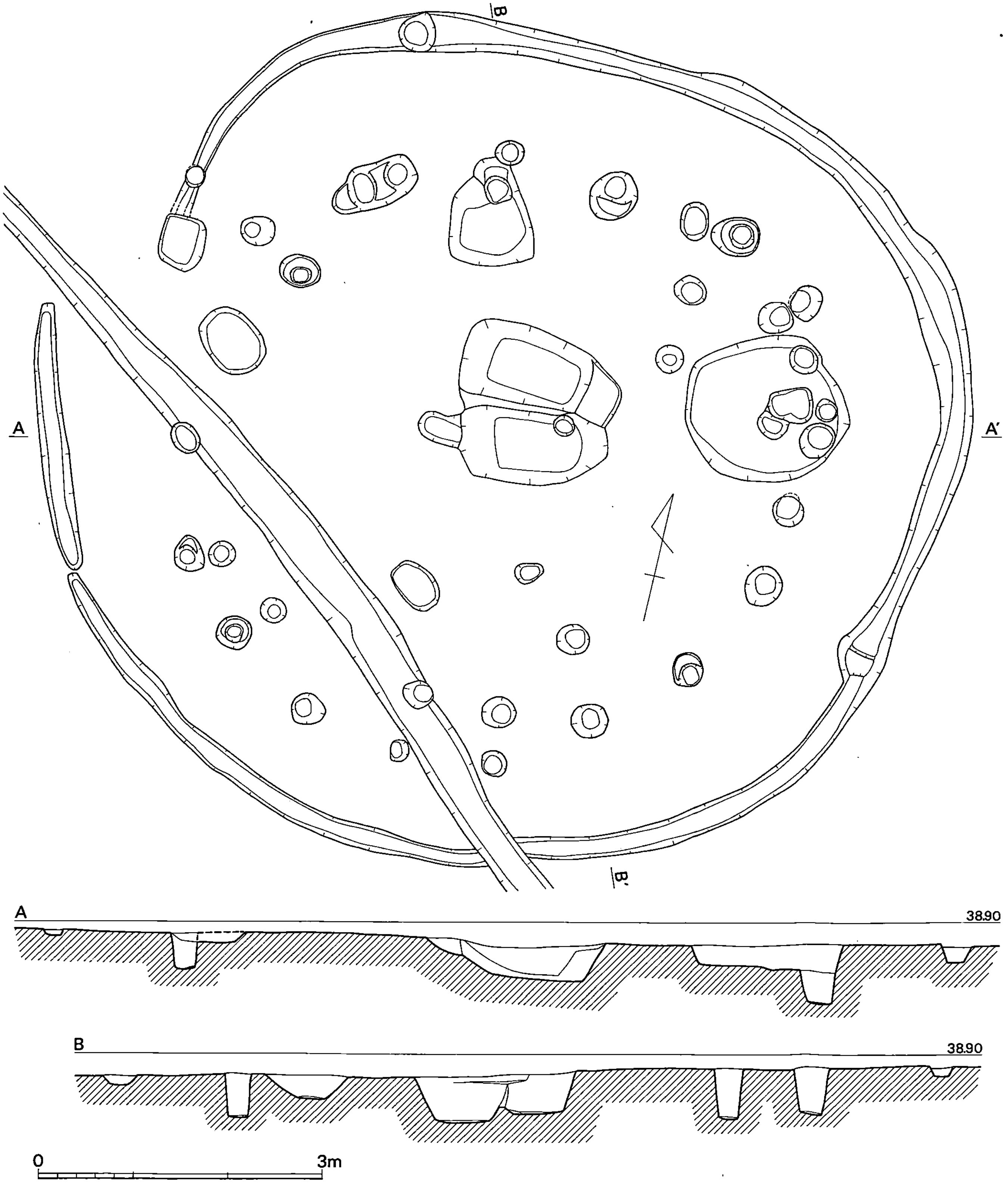
なお，中央方形壙の西に隣接して不整長方形の壙があるが，これにも住居跡とほぼ同時期の土器片が遺存する。当住居跡に関連するものかは断定できない。

遺物は方形壙から第16図の2・3・5・6が，不整長方形壙から1・4の土器片が出土している。1～4は甕形土器の口縁部である。1～3は口唇部が若干跳上げ気味のもので，3は口縁部下に断面三角形の低い突帯をめぐらす。4は内傾する体部から外反する口縁を有す。口縁下に1条の断面三角形の突帯をめぐらす。5はやや大きな壺形土器の底部である。6は薄手の器台であり，体部は細い刷手目整形を施す。

2号住居跡（第15図、図版12－1）　2号溝の西に遺存する。やや歪つな長方形プランを呈す。遺構は浅く，北側では壁はほとんど遺っていない。壁に沿う溝も一周しない。床面はほぼ平坦である。床面には東側に2つのピットがあるが，これが柱穴となるか不明で，外部にも柱穴はない。なお，東壁のほぼ中央に長方形状の壙があり，住居跡に関するものである。



第 16 図　1・3号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 17 図　3 号住居跡実測図 (1/60)

遺物は，土器の細片が若干出土している。弥生時代中期に属すものである。

3号住居跡（第17図，図版6－2）　円形プランを呈す。周壁は遺存しないが，周溝からして径は，東西 9.9m，南北8.84mを測る。周溝は北側が深く，他は浅くなっており，西側では連続していない。ほぼ中央には接する二つの長方形壙がある。いずれも深く当住居跡に関連する遺構で，埋土中には炭片や灰が混入していた。この壙を中心に15本の柱穴が円形に並ぶ。

住居跡の西側は，4号溝が斜断し，壙の東側には，当住居跡より新しい貯蔵穴がある。

遺物は，周溝や壙から弥生時代中期の土器（7～9）が出土している。いずれも甕形土器の口縁部である。7は平坦口縁で，内面に稜がつく。中央方形壙より出土。胎土は砂粒が多い。8は内傾する平坦口縁で，内面に稜がつく。口唇部は薄くなっている。胎土は細砂粒や雲母を含む。9は外反する口唇部である。胎土は細砂粒を含む。このほか砥石(第63図58)や石皿（第64図69）が出土している。

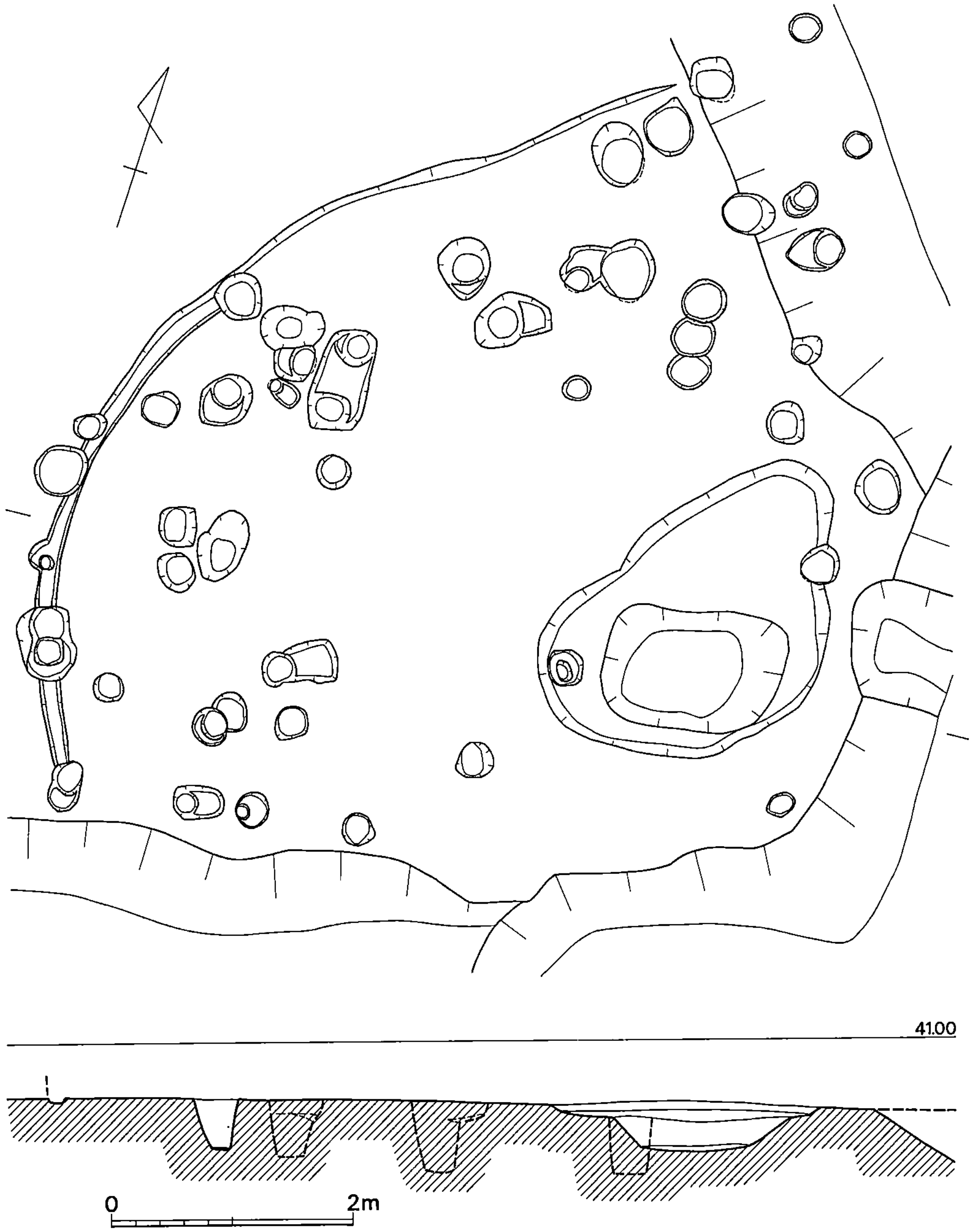
4号住居跡（第18図，図版7－1）　畑地開墾により東と南側が削平を受け，全体の4分の1程度が遺存する。壁は北側で若干残る程度で，西側は壁はなく，周溝でその規模が把握できる。円形プランを呈するものと考えられ，ほぼ中央に不整形の浅い壙があり，その壙内にはさらに方形の壙がある。柱穴は6本が確認され，恐らく10数本の柱穴からなるものと思われる。径9m前後の大型プランを呈するものと思われる。

なお，壁は北側でやや広がり，これが別に住居跡の遺存を示すものか不詳である。

遺物は，いずれも細片で少ない。弥生時代中期に属すものであろう。

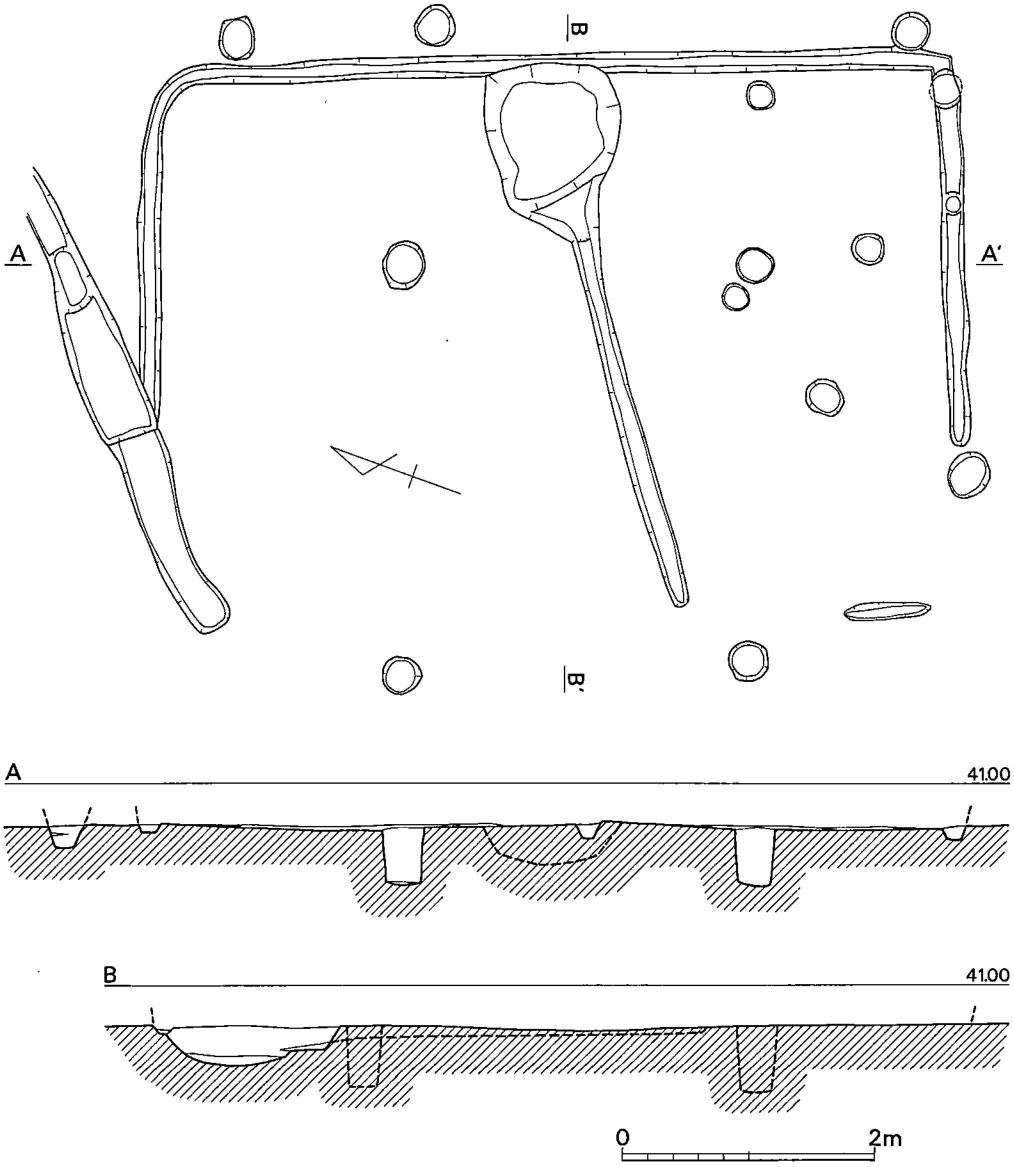
5号住居跡（第19図，図版7－2）　方形プランを呈す。周壁はなく，周溝によってその規模が把握できた。周溝は削平により西側が消滅しているが，柱穴の位置などから東西約 6.6m，南北 6.6mを測る。東側には浅い壙が壁に接してあり，この壙より南西に浅い溝が延びる恐らく，この溝は後述する12号住居跡のように，周溝に接続するものと考えられる。柱は4本である。

遺物は，床面東側壙から出土している。周溝内からも出土したが，いずれも細片である。土器は10～14が出土している。10は中型の甕形土器である。「く」の字形に外反する口縁部で，口唇部は跳上げ気味である。口縁下に3条の断面台形状の突帯をめぐらす。これ以上の突帯をめぐらすかは不明である。また，胴部にも数条の同様の突帯をめぐらすものであろう。胎土に粗砂粒が多い。他の土器との比較や壙上面より出土していることから流れ込みのよのであろう。11は直口縁の坩であると思われる。小片でその大きさは不明である。胎土は砂粒を若干含む。焼成あまく器面は剥落し調整法は不明である。12は脚付の椀と思われる。大きな椀部は口縁部の形状が不明である。脚部はラッパ状に開くものである。外面は全体に丁寧なナデ仕上げで，脚部内面はヘラケズリを施し，下端は横位の刷毛目整形を施す。13，14は高杯である。13は脚下位を欠損するが，大きく外反する形状を呈すものであろう。杯部は下位に一稜を有し，口縁



第 18 図　4 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

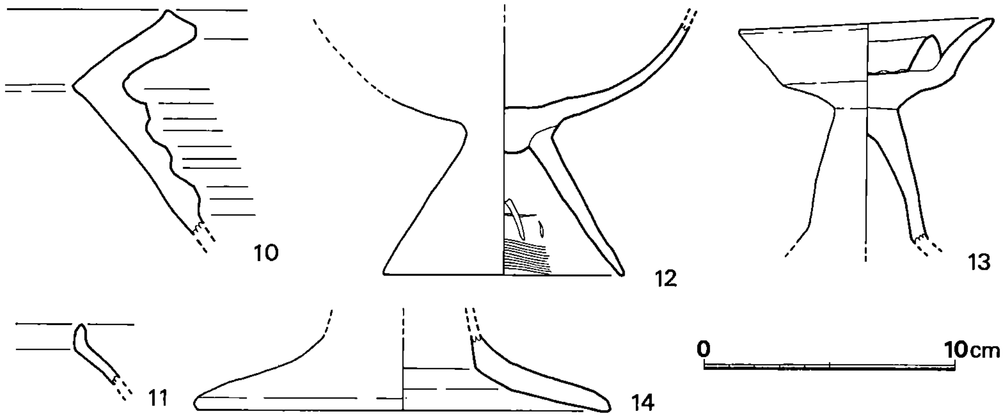
部は若干外に開く。内面に厚い粘土紐を貼りつけ一周させている。特異な形状を示すもので，内面には黒色の煤状異物が付着している。胎土は砂粒が多い。14は高杯の脚部である。器面に13と同様の異物が付着する。胎土は砂粒，雲母を含む。



第 19 図　5 号 住 居 跡 実 測 図（1/60）

10が弥生時代中期後半の土器である。11～14は古墳時代でも５世紀前半頃のものと考えられ当住居跡の時期を示すものである。

6号住居跡（第21図，図版８－１）　当初，円形プランを呈す一軒の住居跡と思い発掘を実施したが，三重の周溝を確認した。壁は中央より東側のみに遺存し，西側は周溝によって全体の平面形をとらえることができた。南東側は開墾により削平されている。周溝は同心円状にあり，他住居跡との比較から中央の壙が一つであることから，徐々に拡張したものと考えられ



第 20 図　5号住居跡出土土器実測図（1/3）

る。また，中央の方形壙はやや大きく，当初からこの規模であったかどうか判断しがたい。

最初は，径約５ｍの円形プランを呈し，柱穴は５本（１～５）が考えられ，次に径約 6.8m の円形プランを呈し，柱穴は７本（６～12）が考えられる。最終的には，径約 8.6m の円形プランを呈し，柱穴は９本（13～21）である。柱穴は，いずれもしっかりしたものである。

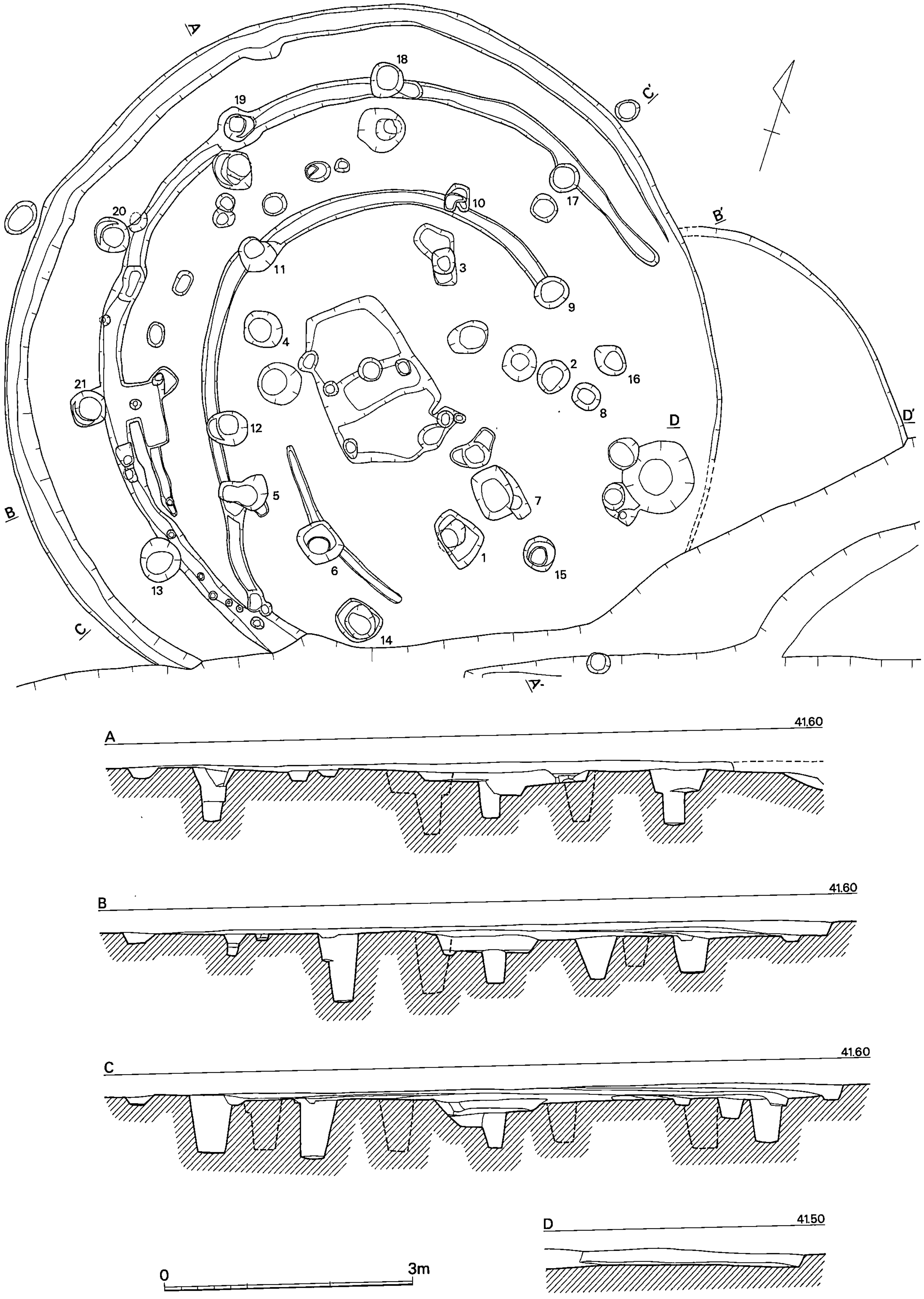
なお，周溝はいずれも東側で切れ一周しない。この部分より南側が床面の最も深いところである。重複する７号住居跡との関係で深くなっているのであろうか。７号住居跡より新しい。中央の長方形壙は，底面が段をなし，中央部分が一段と深くなっている。埋土中には，炭片や灰が混入する。

遺物は，住居跡の埋土や溝の中から土器の小片が出土した（15～21）。15～17は甕形土器の口縁部である。いずれも大きく外反する口縁部で，16・17の口唇部は跳上げ気味のものである。いずれも胎土に細砂粒を含む。18は壺形土器のラッパ状に開く口頸部片である。口唇部は器壁が薄く，遺存状態も不良であるので断定できないが，粘土の貼り付け部が取れたようで，いますこし厚くなるものとも考えられる。胎土に粗砂粒が多く，二次加熱をうけている。19は甕の，20は壺の底部と考えられる。いずれも器壁が薄く，器面は剥落し，調整法は不明。20の外面には煤が付着する。21は器壁の厚い器台である。焼成不良で器はもろくなっている。内面の上下端はナデ，細い筒状の部分は篦による押えである。胎土は粗砂粒が非常に多い。弥生時代中期の前半頃のものであろう。

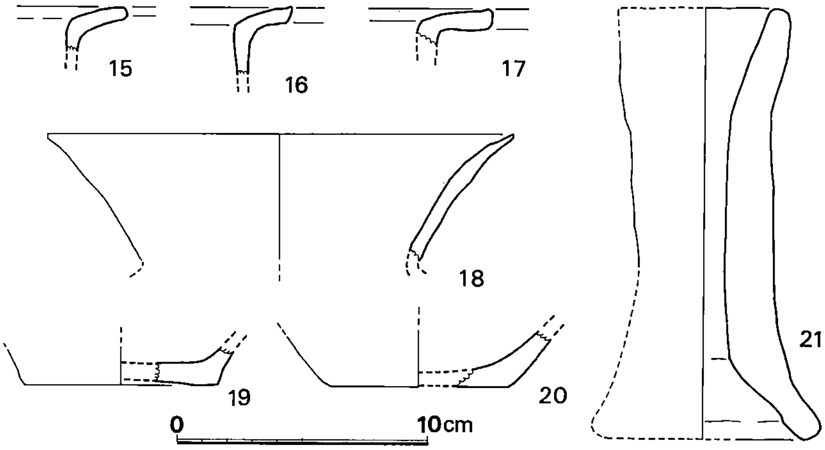
遺物は，このほかに石庖丁（36），砥石（49～51・60・64・66）が出土している。

７号住居跡（第21図，図版８－１）　開墾と６号住居跡によってほとんど削平されており，遺構の一部が残るのみである。壁は15cm前後の高さで遺るも，床面には柱穴は全くない。

遺物は，床面に貼りつくように黒曜石・頁岩の細片と共に，打製石鏃（第58図１～７）が出土している。土器は，いずれも細片で非常に少ない。６号住居跡との関係から，これより古く



第 21 図　6・7 号住居跡実測図 (1/60)

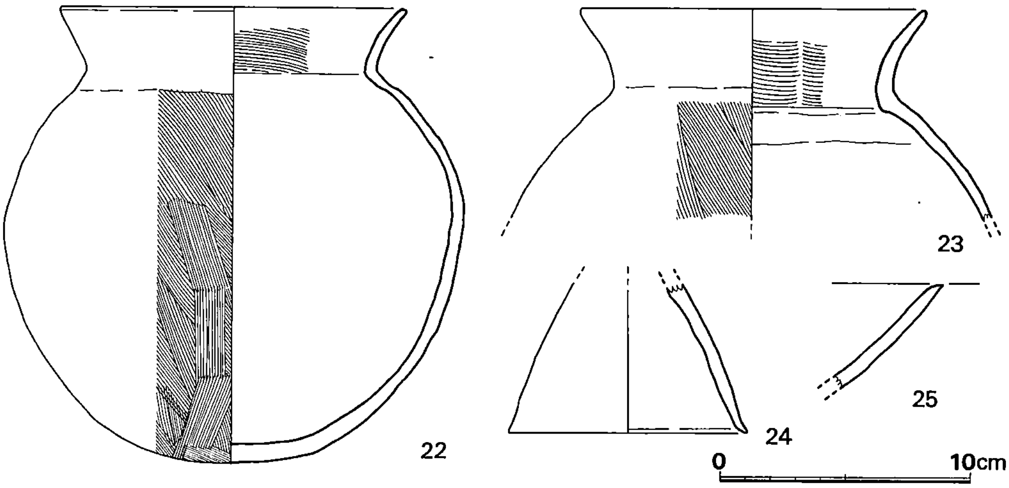


第 22 図　6号住居跡出土土器実測図（1/3）

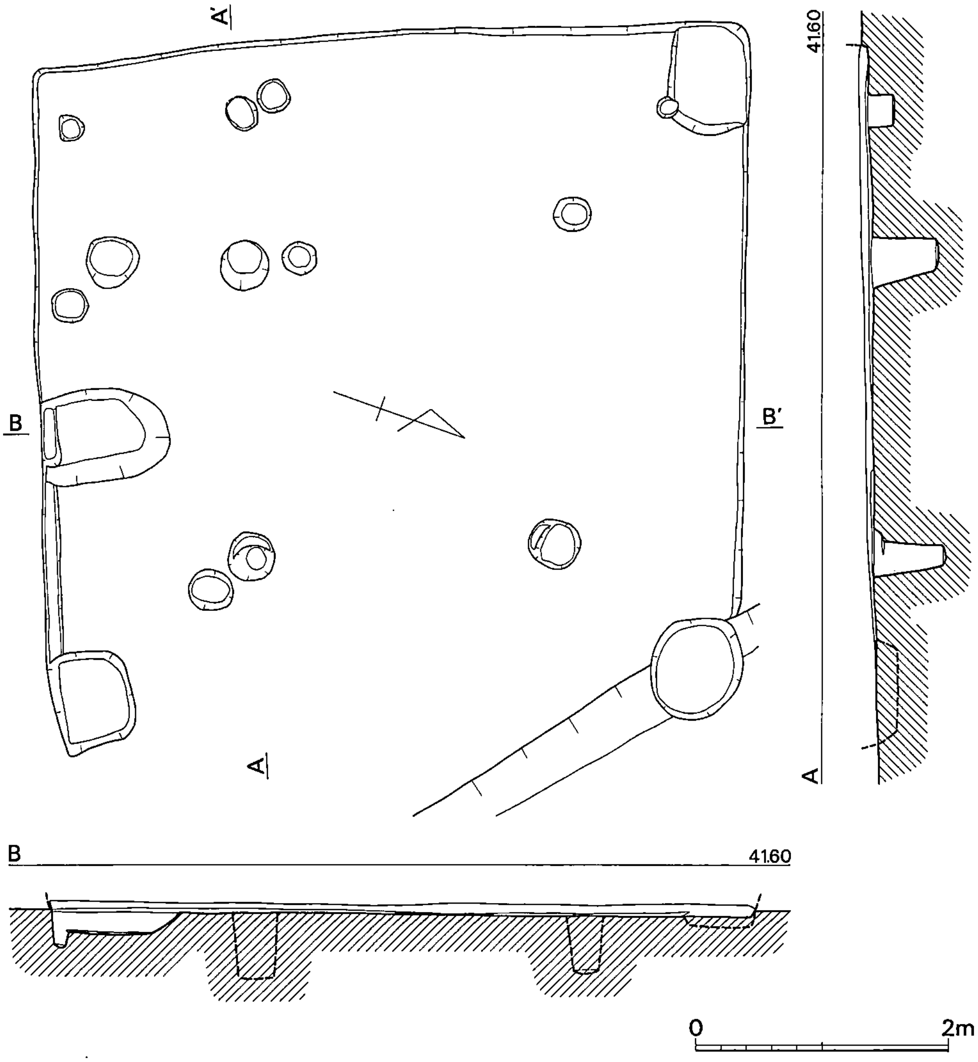
考えられ，弥生時代中期の前半に属すものであろう。

8号住居跡（第24図，図版8－2）　方形プランを呈す住居跡である。遺構は非常に浅く，東辺の壁は遺存しない。東西5.5m，南北2.6mを測る。周溝は南壁沿いに一部がみられるのみである。南壁のほぼ中央に長方形のやや深い壙があり，南東隅を除く他の三隅には方形のやや浅い壙がある。この三つの壙は屋内貯蔵穴ともいうべきものであろうか。柱穴は4本で，北東側の1本が方形線上からややはずれる。深さは50cm前後を測る深いものである。

遺物は南壁沿いの中央壙から土器が出土した。いずれも土師器である（22～25）。22・23は甕形土器である。22は，全体に薄手の土器で，口縁部は外反し，丸味のある体部である。頸部内面に稜がつく。口縁部の外面は横ナデ，内面下位は横位の刷毛目を施す。体部の外面は細い刷毛目整形を，内面は横位のヘラケズリ整形を施す。胎土は砂粒が多い。外面は体部の中ほ

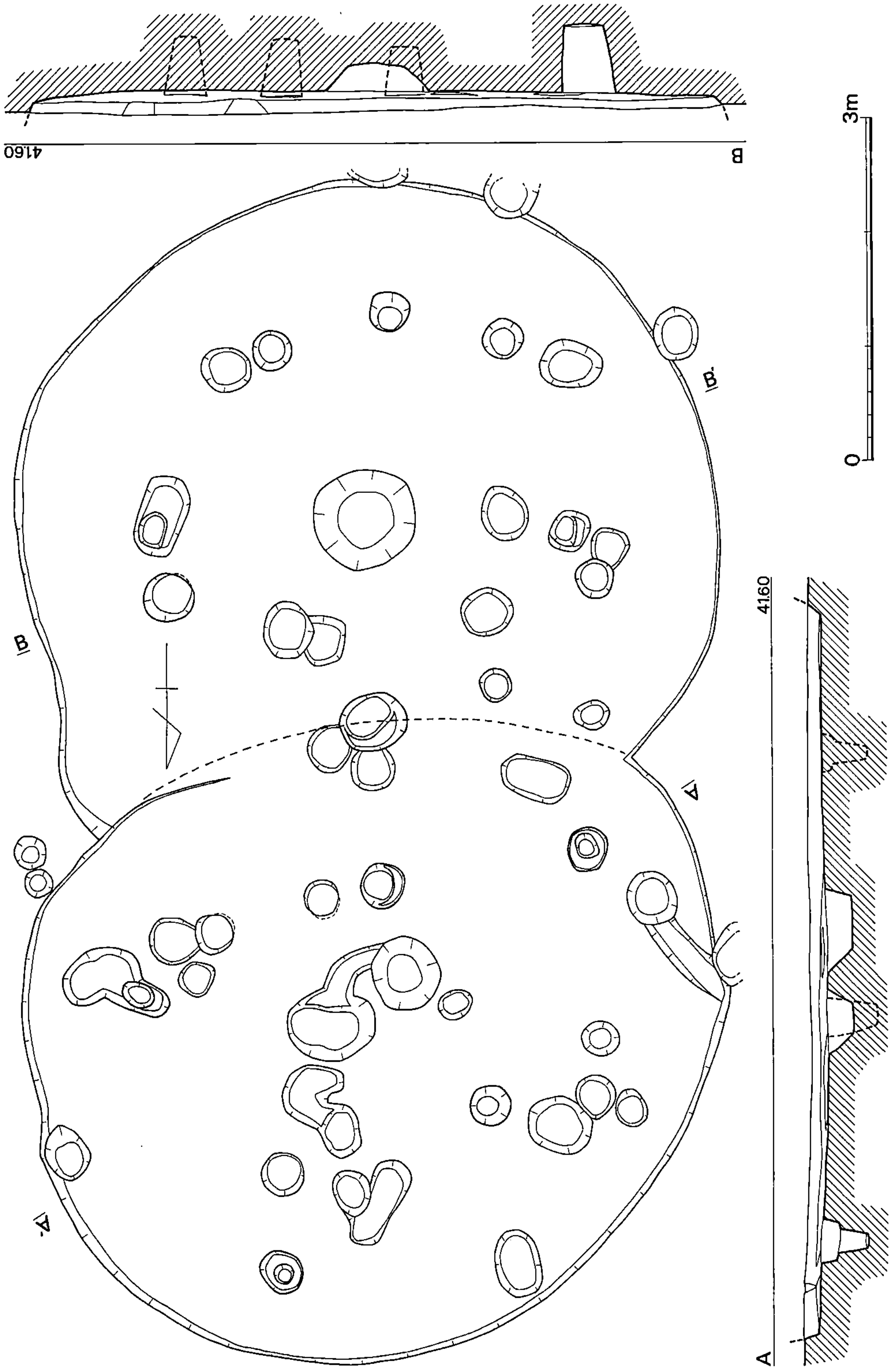


第 23 図　8号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 24 図　8 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

どから口縁部にかけて煤が付着している。23はおおむね上半部が残るのみである。22と同様の形状を呈す器形と思われる。器面の整形は，口縁部の外面と内面上位を横ナデし，内面下位はやや粗い横位の刷毛目である。体部は，外面を刷毛目，内面をヘラケズリしている。内面には粘土の積み上げ痕が一部にみられる。胎土は砂粒多い。24は25の脚かと思われる。やや膨みのある脚体で，端部は若干外反する。整形は，外面は細い刷毛目のあとていねいなナデを施し，内面は箆による押し引きのあとにナデを施す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。25は24の上部にくるものであろう。椀かと思われる形状である。整形痕は器面が剝落し不明である。胎土は胎土は砂粒が多く，雲母を含む。



第 25 図　　9 ・ 10 号住居跡実測図 (1/60)

これらの土器から，当住居跡は古墳時代の５世紀前半頃に属するものであろう。

9号住居跡（第25図，図版９－１・２）　10号住居跡と重複するが，卵形プランを呈するものと思われる。東西2.2m，南北約5.5mを測る。壁高はそれほど高くはない。ほぼ中央に浅い溝によって連続する２つの円形壙がある。柱穴は５～６本が考えられるが，よくわからない。

遺物は，土器がきわめて少なく，石器がよく出土している。土器は甕（26～30）と蓋（31）がある。26・27の甕口縁は如意形を呈す。いずれも焼成不良で器面の剝落が著しく，胎土は粗砂粒が多い。28～30は甕の底部である。30は底部が薄く，外底は上げ底気味である。いずれも胎土に粗砂粒が多い．31は蓋の天井部片であろう。胎土は砂粒多く，雲母を含む。

この他，石鏃（９～17），石斧（44），砥石（79），磨石（72）が出土している。

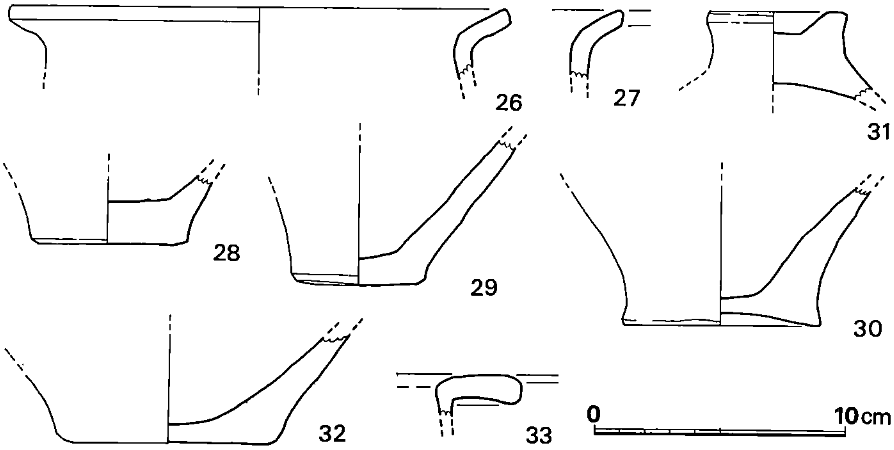
当住居跡は，出土土器からして，弥生時代中期前半に属するものと考えられる。

10号住居跡（第25図，図版９－１・10－１）　９号住居跡と重複する。円形プランを呈す。東西6.2m，南北約６ｍを測る。壁高はそれほど高くはない。床面のほぼ中央に円形壙がある。壙内には炭や灰が混入する。柱穴は主柱穴が５本で，これに２本の補助柱がつくものと考えられる。

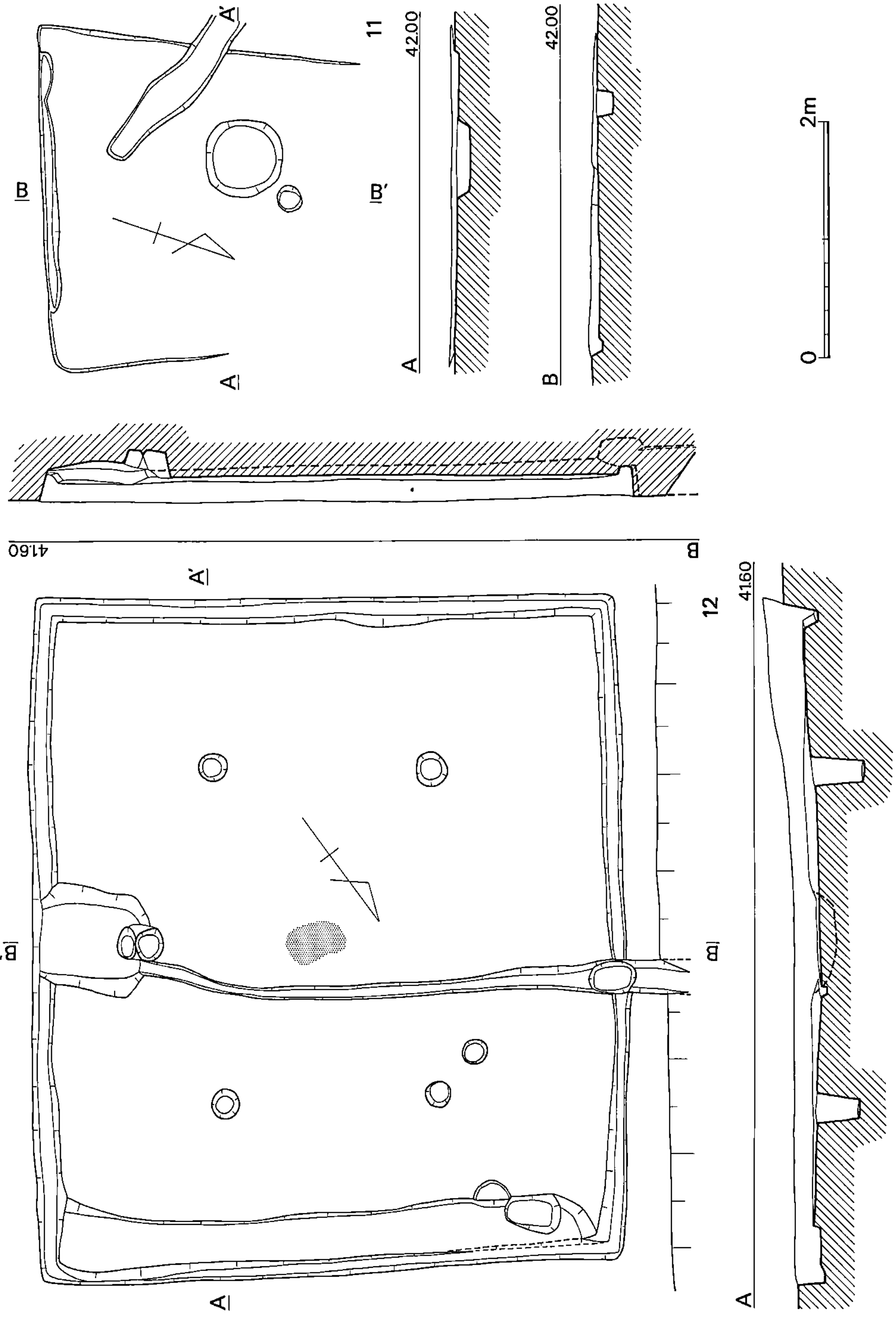
なお，北西側で９号住居跡の接する部の壁がやや張り出すが，この部分の床面はやや傾斜し高くなっており，入口部の施設であろうかとも考えられる。

遺物は，土器がきわめて少い。甕形土器の一部が出土している（32・33）。32は，やや大きめの底部である。体部外面は細いヘラミガキ，内面はナデによる整形である。胎土は粗砂粒が非常に多い。33は大きく外反し平坦部をつくる口縁部片である。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。この他，磨製石鏃（18～25）や砂岩製の石皿（67）が出土している。

出土した土器から弥生時代中期に属すもので，９号住居跡出土のものに比べ，やや新しいものであろう。このことから，当住居跡は９号住居跡よりも新しいものと考えられる。



第 26 図　９・10号住居跡出土土器実測図（1/3）



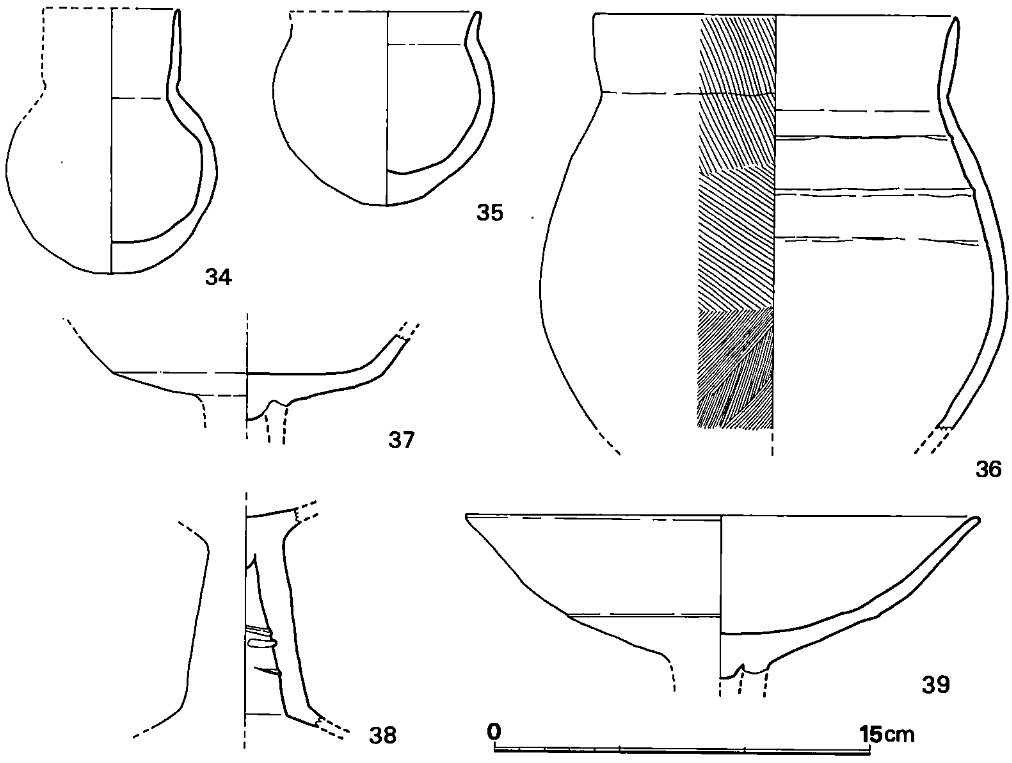
第 27 図　11・12 号住居跡実測図（1/60）

11号住居跡（第27図，図版10－２）　削平を受け完存しないが，台形状プランを呈するものであろう。西側は細長い壙が重複する。床面中央のやや西よりに浅い円形壙が，その北に小ピットがある。柱穴らしきものは，外部にもない。南壁沿いに浅い溝がある。２号住居跡と共に住居跡といえるか不明である。ただし，円形壙の東側の床面が若干焼けていた。

遺物は，土器の細片ばかりで，極めて少なく，図示できるものはない。弥生時代中期に属す住居跡である。

12号住居跡（第27図，図版11）　長方形プランを呈す。南北 5.9m，東西５ｍを測る。当遺跡で最も遺存度のよい住居跡である。わりあい深い周溝がめぐり，東壁沿いの中央には長方形状の壙を掘り，これと接続し，さらにこの壙から西に溝を掘り，屋外へ延している。明らかに排水を意図したもので，西側壁部では周溝と接続する部分を一段と深くし溜枡状にしている。類例をみない施設である。柱は４本で，柱間は南北間が大きくなっている。床面のほぼ中央の床面が赤く焼けている。炉跡と考えられる。また，北側は溝沿いに幅20cmほどで床面が深くなっている。

遺物は床面とやや浮いた高さで出土している。いずれも土師器である（34～39）。34は坩で



第 28 図　12号住居跡出土土器実測図（1/3）

直口縁は長い。体部は球形をなし，頸部はややくびれ状をなす。器壁はやや厚い。器面の調整は，口縁部外面と体部外面は，ヘラケズリの後に丁寧なナデ整形を施しているものと思われる。体部内面がヘラケズリであるほかは，ナデによる整形である。焼成はややあまく，胎土は粗砂粒多い。35は，短く外反する口縁部をもつ坩である。丸味のある体部は器壁が厚く，底部はやや尖り気味である。口縁部内外面と体部外面はナデによる整形で，体部内面はヘラケズリ整形である。36は甕形土器で，下胴部がない。若干外傾する口縁部で，あまり肩が張らず，胴部最大径がやや下位にある。器面の整形は，外面は刷毛目を施し，胴下位はやや細い刷毛目を施す。口縁部内面はヨコナデを，胴部内面は丁寧なヘラケズリを擦過痕状に残す。また，粘土の接合部が輪積み状に残る。胎土は粗砂粒を含む。37～39は高杯である。37は杯部で，口縁部は欠損する。外面下位には稜がつく。器面は剝落し整形痕は不明。胎土は砂粒が多い。38は脚部で，端部を欠損する。端部は大きく外反するものである。外面は剝落し，内面はヘラケズリの整形を施す。粘土のしぼり上げの痕跡が深い溝状となって残る。胎土は砂粒が多い。39は杯部の完形品である。下位の屈折は浅く，低い段をなす。整形は，器面の剝落が著しいが、丁寧なナデによるものと思われる。胎土は砂粒が多い。遺物は，このほか蛇文岩質の凹石（75）が出土している。

当住居跡の時期は，出土した土器から，古墳時代すなわち５世紀前半頃のものと思われる。

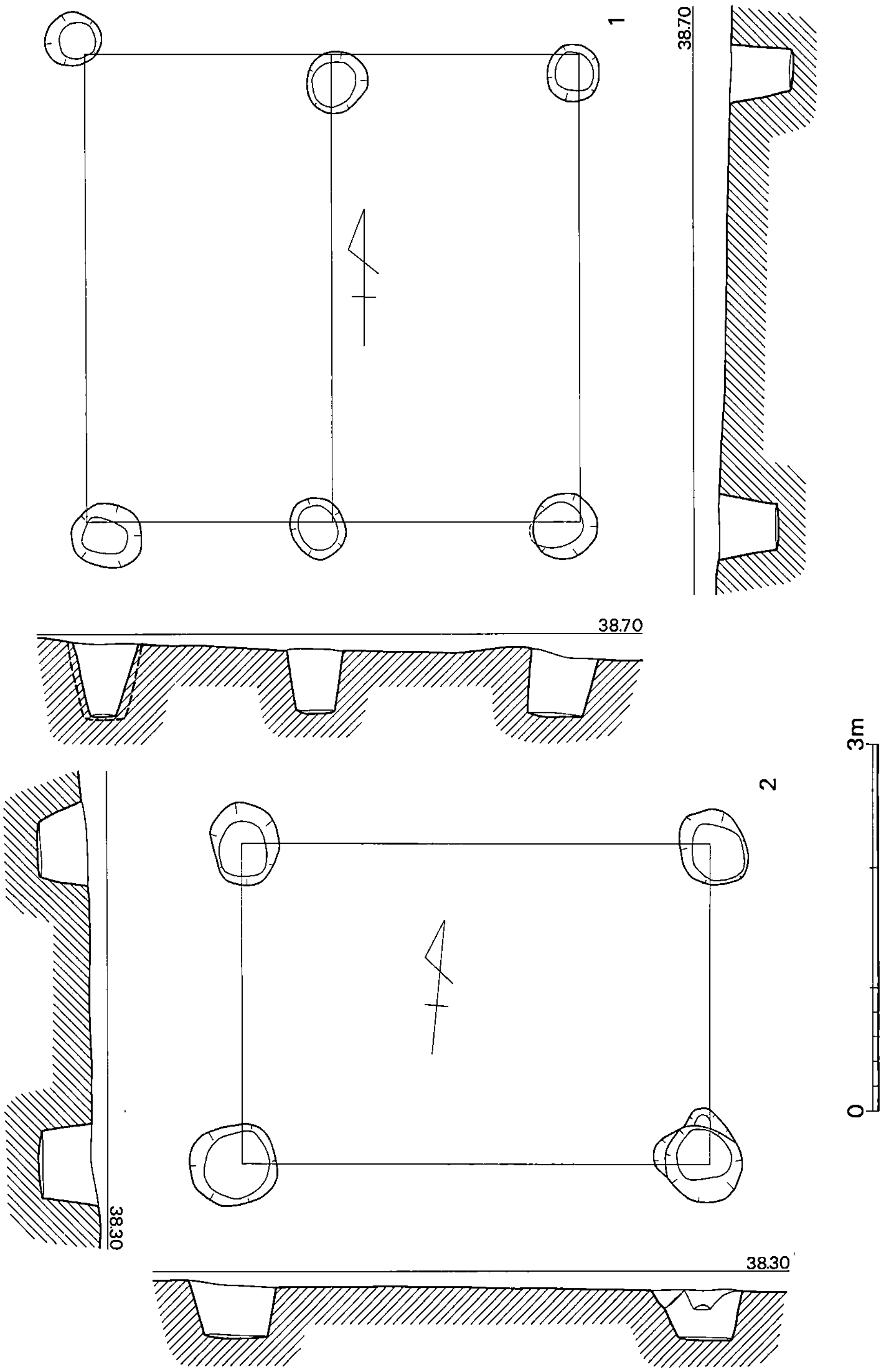
(2) 掘立柱建物

掘立柱建物は３棟が確認された。いずれも小規模なもので，この他にも遺存するものと考えられるが把握できなかった。第11号住居跡の東側に縦列する柱穴群があり建物跡と思われ，これについては図示した。

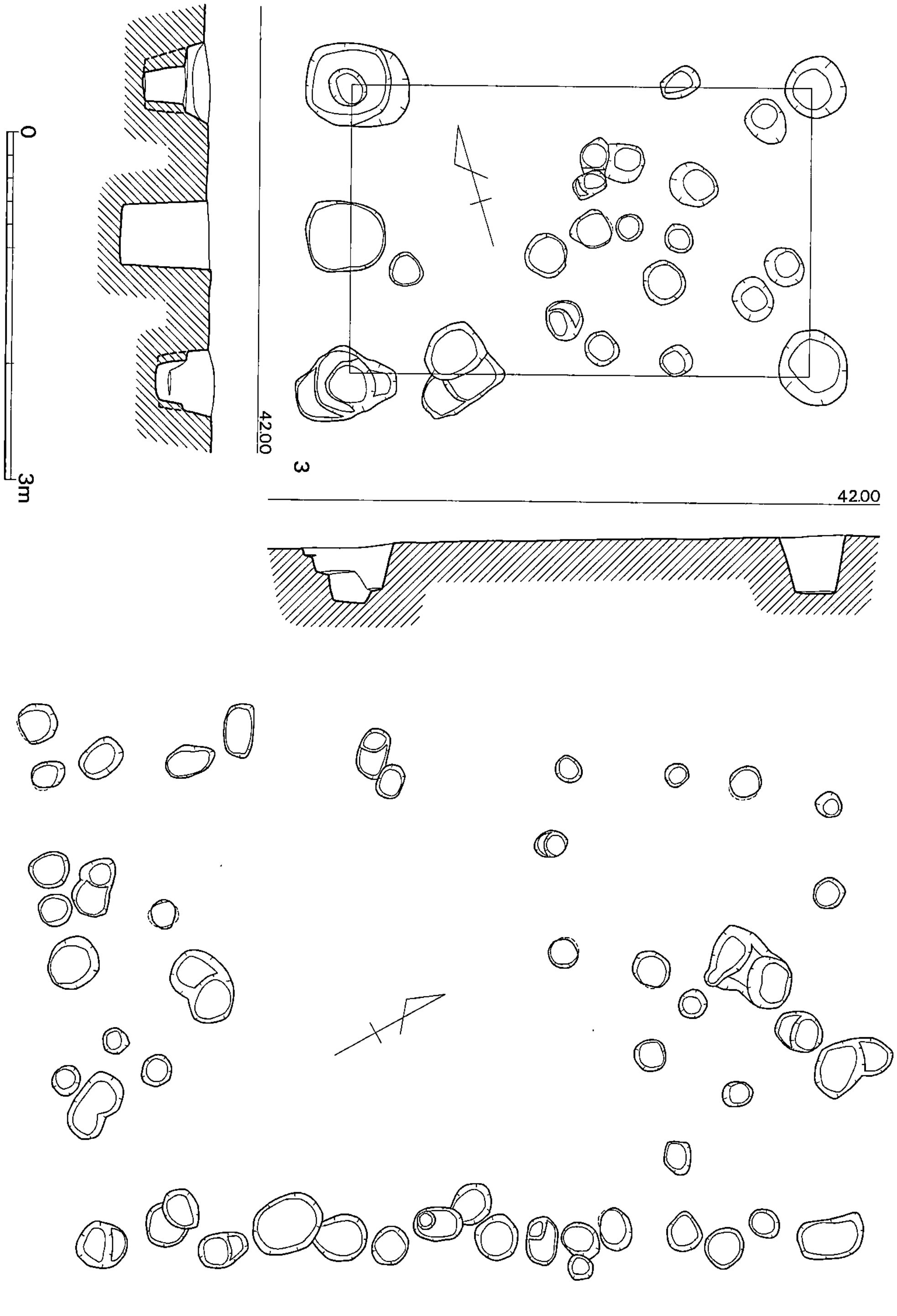
１号掘立柱建物（第29図１，図版12－１）　２間×１間の建物で，梁間よりも桁間が長い。柱穴は，梁間総長4.04m，桁間 3.8mの中におさまるが，柱穴の心心距離は，北側梁間で 2.0m，2.1mを，南側梁間で2.0m，1.7mを，桁間は3.7m，3.6m，4.0mを測る。柱穴の規模はおおむね一定している。遺物は東南隅の柱穴（Ｐ45）から小型の椀（第57図197）が出土している。土師器であり古墳時代初め頃の時期が考えられる。

２号掘立柱建物（第29図２，図版12－２）　１間×１間の建物である。梁間の長いものである。梁間3.83m，桁間2.62mを測る。ほぼ東西に長軸を取る建物である。柱穴は平面形，規模が一定している。柱穴は40cmとやや浅いものである。西南隅の柱穴より弥生中期の甕口縁部片（第56図173）が出土している。

３号掘立柱建物（第30図３，図版13－１）　ほぼ東西長軸を取る建物である。梁間4.0m，桁間2.5mを測る。西側の桁間は間柱があり，この柱穴の心心間は1.7mを測る。東側には間柱はなく，当初建物は西に延びるものと考えていたが，これに対する柱穴は確認されず，図示す



第 29 図　　1・2号掘立柱建物実測図（1/60）



第 30 図　　3 号掘立柱建物・第11号住居跡東側柱穴群実測図（1/60）

る建物が考えられた。遺物は西南隅の柱穴から弥生時代前期の土器細片が出土している。

第11号住居跡東側の柱穴群（第30図，図版13－２）　南北方向の小柱穴列と南端から直交する柱穴列が認められるが，これに対する柱穴が確認されず，建物の規模は把握できなかった。他の建物と較べ長軸方向が異る。時期のやや異なる建物であろうか。

(3)　竪穴（第32・36・39図，図版14～19）

竪穴は27基が発見された。次項の土壙とあまり相異のないものもあるが，平面形や深さなどから土壙と分けた。これらの竪穴は，本来貯蔵の用をなしたものと考えられる。いずれも畑地開墾などにより削平をうけ，遺構の深さは非常に浅くなっているが，他の遺構から判断すると，それほど深くはなかったものと考えられる。また，これらの竪穴は調査区に散在して遺存し，しいていうならば，東側にいくぶん多い。

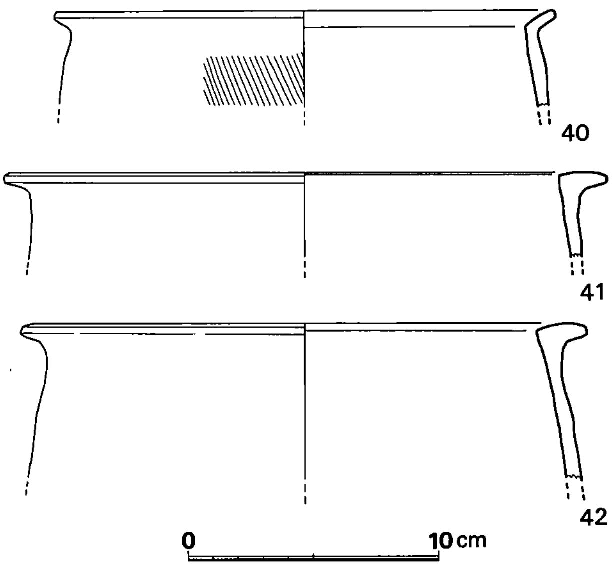
１号竪穴（１）　小型の貯蔵穴で浅く遺存する。円形プランを呈す。床面はやや傾斜し，西側に浅い落ち込みがある。遺物は土器片があるが，いずれも細片で時期を判断できる物ではない。

２号竪穴（２）　不整な円形プランを呈す。深さは浅く，床面は中央がやや深くなっている。遺物は若干の土器片が出土している（40～42）。40は，内傾する平坦口縁部で，内側に稜がつく。胴部には斜位の刷毛目整形を施す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。41は平坦な口縁を有す。器面は剝落し，整形は不明。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。42は平坦口縁部を有す。やや内傾するもので，内側に稜がつく。器面の剝落が著しいが，胴部は刷毛目を施している。胴部外面には煤が付着する。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。

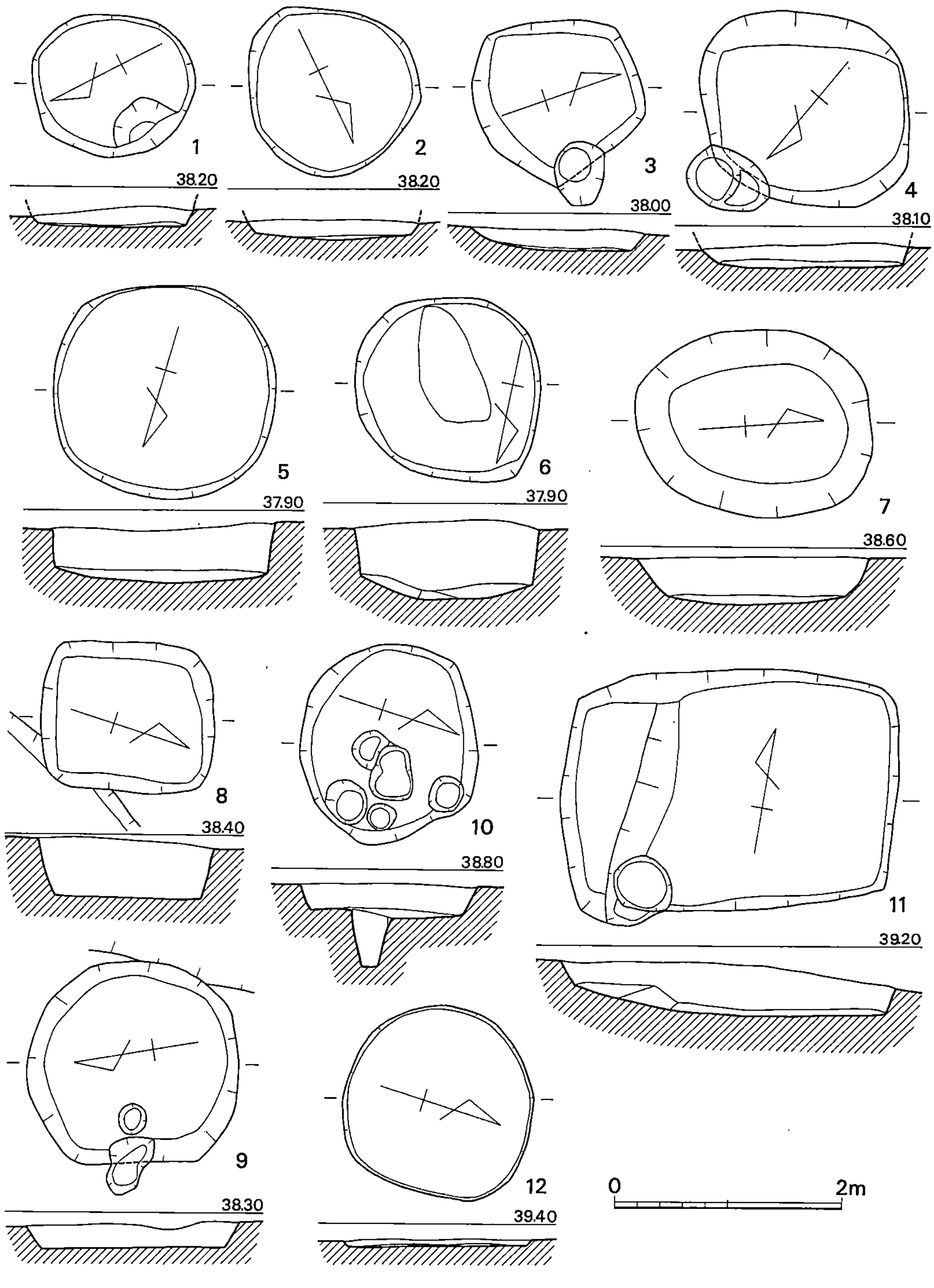
３号竪穴（３）　不正な方形プランを呈す。床面は浅く，おおむね平坦で，北側に傾斜する。遺物の出土はない。

４号竪穴（４）　長方形プランを呈す。床面は浅く，中央がやや深くなっている。遺物は細片ばかりである。甕形土器の破片で厚手の底部がある。弥生時代の中期前半に属すものであろう。

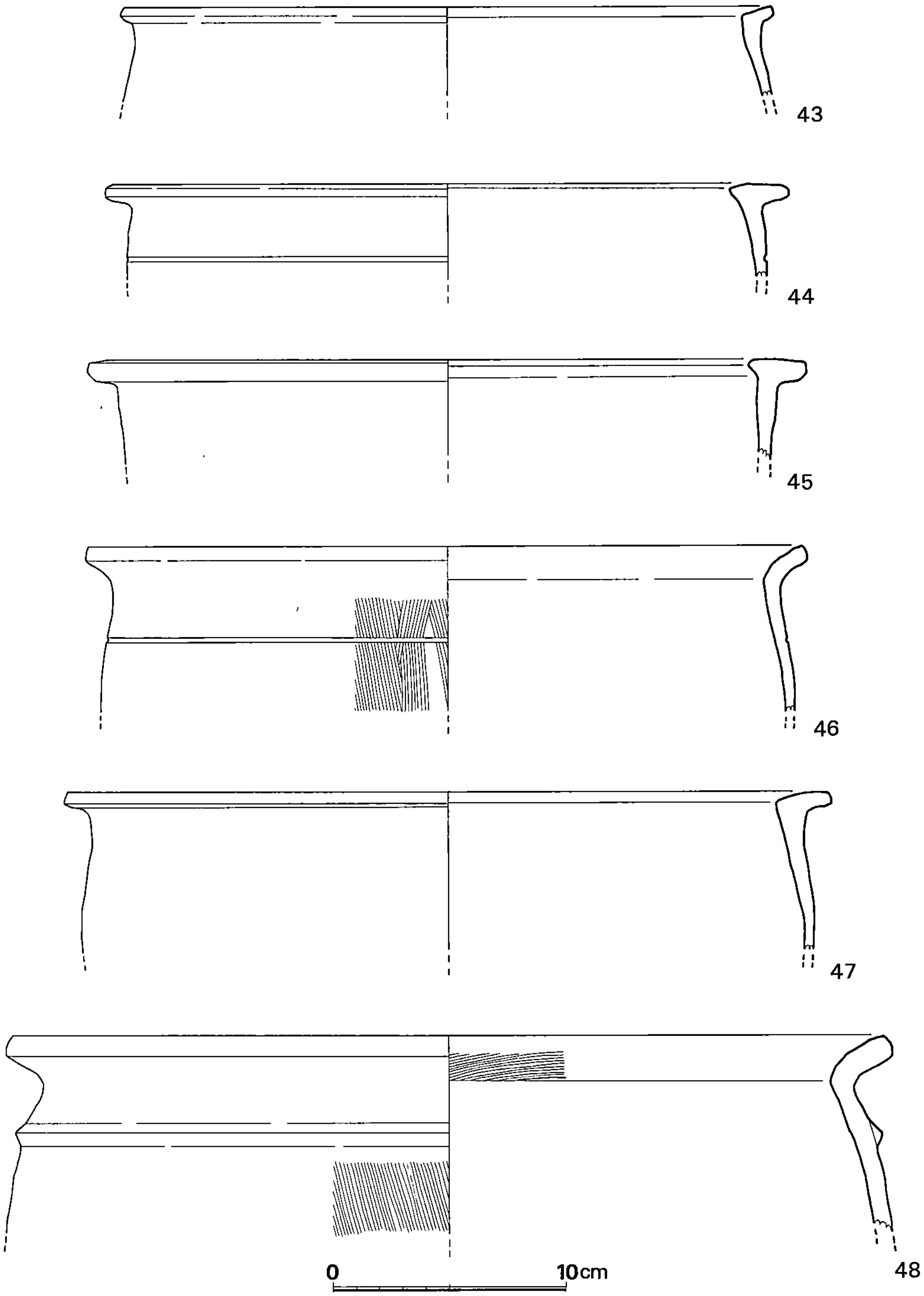
５号竪穴（５）　円形プランを呈す。やや大型のものである。床面は，わりあい深くあり，中央



第31図　２号竪穴出土土器実測図（1/3）



第 32 図　竪　穴　実　測　図　1 (1/60)

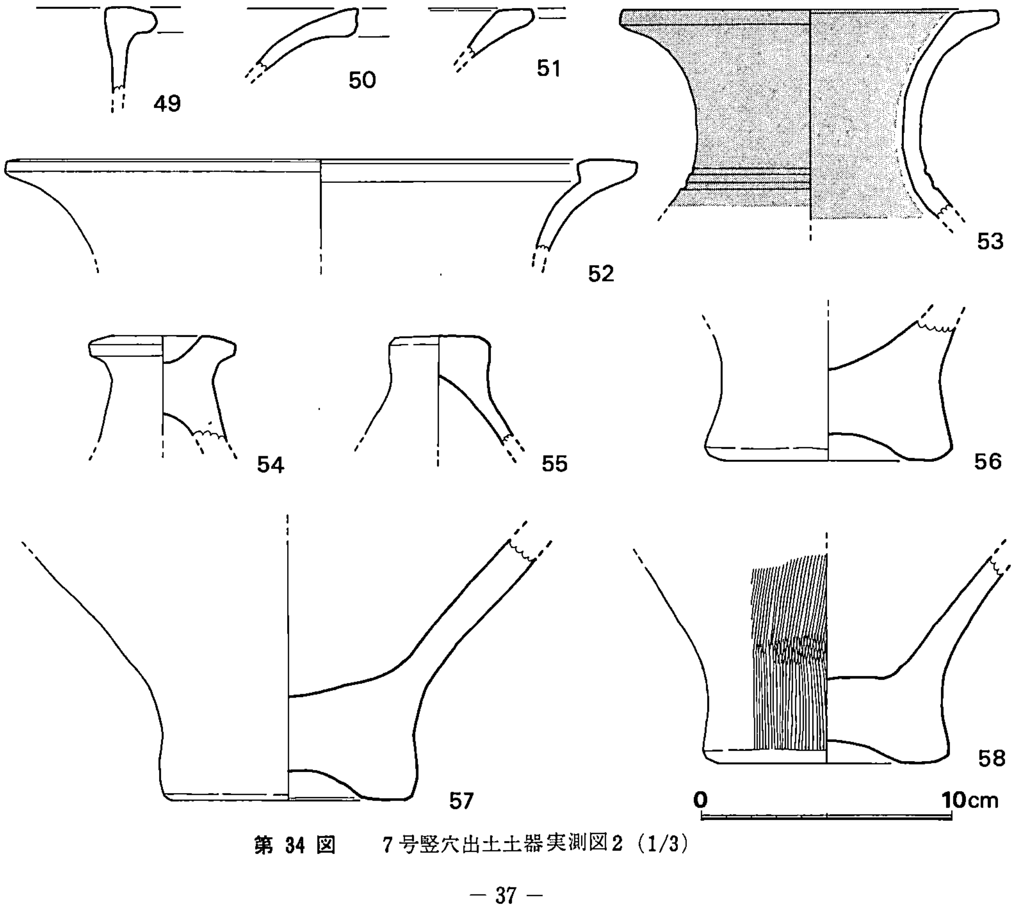


第 33 図　　7 号竪穴出土土器実測図 1 （1/3）

が深くなっている。遺物は土器の細片が少量と打製石鏃（８）が出土している。弥生時代の中期に属するものである。

6号竪穴（6）　おおむね円形を呈すプランである。床面はやや深く，中央が深くなっている。遺物は，甕形土器の細片が少量出土している。弥生時代の中期のものである。

7号竪穴（7）　長円形プランを呈す。床面はやや深く，中央部がさらに深くなっている。壁は大きく外傾する。遺物はかなり多く，土器や石器が出土している。土器は43～58があり，甕形土器が多い。43は短く外反する口縁で，平坦部は内傾する。内側に明瞭な稜がつく。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。44は平坦口縁部をなし，やや内側につき出すもので，口縁下に１条の箆描き沈線をめぐらす。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。45は平坦口縁部で，内側につき出るもので稜がつく。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。46は如意形口縁を呈す。胴部は刷毛目を施し，その後に箆描きの沈線を口縁下にめぐらす。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。47は内傾する平坦部をなす。内側に稜がつく。胎土は粗砂粒が多い。48は「く」字状に外反する口縁部で，その下に断面三角形の突帯をめぐらす。やや大きな甕である。口唇部から突帯部までを横ナデし，その下位は刷毛目を施す。口縁部の下位は刷毛目を施し，胴部内面は丁寧なナデ整



第 34 図　　7号竪穴出土土器実測図2（1/3）

形である。胎土は粗砂粒を含む。50～53は壺形土器である。いずれも大きく開く口頸部のものである。51・53は同様の口縁部で，52は粘土を貼り付け平坦部をつくる。53は頸部下位に2条の箆描き沈線をめぐらす。内外面とも丹塗りしている。いずれも胎土に砂粒が多い。54・55は蓋形土器の天井部である。54は厚手のもので，外面がへこむものである。両者とも内外面にナデによる整形をしている。胎土は砂粒が多い。56～58はわりあい大きな甕の底部である。いずれも上げ底である。58は外面が刷毛目整形で，内面はナデ整形である。56・57は器面が剥落し不明。いずれも胎土に粗砂粒が多い。57は雲母を含む。遺物は，この他に石剣片（27），扁平片刃石斧（42）が出土している。

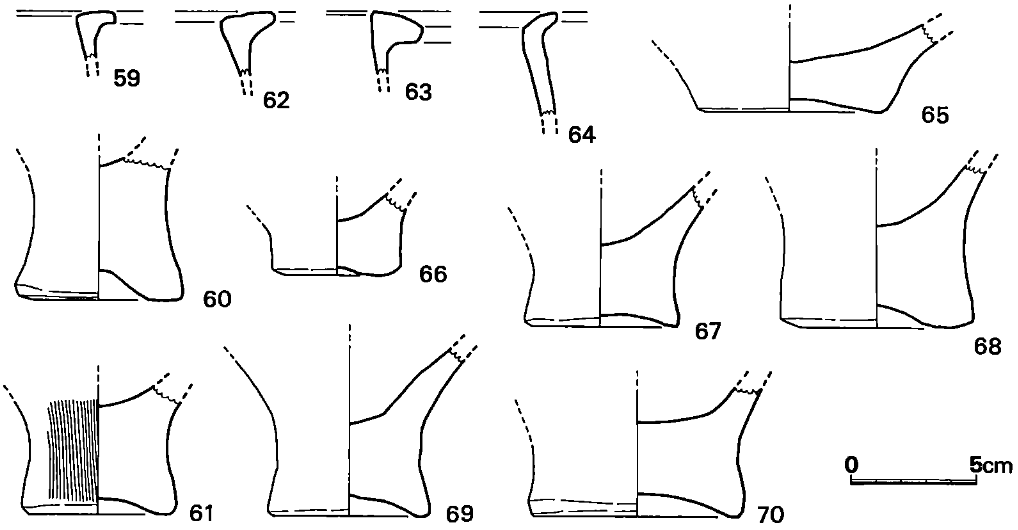
出土した土器は，弥生時代の中期前半のものであろう。

8号竪穴（8）　方形プランを呈す。2号溝により一隅が削平されている。床面は深く，平坦である。遺物の出土はない。

9号竪穴（9）　おおむね円形を呈すプランである。床面は浅く，平坦である。遺物は甕形土器の破片がある（59・60）。59は外反するものでおおむね平坦をなす。胎土は砂粒が多い。60は細身の底部で，器壁が厚い。胎土は粗砂粒が多い。弥生時代の中期前半のものである。

10号竪穴（10）　おおむね円形を呈すプランである。3号住居跡の調査時に検出する。床面は，北側がやや深く，柱穴状のピットは，3号住居跡に伴うものであろう。遺物は甕形土器の底部が出土している（61）。厚手の細身のもので，外底は浅い上げ底である。外面は粗い刷毛目を施す。胎土は粗砂粒が多い。弥生時代の中期前半のものである。このほか，砂岩製の砥石（63）が出土している。

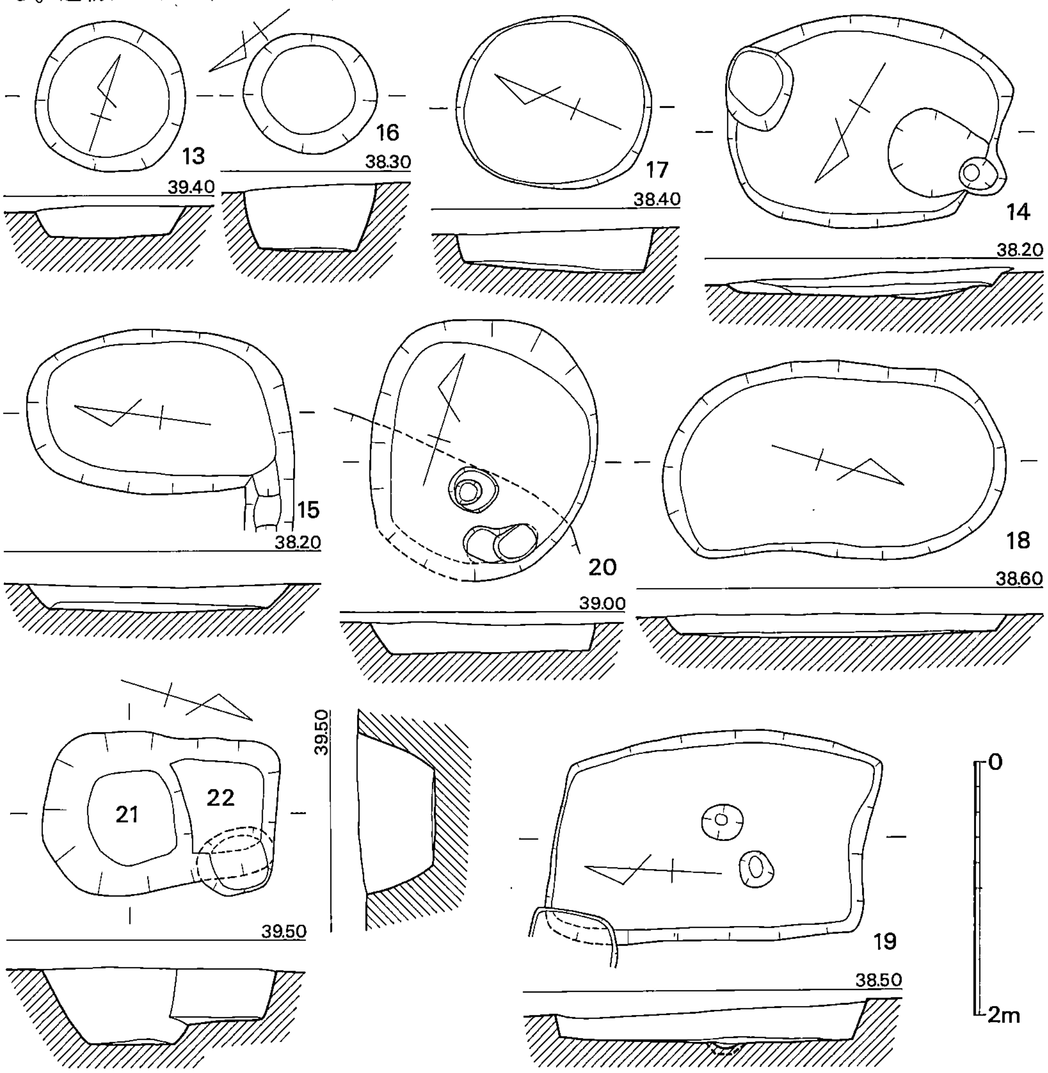
11号竪穴（11）　長方形プランを呈す大型のものである。床面は，西側に段を有し，東側に深くなっている。床面隅のピットは，当遺構には伴わない新しい時期のものである。



第35図　9～11号竪穴出土土器実測図（1/3）

遺物はかなり出土しているが，細片が多い。甕形土器の底部が多い（62〜70）。62〜63は甕の口縁部である。62は内傾し，63は外傾する器壁の厚い口縁である。いずれも胎土に砂粒が多く，62には雲母を含む。64は短い如意形口縁をなす。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。65は壺形土器の底部である。浅い上げ底となるもので，胎土は砂粒が多く，雲母を含む。66〜70は甕の底部である。いずれも器壁の厚いもので，上げ底となる。66は蓋形土器の天井部かとも考えられる。どの土器も胎土に砂粒が多く，70は雲母を胎土に含む。遺物は，この他に石剣（26），石庖丁（31），石斧（43），砥石（48）などの石器と鉄斧（第66図１）が出土している。出土した土器は，弥生時代の中期前半に属するものと考えられる。

12号竪穴（12）　円形プランを呈す。削平により非常に浅くなっている。床面は平坦である。遺物は土器の細片で少量出土している。弥生時代のものである。



第 36 図　竪 穴 実 測 図 2（1/60）

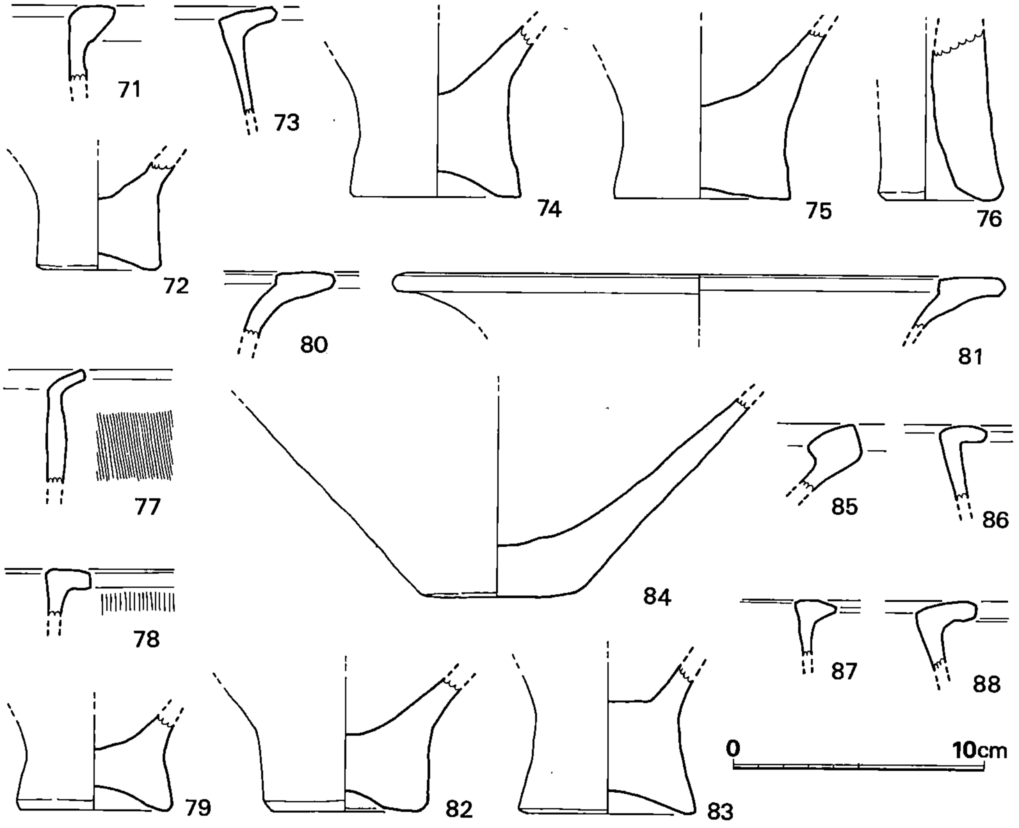
13号竪穴（13）　円形プランを呈す小型のものである。床面は平坦である。遺物は土器の細片ばかりで，数片が出土している。弥生時代のものである。

14号竪穴（14）　長方形プランを呈す。床面は浅く，中央が深くなっている。床面の西側に浅い落ち込みがある。東西の小ピットは，当遺構より新しい時期のものである。

遺物は，土器片が出土しているが，量的に少ない。71・72の甕形土器片がある。71は口縁部片で，器壁の厚いものである。断面が三角形状を呈す。胎土は砂粒が多い。72は上げ底の厚い底部で，細身をなす。弥生時代中期前半のものである。

15号竪穴（15）　楕円形状プランを呈す。床面は浅く，中央が深くなっている。西南隅より西に延びる溝は，この遺構と一連のものであろうが，それがどのような意図で設けられたか不詳である。溝の一部は底・壁が赤く焼けており，その周辺での埋土中には，焼土や灰が多く含まれていた。

遺物は，土器の細片が多い。73の甕形土器の口縁部片がある。外反する口縁は，平坦部がやや内傾する。内側に稜を有す。この他に器壁の厚い上げ底の底部片がある。また，この遺構に接続すると思われる溝より石庖丁片（30）が出土している。



第 37 図　14～19号竪穴出土土器実測図（1/3）

16号竪穴（16）　円形プランを呈す小型のものである。深さもかなりあり，床面は中央がやや深くなっている。

遺物は，土器片が多く，図示できたのは残りやすい甕形土器や器台である。74・75は底部で，いずれも上げ底の厚いものである。胎土に粗砂粒が非常に多い。76は細身の器台で厚手のものである。やや小型のもの。胎土は粗砂粒が多い。

17号竪穴（17）　円形プランを呈す。床面は南に傾斜し，中央がやや深くなっている。

遺物は，少量の土器片が出土している。甕形土器片である（77～79）。77は如意形口縁をなす。器外面には刷毛目を施す。胎土は砂粒が多い。78は平坦をなす口縁部である。口縁部直下より刷毛目を施す。胎土は砂粒が多い。79は上げ底の底部である。下端部はやや開く。胎土は細砂粒を含む。弥生時代の中期前半に属す。

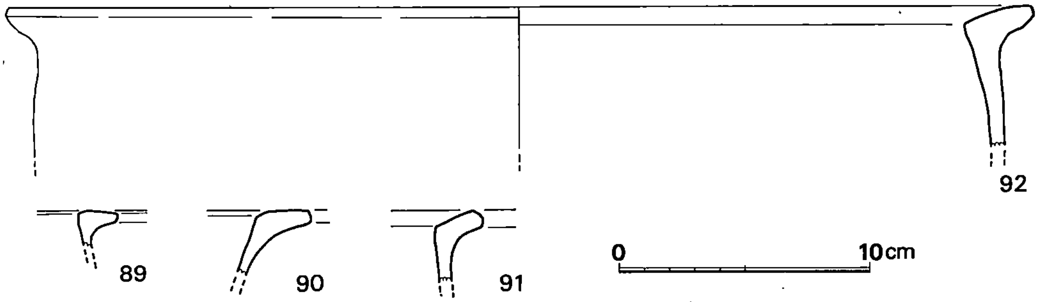
18号竪穴（18）　不整な楕円形プランを呈す。床面は浅く，中央が深くなっている。

遺物は，土器の出土が多かったが，いずれも細片である。80～83・88が出土している。80・81は壺形土器の口縁部片で，平坦口縁をなす。いずれも大きく開く口頸部をなすものであろう。胎土に砂粒が多い。82・83は甕形土器の底部で，上げ底であり，厚い底部である。胎土は，82が砂粒が多く，雲母を含む。83は粗砂粒が非常に多い。88は甕形土器の口縁部片で，平坦部は内傾し，内側に稜がつく。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。弥生時代の中期前半の土器である。

19号竪穴（19）　やや歪つな長方形プランを呈す。床面は浅く，中央がやや深くなっている。中央付近に2個の小ピットがある。

遺物は，土器と石器が出土している。土器は細片が多い。84は壺形土器の底部である。小径の底部から大きく開く下胴部である。胎土は砂粒が非常に多い。85は壺形土器の口縁部片である。内側に粘土を貼りつけ厚くする。段を有す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。86・87は甕形土器の口縁部片である。87の口縁は，外面に粘土を貼りつけ，断面三角形状につくっている。いずれも胎土に砂粒が多く，87には雲母を含む。石器は，小型の片刃石斧（40）が出土している。

出土の土器は，弥生時代の中期前半に属するものである。



第 38 図　21～23号竪穴出土土器実測図（1/3）

20号竪穴（20）　13号土壙と重複し，これより新しい。不整な円形プランを呈す。床面は浅く，平坦である。床面の小ピットは，当遺構よりも新しい時期のものである。

遺物は，土器の細片ばかりで，量的にも少ない。弥生時代の中期に属する。この他に，小型の片刃石斧片（39）が出土している。

21号竪穴（21）　円形プランを呈す。22号と重複し，全容は不明である。床面は深く，中央がやや深い。22号との前後関係は確認できなかった。

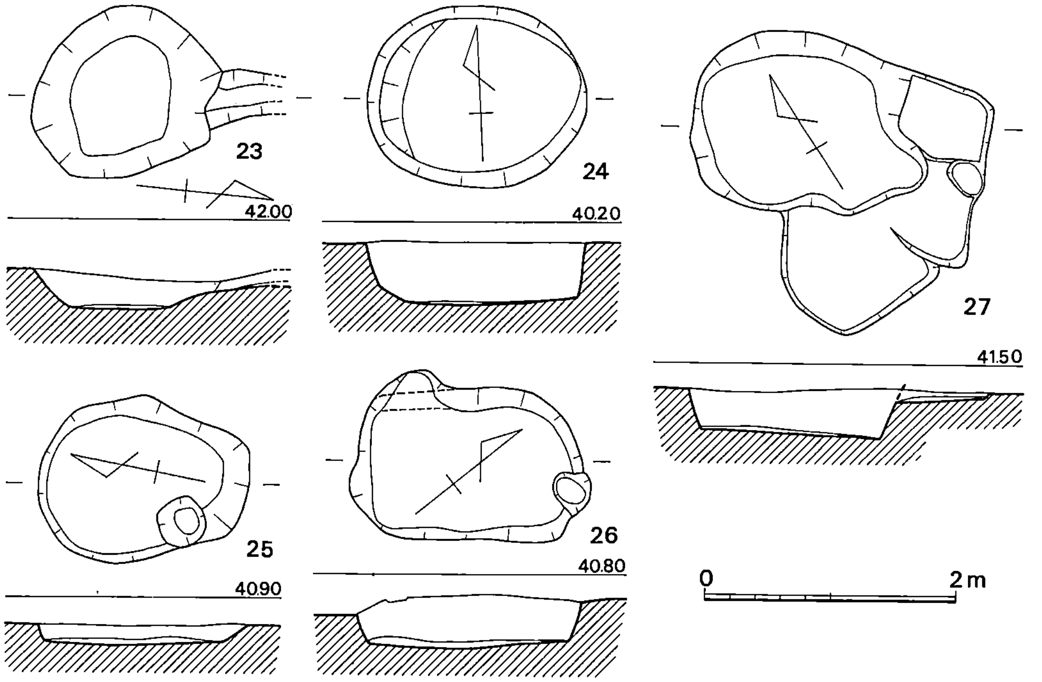
遺物は，少量の土器片が出土する。いずれも細片ばかりである。89は甕形土器の口縁部片である。やや外傾する平坦口縁である。胎土は粗砂粒を含む。90は壺形土器のラッパ状に開く口縁部片である。口縁部は平坦となる。胎土は砂粒・雲母を含む。弥生時代の中期前半に属す土器である。

22号竪穴（22）　21号と重複し，その全容はつかめないが，おおむね方形プランを呈すものであろう。床面は，割合い深く，中央がさらに深くなっている。

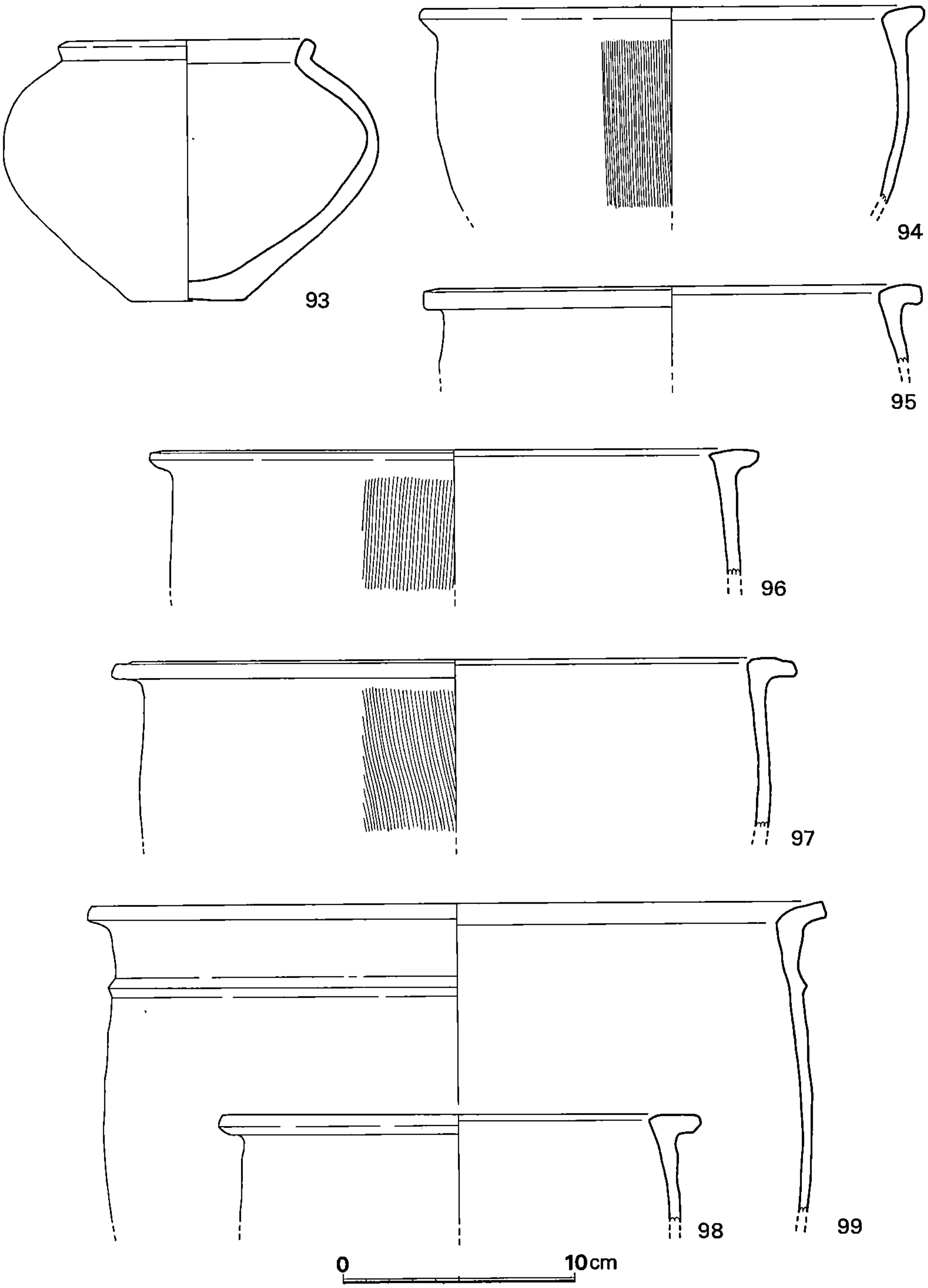
遺物は，土器の細片が若干量出土している。時期の判別はしがたい。

23号竪穴（23）　不整な円形プランを呈す。15号と同様に，小溝の付設されるものである。溝部の全容はつかめなかった。床面は，おおむね平坦である。

遺物は，土器片が多量に出土しているが，図示できるものは少ない。甕形土器の破片が多い。91は甕の口縁部である。「く」の字形の口縁部で，内側に稜がつく。胎土は砂粒が多い。92は



第39図　竪　穴　実　測　図　3（1/60）

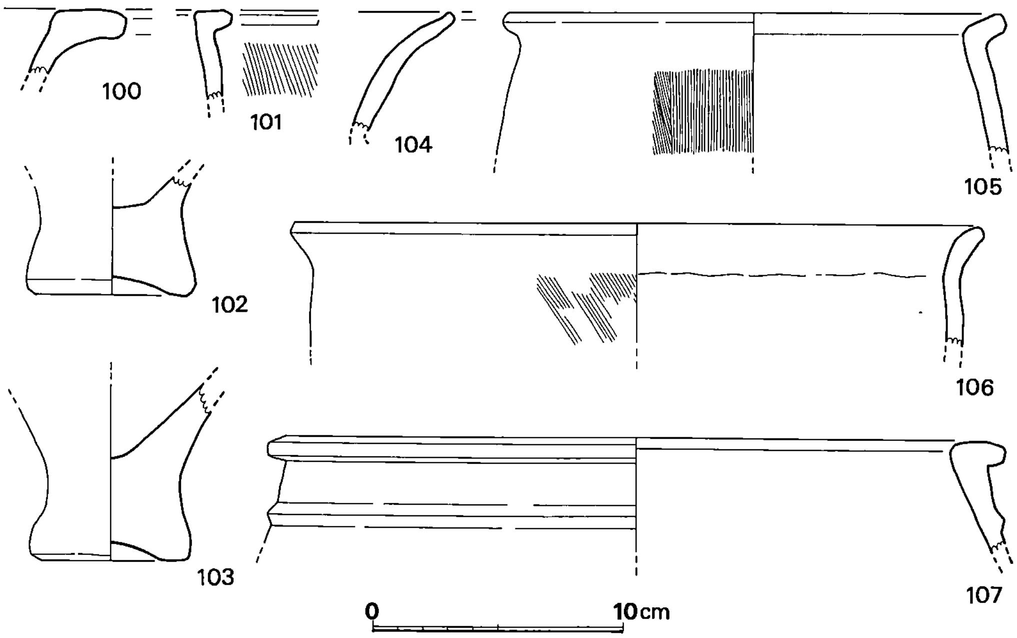


第 40 図　24号竪穴出土土器実測図（1/3）

やや大きな甕の口縁部である。内傾する平坦口縁で，内側に稜がつく。器面の整形はナデによるものである。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。弥生時代の中期前半に属するものである。

24号竪穴（24）　長円形プランを呈す。床面は深く，おおむね平坦である。遺物は非常に多い。93～99の土器が出土する。93は壺形土器で，口縁部の一部を欠損する。肩の張る胴部を呈し，これに短く外反する口縁部を有す。無頸壺と呼ばれるものであろう。口縁部内外面は横ナデ，胴部外面は箆ミガキを，内面はナデ整形を施す。胎土は砂粒が多い。94は内傾する平坦口縁をなす。口縁部下に胴部最大径のあるもので，下胴部に若干丸味のある甕形土器であろう。胴部外面は刷毛目整形を施す。胎土は砂粒が多い。95は大きく外反する甕の口縁部である。胎土は砂粒が多い。96はやや内傾する平坦部を有し，内側に唇状に出る口縁部をもつ甕形土器である。胴部外面は刷毛目整形を施す。胎土は砂粒が多い。97は平坦をなす口縁部をもつ甕である。口唇部はやや薄くなり段を有す。胴部外面は刷毛目整形を，内面はナデ整形を，口縁部は横ナデを施す。胎土は粗砂粒が多い。98は平坦口縁部を有す甕形土器である。内側に稜がつく。胎土は粗砂粒が多い。99は如意形口縁をもち，胴部上位に断面三角形の突帯をめぐらす甕形土器である。他の甕形土器に較べやや大きい。胎土は粗砂粒が多い。これらの土器は，弥生時代の中期前半に属するものである。この他に石庖丁片（33）が出土している。

25号竪穴（25）　不整円形プランを呈す。床面は浅く，中央がやや深くなっている。遺物は，土器の細片が若干量出土。時期の判別はしがたい。



第 41 図　26・27号竪穴出土土器実測図（1/3）

表1　竪穴一覧表

単位　cm

号	平面形	口辺形	底辺形	深さ	出土遺物		時期	摘要
					土器	石器		
1	円形	144 × 125	131 × 111	18				
2	不整円形	151 × 146	137 × 136	17	㊵〜㊷		中期(前半)	
3	不整方形	145 ×(132)	118 ×(112)	19				
4	方形	180 × 167	163 × 125	21			中期	
5	円形	196 × 185	186 × 176	53		⑧	中期	
6	円形	163 × 159	150 × 146	68			中期(前葉)	
7	長円形	207 × 164	155 × 102	42	㊸〜(58)	㉗㊷	中期(前半)	
8	方形	153 × 131	138 × 103	53				
9	円形	185 × 175	161 × 145	21	(59)(60)		中期	
10	長円形	155 × 172	134 × 156	30	(61)	(63)	中期	
11	長方形	296 × 210	274 × 185	48	(62)〜(70)	㉖㉛㊳㊽㊸	中期(前半)	
12	円形	167 × 167	149 × 151	6				
13	円形	118 × 117	96 × 106	26				
14	長円形	216 × 167	203 × 144	20	(71)(72)		中期	
15	長円形	208 × 130	175 × 103	23	(73)		中期	
16	円形	106 × 94	75 × 70	55	(74)〜(76)		中期	
17	円形	155 × 133	143 × 128	34	(77)〜(79)		中期(前半)	
18	長円形	271 × 156	148 × 130	19	(80)〜(83)(88)		中期	
19	長方形	244 × 166	229 × 145	31	(84)〜(87)	㊵	中期(前半)	
20	円形	180 × 206	157 × 168	25		㊴	中期	
21	円形	— × 129	— × 74	61	(89)(90)		中期	
22	方形(?)	— × 111	— × 90	41				
23	不整円形	(145)× 137	79 × 92	32	(91)(92)		中期	
24	円形	175 × 145	158 × 123	51	(93)〜(99)	㉝	中期	
25	不整方形	167 × 130	140 × 110	18			期	
26	方形	180 × 119	160 × 95	41	(100)〜(103)		中期	
27	不整方形	164 × 142	— × 115	38	(104)〜(107)	(55)(56)(71)	中期	

計測値は現存値である。

26号竪穴（26）　長方形プランを呈すものである。畑地開墾により，南東が削平されている。床面はわりあい深く，南東側に傾斜している。

遺物は，土器片が多いが，いずれも細片である。壺・甕形土器片（100 ～ 130）が出土している。 100は大きく外反する頸部から平坦をなす口縁をつくる壺形土器の口縁部である。器肉の厚いものである。胎土は砂粒が多い。 101は内傾する体部端に粘土を貼り平坦な口縁部をつくる甕形土器である。胴部外面には粗い刷毛目を施す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。 102・103 は上げ底をなす甕底部で，厚味のある細身をなし，下端部がやや外側に開くものである。いずれも胎土に砂粒が多く，雲母を含む。これらの土器は，弥生時代の中期前半に属するものである。

27号竪穴（27）　不整形プランを呈す。南東側が，後世の浅い掘り込み等で幾分崩壊している。床面は，南東側に傾斜している。

遺物は，土器や石器がある。土器は全て破片である（104 ～ 107）。104 はラッパ状に開く壺形土器の口頸部片である。口唇部は，やや跳ね上げ気味である。胎土は粗砂粒が非常に多い。105 は「く」の字状に外反する甕形土器の口縁部である。口縁内側には稜がつく。口縁部の内外面は横ナデ，胴部外面は刷毛目整形を，内面はナデを施す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。106 は如意形口縁の甕形土器片である。口縁部内側に浅い稜がつく。口縁部内外面は横ナデを，胴部内面はナデを，外面は刷毛目整形をナデ消しているようだ。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。107 は短い平坦口縁部を有す甕形土器である。口縁下に低い断面三角形の突帯をめぐらす。胎土は粗砂粒が非常に多い。このほかに，砥石状石器（55・56）や石皿（71）が出土している。

出土した土器は，弥生時代の中期前半に属するものである。

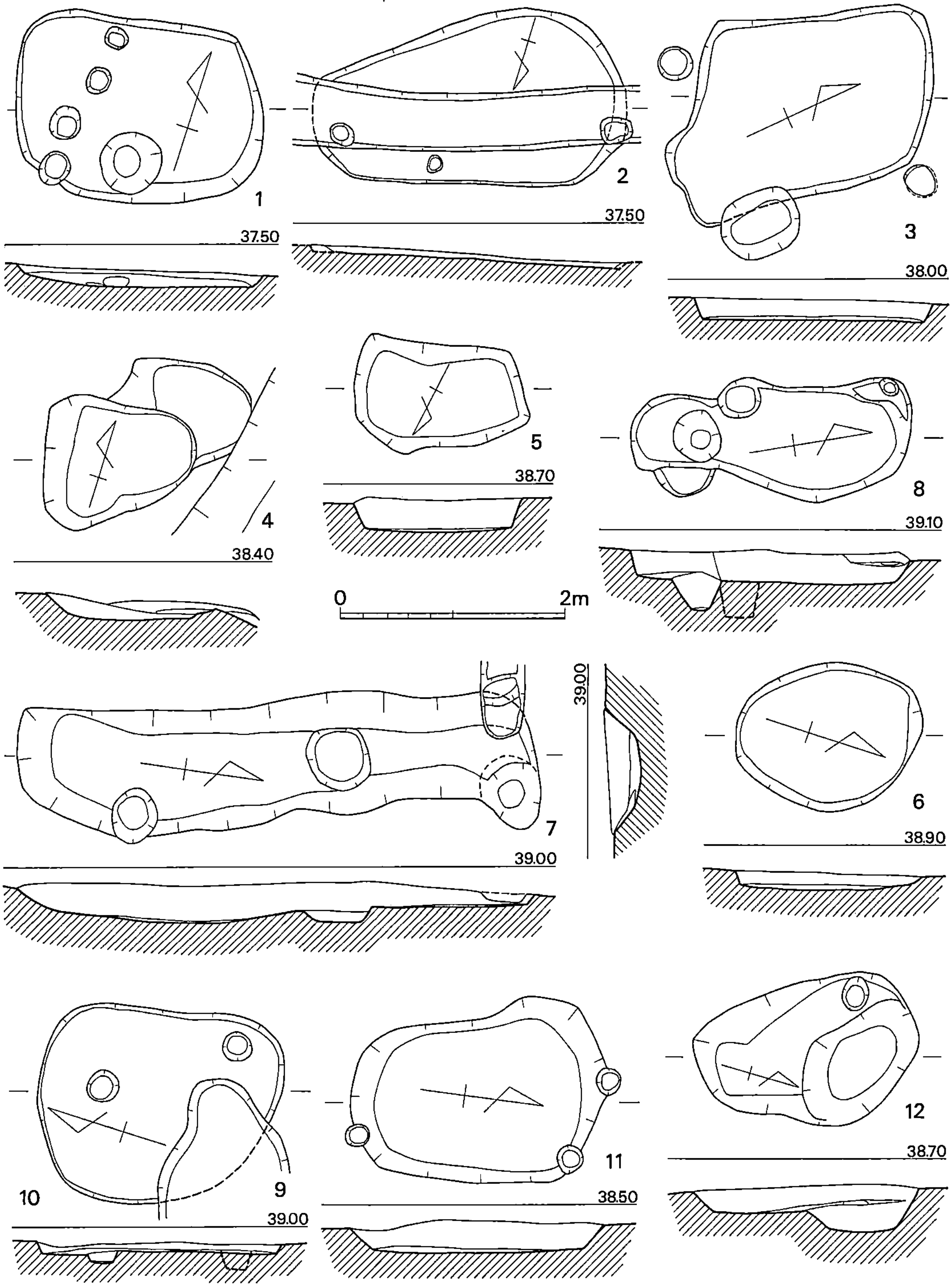
4）土壙（第42～47図，図版20～23）

土壙は21基が確認された。いくつかを除いて，平面形プランは一様でなく不整なものばかりである。7・15号は長軸が非常に長いもので特異なものである。いずれも深さの浅いもので，やはり削平を受けたものであろう。

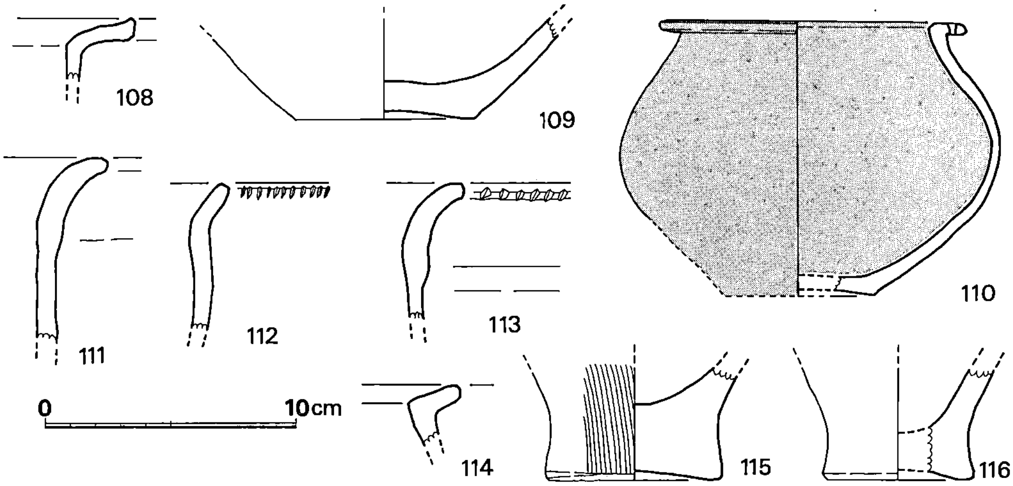
1号土壙（1）　長方形プランを呈す。非常に浅く，壙底は中央が深くなっている。壙底の小ピット群は，この遺構に伴うものか不明である。

遺物は，土器片が出土しているが，極めて少ない。108 は大きく外反する甕形土器の口縁部で，端部は跳ね上げ気味のものである。胎土は粗砂粒や雲母を含む。109 は壺形土器の底部である。やや上げ底気味のものである。胴部外面はヘラミガキを施しているようだ。胎土は砂粒が多い。弥生時代の中期に属する土器である。

2号土壙（2）　不整形プランを呈す。非常に浅く，かろうじてそのプランを確認できる



第 42 図　土 壙 実 測 図 1 (1/60)



第 43 図　1・4～6号土壙出土土器実測図（1/3）

ものである。新しい溝により中央が損壊している。壙底は平坦である。

遺物は、土器の細片が若干量出土している。弥生時代の中期に属するものである。

3号土壙（3）　1号住居跡の東側にて検出された。不整形プランを呈す。壙底はおおむね平坦である。

遺物は，土器の細片が少量出土している。甕形土器片から，弥生時代の中期のものである。この他に，石剣未製品（29）が出土している。

4号土壙（4）　2号溝の西に隣接して遺存する。小型で不整なプランを呈す。壙というより浅い落ち込み状をなす。東側の壁は，ほとんど残っていない。

遺物は，無頸壺が出土している（110）。短い平坦口縁を有し，胴部最大径は中ほどにある，全体に器壁の薄いものである。口縁部に径3㎜の小孔を焼成前に上から穿っている。孔心心間が1.9 cmで2孔を穿ち，これを一対として2ヶ所に施している。器面は剥落が著しいが，ヘラミガき整形で内外面とも丹を塗布している。弥生時代の中期に属するものである。

5号土壙（5）　不整長方形プランを呈す。わりあい深い壙底は平坦である。

遺物は，甕形土器の口縁部片が出土している（111 ～ 113）。111 は如意形口縁部で，胴部に較べ，器壁が厚く，その下位に段がつく。胎土は粗砂粒や雲母を含む。112 は如意形口縁部で，口唇部に箆による刻目を施す。胎土は粗砂粒や雲母を含む。113 は111 と同様の形状をなす。口唇部に幅広い箆による刻目を施す。胎土は粗砂粒や雲母を含む。これらの土器は，弥生時代の前期後葉に属すものである。

このほかに石庖丁片（32）が出土している。

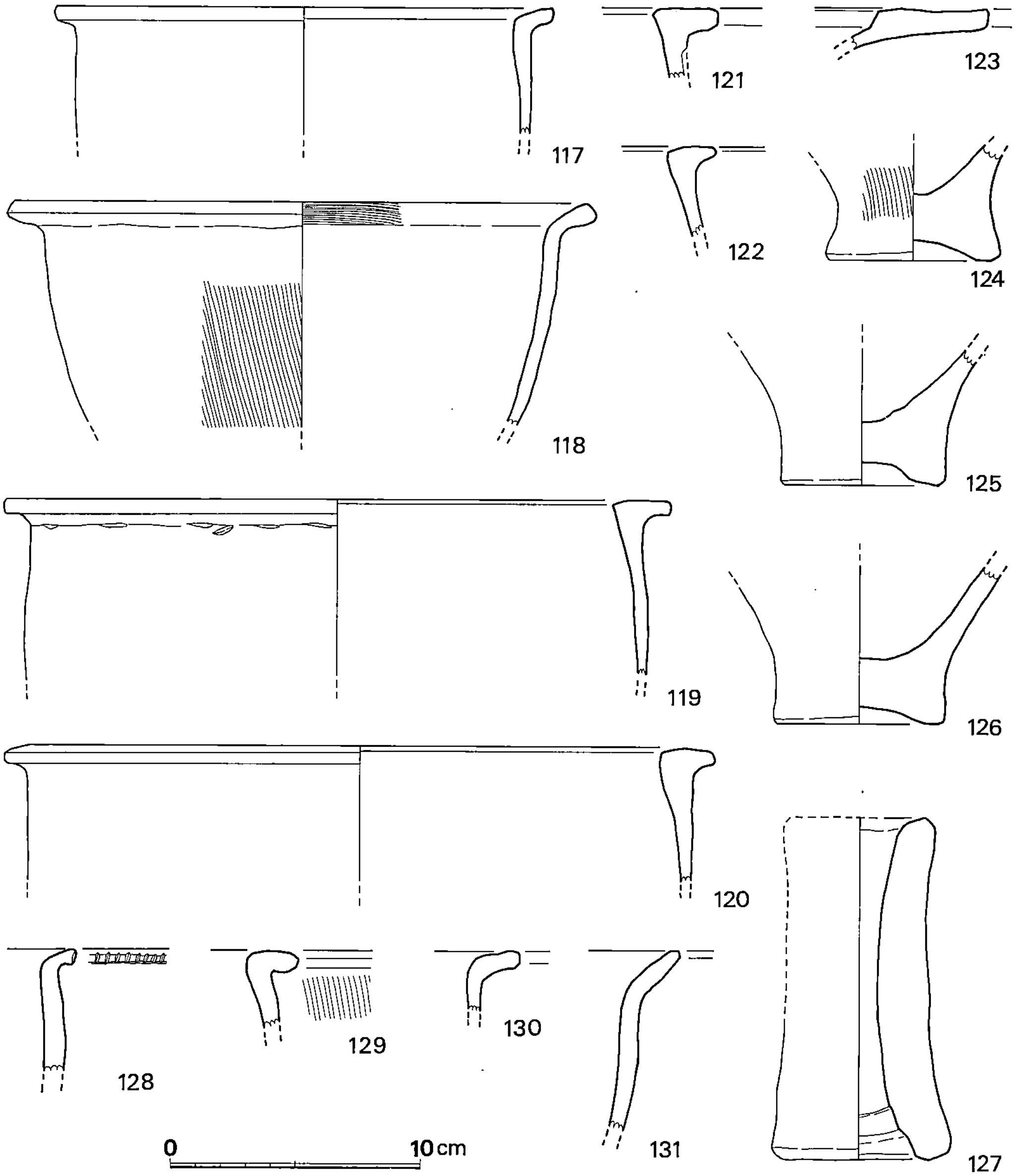
6号土壙（6）　楕円形プランを呈す。壙底は浅く，中央がやや深くなっている。

遺物は，土器片が少量出土した。いずれも甕形土器である（114 ～ 116）。114 は内傾す

る平坦部をなす口縁部である。内側に稜がつく。胎土は砂粒が多い。115 は厚い底部で上げ底を呈す。外面は粗い刷毛目を施す。胎土は粗砂粒を含む。116 は底部片で，上げ底をなすものであろう。胎土は粗砂粒や雲母を含む。これらは，弥生時代の中期に属するものである。

この他に砥石片（68）と鉄製品（2）が出土している。

7号土壙（7）　6・8号と共に，浅い包含層下に検出された。壙底の中央やや北に浅いピットがあり，その南が，壙底の最も深いところである。



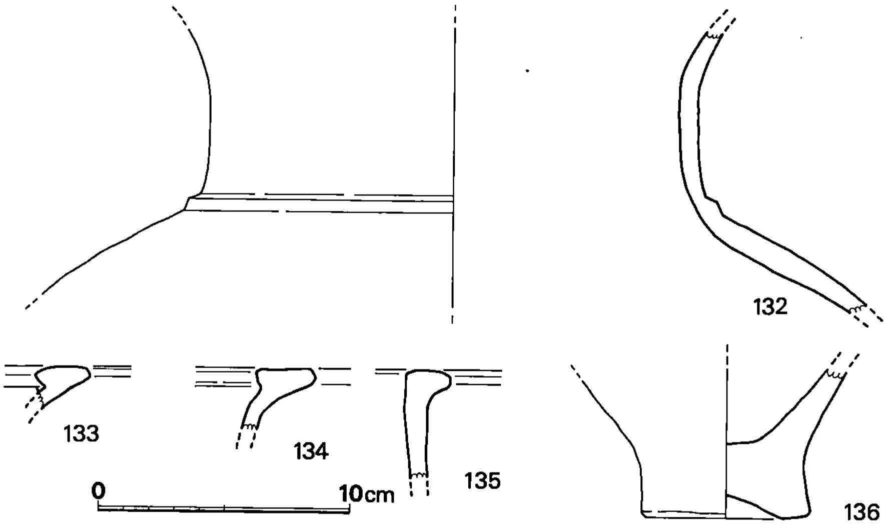
第 44 図　7・8号土壙出土土器実測図（1/3）

遺物は，土器片が多量に出土しているが，甕形土器が多い。117 は内傾する平坦部の口縁である。小型の土器であろう。胎土は粗砂粒が多い。118 は外傾する口縁部で，口唇部は肥厚する。口唇部から胴上部は横ナデ，口縁部内面は横位の刷毛目を施す。胴部は外面を粗い刷毛目内面はナデの整形である。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。119 は平坦な口縁部をなす。口縁下外面には篦様工具による押圧痕が残る。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。120 は，おおむね平坦な口縁部をつくる。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。121 は平坦をなす口縁部で厚味のあるものである。胎土は砂粒が多い。122 は平坦をなす口縁部で，口唇部は薄くなっている。胎土は砂粒や雲母を含む。123 は壺形土器の口縁部である。平坦部は長く，内側に段を有す。胎土は砂粒多い。124 ～ 126は甕の底部である。いずれも上げ底を呈すが，器壁は薄い。 124は下端が開くもので，外面に粗い刷毛目を施す。いずれも胎土が砂粒が非常に多い。127 は器壁の厚い器台片である。内面下位がナデによる整形を施すが，他面は不明である。胎土は粗砂粒が多い。器台は薄手のものも出土しているが，細片である。これらの土器は，弥生時代の中期前半でもやや新しい時期のものであろう。

この他に，溝状痕のある石器（47）が出土している。

8号土壙（8）　不整形プランを呈す。やや長軸の長いものである。壙底は南の小ピット南側が一段高くなっているが，おおむね平坦である。

遺物は土器片が出土している。いずれも甕形土器である（128 ～ 131）。128 は肥厚する胴から短く如意形状に外反する口縁部である。口唇部には，篦による細い刻目を施す。内外面とも丁寧なナデによる整形である。胎土は砂粒を含む。129 は，肥厚する口縁部である。大きく外反し，端部はやや下り気味である。口縁部と胴部内面が横ナデで，胴部外面は粗い刷毛目を施す。胎土は砂粒多い。130 は大きく外反する口縁部で，端部がやや肥厚する。胎土は砂粒



第 45 図　11号土壙出土土器実測図（1/3）

を含む。131 は如意形口縁をなす。外面の口縁下から内面は横位のヘラミガキ，胴部外面は斜位のヘラミガキ整形である。胎土は粗砂粒や雲母を含む。128 ・ 131は古い様式のもので，弥生時代の前期後葉のもので，129 ・ 130は中期前半のものである。

9号土壙（9）　3号溝の北端にあり，この溝により西側を損壊される。不整形プランを呈す。壙底は浅く，おおむね平坦である。

遺物の出土はなく，時期は不明である。

10号土壙（10）　9号土壙と重複し，これにより一部が削平される。壙底は浅く，おおむね平坦である。壙内に2つの小ピットがある。

遺物は，土器の細片が少量出土しているが，時期を判断できるものではない。

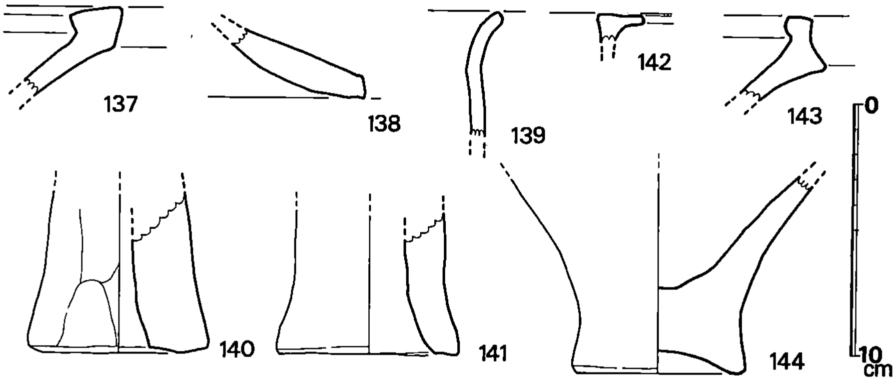
11号土壙（11）　やや丸味のある長方形プランを呈す。壙底はやや深く，中央部より南側が若干深くなっている。

遺物は，壺・甕形土器片が出土している（132 ～ 136）。132 はやや大きな壺で，直立する頸から大きく外反する口縁部をなすものであろう。肩と頸の境に低い断面三角形の突帯をめぐらす。胎土は粗砂粒が多い。133 ・ 134は平坦な壺の口縁部である。いずれも胎土に砂粒が多く，雲母を含む。135 は甕の口縁部である。肥厚する体部に粘土を貼りつけ短い平坦部をつくる。胎土は粗砂粒が多い。136 は甕の底部である。上げ底で，内外面ともナデによる整形である。胎土は砂粒が多い。このほか，薄手の器台片がある。これらの土器は弥生時代の中期前半に属するものである。

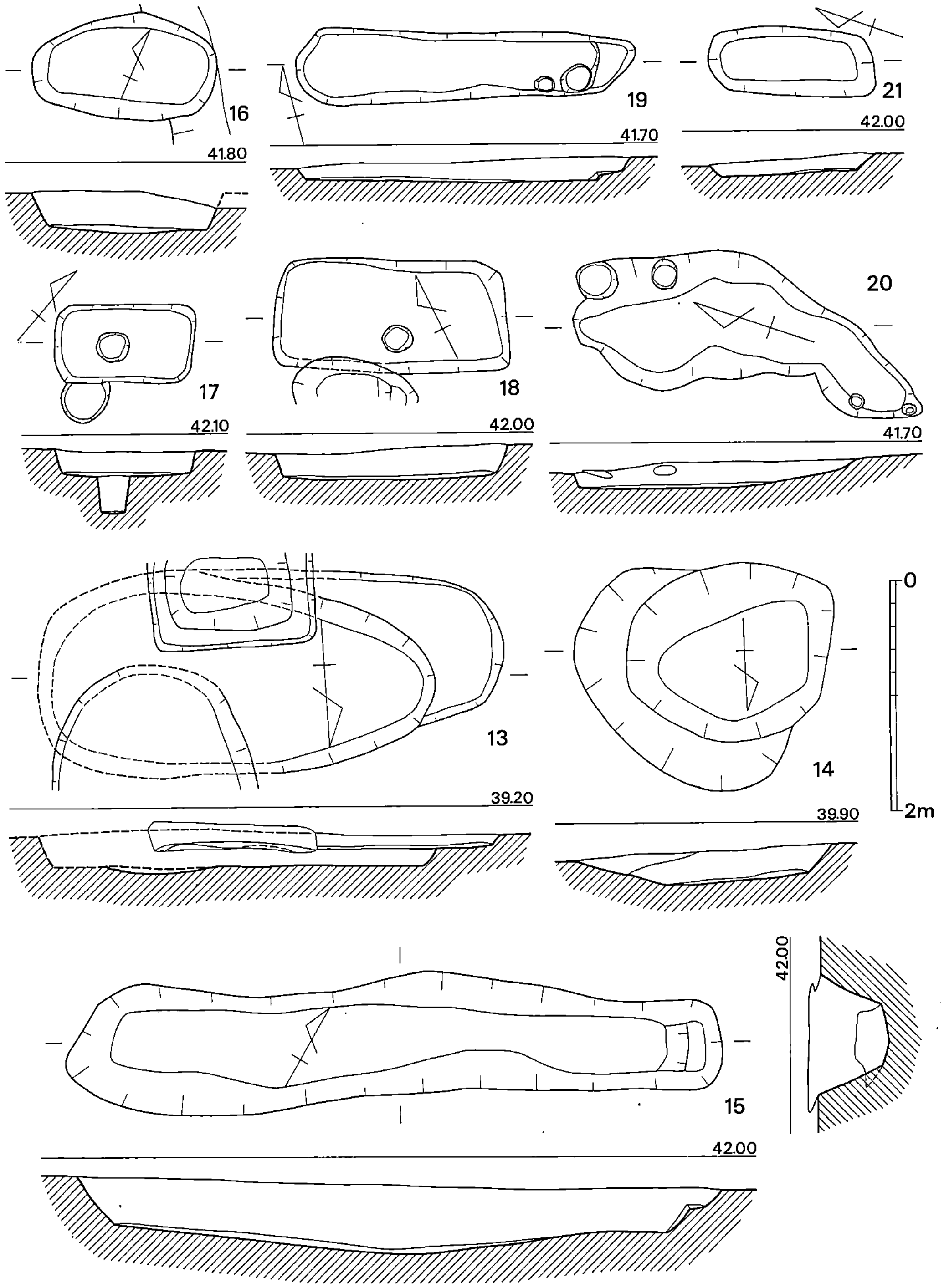
この他の遺物に磨石（73）がある。

12号土壙（12）　19号竪穴の南に隣接して遺存する。不整形なプランを呈し，壙底は二段となっている。

遺物は，土器片がかなり出ているが，図示できるものは少ない。137 は壺形土器の口縁部である。大きく外反する口縁部は，その端を肥厚させているが，この肥厚部は短い。内側に段を有す。古い様相の残るものである。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。138は蓋形土器の身受け部



第 46 図　12・14号土壙出土土器実測図（1/3）



第 47 図　土 壙 実 測 図　2 (1/60)

の破片であろう。器壁の厚いもので，胎土は粗砂粒が非常に多く，雲母を含む。139 は軽く外反する甕形土器の口縁部である。器面の剥落が著しいもので，口唇部に刻目を有すが，詳しくは判別しがたい。140・141は器壁の厚い器台である。140 の胎土は粗砂粒を含むが，141 の胎土は精製土を使用している。

これらの土器は，弥生時代の中期前半でもやや古いものであろう。

この他に，磨石（74）が出土している。

13号土壙（13）　2号土壙墓と20号竪穴と重複し損壊をうけ，その全容はつかめ得ない。長楕円形プランをなすものと考えられる。壙底は浅く，おおむね平坦である。

遺物は，土器の細片が少量出土している。甕形土器の細片からして，弥生時代の中期のものである。この他に，石庖丁片（34）が出土している。

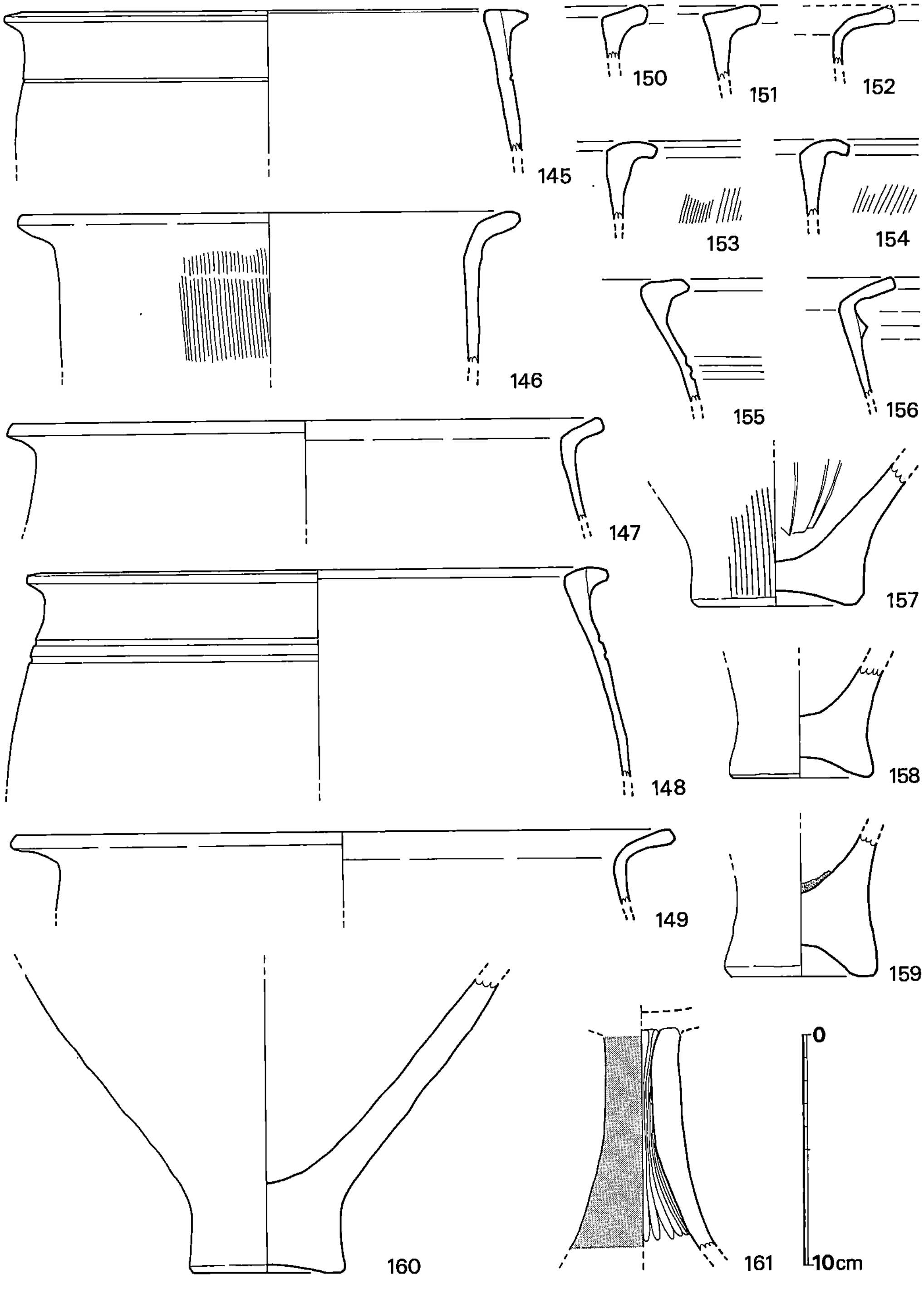
14号土壙（14）　断面が擂鉢状をなし，不整形なプランを呈す。壙底は東に傾斜する。

遺物は，土器が少量出土している。142 は甕形土器の口縁部である。非常に焼成のあまいもので，器表がかなり磨滅していると思われるが、平坦口縁をなす端部は，非常に薄くなっている。胎土は細砂粒が多い。143 は壺形土器の口縁部か。大きく外反する口縁端部に粘土を貼り整形し，浅い袋状を呈す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。144 は甕の底部である。上げ底のもので，やや厚身のものである。外面は刷毛目を施しているが，剥落が著しい。

143 は後出する土器で，他にこの時期の土器片はなく，流れ込みの可能性を含むが，遺跡の全体をみても，この時期のものはなく，判断に苦慮するところである。142・144は弥生時代の中期に，143 は同後期に属するものである。

15号土壙（15）　長軸の非常に長い壙である。壙底は深く，中央が深くなっている。壙内の東側には一段を設ける。他と異なる特徴のある壙である。どのような意図で設けられたかは不明である。

遺物は，土器が多量に出土し，石器は砥石（57）が出土している。土器は甕が多く，壺や器台の細片がある。145 は平坦な口縁部をなす。口縁下に1条の浅い箆描き沈線をめぐらす。胎土は粗砂粒や雲母を含む。147 は大きく外反し，平坦部は内傾する。不明瞭な稜が内側につく。胎土は砂粒が多い。148 は大きく屈折する口縁部で，やや丸味のあるもので，胴部はやや張り出すものである。胴部には，口縁下に2条の幅広い箆描き沈線をめぐらす。胎土は粗砂粒が多い。149 は大きく外反する口縁で，器壁は薄い。口縁端部がやや肥厚する。器外面は横ナデ整形で，口唇部下全体に煤が付着する。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。150・151は大きく屈折する口縁部で，平坦部は内傾する。内側に稜がつく。両者とも胎土に砂粒が多く，雲母を含む。152 は，149 と同様の形状を呈すが，口唇部が欠損し，よくわからないが，跳上げ状になるものと推定される。胎土は粗砂粒が多い。153・154は類似する口縁部である。口唇部は若干下り気味である。胴部は口縁下より刷毛目を施す。いずれも胎土に砂粒が多く，154 は雲



第 48 図　　15・16号土壙出土土器実測図（1/3）

母を含む。155 は，148 に類似する口縁部である。胴部は口縁下より刷毛目を施し，その後に篦による幅広い２条の沈線をめぐらす。156 は大きく外反する口縁で，器壁の薄いものである。内側に稜がつき，口縁部直下に断面三角形の突帯をめぐらす。胎土は細砂粒が多い。157～ 160 の底部のうち，157 はやや大型のもので，つくりも他のものと異なり，薄手のものである。いずれも上げ底をなす。157 の外面は粗い刷毛目を施し，内面には板状工具の小口による押し引きの痕跡がある。胎土は砂粒や雲母が多く含まれる。158 ～ 160は細身で厚い底部である。いずれも胎土に砂粒が多く，158 ・ 159には雲母を含む。159 の内底には黒色を呈す異物が付着する。

これらの土器は，148 や 155のように胴部の張るものがあるが，沈線をめぐらすなど古い様相が残る。また，149 ・ 152・ 156は器壁が薄く後出する土器群の様相を呈し，全体的な形態がつかめず判断しがたいところがある。しかしながら，底部には薄手のものがない。全体的にみて，弥生時代の中期前半に属し，中葉頃に近い時期のものであろうか。

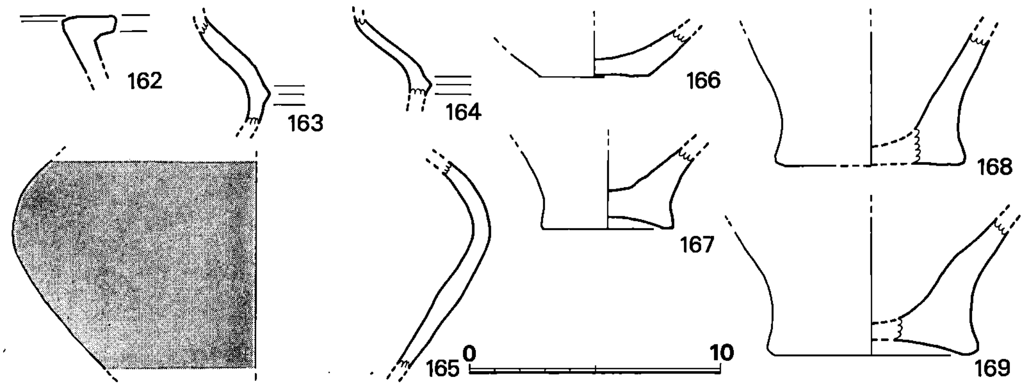
16号土壙（16）　畑地開墾により東側が削平をうける。壙底は，おおむね平坦である。

遺物は，土器の細片が若干出土している。器種は壺・甕・器台・高杯がある。高杯（161 ）は，脚体部が残るのみである。細身で器壁は厚い。器外面は縦ヘラミガキで丹塗りしている。内面には篦による押し引きがある。胎土は粗砂粒を含む。他の土器片からして，弥生時代の中期に属するものである。

17号土壙（17）　小型の長方形プランを呈す。壙底は，おおむね平坦である。壙底の小ピットは，周辺のピット群の状況から，壙より新しいものである。遺物は出土していない。

18号土壙（18）　長方形プランを呈す。17号と共に整った平面形と掘り方をなす。隣接する小壙により一部崩壊する。壙底は，おおむね平坦をなし，中央南よりの深さ７cmの小ピットは，壙に伴うものである。遺物は出土していない。

19号土壙（19）　長方形状をなす浅い壙である。東側に一段を設け，壙底には２つの小ピットを設ける。



第 49 図　20号土壙出土土器実測図（1/3）

遺物は，土器の細片が出土し，この中には甕，丹塗り小型壺や器台がある。弥生時代の中期に属すものである。

20号土壙（20）　不整形なプランを呈す。壙底は浅く，北に深くなっている。壙内の北側に２つの小ピットがある。

遺物は，土器片が多い。いずれも細片である。162 は平坦部をなす甕の口縁部である。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。163・164は算盤玉状をなす壺の胴部片である。胴の最大部に断面三角形の突帯をめぐらす。163 の肩部外面はヘラミガキで，他はナデによる整形である。164 の肩部はナデ整形かやや不明である。他面はナデによる。いずれも胎土に砂粒を含み，163は雲母を含む。165 は肩の張る壺である。器面の剝落が著しい。内面はナデによる整形である。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。166 は壺の底部である。165 のような壺の底部になるものであろう。外面は丁寧なナデ整形を施す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。167 ～ 169は甕の底部で，いずれも薄手のものである。弥生時代の中期中葉頃のものであろう。

21号土壙（21）　長方形を呈す小型の土壙である。壙底は浅く，平坦で北側に傾斜する。

遺物は出土していない。

表２　土壙一覧表

単位　cm

号	平面形	口辺形	底辺形	深さ	出土遺物		時期	摘要
					土器	石器		
1	長方形	219 × 161	(206 × 135	15	⑩⑧・⑩⑨		中期	
2	長円形	(270)× 157	(250)× 145	6			中期	
3	不整長方形	210 × 157	195 × 146	29		㉙	中期	
4	不整形	133 × 118	108 × 96	24	⑪⓪		中期	
5	不整長方形	149 × 91	129 × 61	29	⑪①～⑪③	㉜	前期	
6	不整円形	163 × 130	149 × 120	30	⑪④～⑪⑥	⑥⑧	中期	
7	不整長方形	462 × 108	423 × 74	33	⑪⑦～⑫⑦	㊼	中期	
8	不整形	248 × 100	229 × 85	37	⑫⑧～⑬①		前期末 ～中期初	
9	不整形	(185)× 115	(168)× 99	14				
10	不整円形	218 × 175	208 × 166	7				
11	不整長方形	228 × 164	184 × 132	39	⑬②～⑬⑥	⑦③	中期	
12	不整形	200 × 133	157 × 80	42	⑬⑦～⑭①	⑦④	中期	
13	不整長円形	(345)×(147)	(320)×(112)	14		㉞	中期	
14	不整円形	222 × 195	130 × 91	27	⑭②～⑭④		中期～後期	
15	不正長方形	564 × 99	480 × 64	54	⑭⑤～⑯⓪	⑤⑦	中期(前半)	

16	不整長方形	160 × 92	139 × 67	36	⑯①		中期(中)	
17	長 方 形	121 × 68	113 × 59	21				
18	長 方 形	202 × 98	187 × 80	27				
19	長 方 形	293 × 59	278 × 45	20			中期	
20	不 整 形	315 × 125	275 × 75	22	⑯②～⑯⑨		中期(前半)	
21	長 方 形	143 × 60	117 × 37	12				

計測値は現存値である。

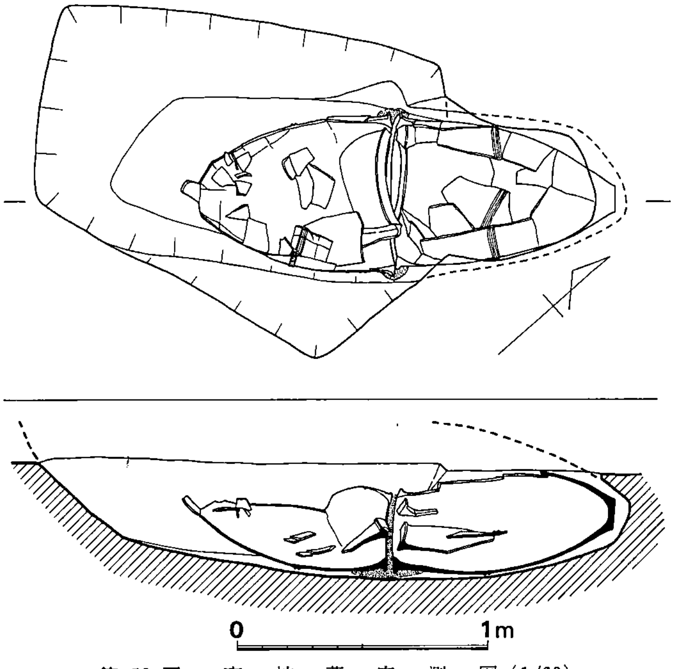
(5) 甕棺墓（第50・51図，図版23－3）

第6号住居跡の南西側に所在する。当棺の南は畑地開墾により大きく削られている。1基のみが確認された。開墾により上部を削平されているが，棺はかろうじて削平をまぬがれていた。ただ重圧により上部が崩壊し，遺存状態はあまりよくない。棺は，長方形の壙を堀り，一方に横穴を穿ち下甕を納め，これにほぼ同大の上甕を口を合せて据えている。いわゆる接口式の甕棺で，全体にほぼ水平に納め，接口部には白色粘土により目貼りしている。

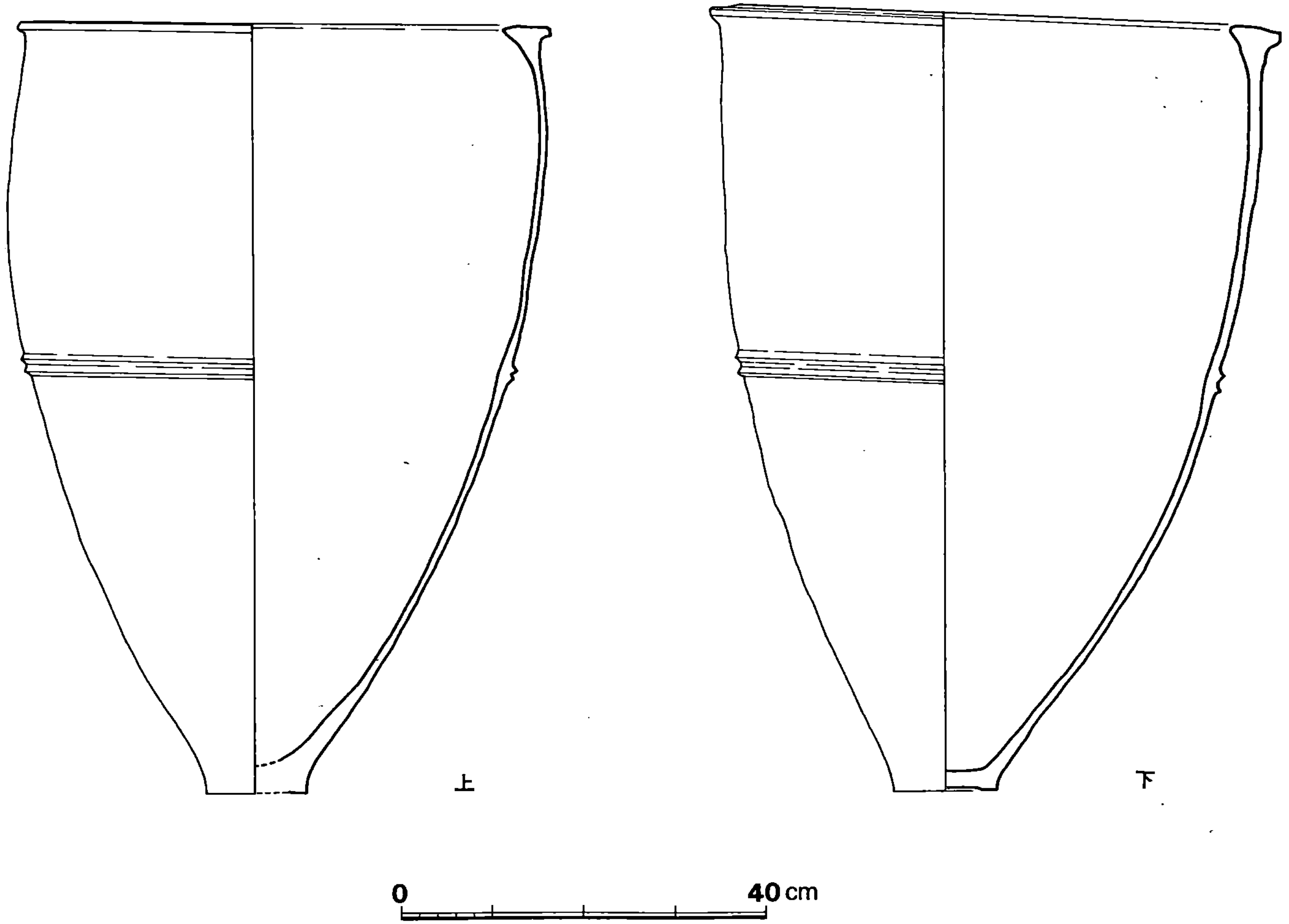
甕棺（第51図）は，ほぼ同大のものを使用している。上甕は底部を完存しない。平坦口縁部を有し，胴部最大径は上部にあり，その下部に2条の断面三角形の突帯をめぐらす。下甕は，やや外傾する平坦口縁部となり，胴部最大径は口縁下にあり，胴部の中位に2条の断面三角形の突帯をめぐらす。底部外面は浅い上げ底となる。

いずれも全体に焼成があまく，器面の剥落がはなはだしく，器面の調整が詳細に把握できないが，両者とも丁寧なナデ仕上げを施しているものと思われる。叩きや刷毛目は認められない。

口縁部は，いずれも内側に張り出し，外側には短かく延び，厚味のあるものである。胴部の上端はやや内傾する。胴部の張りのない形状で，突帯はほぼ中位にめぐらし，その形状から上・下甕とも弥生



第50図　甕　棺　墓　実　測　図（1/60）



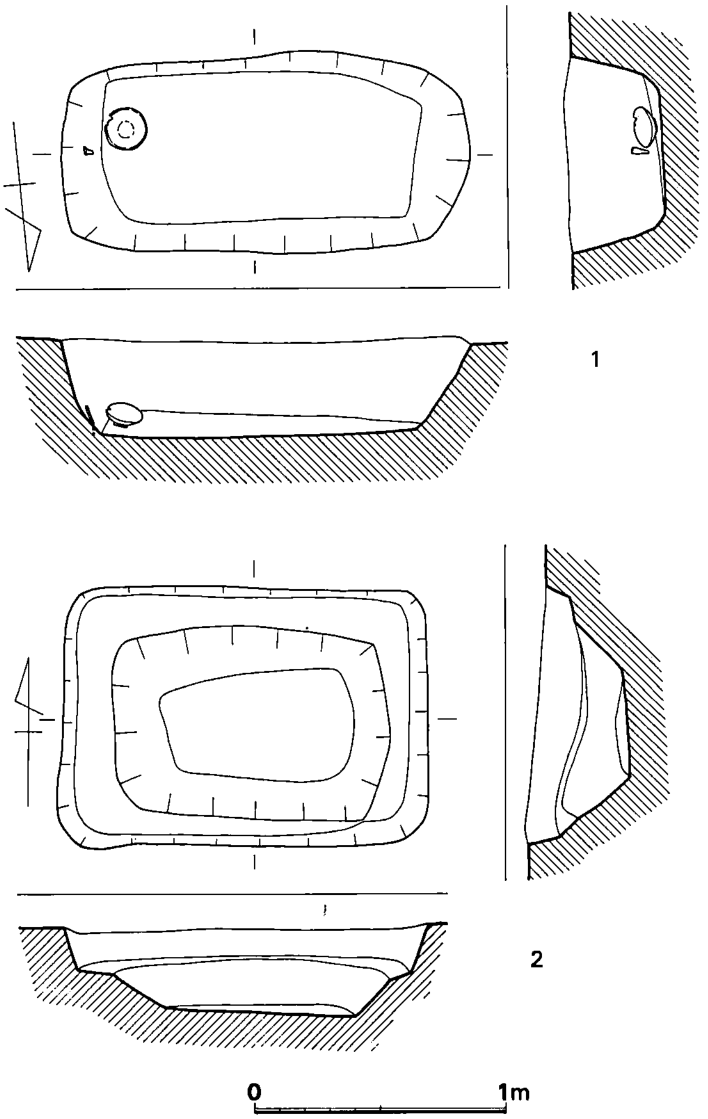
第51図　甕　棺　実　測　図 (1/8)

時代の中期前半でもやや新しい時期のものであろう。

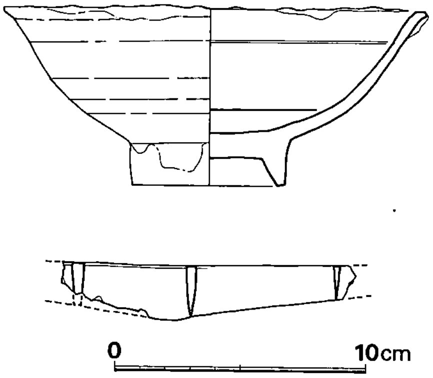
(6) 土壙墓

土壙墓は２基が検出された。土壙の中で17・18号土壙などは平面形や規模などから土壙墓かとも考えられるが，遺物の出土もなく土壙としてあつかった。

１号土壙墓（第52図１，図版24－１）　長方形プランを呈す。長辺1.63m，短辺0.8m，深さ0.4m前後を測る。壙は半ば礫混入の硬い地山に掘られている。壙底はおおむね平坦である。



第52図　土壙墓実測図（1/60）

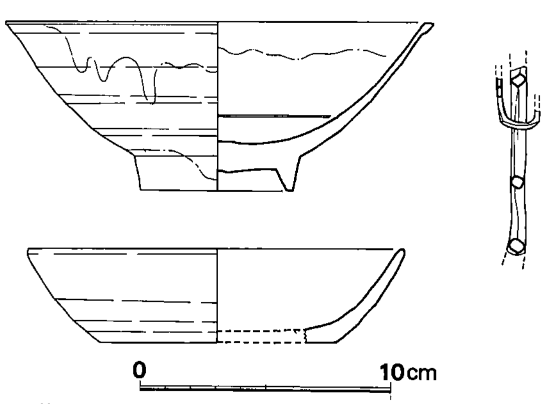


第 53 図　1号土壙墓出土品実測図 (1/3)

遺物は，壙底の東端に白磁碗が置かれており，小口法面下端に鉄刀子が地山に突刺っていた。刀子は，地山が非常に硬く，完全に取り上げることは困難で，先端部が欠損した。白磁は副葬品と考えられるが，鉄刀子は副葬品であるかは，その出土状態からは判断は難しい。

遺物（第53図）は，白磁と鉄刀子である。土壙墓に隣接する浅い位置から大型の砥石（第 63 図 61）が出土しているが，これに関連するものか不明である。白磁碗は完形品である。口径16.9cm，高台径6.1cm，器高7cmを測る。下体部にやや膨みがある。口縁部は浅く外反し，端部は水平となる。釉下には，外面は口縁下部よりヘラケズリの痕がみとめられ，内部は口縁下と底部ちかくに2条の沈線が入る。高台の内外面が露胎であるほかは薄く施釉され，高台に一部垂れている。また，口唇部には釉が玉状になって厚くなっておりなめらかでない。内外面とも小さな気泡痕がいくつもみられる。色調は乳白色で，鉄分の付着でまだらに茶色を呈す。鉄刀子は，柄部と刀部の大半を欠損する．現存長11.7cm，関部幅2.1cmを測る。関部の幅が最も大きいもので，刃部からゆるやかに弧を描き関となる形態で，柄部も端部に向かって細くなるものであろう。出土遺物からして平安末期頃と推定される。

2号土壙墓（第52図2，図版24－2）　幅広の長方形プランを呈す。掘り方のある土壙墓で，一段目は長辺1.66m，短辺1.04m，深さ0.27mを測る浅いもので，さらに長辺1.1m，短辺0.78m，深さ0.21m前後の壙を掘っている。深さの浅いもので，やや小型の壙である。一段の壙底はおおむね平坦で，おそらくこの部分は木蓋を置いた位置と思われる。また，法面はなだらかで，壙底もあまり平坦ではない。遺物は白磁，土師器，鉄製品が出土している。白磁は，壙の東側の一段目の壙底から法面にそって流れ落ちた状態で，いくつもの小片となって出土した。恐らく棺外に副葬したもので，木蓋が朽ちて棺内に流れ込んだものと考えられる。土師器，鉄製品は埋土中に発見されたものである。



第 54 図　2号土壙墓出土品実測図 (1/3)

遺物（第54図）は，前記のとおりである。白磁碗は，口縁部の一部が欠損するものでほぼ完形のものである。口径17.1cm，高台径6.2cm，器高6.6cmを測る。器壁はわりあい薄い。口縁部は

浅く外反し，端部は平坦となる。釉下には，外面では口縁下部よりヘラケズリがみられ，内面には下体部に１条の浅い沈線がみとめられる。高台の内外面を除いて施釉され，高台の一部にかかっている。口縁部はやや釉が厚く内外面ともに垂れている。釉面には小さな気泡がいくつもみられる。色調は淡い灰色を呈す。土師器は細片より復原したものである。口径15cm，底径9.4cm，器高3.7cmを測る。体部はほぼ直線的に外傾するもので，口唇部は丸味をもつ。底部は平坦で糸切りである。下体部にはヘラケズリ痕がみとめられるが，内外面ともヨコナデ整形である。外面には煤状の異物の付着は一部にみとめられる。鉄製品は径６㎜前後のややねじれた棒状のものにＵ字状の金具の銹着するもので，これが一体のものであるかもあわせて用途不明の鉄製品である。出土遺物からして平安末期頃の土壙墓と考えられる。

(7) 溝（付図３・４）

溝は６条が確認された。配置図の中で番号の付していないものは，後世に掘られたもので，農業用水路と考えられるものである。

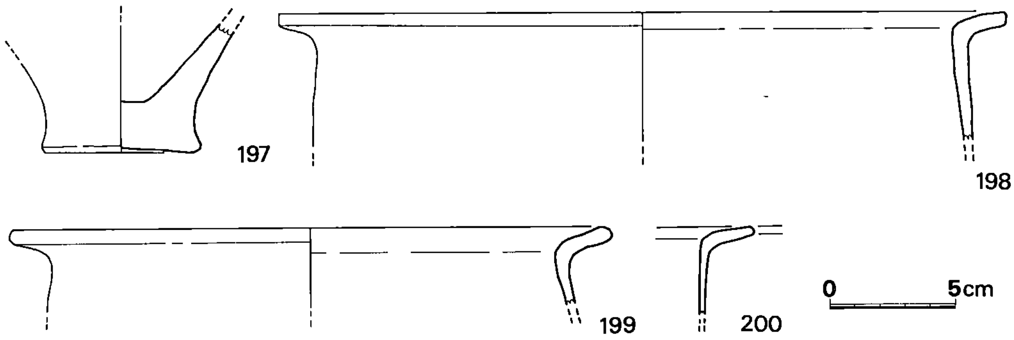
１号溝（図版25－１）　南北に延びる溝である。南端は一段を有し浅くなっている。溝底は北に深くなっている。幅は120cm前後で，深さは30～40cmを測る。遺物は弥生式土器や土師器の細片が若干出土している。時期不明である。

２号溝　発掘当初，掘立柱建物に伴う布張状溝かと考えられたが，掘立柱建物として考えられる柱穴が周辺でみられなかった。細く浅いもので10cm前後の深さである。

この溝から197～199の土器が出土している。いずれも弥生式土器の甕である。198・199は大きく外反する口縁部で薄手のものである。いずれも砂粒が多く，198は雲母を含む。197はやや上げ底気味の底部で，胎土に砂粒多し。

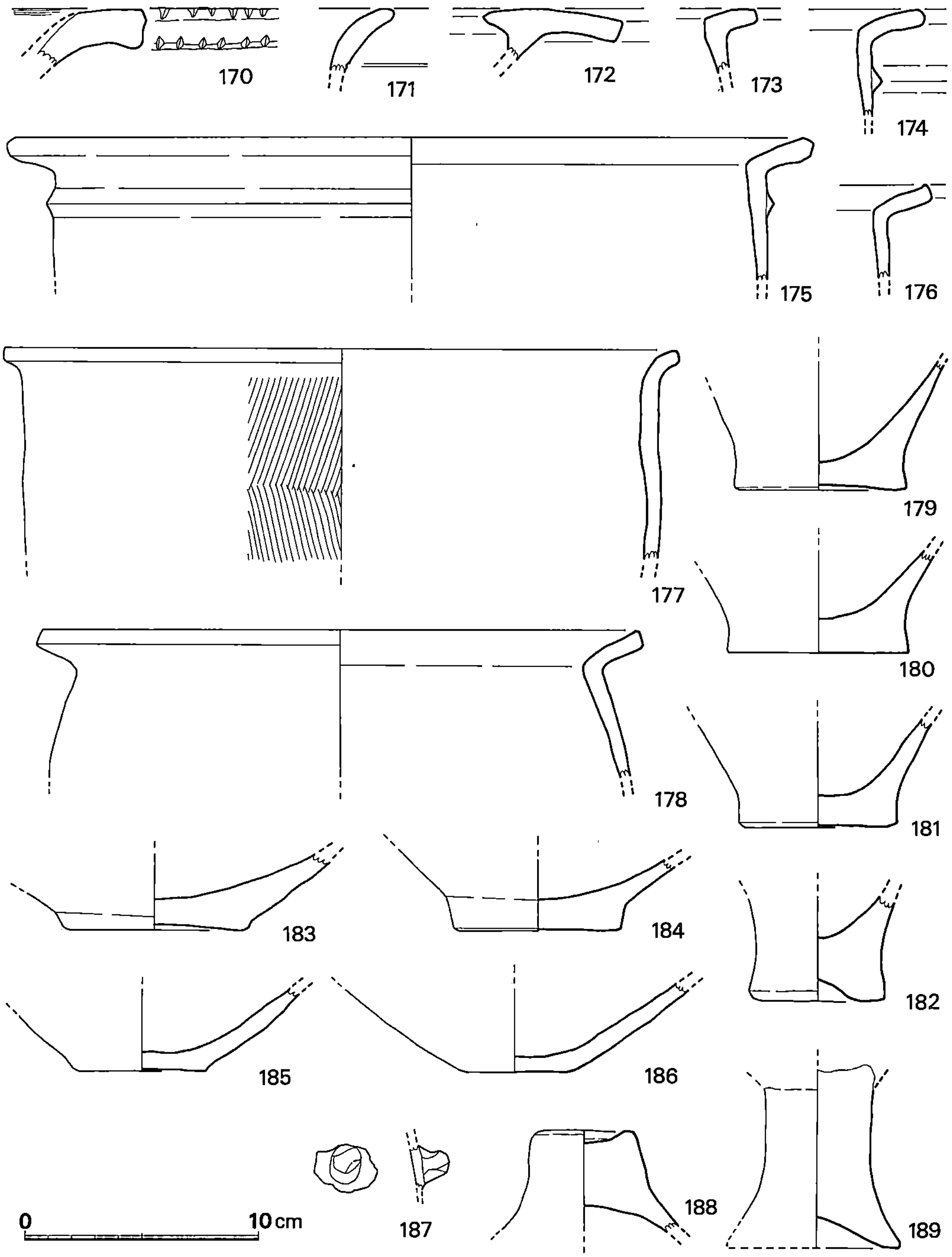
３号溝（図版４－１）　南北に延びる溝である。延べ33ｍが確認され，南端は削平によって消滅し，本来はもう少し延びるものであろう。最大幅は1.1ｍを測る。深さは10～20cm前後で，北に傾斜している。遺物の出土はないが７・８・９号竪穴より新しいものである。

４号溝（図版６－２）　ほぼ東西に延びる細く浅い溝である。６号土壙の南が谷状にくぼ



第55図　溝出土土器実測図（1/3）

み，これより延びるものと考えられる。9号土壙を切り，この部分で消滅するが，削平による



第 56 図　小ピット出土土器実測図（1/3）

もので，本来は西へ延びるものと思われる。３号住居跡を斜断す。弥生時代よりも新しいもので，滑石製品（53）が出土しており，これから中世代のものと考えられる。土器の出土はない。

５号溝（図版25－２）　　19号竪穴の両側のやや離れた位置で検出された。ほぼ南北に走るが，やや蛇行する。北側は削平により消滅している。幅は30cm前後で，深さは15cm前後を測る。南側では埋土中に焼土と炭が若干量含まれていた。土器は弥生式土器の細片が若干量出土している。200は甕の口縁で，大きく外反するものである。器壁の非常に薄いものである。弥生時代の中期に属するものである。

６号溝　　９号住居跡の東に南北に延びる細い溝である。長さ11ｍが確認された。北端は西に屈折し，両端には小ピットがある。幅は20cm前後で，深さは５～10cmである。弥生式土器の細片が若干出土しているが，時期は不明である。

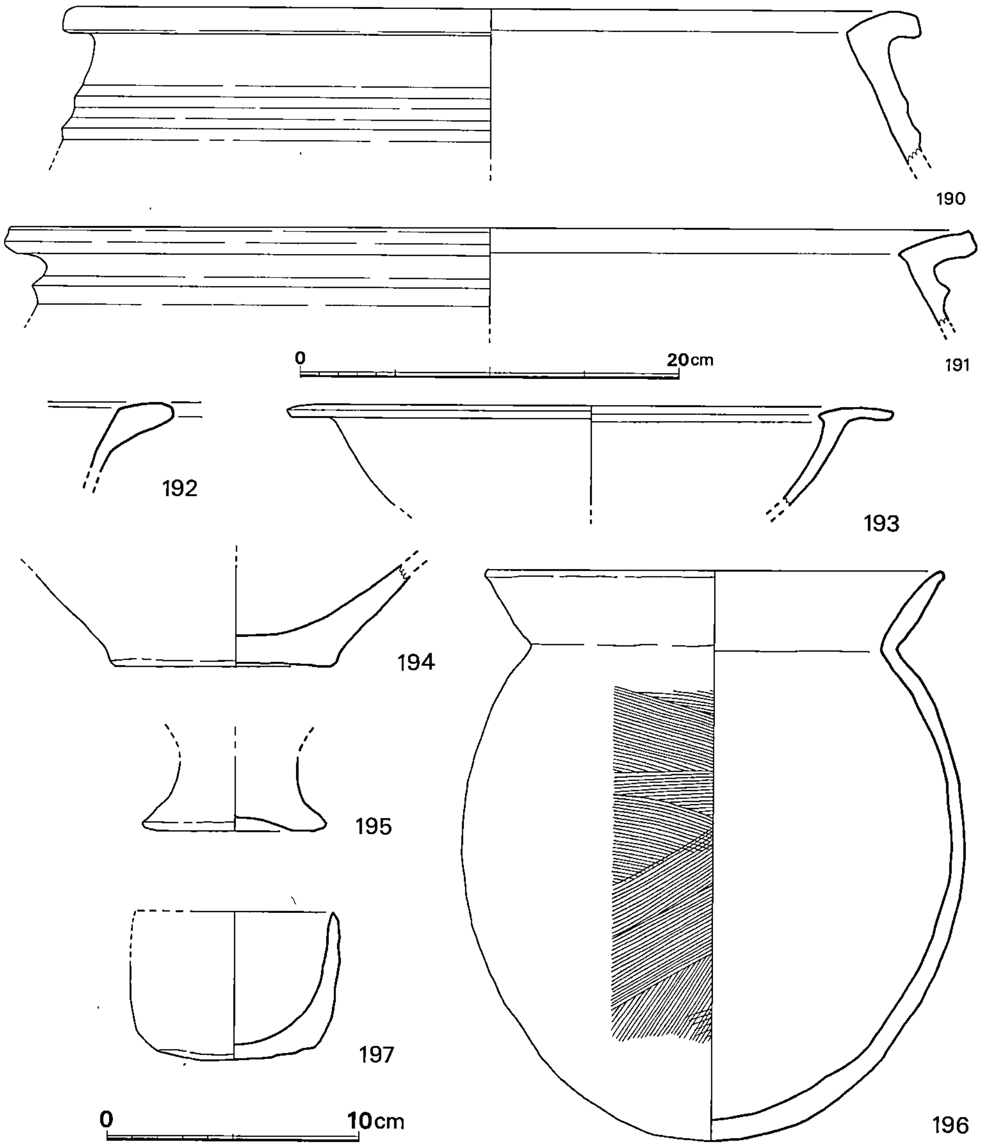
(8)　小ピット群

調査区全体に小ピット群が検出された。これらの小ピットは，大きさや深さに差異がみられ，意図不明なものが多いが，このうちいくつかは掘立柱建物のものであり，弥生時代の住居跡の柱穴となるものも推定される。それらについては，遺構配置図にその範囲を破線で示すところである。

これらのピットのうち，その埋土中より土器片を出したものがある。土器は細片が多く，中には完形に近いものがある。

時期的には，弥生時代中期のものが多く，少量の前期の土器片と古式土師器が出土している。170は大型壺の口縁部である。大きく外反するもので，口唇部は上・下に篦による粗い刻目を施す。内面は刷毛目を，外面はヘラミガキを施す。171は壺の口縁部片である。頸部から肥厚するもので段がつく。胎土は砂粒が多い。172は外傾する幅広の平坦部を有す壺の口縁部である。胎土は細砂粒が多い。173は内傾する平坦部を有す甕の口縁部である。器面は横ナデ整形を施す。胎土は砂粒が多い。174・175は大きく外反する口縁部で，口唇部はやや肥厚する。口縁下に断面三角形の突帯をめぐらす。いずれも胎土に砂粒を多く含む。176は，大きく外反し，口唇部は低く跳上げている。口唇部より外面は横ナデを施す。胎土は細砂粒が多い。177は如意形の口縁部をなす。口縁部外面は横ナデ整形で，胴部外面は粗い刷毛目を施す。器壁の厚いものである。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。178は「く」の字状に外反する口縁の甕である。口唇部は跳上げ気味である。胴部上位に張りのあるものであろう。胎土は粗砂粒や雲母を含む。179～181は薄手の甕底部であり，179・181は上げ底気味であり，胎土に雲母を含む。182は厚手で細身の甕底部で，上げ底である。胎土は砂粒が多い。183～186は壺の底部である。183は６号住居跡内のピットから出土したものである。184と共に古い様相を残すものである。いずれも砂粒が多い。185・186とも径の小さい底部である。薄くつくられた底部である。187は小さな把手である。器壁の薄い体部につけられたものである。土師器であると考えられる。胎土は砂粒や雲母を含む。

188は蓋の天井部である。胎土は粗砂粒が多い。189は188と共伴するものである。脚状をなすもので，どのような本体につくものか不明である。胎土は砂粒が多い。190・191は大きな甕の口縁部である。甕棺に使用可能なものである。190は器壁が厚く，口縁端部はやや下り気味である。胴の張るもので，口縁下に２条の断面三角形の低い突帯をめぐらす，191は跳上げ口縁部で，口縁下に１条の断面三角形の突帯をめぐらす。いずれも胎土に砂粒が多い。整形法は不明である。196は，長円形の胴部に，外反する口縁部を有す。頸部は内外面ともに稜がつく。口縁部は中ほどに若干の膨みがある。口縁部から頸部は横ナデ，胴部は刷毛目を施し，底部付近はこれをナ



第 57 図　小ピット出土および表採土器実測図（1/3）

デ消している。胎土は粗砂粒を含む。197は，土師器の椀である。器壁の厚いもので，胎土は粗砂粒を含む。器外面はナデによる，内面は横位のヘラケズリ整形である。

以上のピット群出土のほかに，浅い落ち込み等から出土した土器がある。192は壺の口縁部である。口縁部は肥厚し平坦部をつくる。193は高杯の杯部である。胎土は粗砂粒を含む。194は，壺の底部である。胎土は砂粒が非常に多い。195は，甕の底部であろうか。端部が外側に大きく延びるものである。

以上，これらの土器のうち，170・171・177・183・184が弥生時代の前期に属し，187・196，197は土師器で，196は5世紀前半のものである。その他は弥生時代中期前半の土器群で，この中でも新旧に分けられよう。

4．遺　物

ここでは，土器以外の遺物について記述する。詳細については，一覧表を付すので，これを参照されたい。

石鏃（第58図，図版30－1・2）

打製と磨製のものがある。打製ものは，黒曜石と頁岩を使用している。三角形鏃と抉りのあるものの二種にわけられる。1～7は7号住居跡から出土したもので，黒曜石や頁岩の小削片を伴う。磨製のものは，粘板岩や凝灰岩を使用している。未製品のものが多い。14のように三角形状を呈す大型のものや，20のように小型のものがあり，また，17のように細身で長大なものもある。この細身のもの（17～19）は，他のものに比べ作りが丁寧である。12～17が9号住居跡出土で，11の打製品が伴う。18～25は10号住居跡出土である。

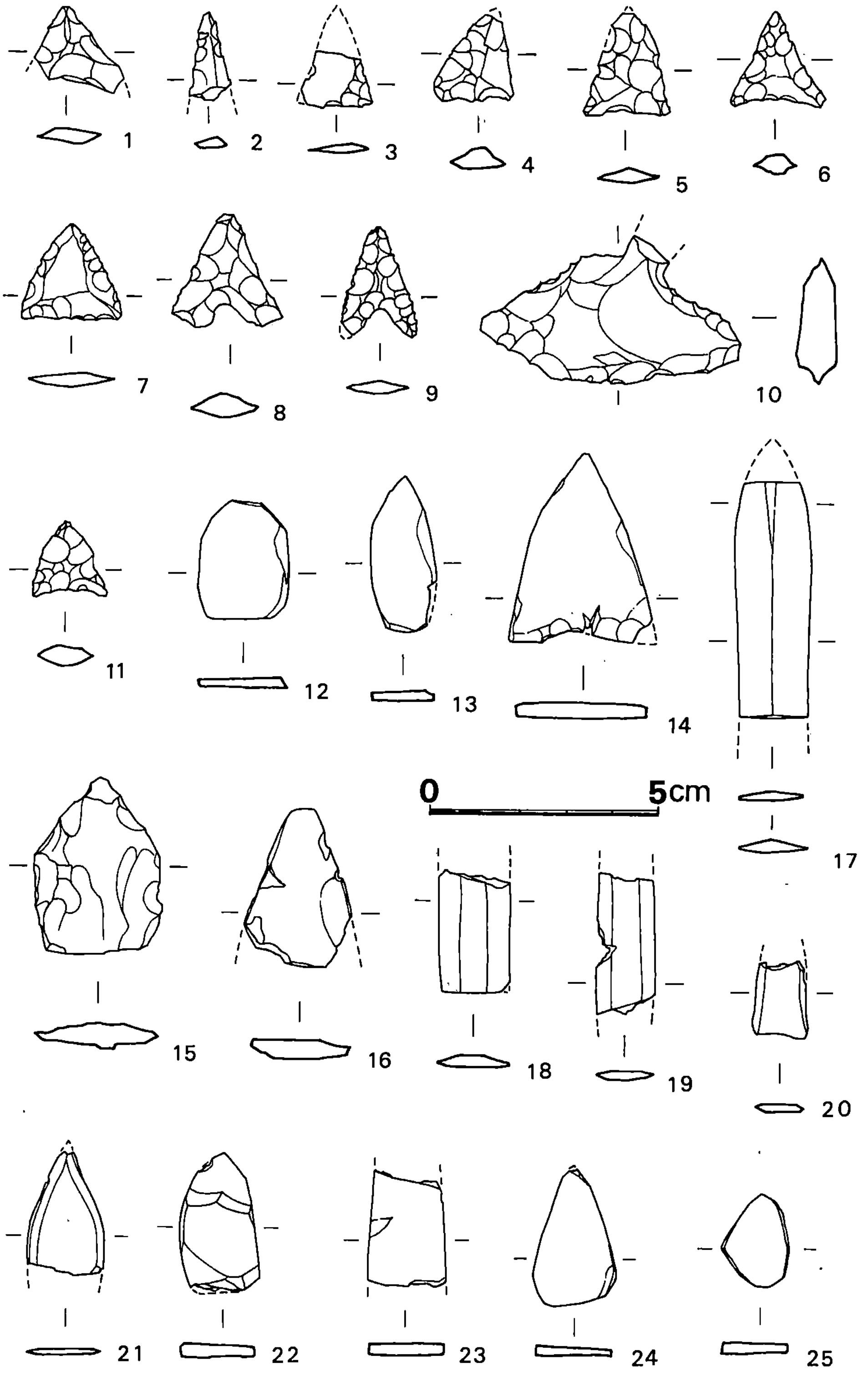
石鏃にかぎっていえば，打製品鏃だけの7号住居跡と磨製石鏃を伴う9・10号住居跡にわけることができる。

石匙（第58図10）

表採品である。頁岩製で身の厚いものである。刃部は両面からの剝離によりつくっている。摘み部を欠損する。

石剣（第59図，図版32・33－1）

未製品も含めて4本が発見された。26は11号竪穴出土のものである。ややずんぐりした形状を呈す。下端の両側には方形の抉りをつくり，抉り部から1cmほど離れて刃部となる。切先は欠損し，裏面は剝離しており，刃部の刃こぼれもはなはだしく，これが使用によって生じたものであろう。茎は短かく，いわゆる剣の柄はなく，むしろ，槍か矛と見るべきものか。27は剣

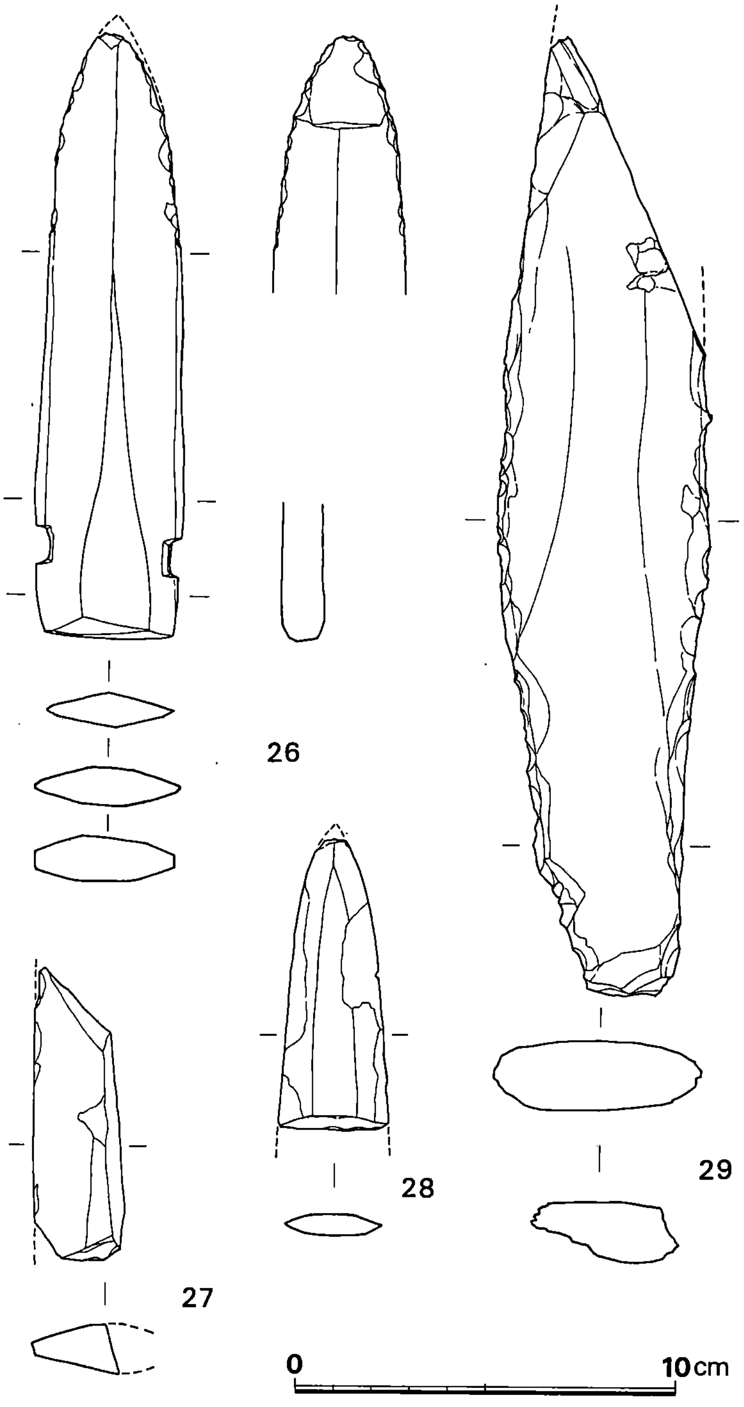


第 58 図　石器実測図 1 （石鏃）（2/3）

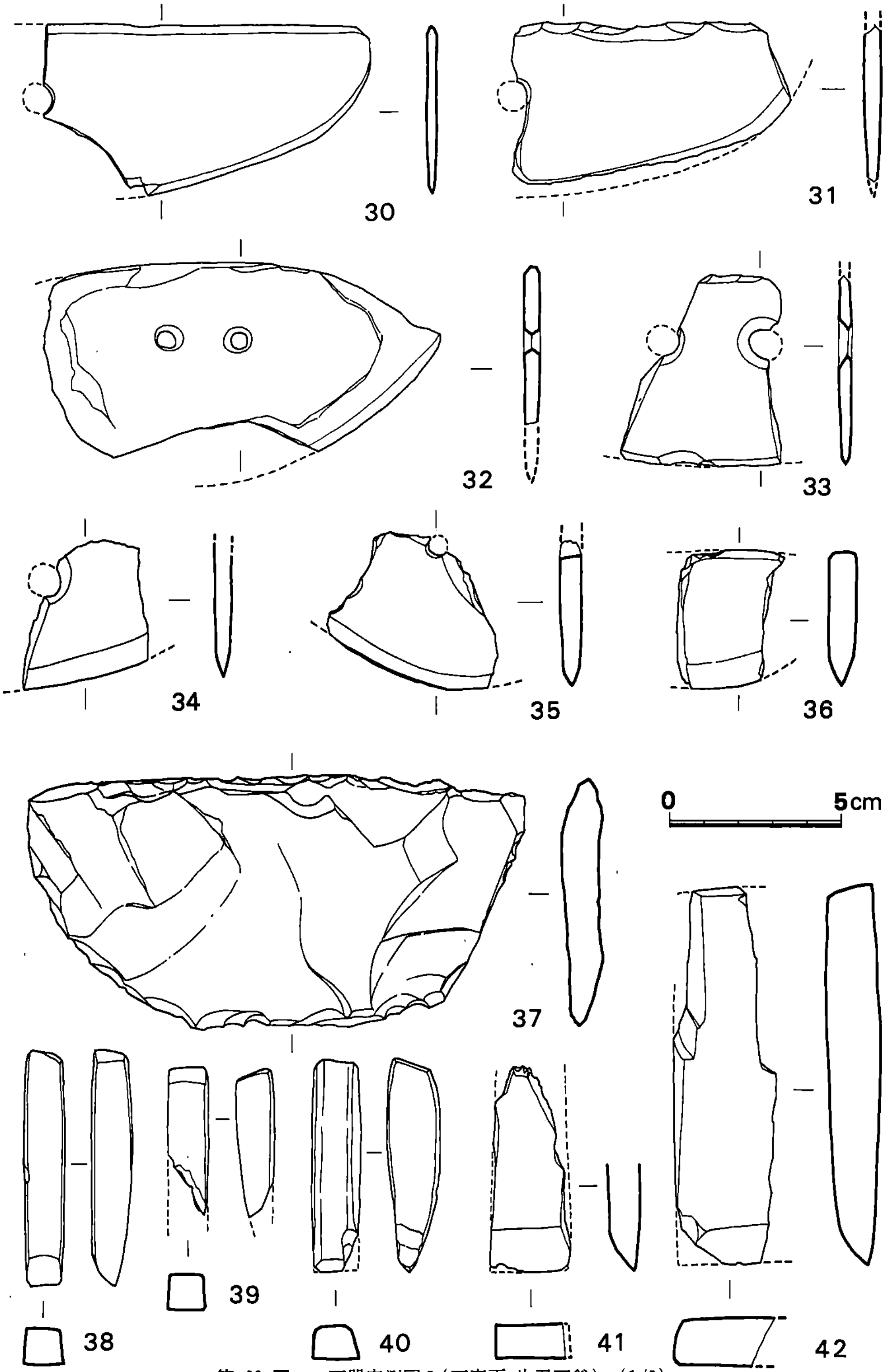
片である。28は10号竪穴の小ピット中より出土している。この小ピットは，3号住居跡との柱穴とも考えられる。大半を欠損するものである。身は薄く，器面に石材の稿目が入る。頁岩質の石材を使用している。29は未製品である。切先を欠損する。欠損部は石の目から折れており，製作中途で折れたものであろう。縁部を調整剥離し，磨きの段階に入ったもので，砥石との擦過痕がついている。

石庖丁（第60図，図版31）

薄手（30～34）と厚手（35・36）のものが出土している。前者は頁岩質のもので，弥生時代前期にみられるもので，背部には，調整剥離痕が残る。後者は凝灰岩製のもので作りも前者と異なる。37は石庖丁の未製品で，調整剥離もほぼ完了し，研磨の工程に入ろうとするものである。凝灰



第59図　石器実測図2（石剣）(1/2)



第 60 図　石器実測図 3（石庖丁・片刃石斧）（1/2）

岩製で，立岩遺跡でみられるものと同じで，形状や調整もよく類似する。

石斧（第60・61図，図版33－２，34）

小型の柱状片刃石斧（38～40）と扁平片刃石斧（41・42），太型蛤刃石斧（43・44）・扁平蛤刃石斧（45），柱状抉入片刃石斧（46）がある。

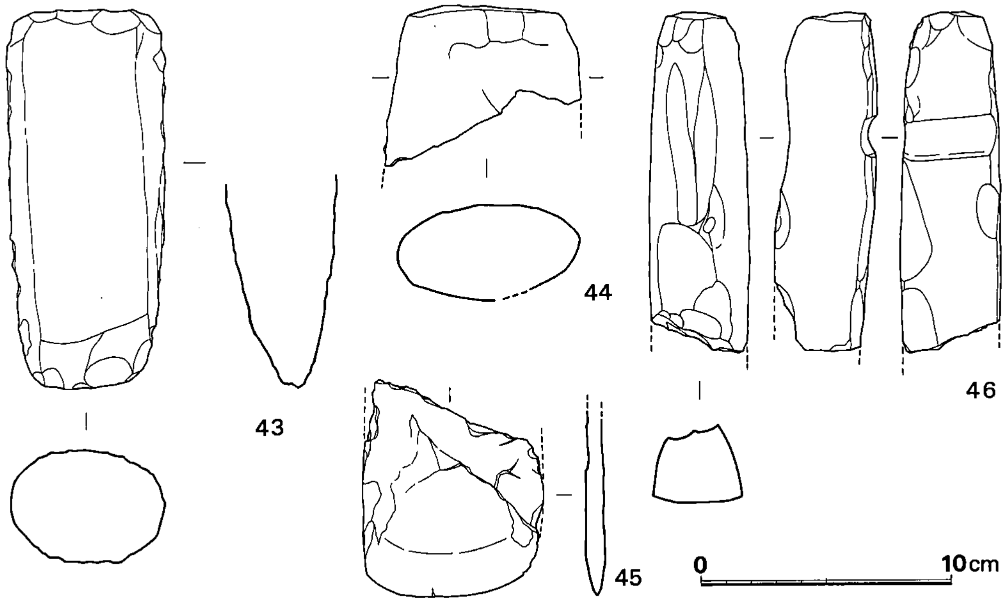
38～42は粘板岩製のものである。38以外は欠損品である。40～42の刃部の欠損部は使用によるものと思われる。43の器面は風化によって剥落し，硬質部分が粒状となり凹凸が著しい。45は石材を扁平に粗割りし，刃部を研ぎ出したもので，蛇紋岩系の石材を使用し，縄文的な様相の残る石斧である。46は刃部を欠損する。断面は台形状を呈し，背部は粗剝離痕を残し，抉り部側はよく研磨している。両側面は，自然剝離面で，手を加えていない。抉りの断面は半円状を呈す。

砥石（第62～63図，図版34・35）

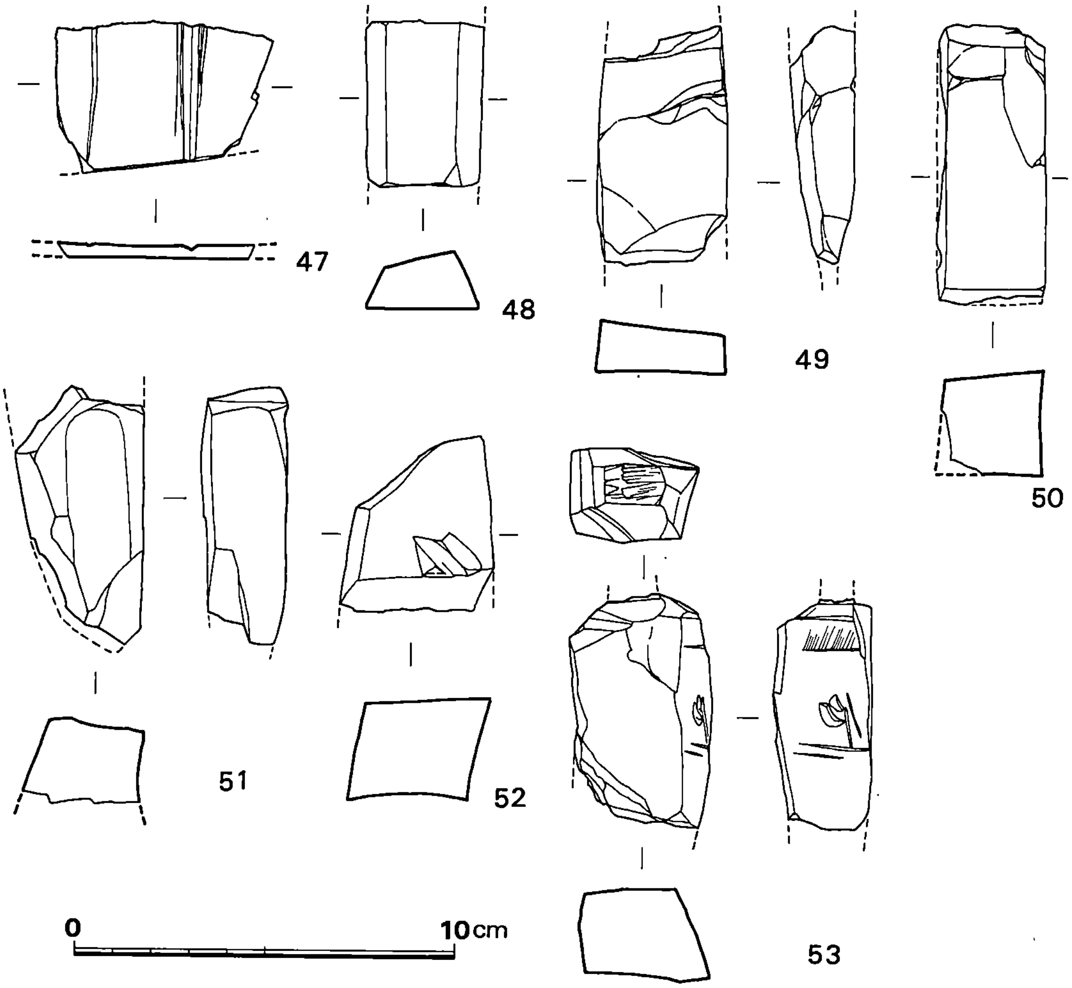
砥石は大・中・小があり，これらはその大きさによって荒砥・中砥・仕上砥にわけられる。荒砥は硬質砂岩で，他は粘板岩や目の細い硬質砂岩を使用している。中でも特異なものは，47・56である。

47は，薄く粗割りした頁岩質安山岩の片面に，断面Ｖ字状の条溝が２条入っている。１条は浅くて細いものであるが，もう１条は深く，そばに数本の条痕が並行する。鋭利なものを研磨したものと思われる。

56はＬ字状をなすもので，両端を欠損し，完全な形は想定できない。断面は上端側は丸味があり，もう一方は長方形状を呈す。丸味のある部分は，敲打により調整し，研磨することによ



第61図　石器実測図４（石斧）（1/3）



第 62 図　石器実測図 5（砥石等）(1/2)

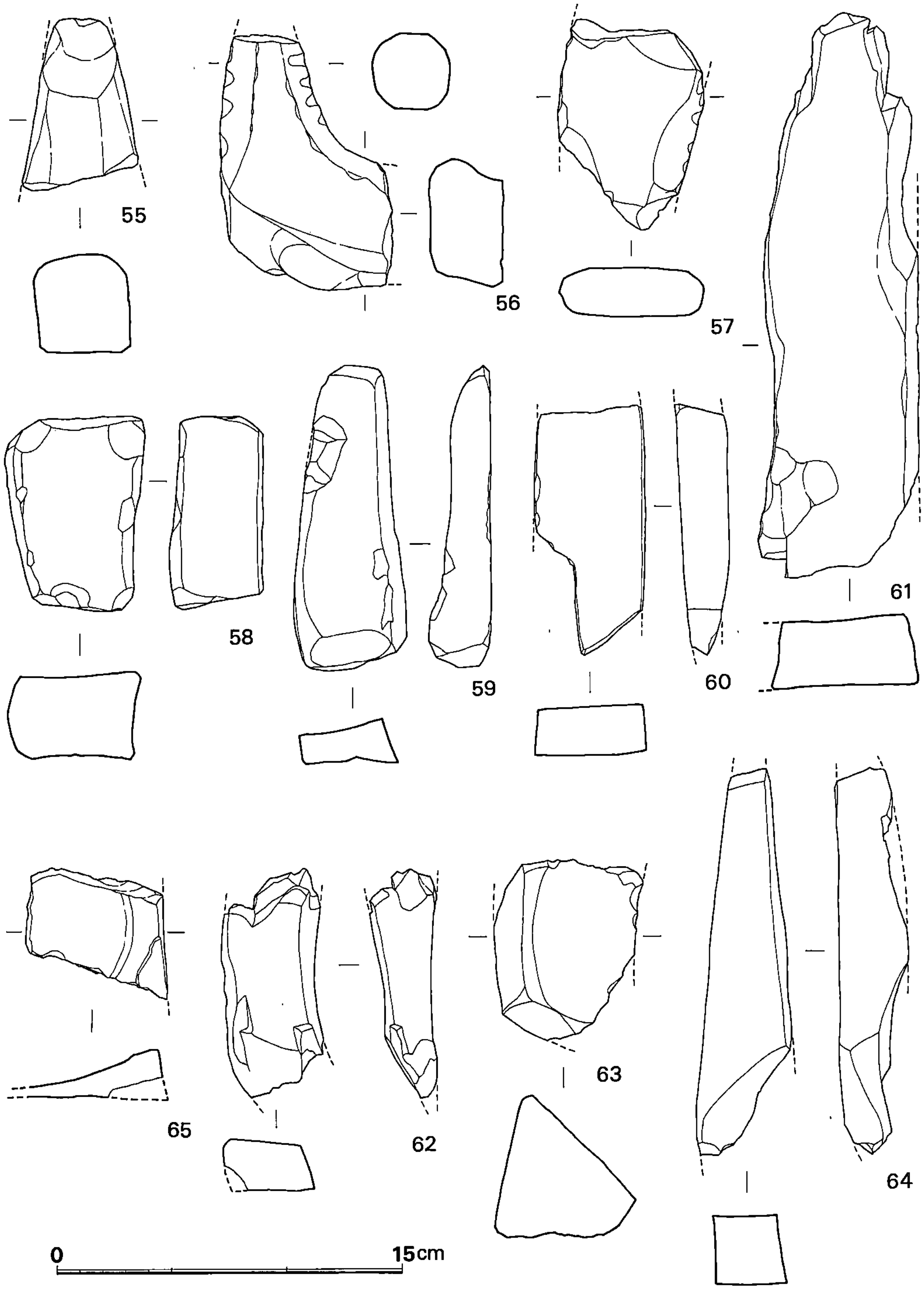
ってつくられている。裏面平坦部と側面の一部をのぞいて全て磨かれている。やや目の細い硬質砂岩を使用している。砥石とあつかってよいか判断しかねる遺物である。66は荒砥用の砥石である。厚く四面とも砥面となる。

石皿（第64図67～71，図版35）

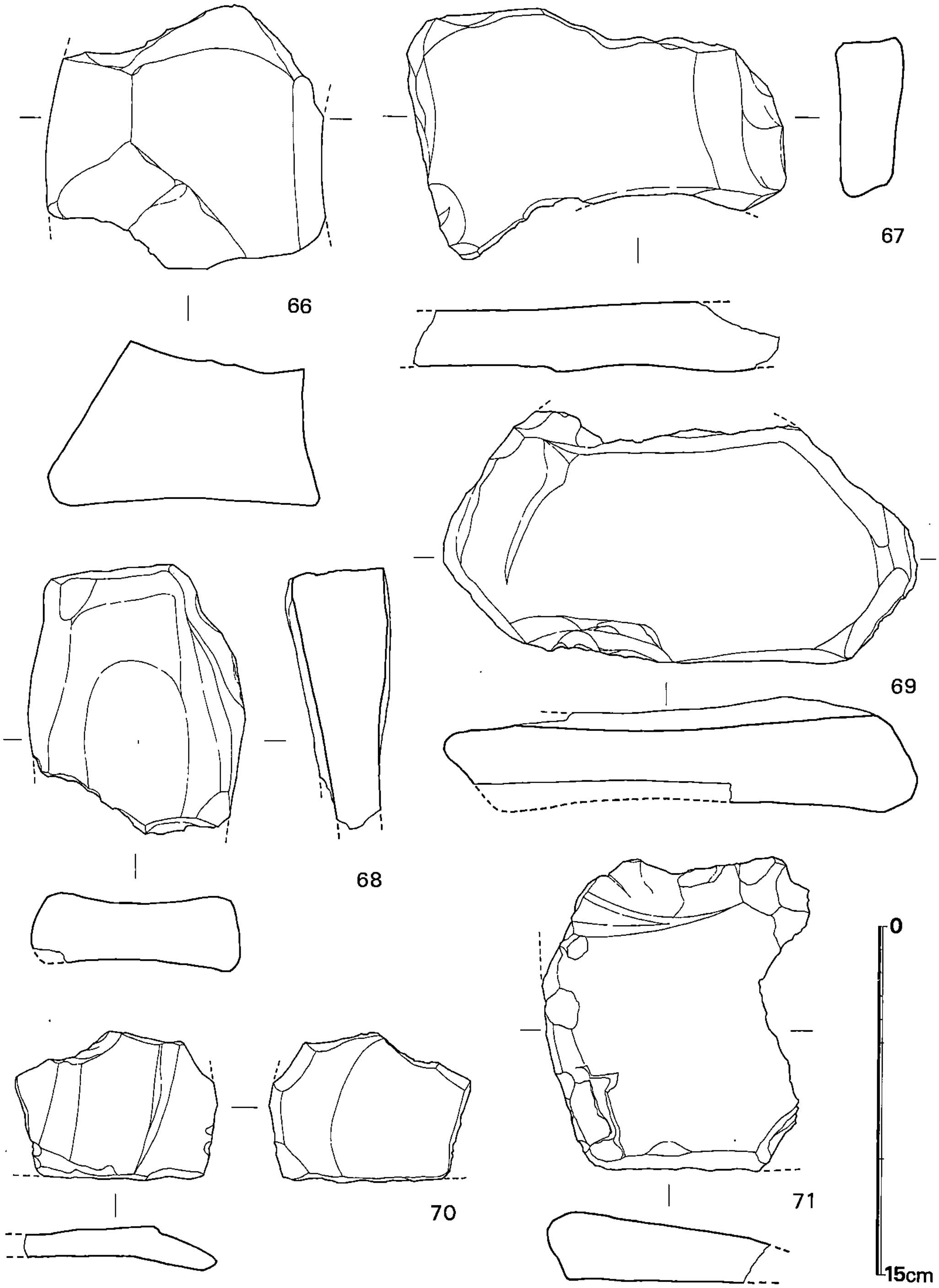
いずれも扁平で中央部分がへこむものである。完形品はない。70は非常に薄いもので，多用されたものであろうか。目の粗い硬質砂岩である。他は目の細い硬質砂岩を使用している。69・71は片面のみ使用している。第63図65は，砥石としたが石皿の可能性もある。

磨石（第65図，図版35）

4 個が発見された。72は扁平で小型のもの，全面が摩られている。73・74は厚く大きなものである。73は下面が，74は両面が摩られている。いずれも安山岩質のものである。75は凹石状



第 63 図　石器実測図 6（砥石等）(1/3)



第 64 図　石器実測図 7（石皿等）(1/3)

表3　石器計測一覧表

単位　cm・g

番号	出土遺構	器種	材質	法量			特徴
				長(高)	幅(径)	重量	
1	7号住居跡	打製石鏃	頁岩	(1.6)	(1.6)	(1.1)	
2	7号住居跡	打製石鏃	頁岩	(1.9)	(0.9)	(0.4)	
3	7号住居跡	打製石鏃	頁岩	(1.1)	(1.4)	(0.4)	剥片鏃
4	7号住居跡	打製石鏃	頁岩	(1.9)	1.7	(1.5)	
5	7号住居跡	打製石鏃	頁岩	(2.2)	1.85	(1.7)	
6	7号住居跡	打製石鏃	頁岩	2.1	2.1	1.0	
7	7号住居跡	打製石鏃	頁岩	2.1	2.2	1.1	
8	5号竪穴	打製石鏃	頁岩	2.4	2.4	2.0	
9	表採	打製石鏃	黒曜石	(2.9)	1.7	(0.9)	半透明白色
10	表採	石匙	頁岩	(3.2)	5.7	(15.5)	
11	9号住居跡	打製石鏃	黒曜石	1.6	1.7	0.9	
12	9号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	2.55	2.0	2.4	
13	9号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	3.4	1.4	(1.9)	
14	9号住居跡	磨製石鏃	凝灰岩	4.2	(3.0)	(5.3)	小豆色
15	9号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	3.9	2.75	5.8	
16	9号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	(3.5)	(2.25)	(4.3)	
17	9号住居跡	磨製石鏃	粘板岩(?)	(5.2)	1.7	(3.7)	
18	10号住居跡	磨製石鏃	凝灰岩	(2.6)	(1.55)	(1.6)	
19	10号住居跡	磨製石鏃	安山岩(?)	(3.0)	1.25	(1.4)	
20	10号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	(1.5)	1.2	(0.7)	
21	10号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	(2.6)	(1.7)	(0.9)	
22	10号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	(2.9)	1.6	(2.2)	
23	10号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	(2.3)	1.7	(1.5)	
24	10号住居跡	磨製石鏃	凝灰岩	(2.9)	1.8	(1.9)	小豆色
25	10号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	2.0	1.5	1.0	
26	11号竪穴	石剣	凝灰岩	(15.8)	3.9	(102.5)	
27	7号竪穴	石剣	凝灰岩	(7.7)	(2.3)	(29.1)	
28	10号竪穴(柱穴)	石剣	頁岩	(7.8)	(2.9)	(17.1)	
29	3号土壙	石剣	凝灰岩	(25.0)	5.5	(312.5)	未製品
30	15号竪穴接続溝	石庖丁	頁岩	(9.4)	(5.0)	(23.2)	
31	11号竪穴	石庖丁	頁岩	(8.0)	(4.7)	(33.1)	
32	5号土壙	石庖丁	頁岩	(11.5)	(5.4)	(50.2)	
33	24号竪穴	石庖丁	頁岩	(3.6)	5.5	(16.5)	
34	13号土壙	石庖丁	頁岩	(3.6)	(3.9)	(11.9)	
35	表採	石庖丁	凝灰岩	(4.8)	(4.4)	(15.0)	
36	6号住居跡	石庖丁	凝灰岩	(2.5)	4.0	(17.8)	
37	表採	石庖丁	凝灰岩	14.4	7.2	200.5	未製品

単位　cm・g

38	11 号 竪 穴	柱状片刃石斧	流 紋 岩	6.8	1.2	19.5	
39	20 号 竪 穴	柱状片刃石斧	流 紋 岩	(4.3)	1.2	(8.9)	
40	19 号 竪 穴	柱状片刃石斧	流 紋 岩	6.2	1.4	(24.0)	
41	柱 穴 (61)	扁平片刃石斧	流 紋 岩	(6.0)	2.35	(23.7)	
42	7 号 竪 穴	扁平片刃石斧	流 紋 岩	10.9	(2.95)	(82.0)	
43	11 号 竪 穴	太型蛤刃石斧	安 山 岩	15.1	6.3	720	
44	9 号住居跡	太型蛤刃石斧	安 山 岩	(4.6)	(7.5)	(229)	
45	20 号 竪 穴	局部磨製石斧	頁 岩	(8.7)	7.2	(87.6)	
46	表 採	抉入片刃石斧	頁 岩	(13.5)	3.9	(346)	
47	7 号 土 壙	砥 石 (?)	頁岩質安山岩	(5.7)	(3.8)	(13.3)	
48	11 号 竪 穴	砥 石	砂 岩	(4.25)	3.0	(33.9)	緻密な石材，中砥用
49	6 号住居跡	砥 石	粘 板 岩	(5.8)	3.4	(39.3)	仕上用
50	表 採	砥 石	粘 板 岩	(7.1)	2.8	(99.2)	仕上用
51	6 号住居跡	砥 石	粘 板 岩	(6.2)	3.4	(67.2)	仕上用・硬質
52	6 号住居跡	砥 石	粘 板 岩	3.9	(4.6)	(62.0)	仕上用
53	4 号 溝	不 明 石 器	滑 石	(6.0)	3.5	(102)	
54	欠 番						
55	27 号 竪 穴	砥 石	砂 岩	(7.2)	4.8	(138.4)	緻密な石材
56	27 号 竪 穴	砥 石 (?)	砂 岩	(10.8)	(7.5)	(371.1)	
57	14 号 土 壙	砥 石	粘 板 岩	(8.6)	6.3	(101.7)	仕上用
58	3 号住居跡	砥 石	砂 岩	8.2	6.0	269.1	緻密な石材，軟質，仕上用
59	表 採	砥 石	粘 板 岩	13.1	4.85	143.5	仕上用
60	6 号住居跡	砥 石	粘 板 岩	(10.5)	(4.85)	(174.1)	仕上用
61	1 号土壙墓側	砥 石	砂 岩	(23.8)	(6.6)	(808)	中砥用
62	8 号住居跡	砥 石	粘 板 岩	(10.0)	4.1	(104)	仕上用
63	10 号 竪 穴	砥 石	砂 岩	(7.8)	6.2	(295.8)	荒砥用
64	6 号住居跡	砥 石	粘 板 岩	(16.4)	3.8	(230)	仕上用
65	9 号住居跡	砥 石	砂 岩	(4.5)	(5.9)	(152)	石皿か
66	6 号住居跡	砥 石	砂 岩	(11.8)	(11.3)		荒砥用
67	10 号住居跡	石 皿	砂 岩	(15.8)	(10.5)		緻密な石材
68	6 号 土 壙	石 皿	砂 岩	(11.6)	9.4		砥石か
69	3 号住居跡	石 皿	砂 岩	20.5	(10.1)		緻密な石材
70	9 号住居跡	石 皿	砂 岩	(9.0)	(6.4)		粗い石材
71	27 号 竪 穴	石 皿	砂 岩	(13.5)	(10.3)		緻密な石材
72	9 号住居跡	磨 石	安 山 岩	7.2	6.2	195.7	全面が磨かれている。
73	11 号 土 壙	磨 石	安山岩(?)	13.4	9.3	980	
74	12 号 土 壙	磨 石	安 山 岩	(7.8)	9.7	(664.5)	
75	12 号住居跡	凹 石	蛇 紋 岩	7.7	6.6	292	石材は軟質

(　　)内数値は現存値である。

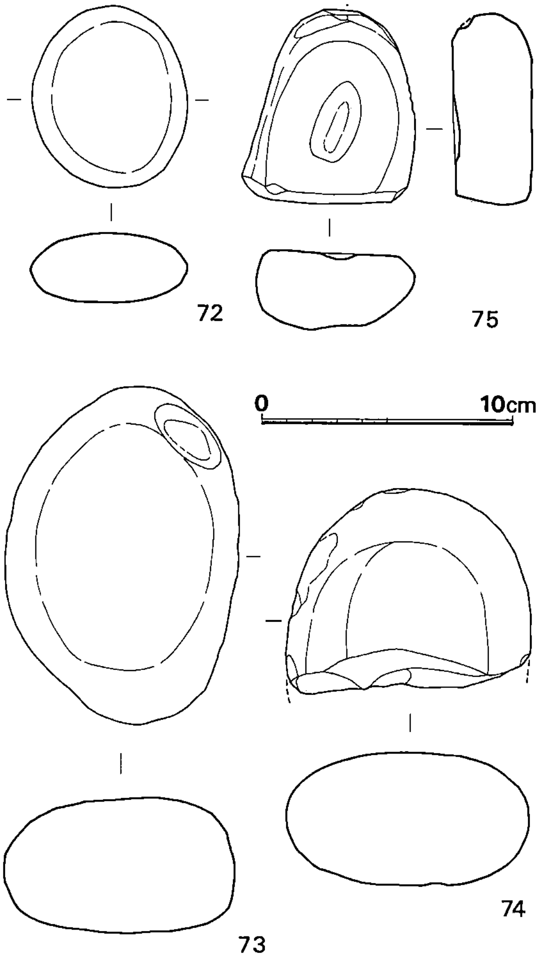
を呈す。中央の凹み部は敲打後に摩られているようである。全面摩られている。軟質の蛇紋岩製のものである。

その他の石器（第62図53，図版34）

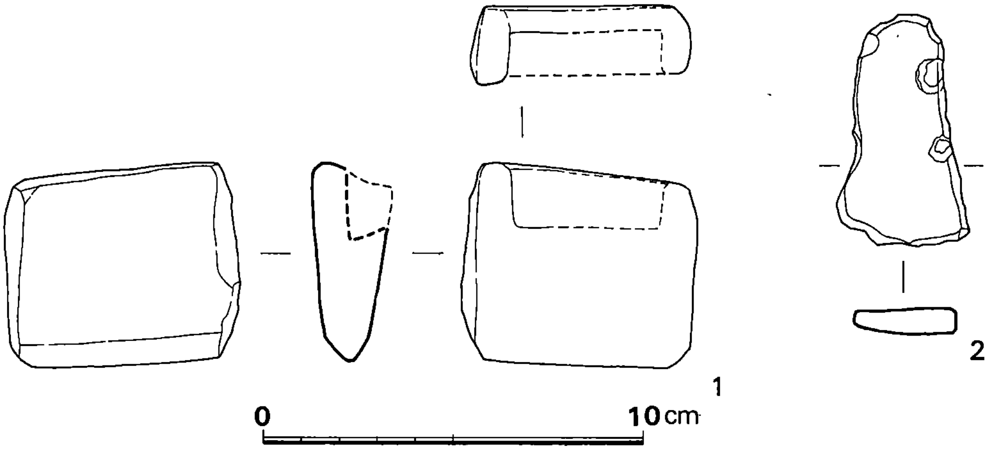
4号溝から出土した。滑石製品である。表裏は剥離面のままで，両側面は磨いている。研磨痕が細い条痕としてみえる。上端は鋭利な工具により中途まで摩り切り，折断したようである。

鉄器（第66図，図版36－1・2）

1は鉄斧である。11号竪穴から出土している。銹が著しく，異物が銹着し完全には把握しかねるものであるが，完形品である。長さ5.1cm，幅6.1cm，刃部幅4.9cmを測る。直刃で両側はやや丸味がある。刃部は鈍く片刃である。これが使用によるものか，研ぎ出していないものかは不明である。上部は浅い袋部があり，上面観は「コ」字状を呈し，内側へのかえりはない。断面は長方形の形態をなす。袋部の器壁は図示するよりも若干は薄くなるものと思われる。身の長さに対して幅の長いもので，方形にちかい形状となす。鉄手斧と



第65図　石器実測図8（磨石）(1/3)



第66図　鉄器実測図(1/2)

推定される。袋部の形状に差異がみられるものの，同様な鉄手斧と考えられるものは，弥生期のものとして熊本県斉藤山遺跡（註１）や同県轟遺跡（註２）で出土している。当遺跡のものは，弥生時代の中期前半の土器群に伴っており，少なくとも，この時期までは，この種の鉄斧が使用されていたものであろう。

２は，撥状をなす鉄板である。小型のもので刃部はみられない。６号土壙から出土。弥生時代の中期前半の土器を伴う。

註１　乙益重隆「熊本県斉藤山遺跡」（日本考古学協会編）『日本農耕文化の生成』本文編　東京堂　1961

註２　潮見　浩「東アジアの初期鉄器文化」吉川弘文館　1982

５．結　び

スダレ遺跡の所在する彼岸原遺跡群は早くから知られていた。遠賀川の流域には多くの弥生時代遺跡が所在するが，嘉穂地方では立岩丘陵の遺跡群が著名である。当地方では，彼岸原や立岩の遺跡群が弥生時代のものとしては規模も広大で，その立地もよく類似する。広く小枝状に展開する丘陵上に所在するもので，県内では小郡市北部で，宝満川の西側に広く展開する丘陵群によく類似し，時期的にもあまり差のない遺跡群が広大な範囲で所在する。ここでは，県指定史跡の種畜場遺跡や横隈山遺跡，北牟田遺跡などが知られる。

スダレ遺跡は，弥生時代の中期前半の集落跡を主体とするものである。この他古墳時代前半の住居跡と中世代の墓が発見された。

弥生時代の遺構は，昭和50年の調査地区を含めて，全体的にみると，台地状地域を主として生活の場とし，墓地は低丘陵上に設けている。

嘉穂地方では，弥生時代の中期前半頃の袋状竪穴群や２～３の住居跡の発見はあった。今回の調査では，８軒の中期前半の住居跡が発見された。これほどの数の発見例は，当地方は珍しく，最近では桂川町の大坪遺跡から５軒の住居跡が発見されている（註１）。

当遺跡の場合，住居跡は，６・７・や９・10号の重複するのを除き，重複することなく広く間隔を置いて造られている。周辺に所在する竪穴や土壙は，住居跡に伴うものであろう。

構造的にみると，８～９ｍを測る径の大型の住居跡がみられる。３号住居跡の中央には，２つの方形壙が接して所在する。いずれも大きな壙であるが，このような例はあまりみないが，深さに相違のあるものの，６号住居跡の長方形壙の規模からして住居跡の一施設と考えられる。同様の壙のある住居跡は，筑紫野市山家の大島遺跡にある（註２）。

竪穴は，削平の状況からして，従来それほど深いものではないと思われるが，恐らく貯蔵の用をなすものと考えられる。土壙としたものには，竪穴としてあつかってよいものもあろう。

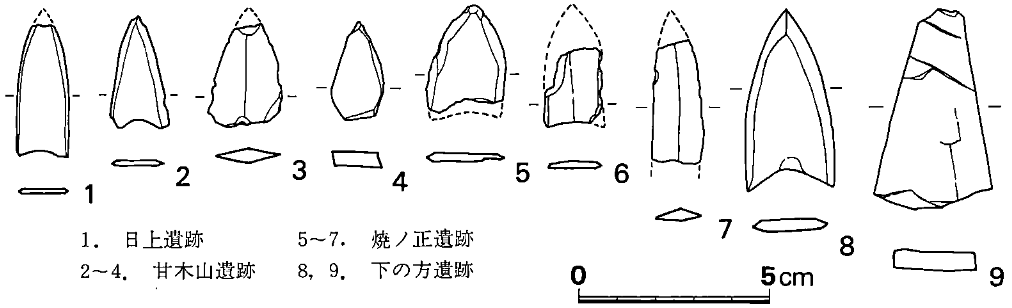
墓地には，先の調査で木棺墓や土坑墓を造り，甕棺墓は中期中葉に至って埋蔵された。小児用墓については，甕棺墓が日常用語の転用により早くから出現している。今回の調査では，6号住居跡の西南に1基の成人用甕棺墓が検出されたが，これが甕の形態から中期前半に属すもので。集落の西と東にほぼ同時期の墓地が営なまれていたことが知られる。ただ，今回の調査では，1基が発見されたのみで，周囲が削平されているところから，墓地の範囲や他にも遺存していたものかは不明であって，速断できかねるところである。

今回発見された甕棺は，合せ口式で上下2つの大型甕がある。いずれも口縁部は平坦をなし，内側に長く張り出し，外側には短い。全体に厚手の口頸部で，胴上部はやや内傾する。胴部のほぼ中央に2条の三角形突帯をめぐらす。KⅡb式（註3）に相当するもので，弥生時代の中期前半頃に属すものである。嘉穂地方では，多くの大形甕の出土があるが，中期中葉以後のものが多く，中期前半のものは，これが初めての発見で，最も古いものとなる。

遺物について，若干の所見を記述する。

土器は細片が多いが，その中に少量の跳ね上げ口縁部片が出土している。この跳ね上げ口縁は，遠賀川流域でよく見られ，特にその下流域に多い。嘉穂地方に見られる跳ね上げ口縁は，下流域の影響によると思われるが，その出現時期については，統一された見解が示されていないところである。当遺跡では，伴出する土器から，少なくとも中期前半でもやや新しい時期に出現するものと考えられる。

石鏃は，打製品と磨製品が出土している。出土状況からして，打製石鏃を出土する住居跡（7号）と磨製石鏃を出土する住居跡（9・10号）とに分けられる。これが製品上の区別では，前述のとおりであるが，伴出する石材剥片からみると，9・10号住居跡でも黒曜石や頁岩の剥平が多く出土しており，9・10号でも打製品の製作を行なっていたものと思われ，9号住居跡では，黒曜石製の打製石鏃1が出土しており，これを裏付けるものであろう。しかしながら，住居跡の切り合いや出土土器からして，短期間の中に7号住居跡→9号住居跡→10号住居跡の順で造られたと考えられ，中期前半には打製品から磨製品へと製作法の変遷があったものと考



第 67 図　嘉穂地方の磨製石鏃（1/2）

えられる。

磨製石鏃は，嘉穂地方では日上遺跡（註４），甘木山遺跡（註５），焼の正遺跡（註６），下の方遺跡（註７）などで出土している（第67図）。遠賀川流域では，その下流域の北九州市八幡西区の辻田遺跡でも多くの未完成品が多く出土している（註８）。 弥生時代の中期に属すもので，鉄鏃の普及に至るまで広く製作されていたものであろう。これらの石鏃は，無茎のものが多く，三角形状の扁平なもので，平基式・凹基式といわれる形状をなすものである。たまに柳葉形状のものが出土するが，短かく身も薄手のものである。これらの石鏃の石材は，凝灰岩や流紋岩（粘板岩と認知している場合が多い）が多く，これが他の石製品の製作工程で得られる石材片を利用したものと考えられ，多くの剝片の中から適当なものを選定したものと考えられる。その製作法については，未製品の所見から，断面形が長方形状をなし，側面が研磨されている。つまり剝片素材から調整剝離等によりある程度の形にまでつくり，さらに研磨により石鏃の形に整え，表裏面の研磨終了後に刃部を研ぎ出し完成するものと考えられる。甘木山や下の方の両遺跡にも，このような製作法を考えるに十分な未製品がある。

辻田遺跡の場合は，やや異なり，未製品をみると調整剝離により形状を整え，さらに刃部もある程度つくり出しており，最終的に研磨により製品としている。嘉穂地方とは，製作手法に異なるが，全体に嘉穂地方ではその出土例が遠賀川の下流域に較べ少なく，十分な相互比較は困難で，今後なお検討することが必要である。

鉄器は２点が出土した。この中に鉄手斧と考えられる小型鉄斧がある。極めて類例の乏しいもので，類似するものに熊本県斉藤山遺跡のものがよく知られている。斉藤山出土のものは弥生時代の前期に属し，当遺跡のものは中期前半のものである。その形状については前章で記述したところであるが，恐らく船載された可能性がある。また，当遺跡では昭和50年の調査では，包含層中より中期前半の土器と共に鉄斧が出土している（註９）。袋部をもち，つくりが丁寧であるやや大型のもので，船載の可能性がある。同一遺跡で，大小の鉄斧が出土したわけで，少なくとも中期前半にまで小型鉄斧が使用され，これ以後大型化するものと思われる。

以上，弥生時代の遺構や遺物について若干の所見を述べ，今後検討を要するところが多いが，この他にも貴重な発見もあった。すなわち，古墳時代前半（５世紀前半）の住居跡の発見である。嘉穂地方では，この時期の住居跡の発掘は初例のもので，嘉穂地方史の空白部を埋める重要な資料である。

註１　「土師地区遺跡群Ｉ」　桂川町文化財調査報告書　第１集　桂川町教育委員会　1982
低丘陵上に所在する大坪遺跡から，弥生時代中期の円形住居跡が５軒発掘された。このほか前期から中期にかけての袋状竪穴81が発見されている。

註２　『大島遺跡』「冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告」　福岡県教育委員会　1982

この報告では，１号住居跡内で，２つの土壙が検出されたが，住居跡との前後関係がつかめず，３・４号土壙として別な遺構として取扱つかったが，住居跡出土の土器と同じ時期のものが出土しており，今回の３号住居跡の調査結果からして，大島遺跡の場合も住居内の施設として考えたらよいものと思われる。

註３　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」　ＸＸＸＩ　福岡県教育委員会　1979

註４　「日上遺跡」　福岡県文化財調査報告書　第48集　福岡県教育委員会　1971

註５　『甘木山遺跡』「嘉穂地方史」先史編所収　嘉穂地方史編纂委員会　1973

註６　「焼ノ正遺跡」　飯塚市文化財調査報告書　第７集　飯塚市教育委員会　1983

註７　「下ノ方遺跡」　飯塚市文化財調査報告書　第６集　飯塚市教育委員会　1982

註８　「辻田西遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第13集　財団法人北九州市教育文化事業団　1982

註９　「スダレ遺跡」　穂波町文化財調査報告書　第１集　穂波町教育委員会　1976

(1)　彼岸原丘陵俯瞰写真（南東から）

(2)　スダレ遺跡俯瞰写真（西から）中央台地

(1)　調査区東側全景（東から）

(2)　調査区東側全景（西から）

(1) 調査区中央南半部全景（西から）

(2) 調査区中央南半部全景（東から）

(1)　調査区中央・3号溝付近（南から）

(2)　調査区中央北半部全景（東から）

(1)　調査区西側全景（東から）

(2)　調査区西側全景（西から）

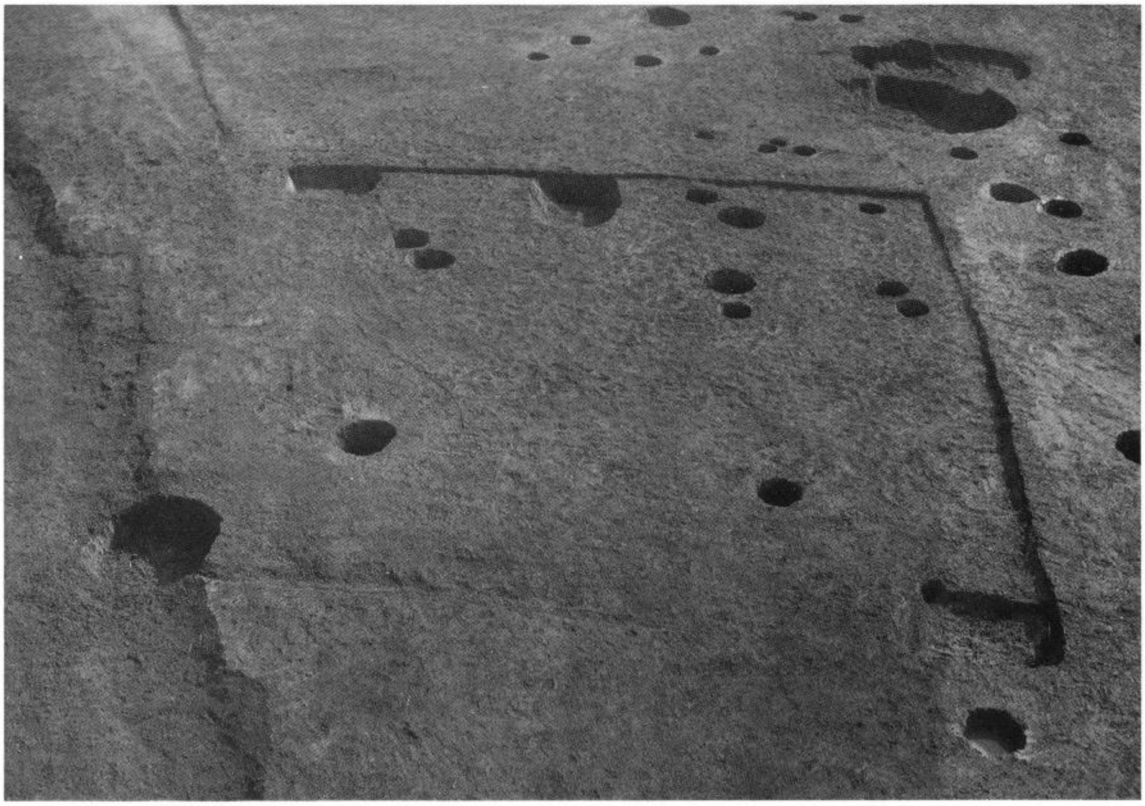
(1)　1号住居跡（北から）

(2)　3号住居跡と4号溝（南から）

(1) 4号住居跡（北西から）

(2) 5号住居跡（北から）

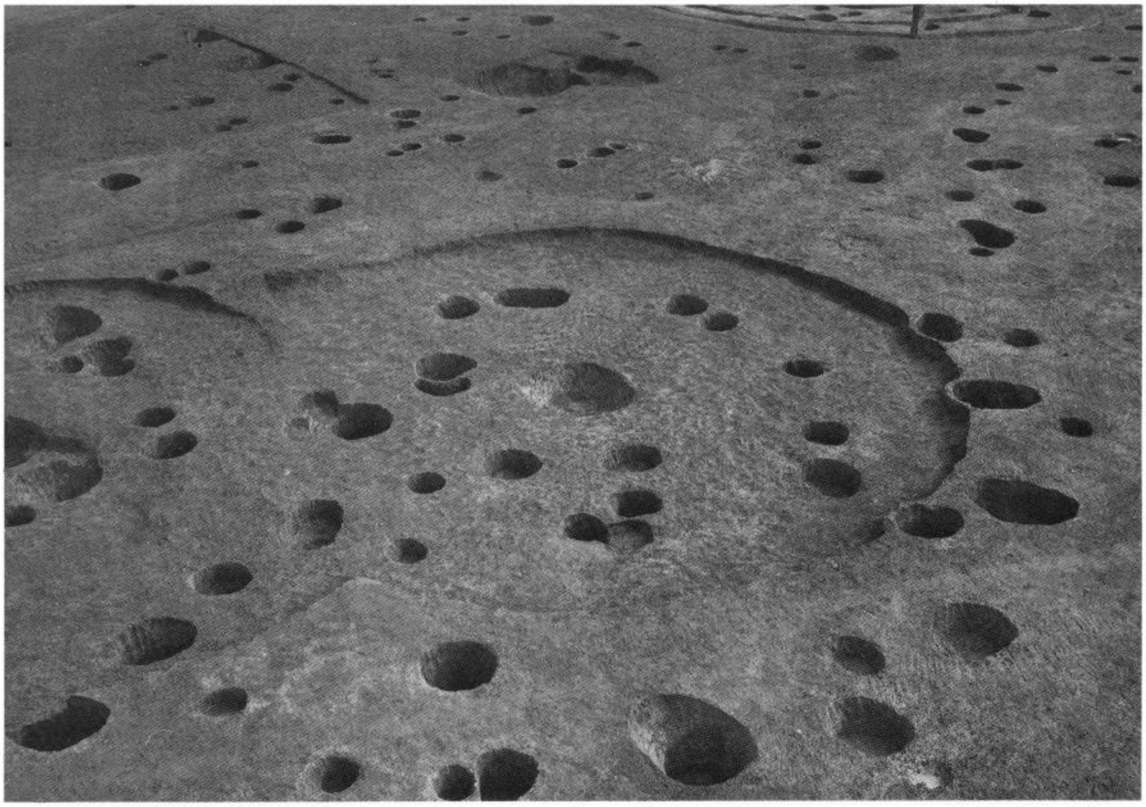
(1)　6・7号住居跡（北西から）



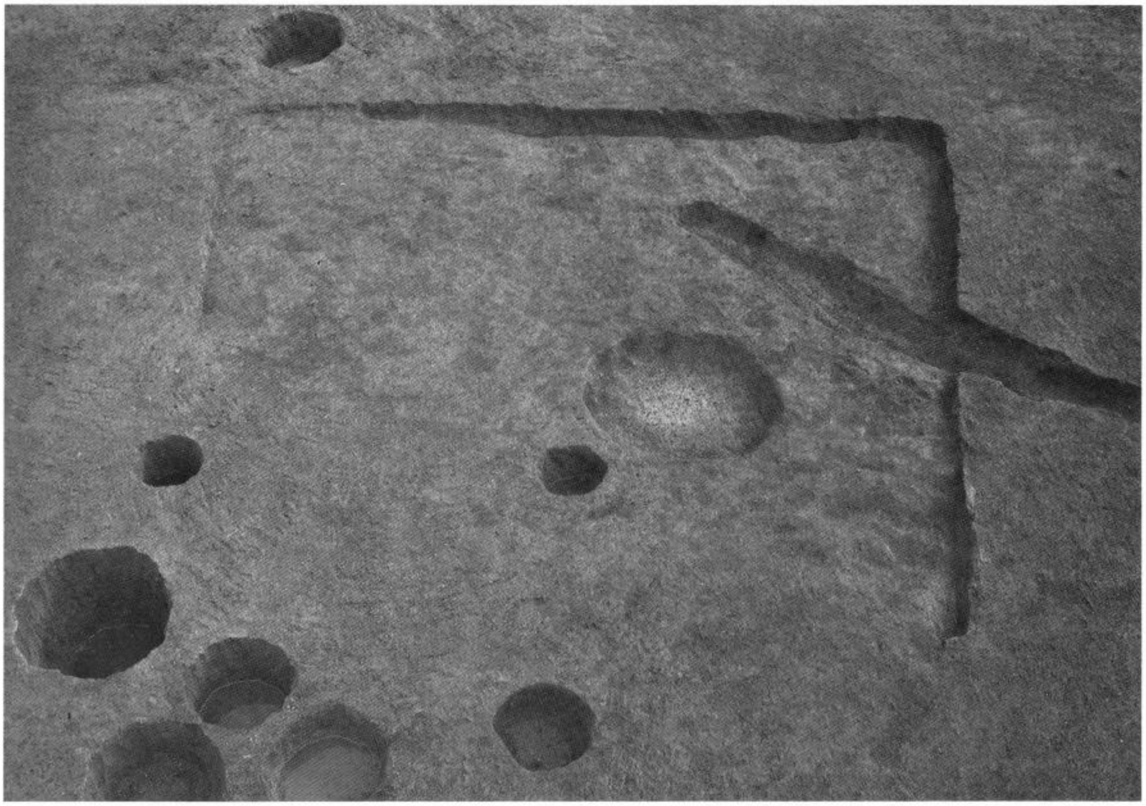
(2)　8号住居跡（北から）

(1)　6～10号住居跡（北西から）

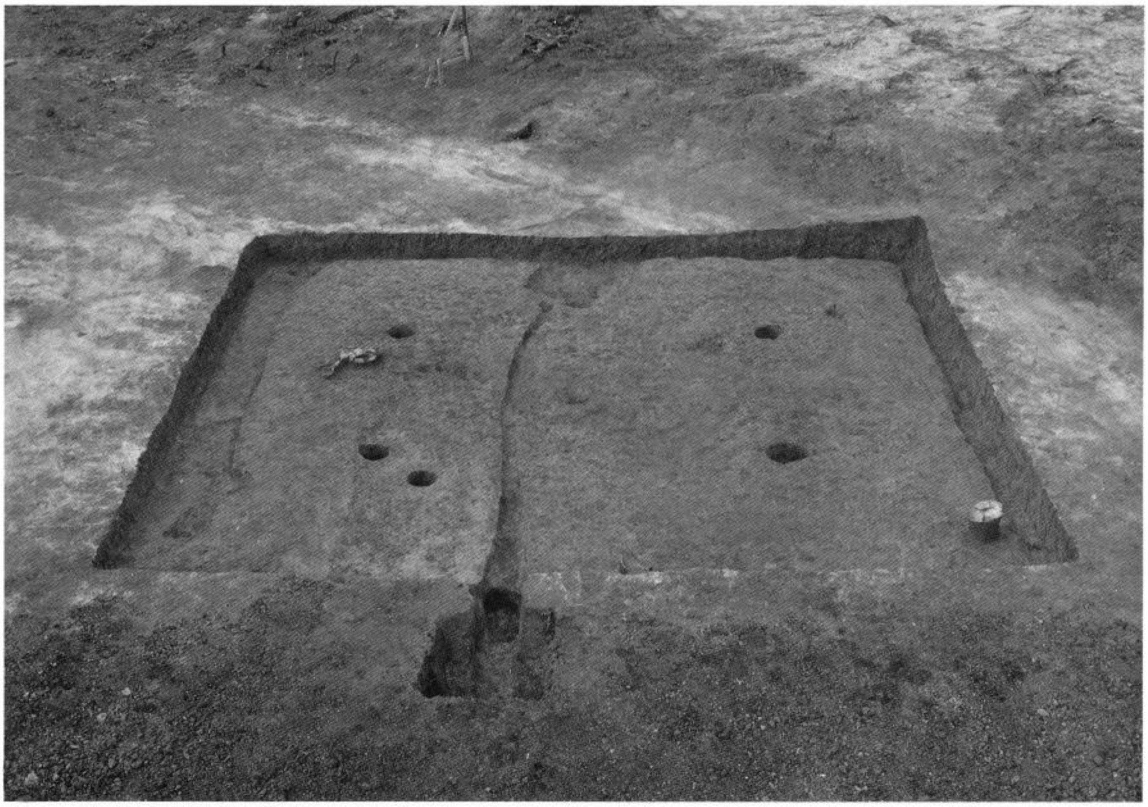
(2)　9号住居跡（北西から）



(1) 10号住居跡（北西から）



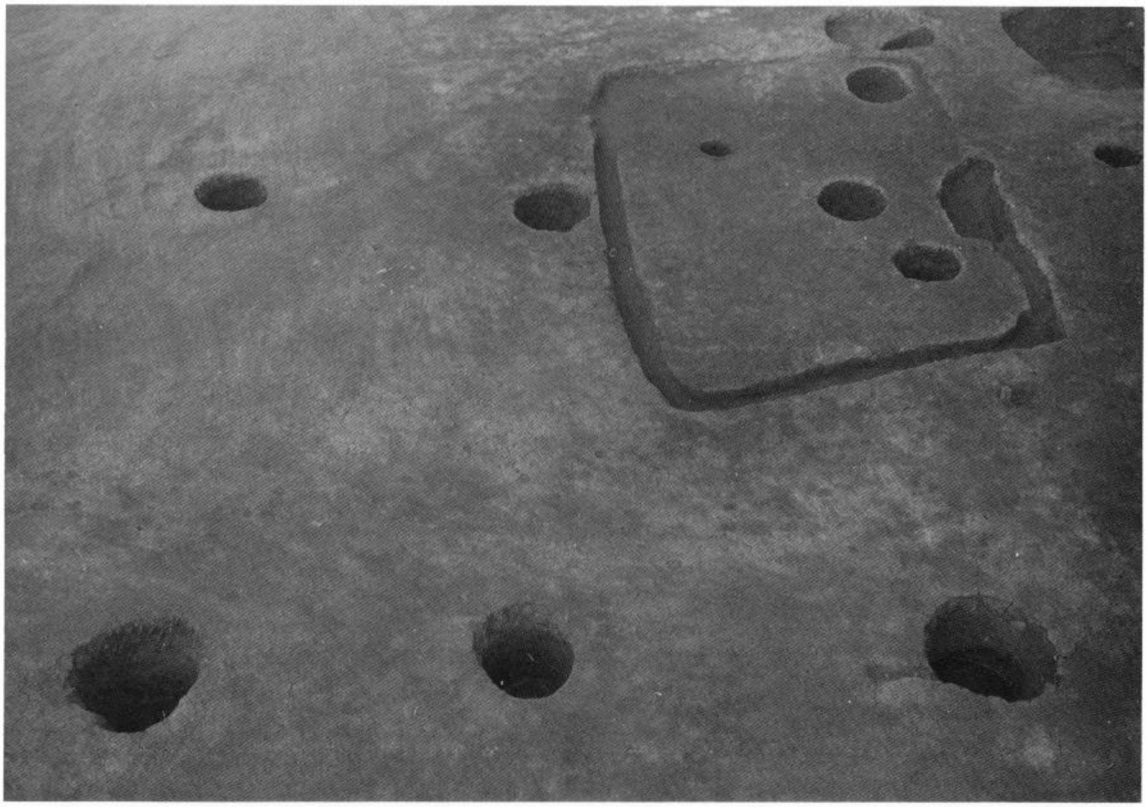
(2) 11号住居跡（北から）



(1) 12号住居跡（西から）

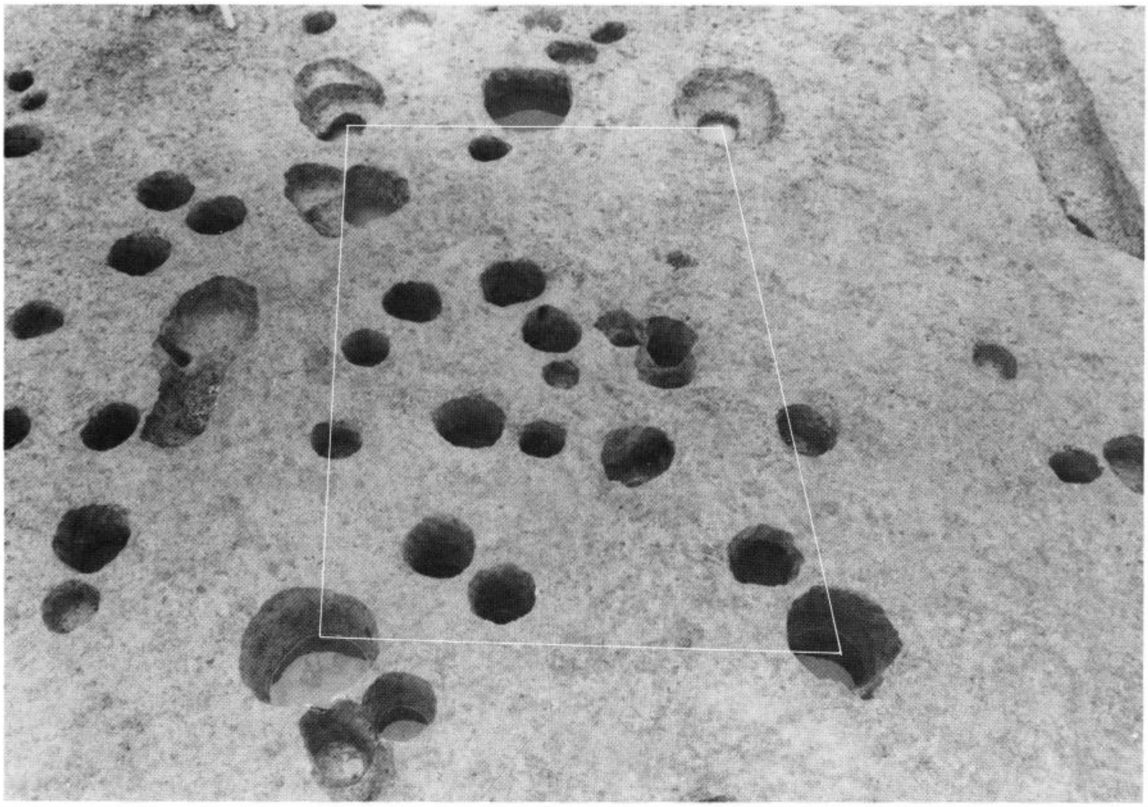
(2) 12号住居跡中央溝（東から）

(3) 12号住居跡中央溝西側溜桝（北から）



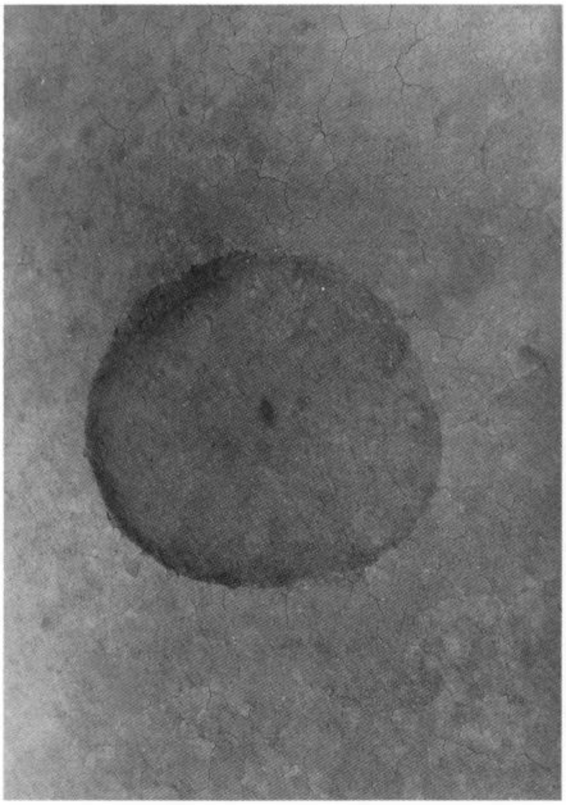
(1)　１号掘立柱建物と２号住居跡（南から）

(2)　２号掘立柱建物と14号竪穴（北から）

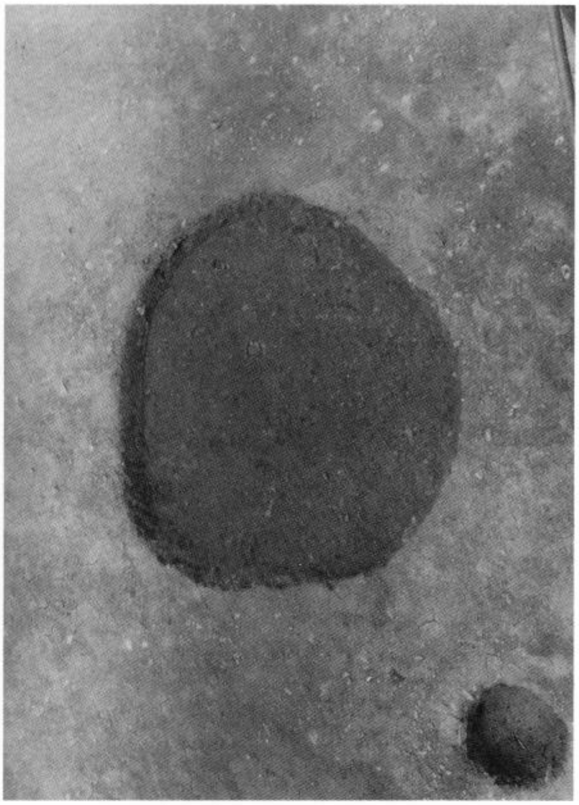


(1) ３号掘立柱建物（南から）

(2) 11号住居跡東側柱穴群（西から）

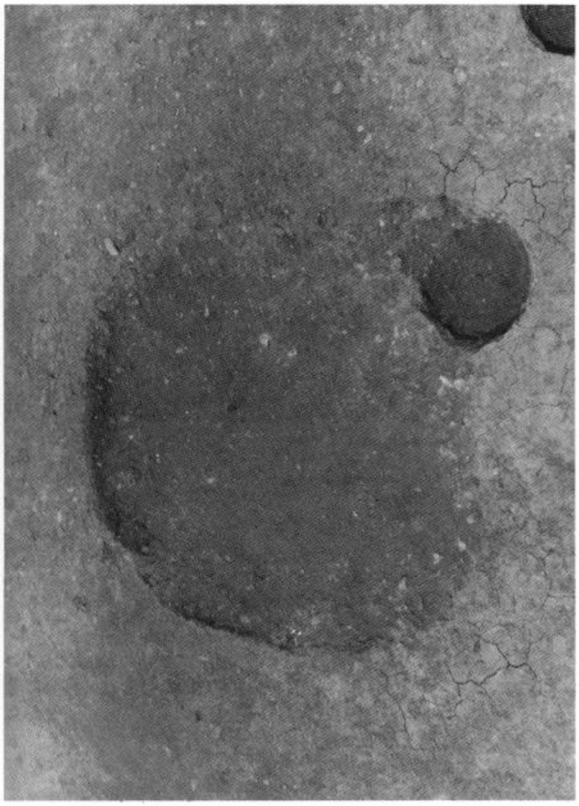


(1) 1号竪穴

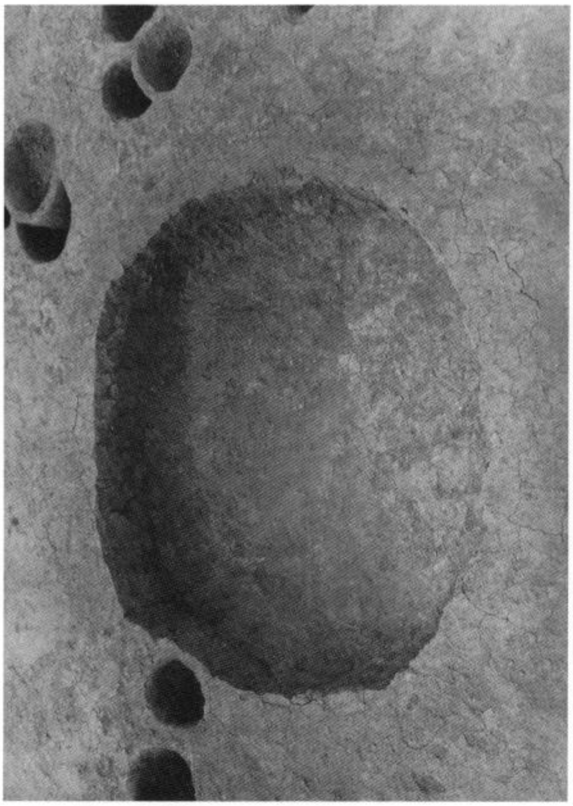


(2) 2号竪穴

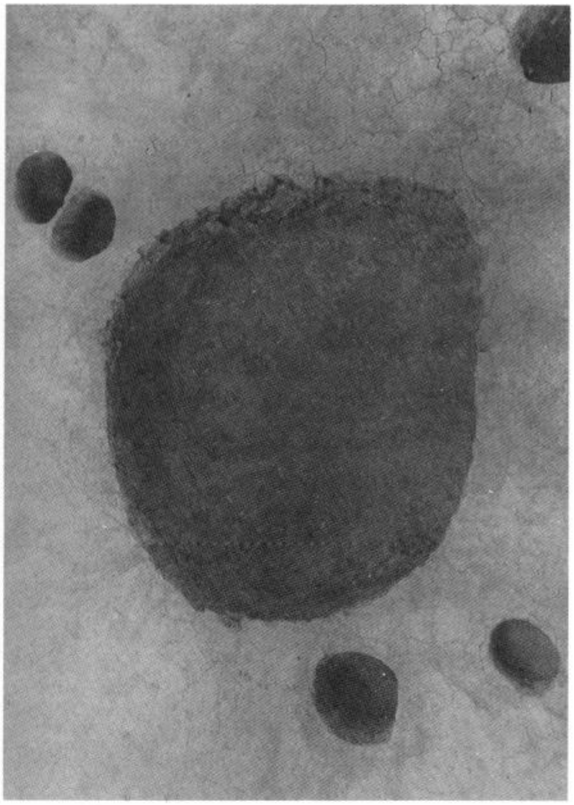
(3) 3号竪穴



(4) 4号竪穴



(1) 5号竪穴



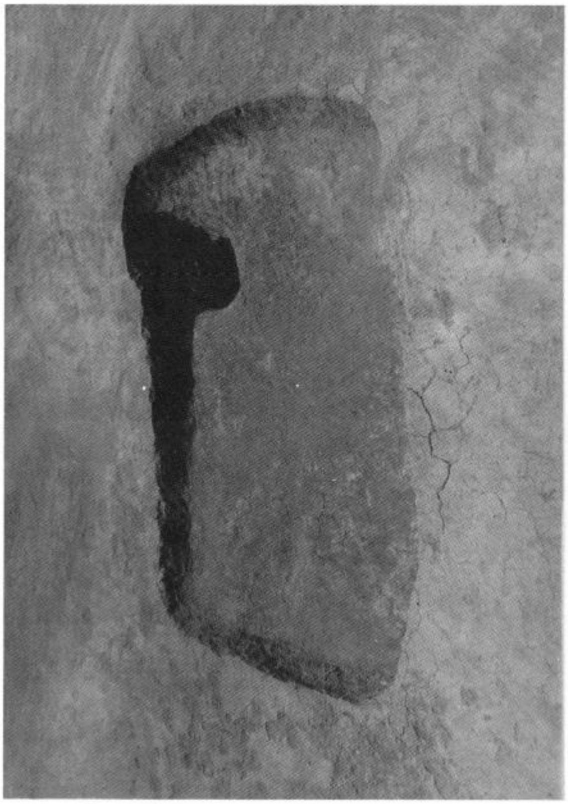
(2) 6号竪穴

(3) 7号竪穴

(4) 8号竪穴

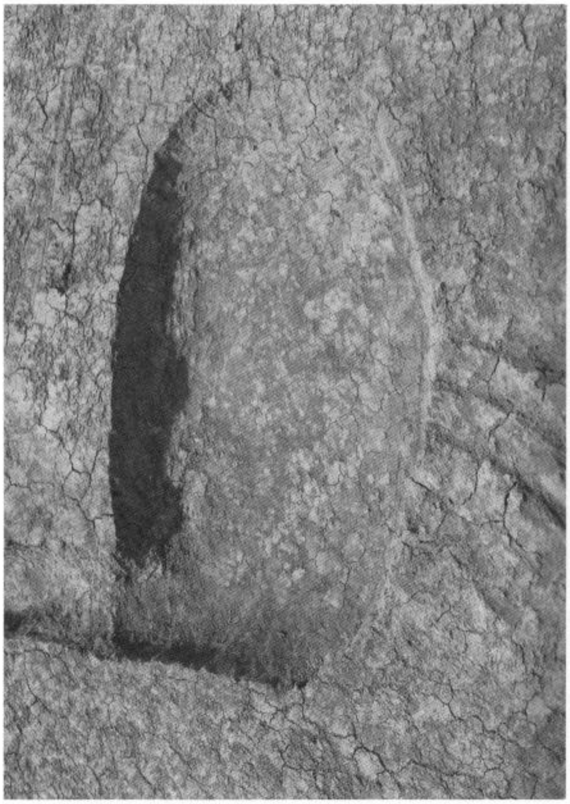
(1) 9号竪穴

(2) 10号竪穴

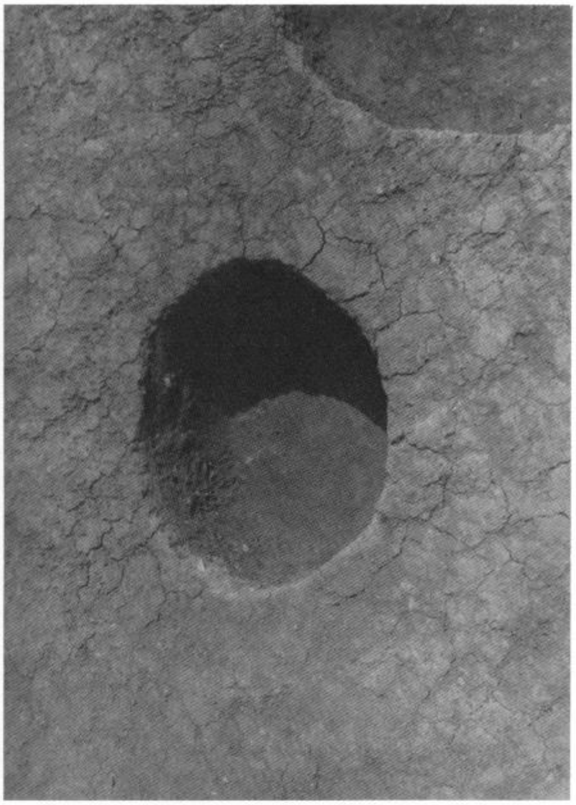


(3) 11号竪穴

(4) 13号竪穴



(1) 15号竪穴

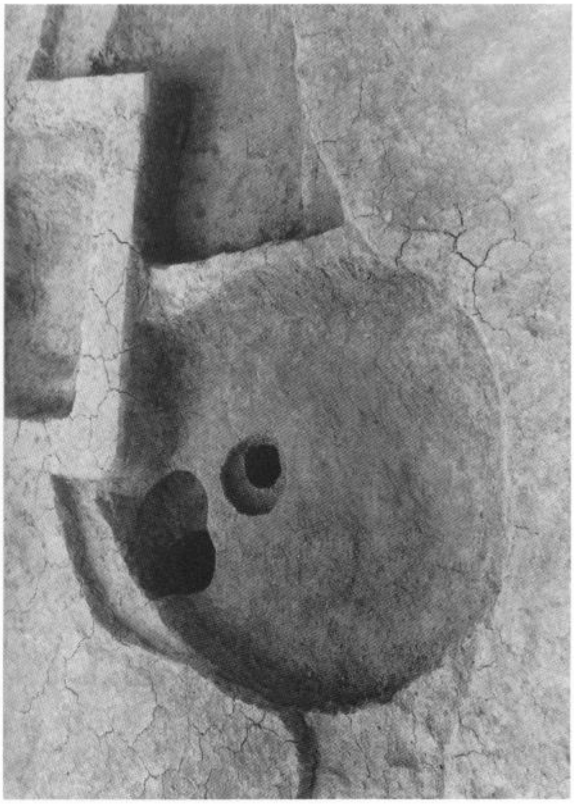


(2) 16号竪穴

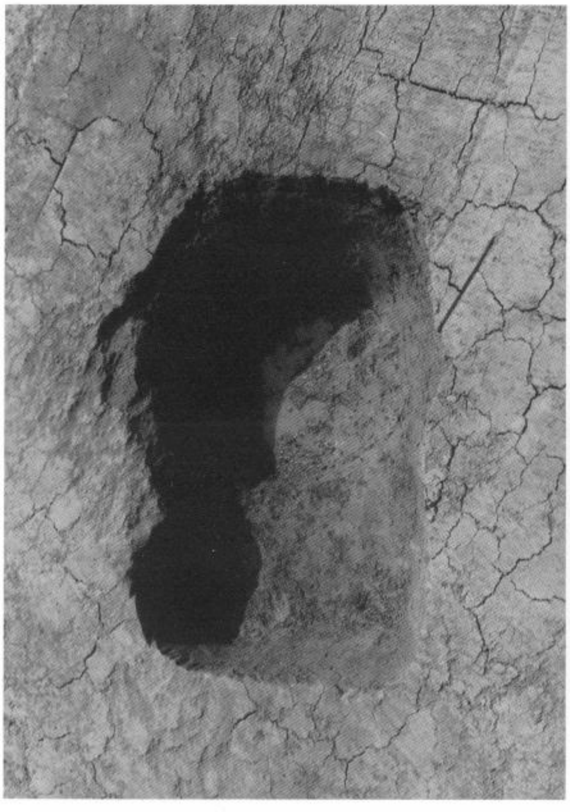
(3) 17号竪穴

(4) 18号竪穴

(1) 19号竪穴



(2) 20号竪穴



(3) 21・22号竪穴

(4) 23号竪穴

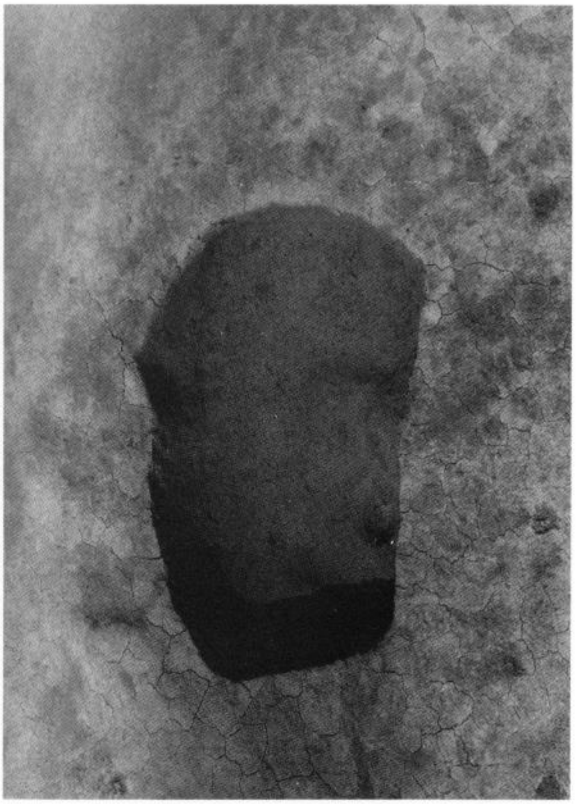
(1) 24号竪穴

(2) 25号竪穴

(3) 26号竪穴

(4) 27号竪穴

(1) 4号土壙

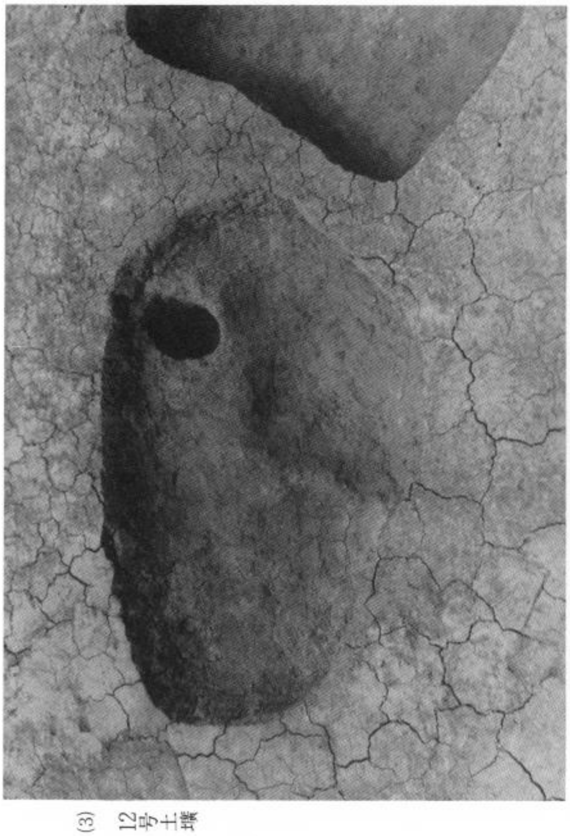


(2) 5号土壙

(3) 6・7・8号土壙（東から）

(1) 9・10号土壙

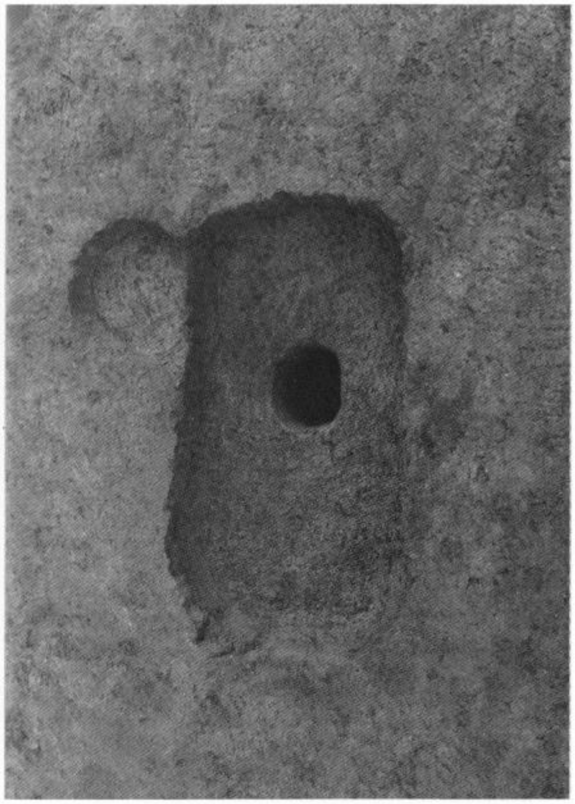
(2) 11号土壙



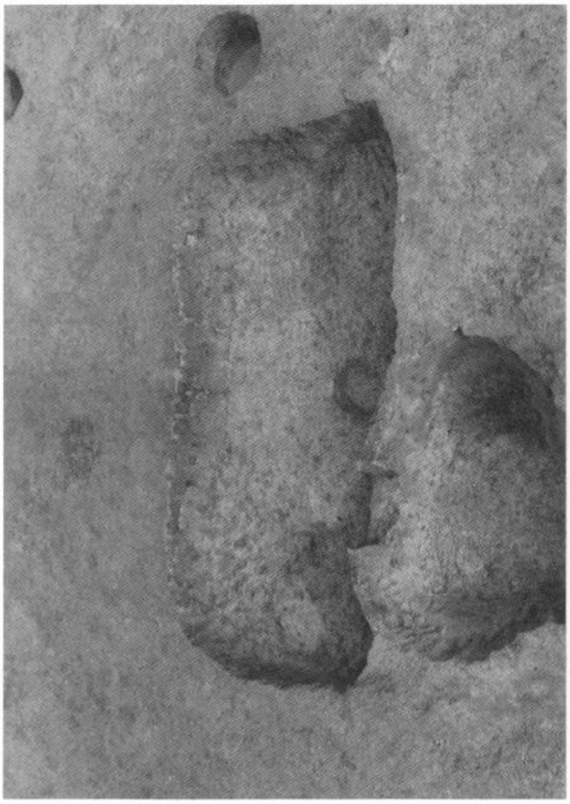
(3) 12号土壙

(4) 13号土壙

(1) 16号土壙



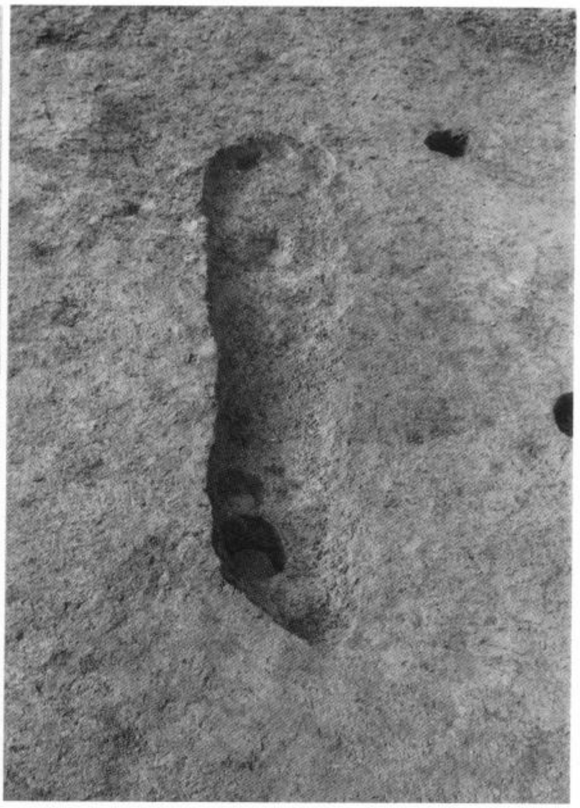
(2) 17号土壙



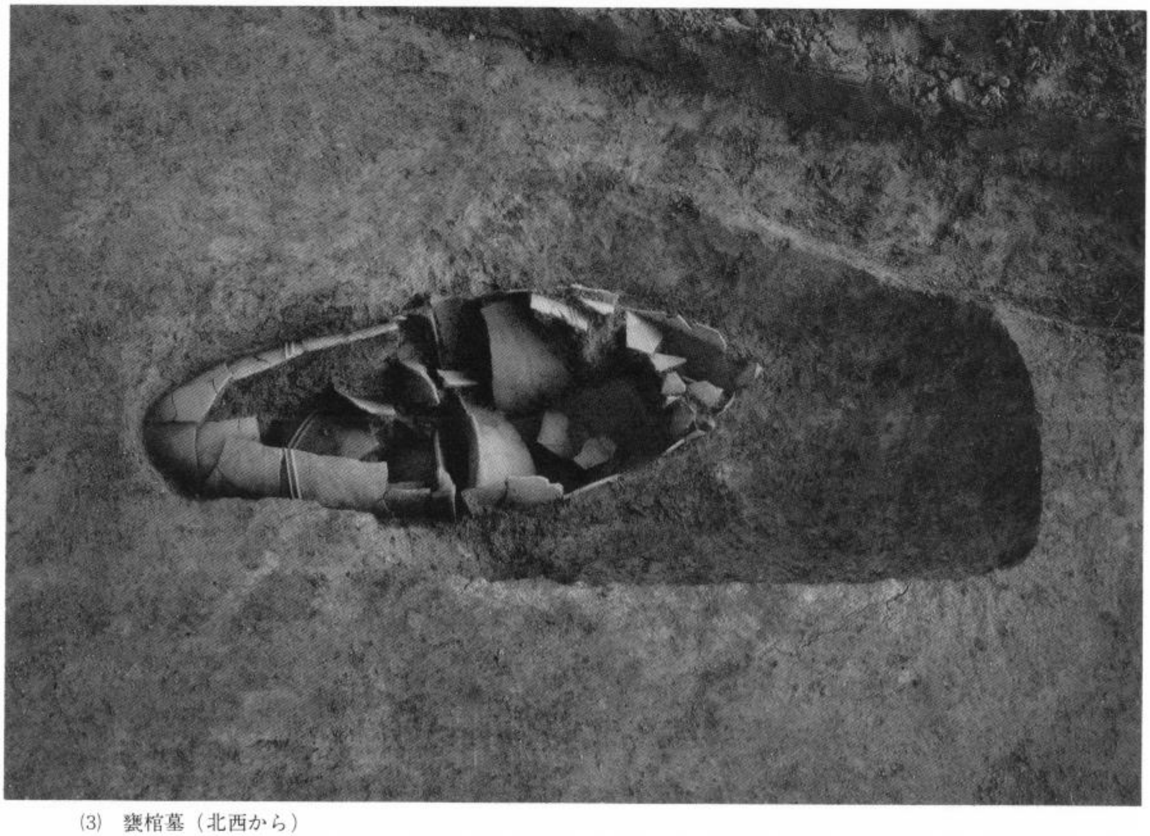
(3) 18号土壙

(4) 20号土壙

(1) 15号土壙

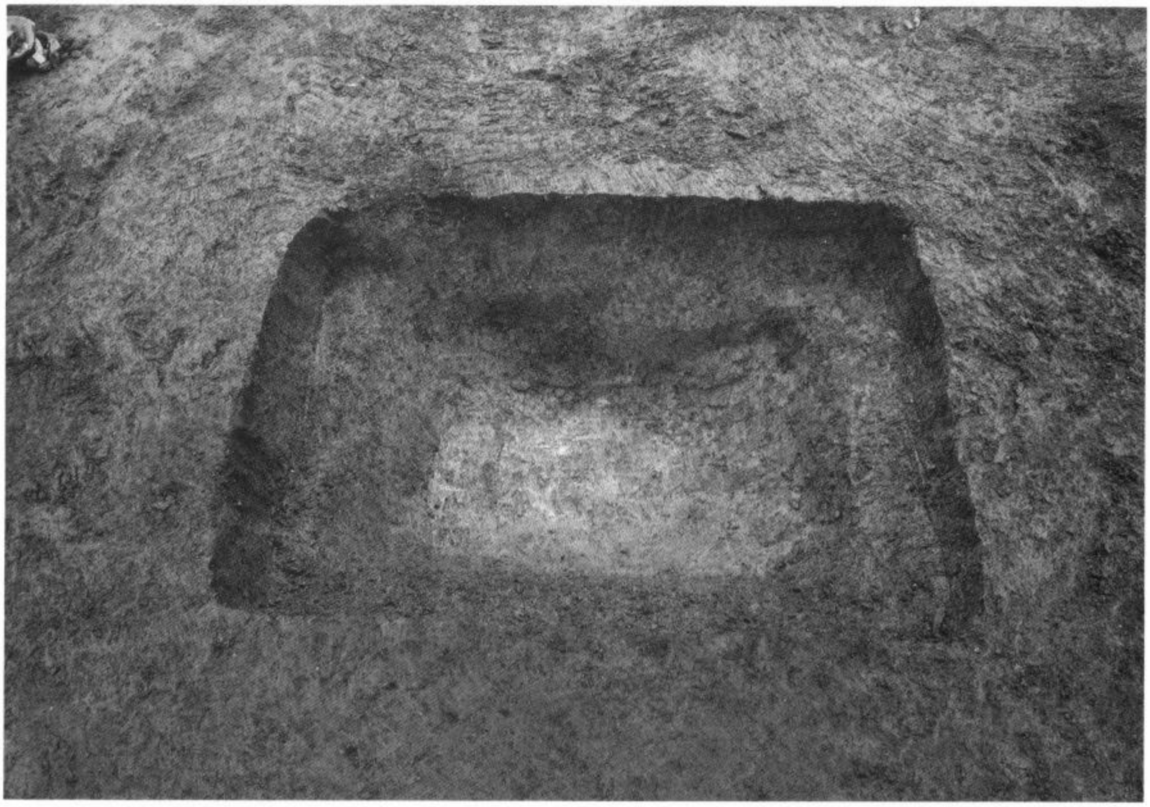


(2) 19号土壙

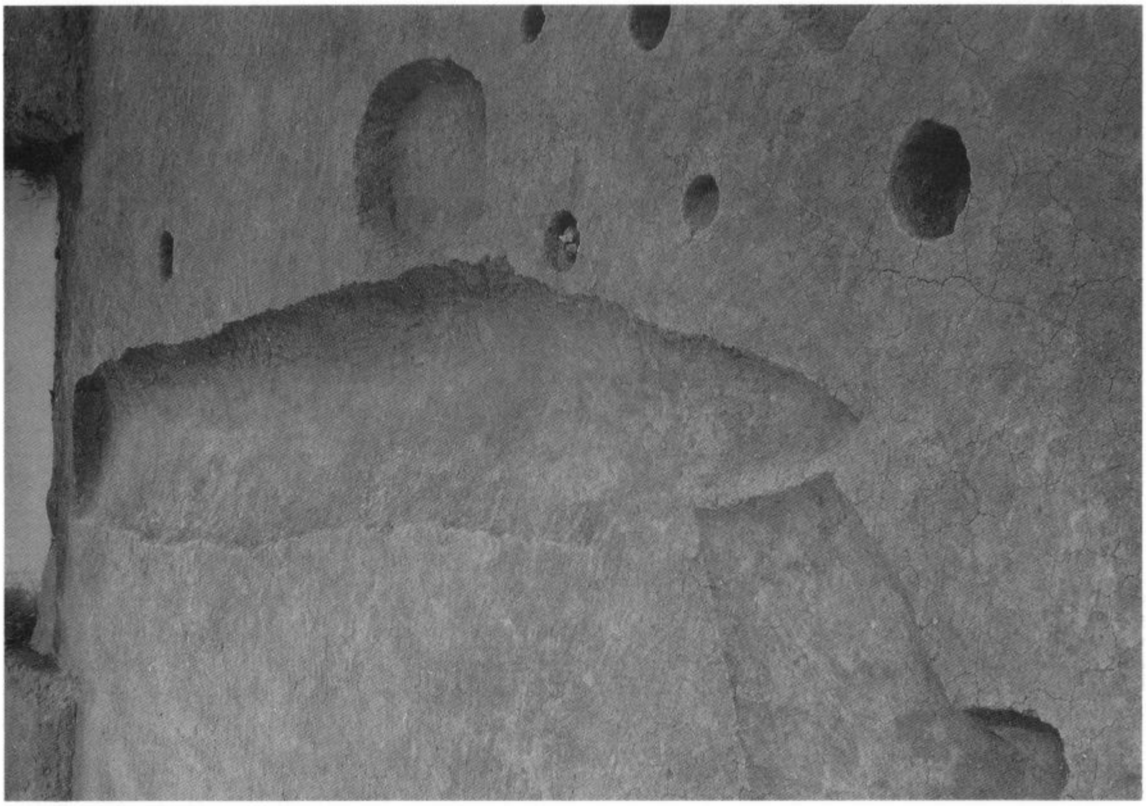


(3) 甕棺墓（北西から）

(1)　1号土壙墓（北から）



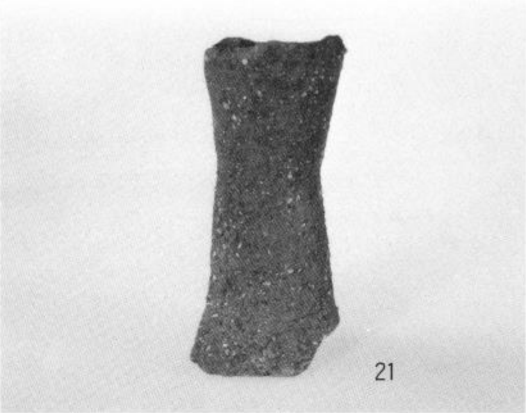
(2)　2号土壙墓（北から）



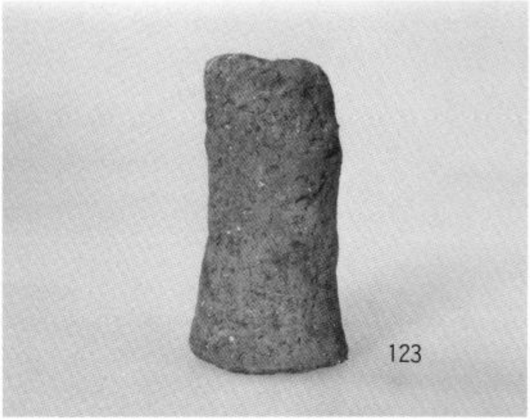
(1) 1号溝（南から）

(2) 5号溝（南から）

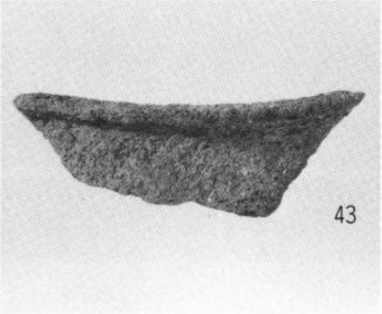
93

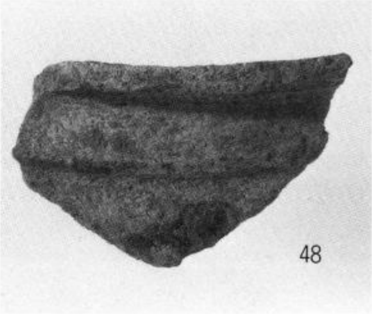

21

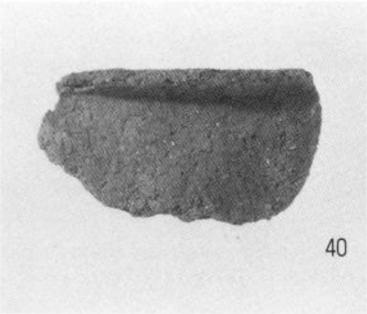
110

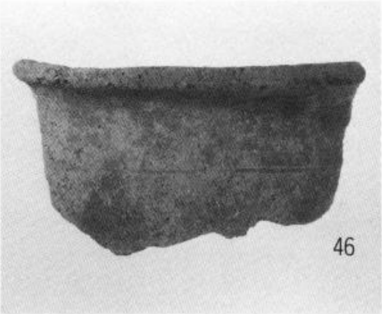

123

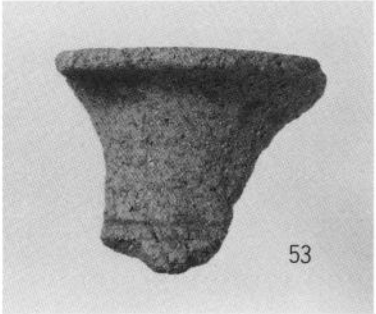
41


43


48

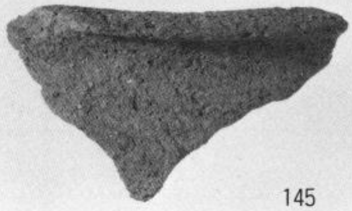

40


46

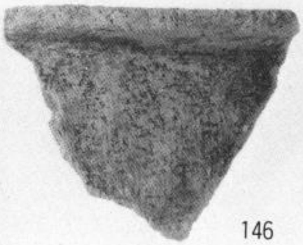

53

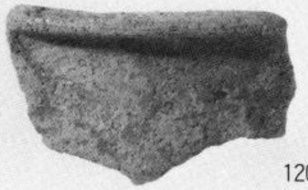
弥生式土器

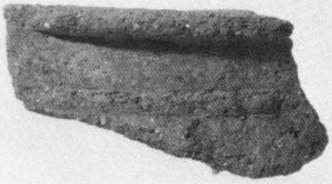
94

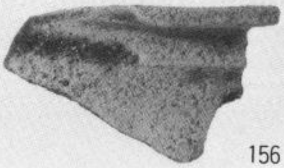
118

145

99

119

146

105

120

148

107

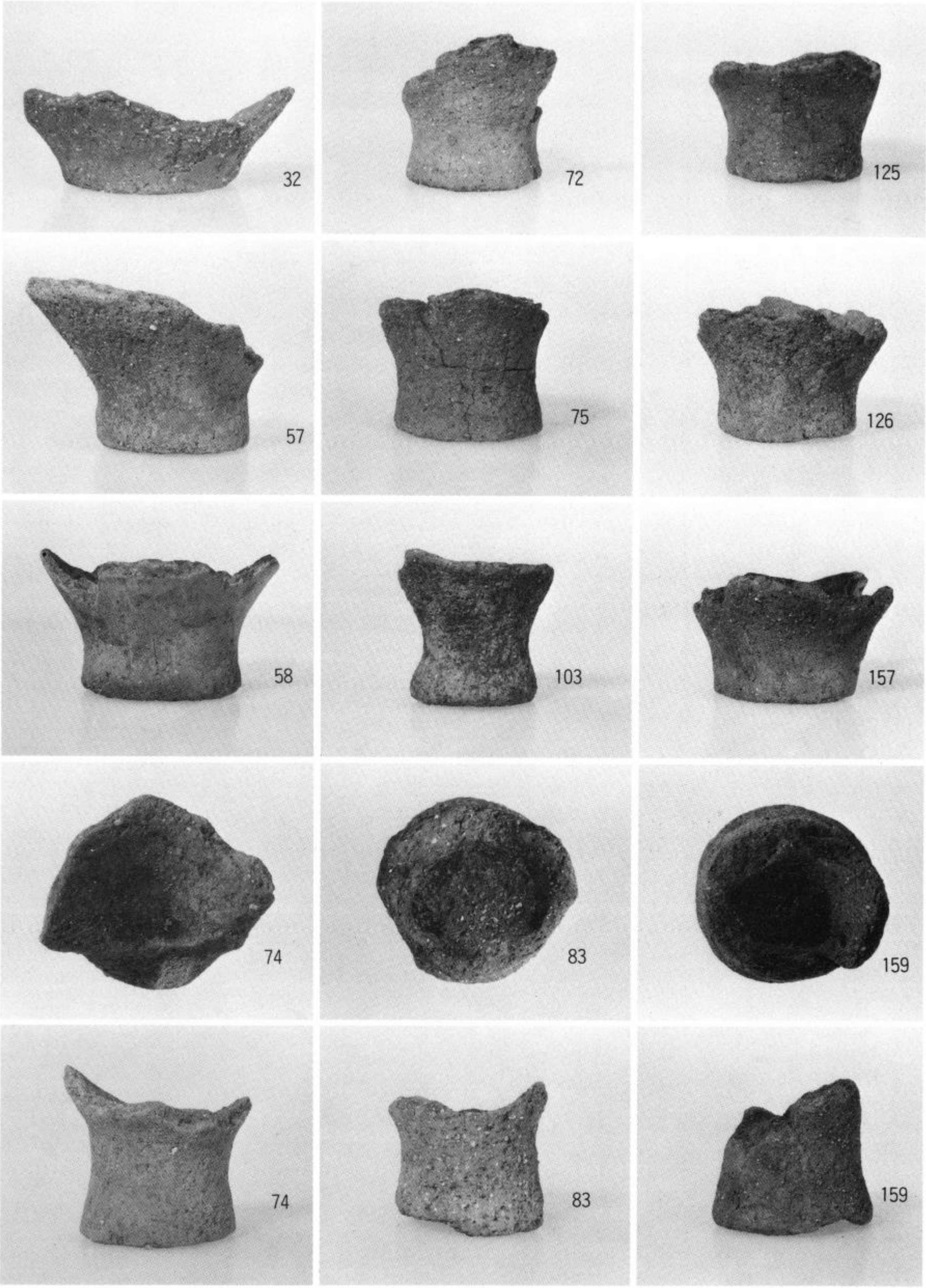
131

156

112

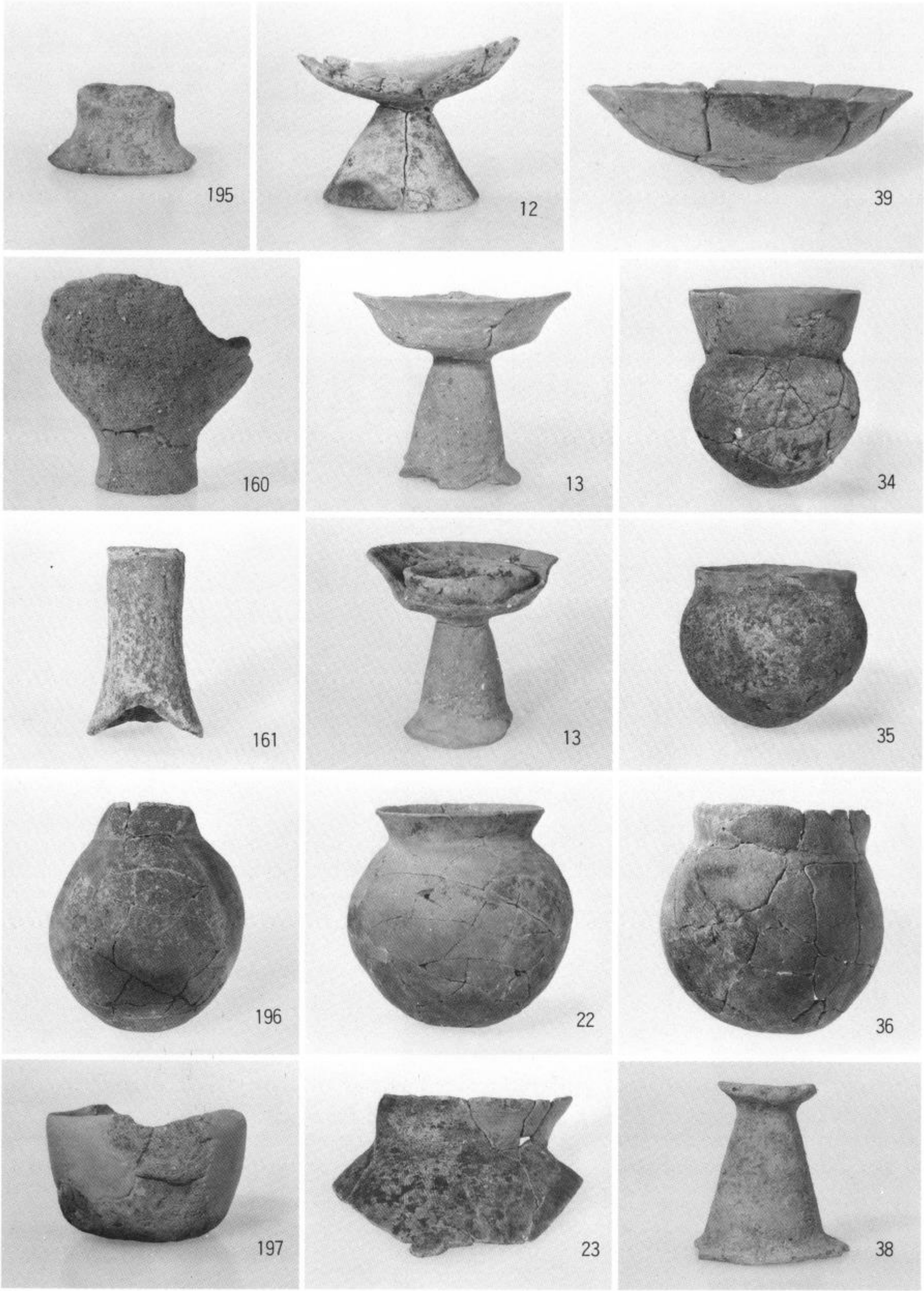
128

10

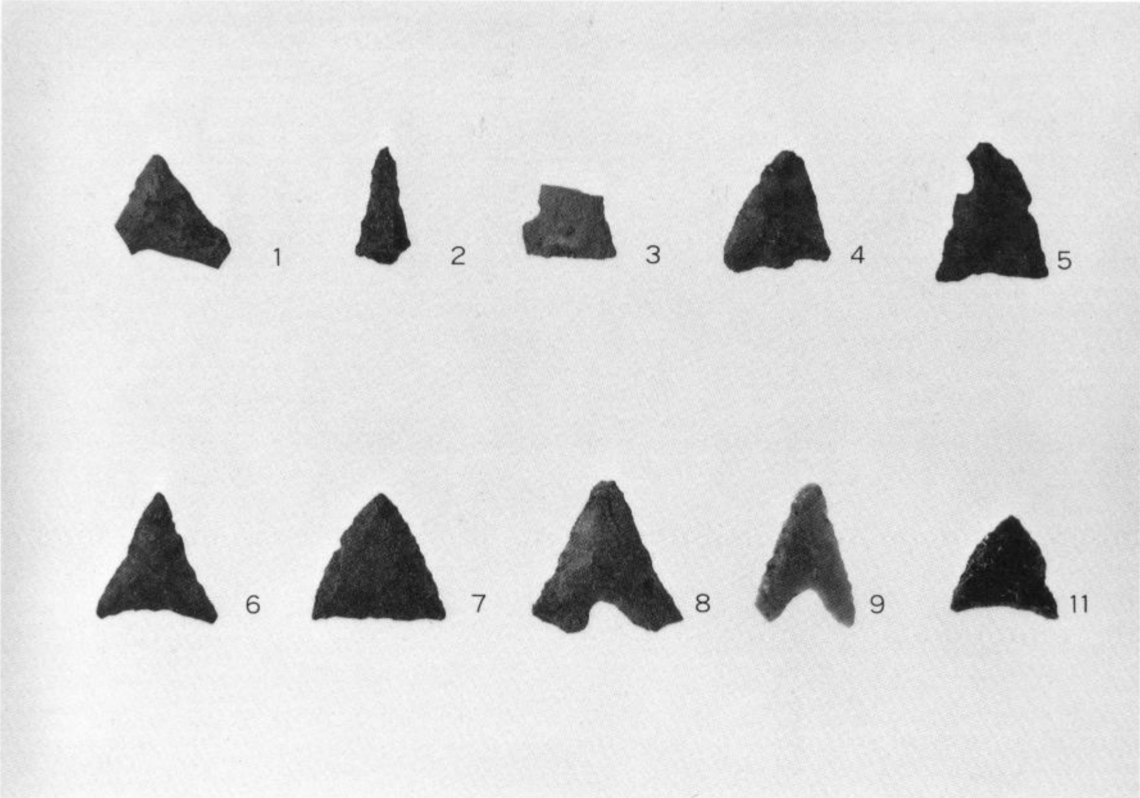
弥生式土器



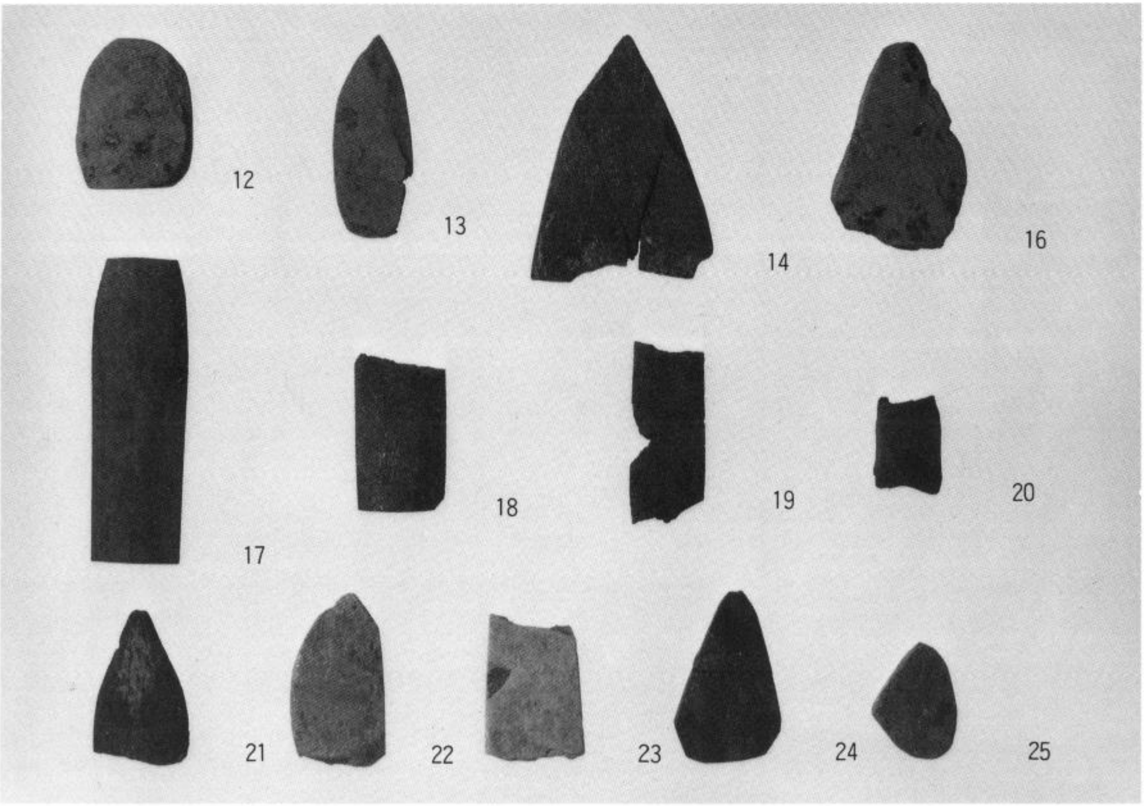
弥生式土器



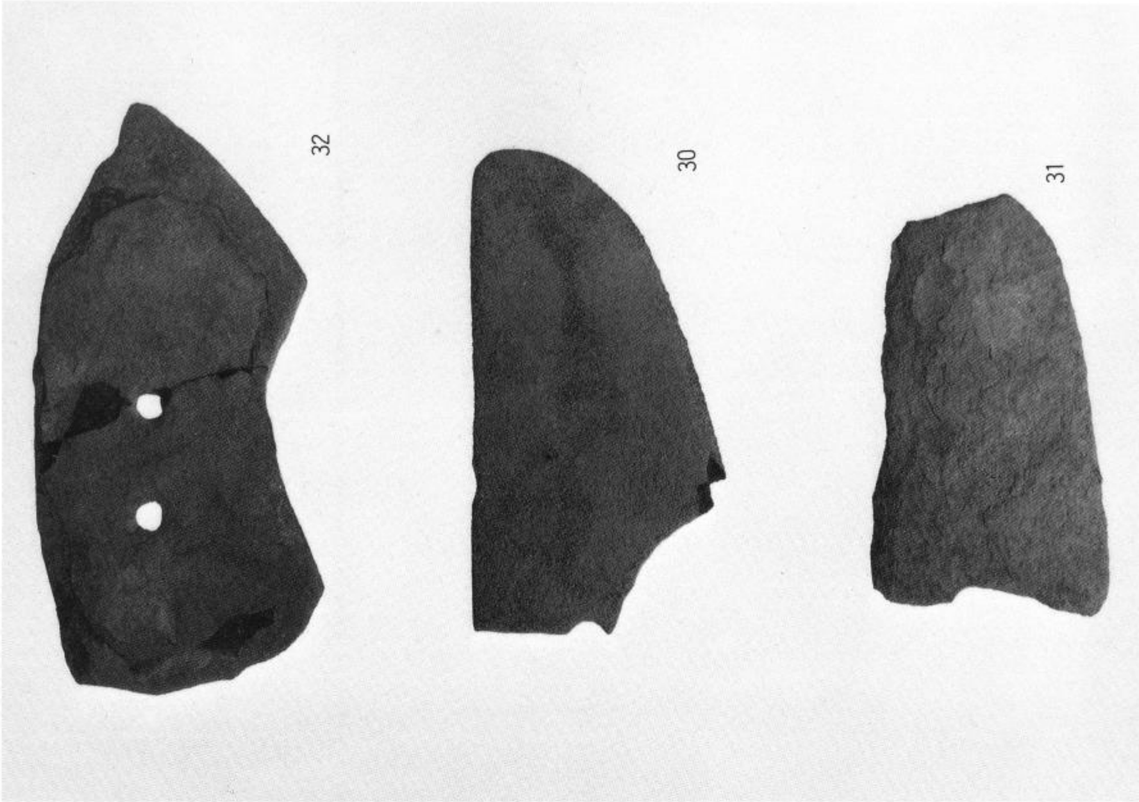
弥生式土器および土師器



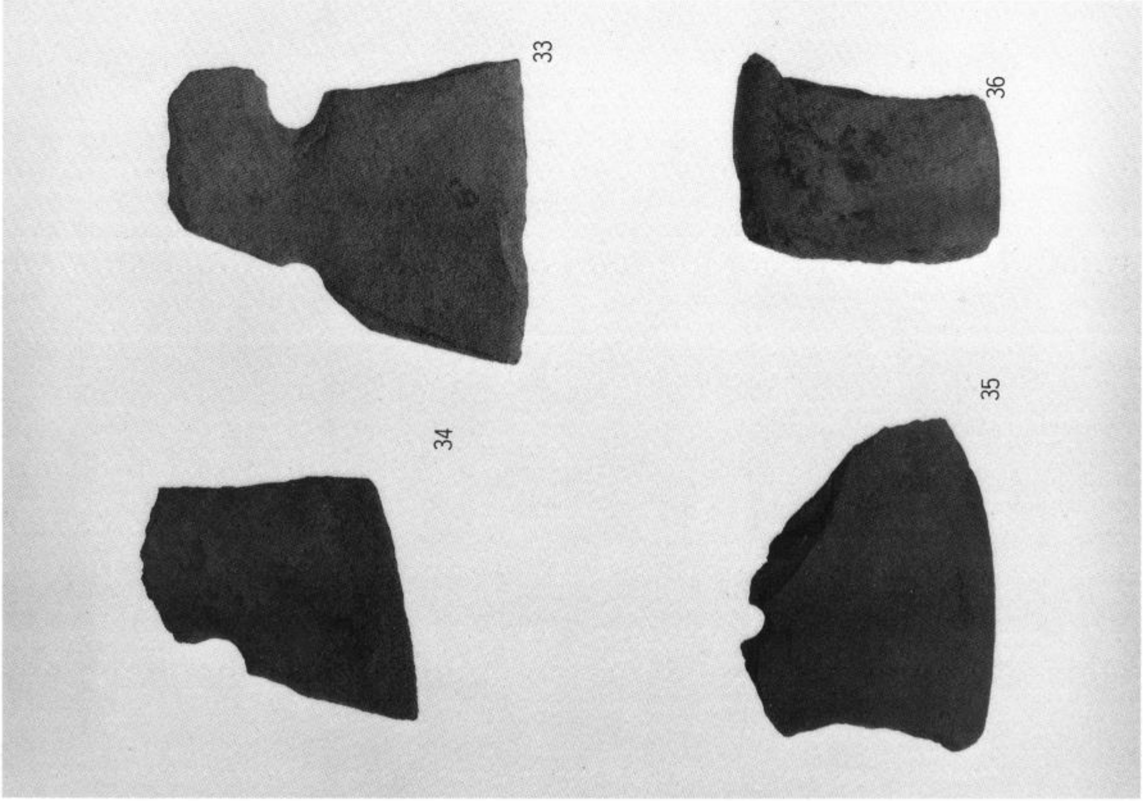
(1) 打製石鏃



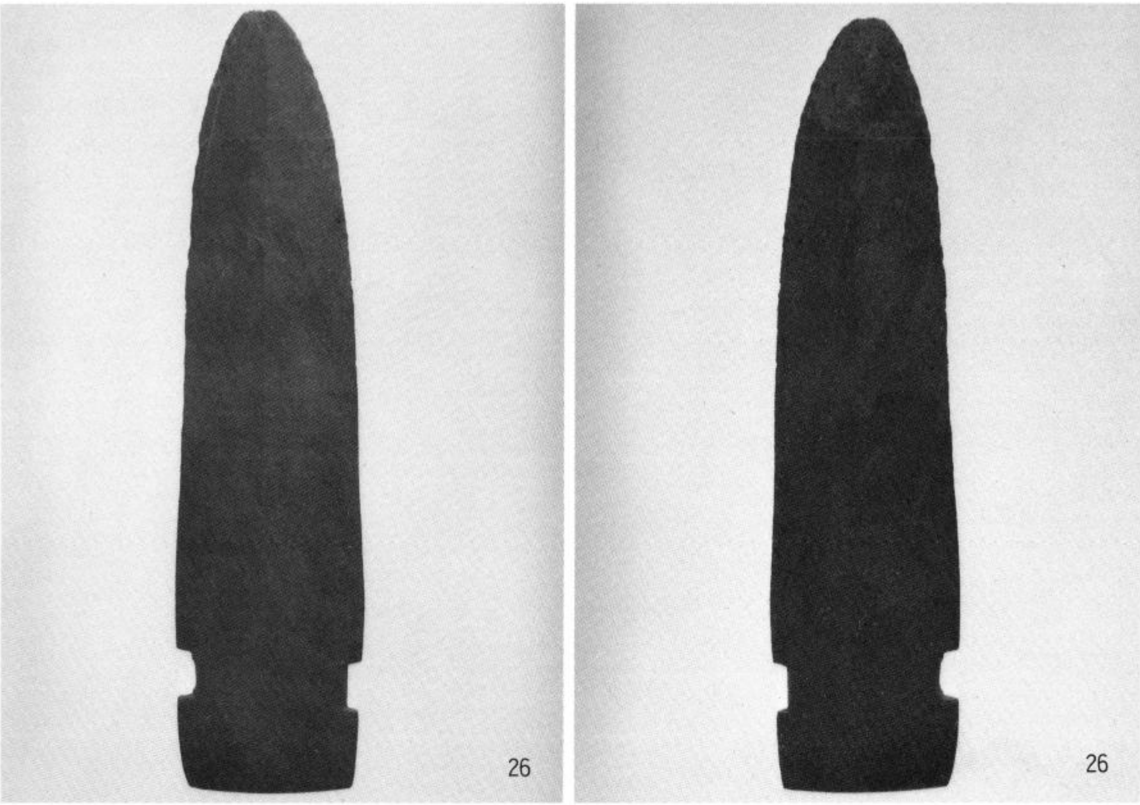
(2) 磨製石鏃



(1) 石庖丁

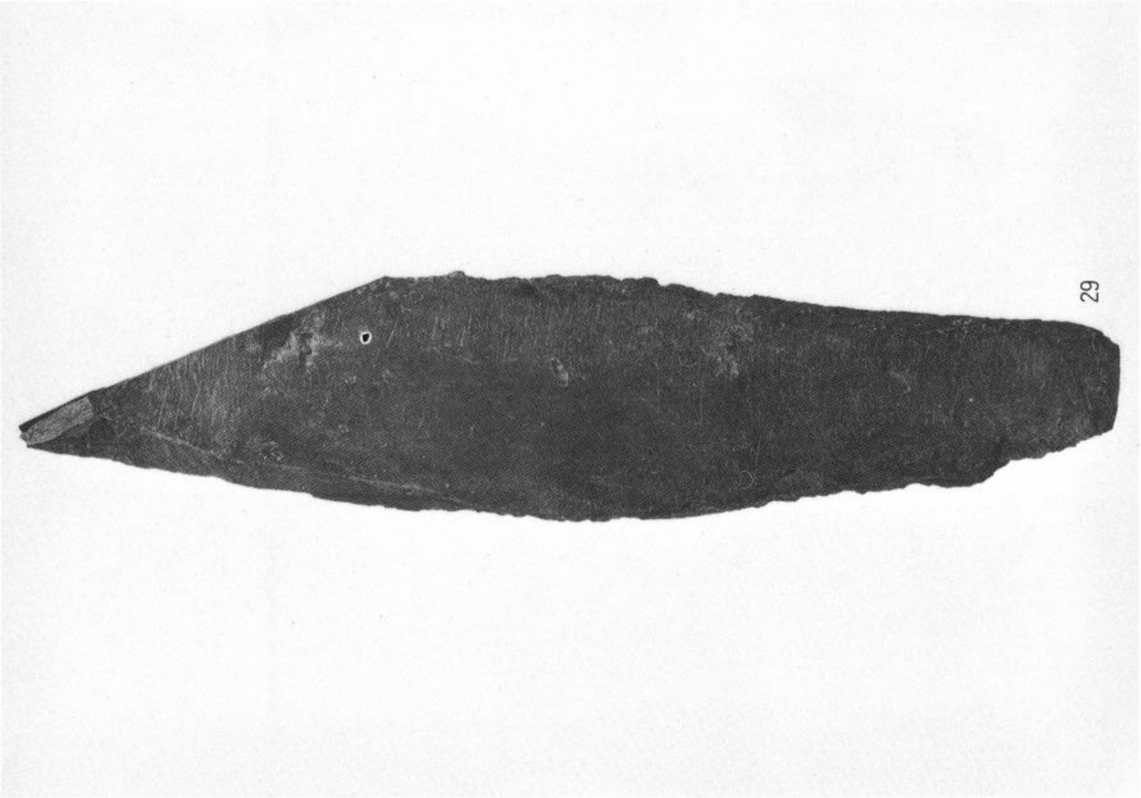


(2) 石庖丁

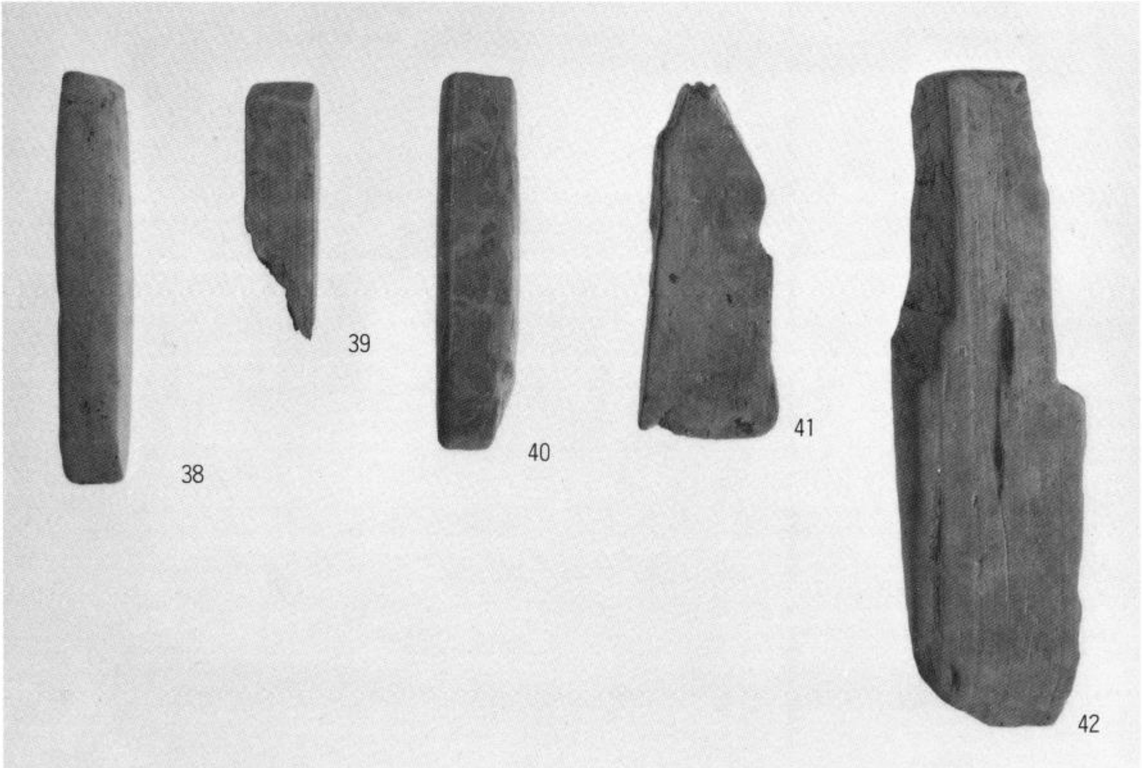


(1) 石剣（表・裏）

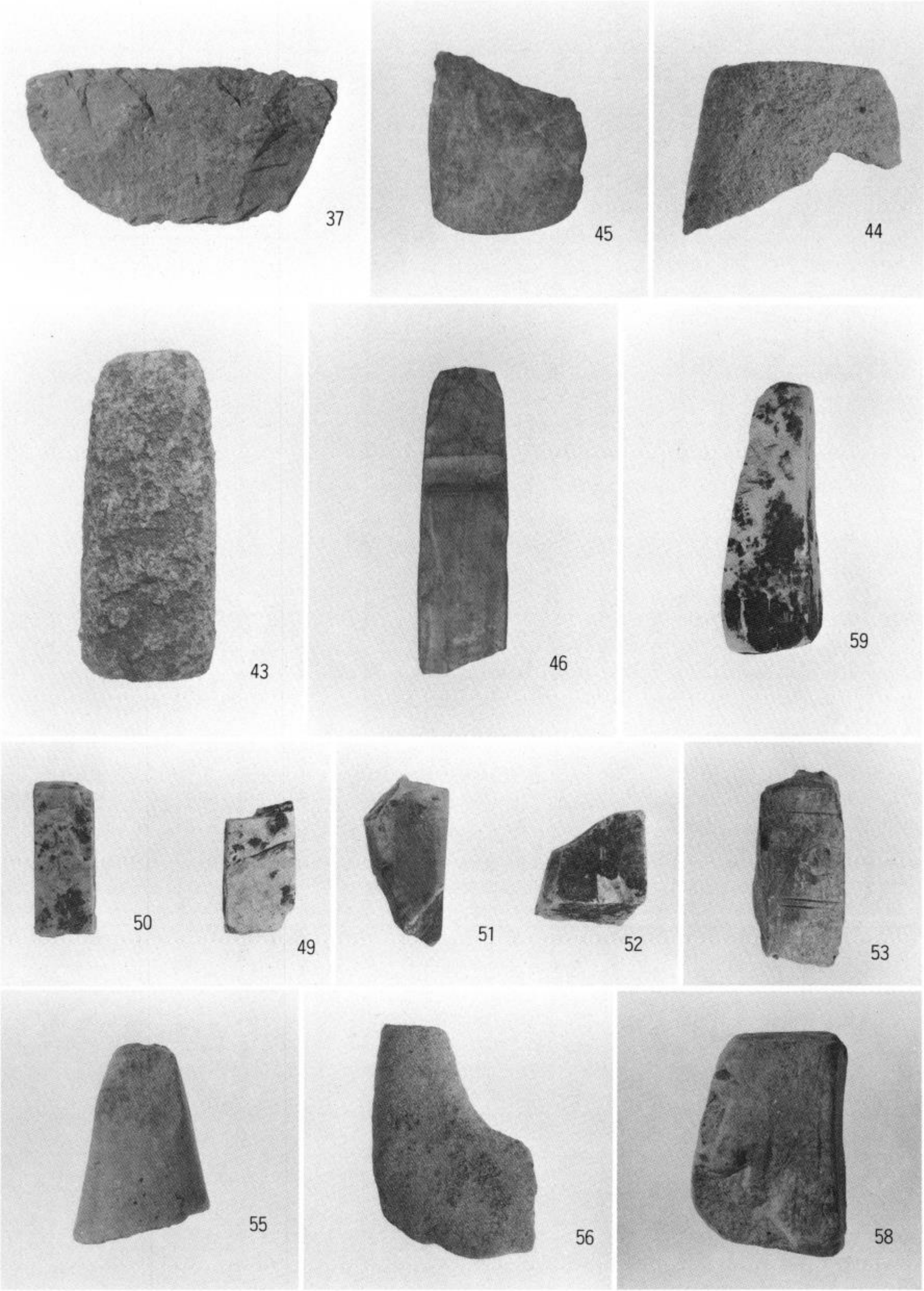
(2) 石剣



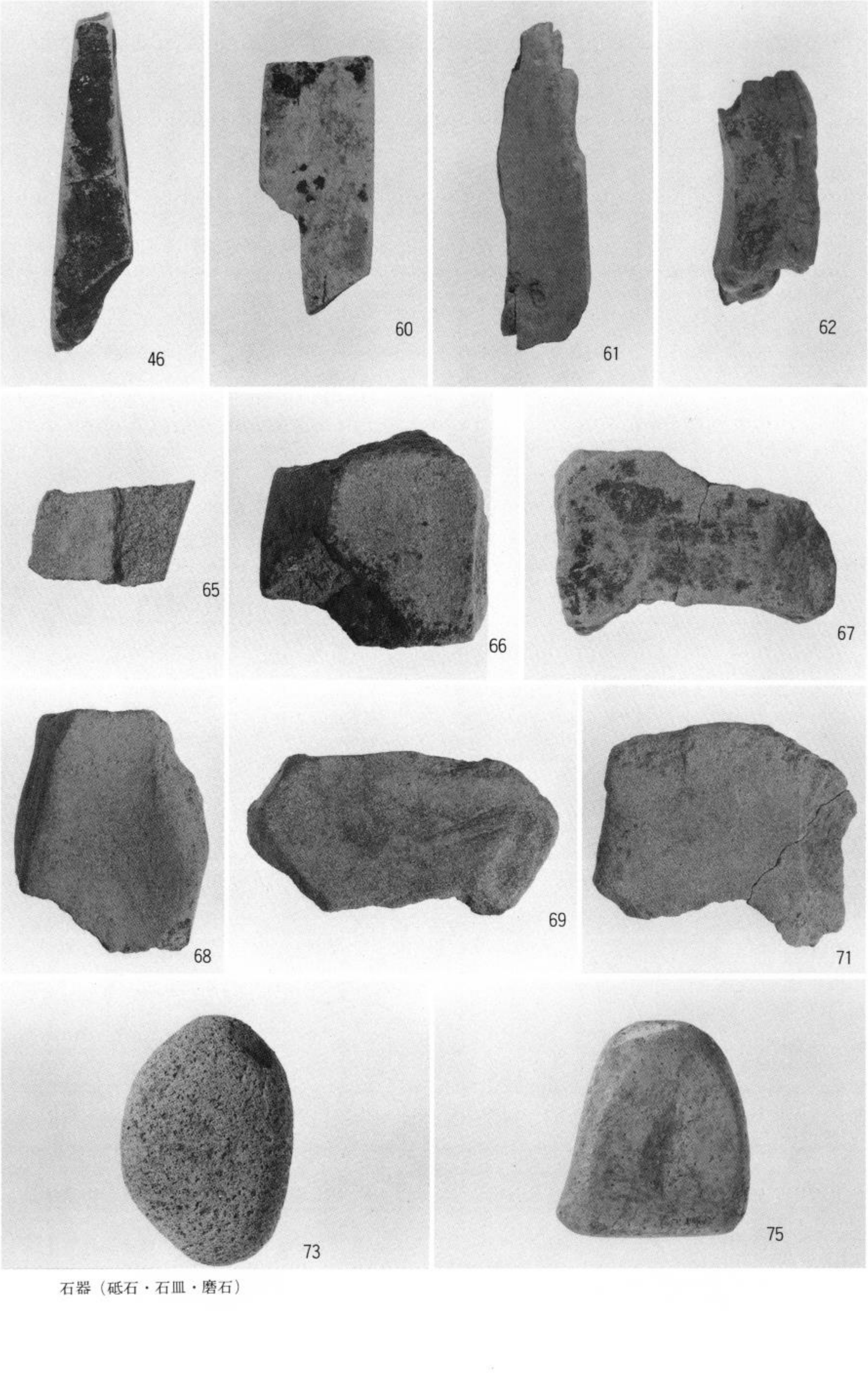
(1) 石剣未製品



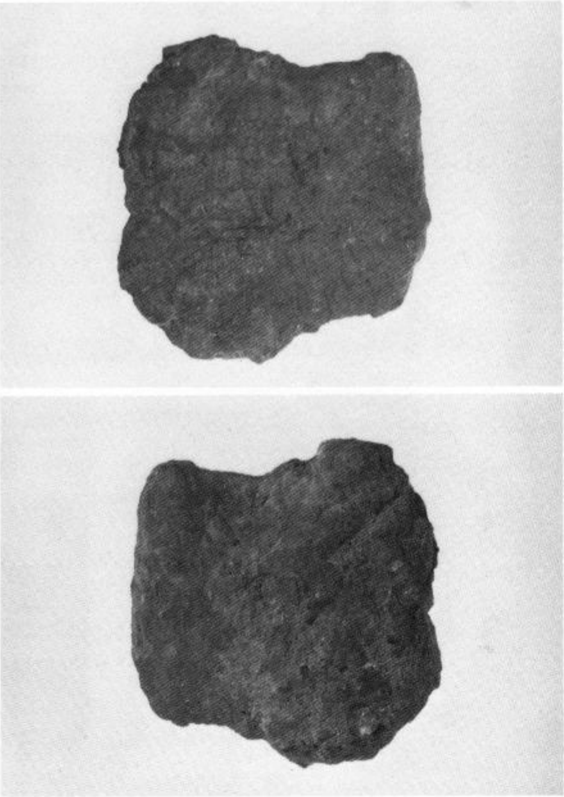
(2) 片刃石斧



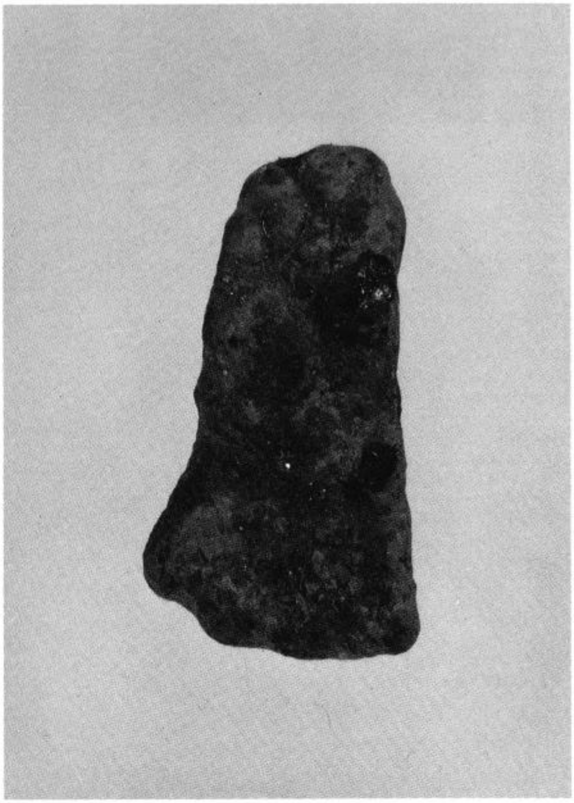
石器（石庖丁・石斧・砥石）



石器（砥石・石皿・磨石）

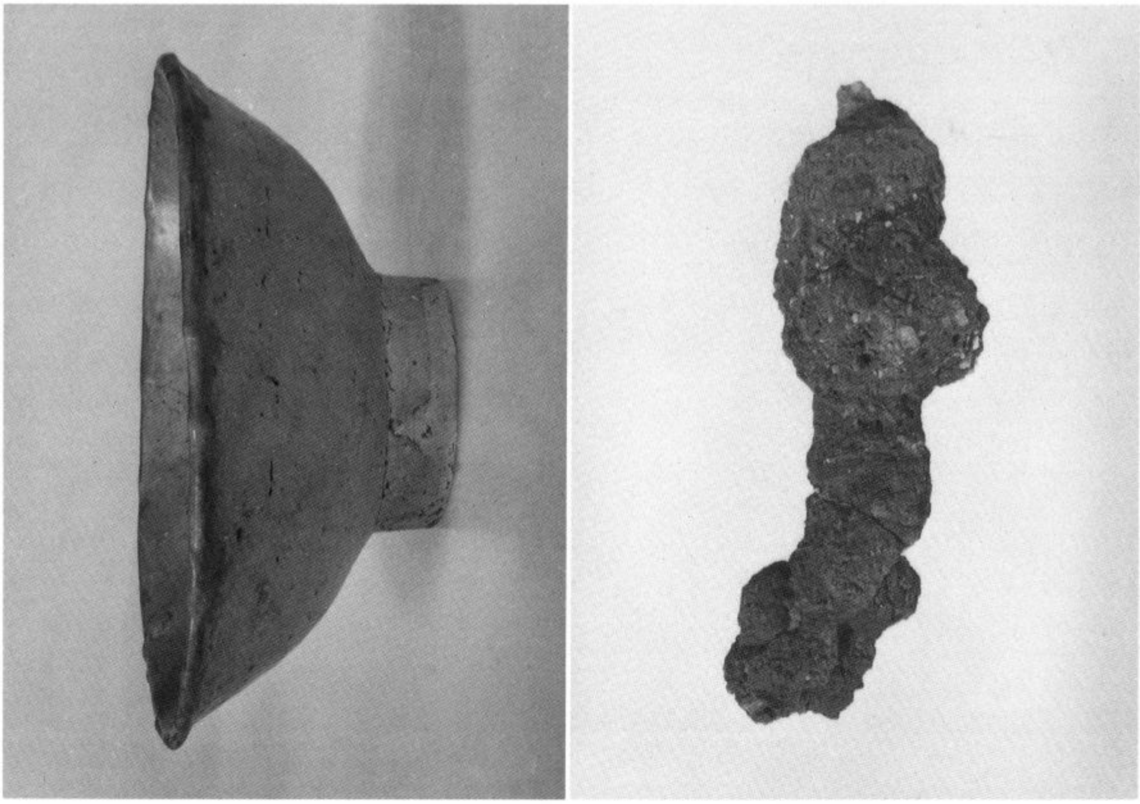


(1) 鉄斧

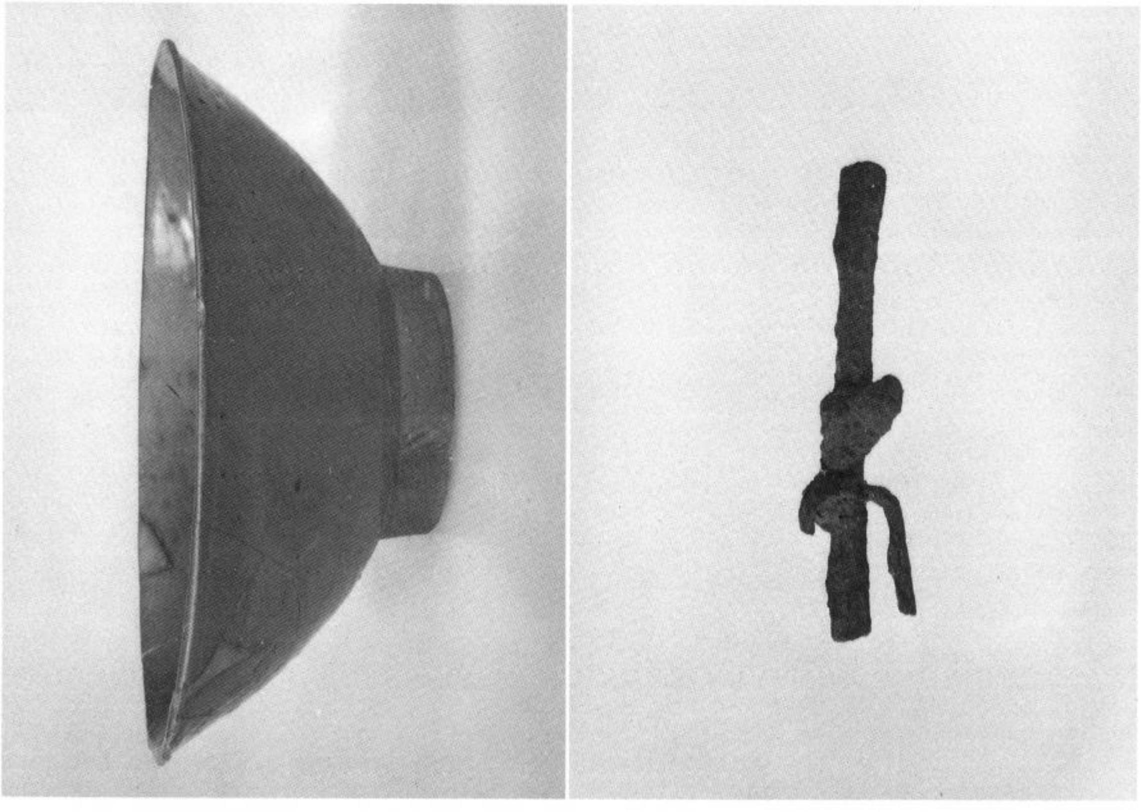


(2) 鉄製品

(3) 甕棺（上・下）



(1) 1号土壙墓副葬品



(2) 2号土壙墓副葬品

Ⅲ　各　遺　跡　の　調　査

2.　ウラン山遺跡

2．ウラン山遺跡

1．はじめに

ウラン山遺跡は，穂波町大字津原に所在する。津原集落の北側にある通称ウラン山と呼ばれる丘陵上に展開する。この丘陵は，椿・安恒地区の丘陵群とは，内住川の支流明星寺川を挟んで西に対峙する。丘陵は最高所で標高約70ｍを測る。細い稜線が続き，所々に平坦部がある。標高65ｍ前後の稜線で，わりあい起伏があり，西から東に低く延びる。丘陵の北側斜面は急傾斜であり，深く細い谷が入る。南側は緩傾斜である。

調査は，丘陵の稜線のほぼ全域におよぶが，東端部は調査区外になり，この地区の南斜面にウラン山古墳がある。小円墳で横穴式石室を主体部とするものである。また，稜線は平坦で幅広く，弥生時代の遺構の所在も予想される。西端部は，すでに削平をうけており，昭和45年に石棺墓が６基確認されたところで，裏ノ谷遺跡と称される。この遺跡と今回の調査区西端部との間には，近世墓が小区域であるが所在し，諸事情があり調査の手が入れられなかった。

また，丘陵の南側裾部は低台地状となり，この部分にも遺跡の所在が予想される。

2．遺跡の概要

発掘調査の着手前には，丘陵の形状からしてそれほどの遺構の検出は望めないものと考えられたが，結果は以下に記述するとおりになった。遺跡は，弥生時代の住居跡や袋状竪穴を主体とするものである。これらの遺構は，丘陵の稜線上のわずかな平坦部に造られているが，鞍部や緩斜面にも造られている。ために，住居跡は完全にその規模が把握できるものは少ない。遺構は，あまり集中しなく，調査区の全域に認められるが，調査区西端の最高所平坦部には袋状竪穴が集中している。平坦部は調査区外にもいくぶん広がるため，この部分だけで50基前後の袋状竪穴の所在が推定される。この地区の袋状竪穴群は，全体的にみて，やや離れた感がある。12号住居跡との間は，一部小域の平坦部があるが，緩斜面であるため遺構はない。

丘陵は，39号袋状竪穴のあるところが，最も細く，この東側の９号住居跡は，やや広い平坦部をなし，ここに，１軒の住居跡が所在するものであるが，大半が調査区域外にあり，一部かかる住居内には大木の根があり，完掘するまでには至らなかった。また，この平坦部の調査区外には，河原石を積み上げた塚状を呈すものが数基所在し，土師器片が採集されるところから，中世代の祭祀遺構の所在が考えられる。

3．遺　　構

遺構は，住居跡12，袋状竪穴82，土壙墓１，石蓋土壙墓１が検出された。これらの遺構は，花崗岩バイラン土中に掘られたもので，この地山が非常にもろいもので，袋状竪穴は崩壊しているものが多く，また，発掘にあたっても作業上危険と思われる部分については取り壊し，作業の安全を図った。

なお，遺構の番号は，東側より発掘順に順次付していった。

また，各遺構の記述にあたっては，出土した土器についてもあわせて記述し，その他の遺物には，別項で記述することとし，掲載図の番号のみ記載している。

(1)　住居跡

１号住居跡（第68図，図版42―１）　円形プランを呈する住居跡である。調査区の東端にあり，狭い稜線いっぱいにつくっている。床面はわりあい深く，遺存状態のよい住居跡である。北西側の壁の一部が崩壊しているが，長径7.32ｍ，短径6.73ｍを測り，やや長円形の平面プランとも思える。壁高は，50～20cmとなっており，主柱は８本が考えられ，図に示す１～８柱穴がそれであろうと思われ，床面のそのほぼ中央部には，浅い壙が掘られている。この壙内には，灰や木炭小片が混入しているが，壙底や壁には加熱による変化はみられない。

遺物は，住居内の壁ぎわの抜根跡の腐植土から土器片が出土している。土器片は大型壷の底部片で中期に属するものである。その他に遺物の出土はない。

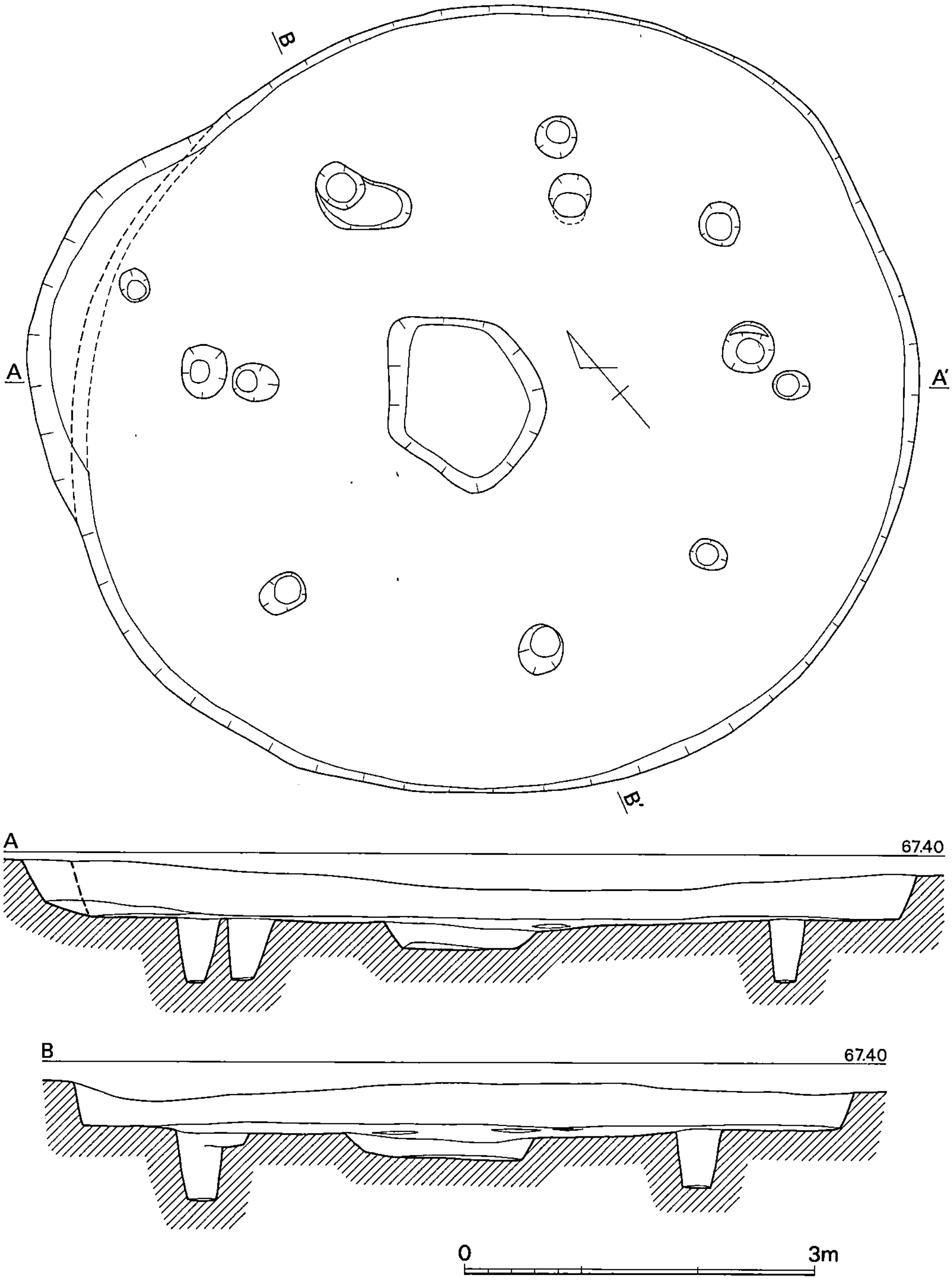
２号住居跡（第69図２，図版42―２）　１号住居跡の北に遺存し，やや広い平坦部に貯蔵群と共に遺存する。貯蔵穴や伐根により周壁が一部不明なところがあるが，径８ｍ強の円形を呈す平面形を示す。遺構の床面は非常に浅く，しかも柱穴もやや不規則的な位置にある。４本柱かと考えられる。柱穴は非常に浅く，深さ10cm前後のものが多い。

４・５号袋状竪穴より新しく，７号袋状竪穴より古い時期の住居跡である。

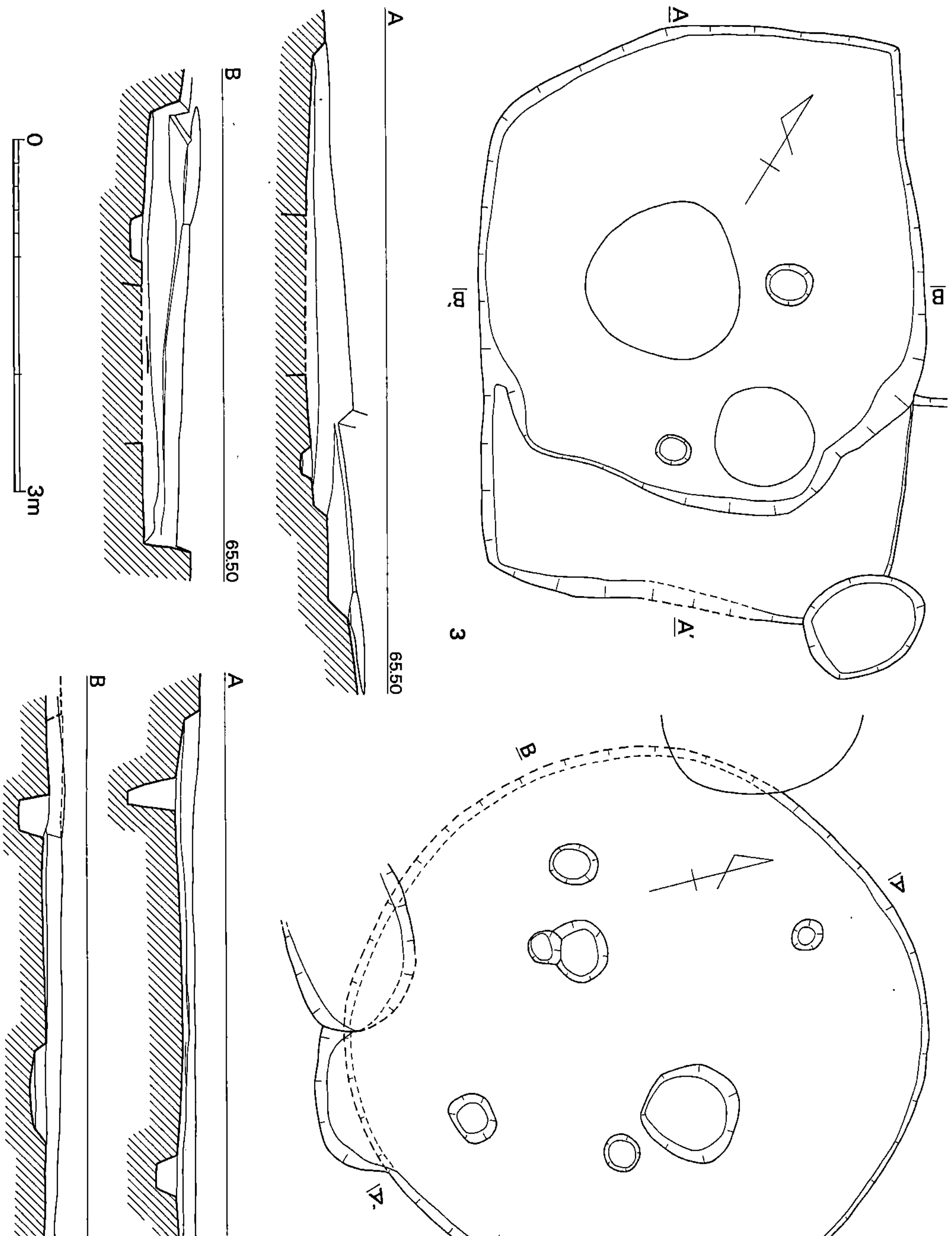
遺物は，石器が出土するのみである。石器は砥石（９）である。

重複する袋状竪穴との関係から，弥生時代の前期に属すものであろう。

３号住居跡（第69図３，図版43―１）　丘陵の鞍部に遺存する。そのためか不明瞭な長方形プランを呈す。長辺4.88ｍ，短辺3.82ｍを測る。南東側にベッド状の段を有す。ピットは２ヶ所で検出されたが，いずれも10cm前後の深さで，柱穴としては浅すぎる感がある。無柱穴なのか，長軸線上の１ヶ所のみ有効で，２本柱とした場合，対応する１本は柱穴がなかったものとも思える。南東隅の壙は住居跡より新しく。さらに住居跡の床面の清掃時に検出された13・14号袋状竪穴は，その上部に貼床などのないことから，当住居跡より新しいものと思われる。



第 68 図　1 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

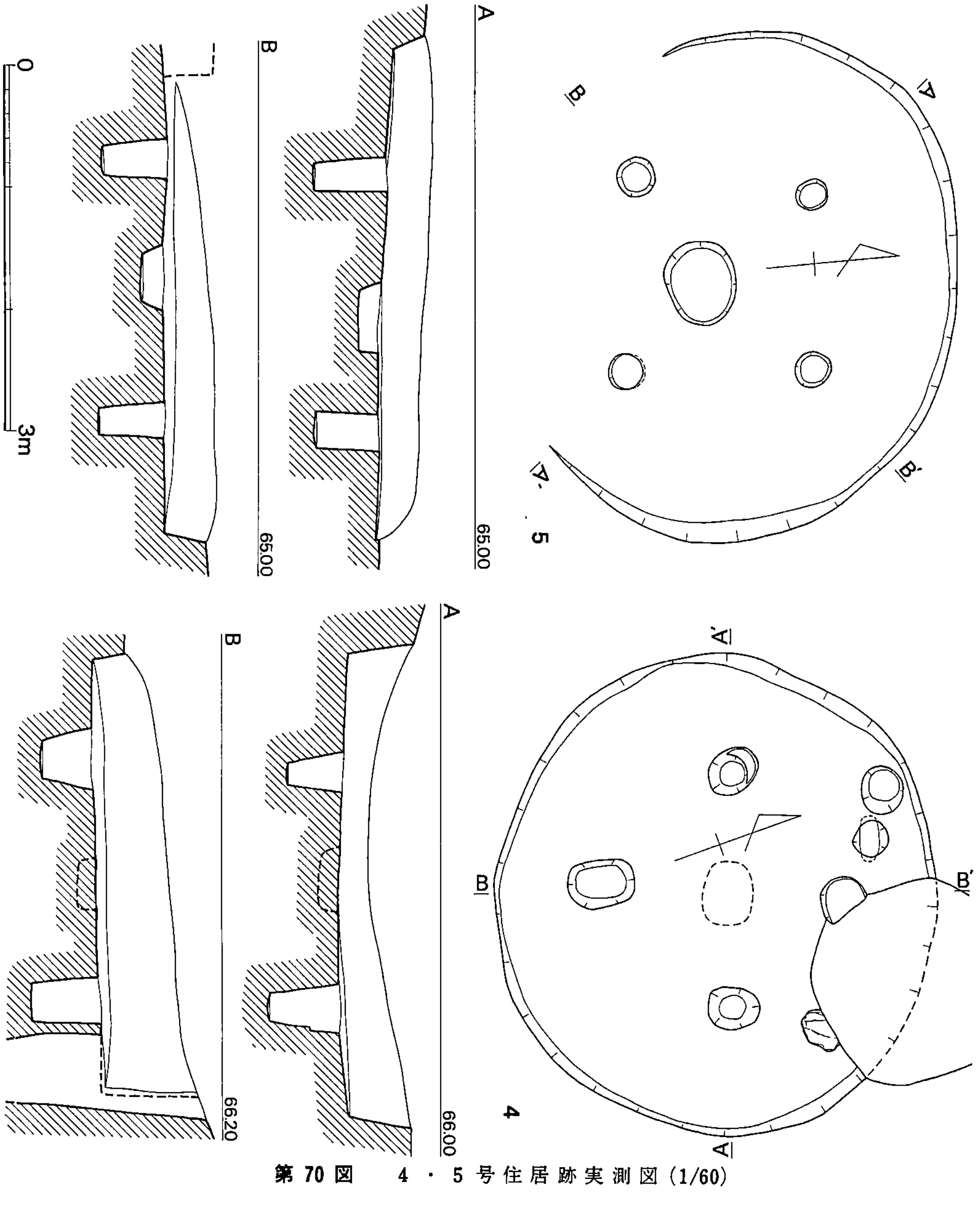


第 69 図　　2 ・ 3 号住居跡実測図 (1/60)

両竪穴が弥生時代の前期の土器を出土しており，当住居跡も前期に属すものと思われる。

遺物は，土器の細片が少量出土しているが，時期の判別はしがたい。その他に石錘状石器(20)が出土している。

4号住居跡（第71図4，図版43―2）　2号住居跡のある平坦部の南西側斜面に遺存する。9・20号袋状竪穴と重複する。9号袋状竪穴が当住居跡より新しく，住居跡の北東側壁は崩壊



第70図　4・5号住居跡実測図（1/60）

しているが，最大径４ｍを測り，ほぼ円形の平面形を呈す。壁高は丘頂側（北側）で約75cmと深いものである。主柱穴は４本柱である。床面の中央には焼土が確認されたが，壙らしきものは確認できなかった。小型の住居跡であるが整った形状を呈す住居跡である。

２基の袋状竪穴との前後関係は，４ヶ所の柱穴のうち，４の柱穴が９号袋状竪穴により壊われているが，20号袋状竪穴によっては壊わされていなく，さらに２の柱穴も壊わされていないためである。よって９号より古く，20号より新しい時期のものである。

遺物は，土器がかなり出土している（１～７）。１は壺の口頸部である。口唇部下端に細い刻目を施し，その下位には横位の刷毛目を施し，これをナデ上げて一部消している。胎土は粗砂粒を含む。２は壺の底部である。古い様相を残す。浅い上げ底をなす。胎土は粗砂粒が多い。３は甕である。如意形状の口縁部をなし，胴上部には１条の箆描き沈線をめぐらす。沈線より下位は細い刷毛目を施す。口縁部や胴部内面はナデ整形である。４は周壁に接して倒壊していた。如意形口縁をなし，頭部に較べ肥厚する。口唇部には細い箆による刻目を施す。器面は内外面ともナデによる整形である。胎土は粗砂粒が多い。５は壺の口頸部片である。口縁部はやや薄くなり，浅く外反する。口縁下に浅い箆による沈線を１条めぐらす。胎土は粗砂粒が多い。６は甕の口縁部片である。口唇部は箆による細長い刻目を施す。胎土は砂粒を含む。７は壺の肩部片である。２条の沈線下位には羽状文を施す。いずれも箆描きである。胎土は粗砂粒が多い。この他に石庖丁（５）が出土している。

これらの土器は，弥生時代の前期末頃のものである。

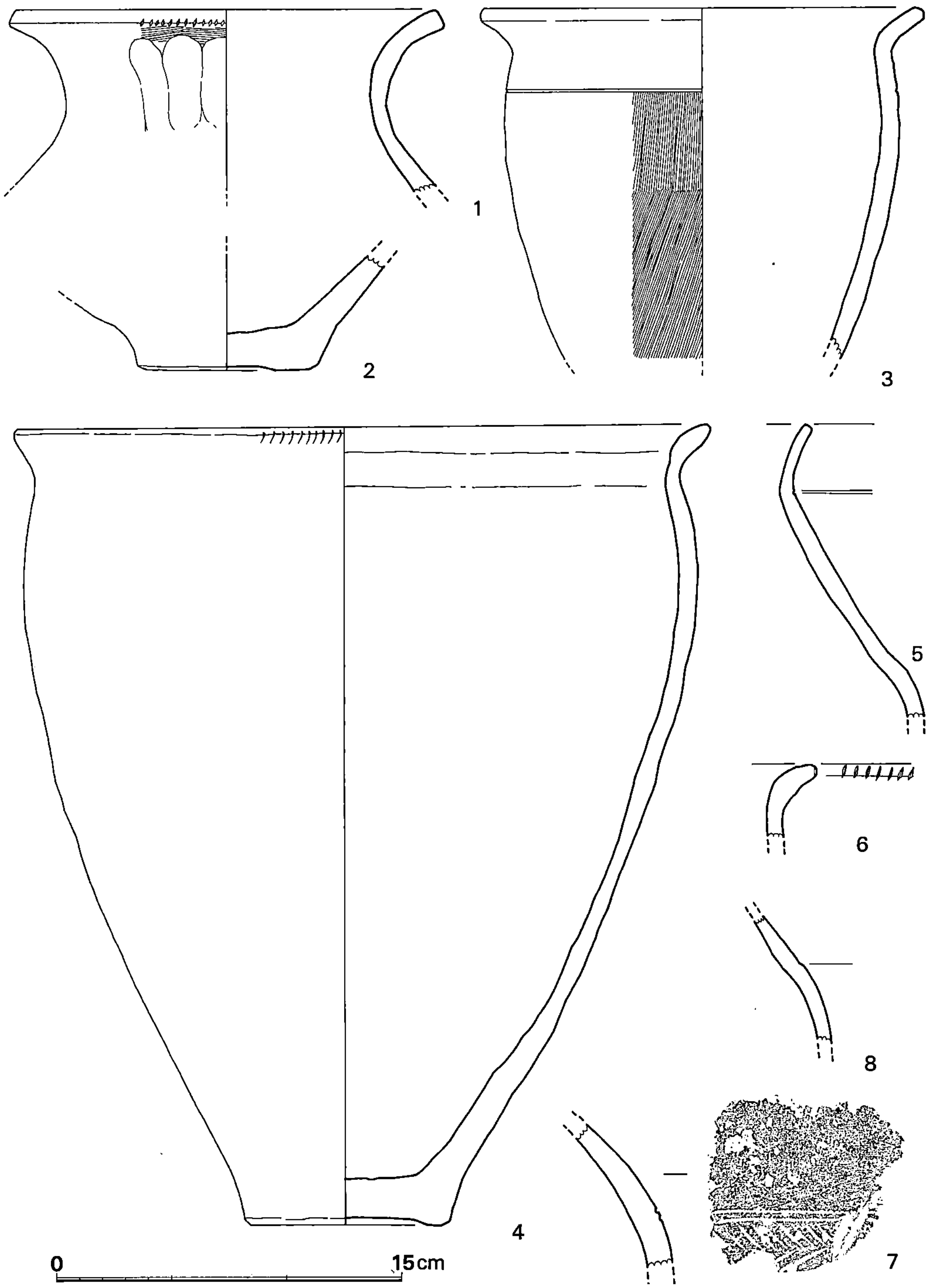
５号住居跡（第70図５，図版44－１）　４号住居跡と同形の住居跡である。丘陵稜線の南側斜面に遺存する。南側の低位部は周壁は遺存しないが長径約4.2ｍ，短径約3.7ｍの長円形プランを呈す。柱は４本で整然と位置し，床面中央に浅い壙がある。埋土中に炭の極小片を若干含む。

遺物の出土はなく，時期不明である。住居跡の規模等から，４号住居跡と同時期ではなかろうか。

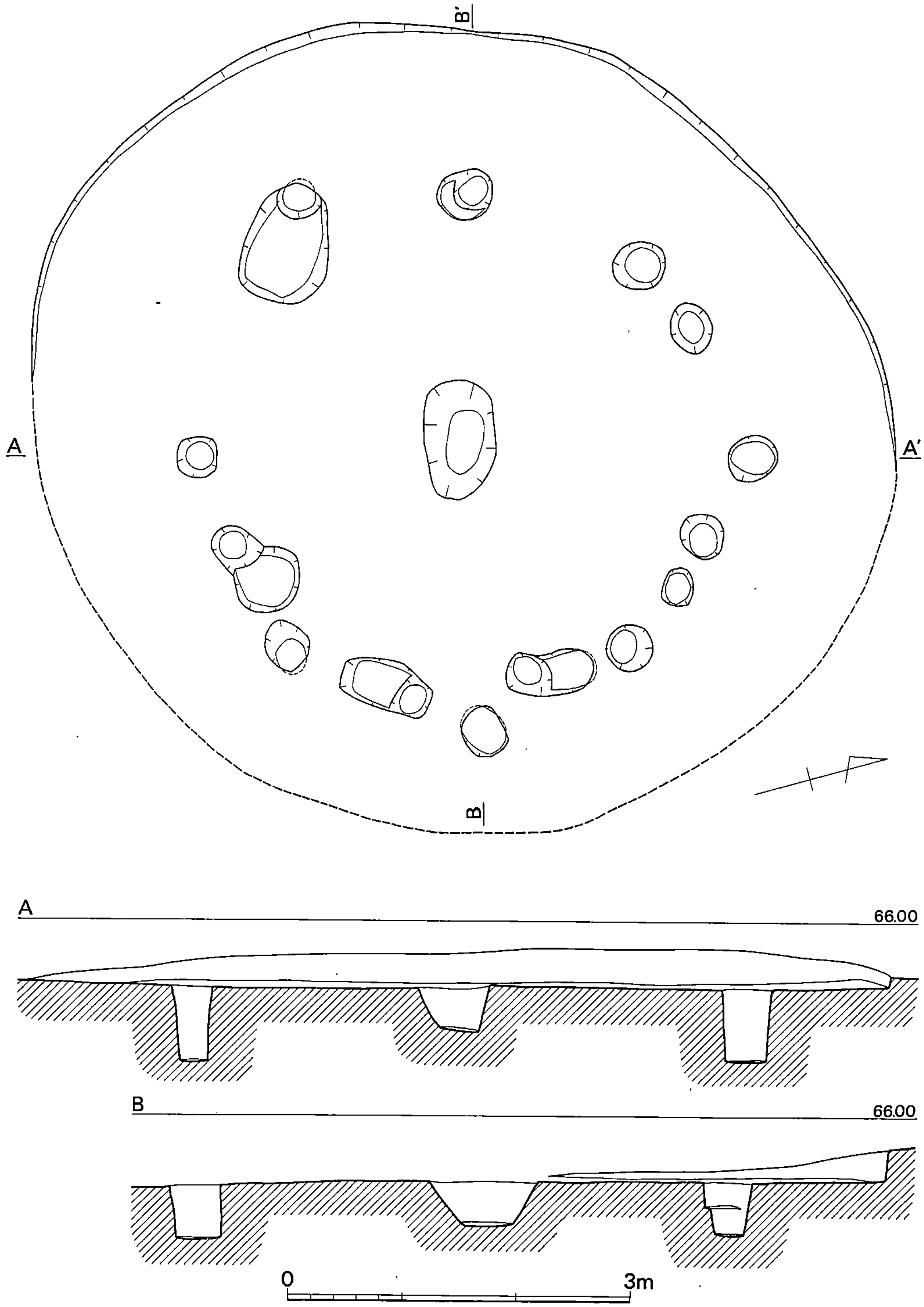
６号住居跡（第72図，図版44－２）　丘陵の稜線に所在する。周壁のうち東半部を削平されているが，長径約7.5ｍ，短径約6.9ｍのやや長円気味の平面形を呈するものと思われる。床面のほぼ中央に長円気味のわりあい深い壙を配す。これには灰や炭が含まれていた。柱穴は周壁より約1.25ｍの円形状に並ぶが，東半部に多く配している。　恐らく８本の主柱を配したものと考えられる。

遺物は極めて少なく，図示できるものは８のみである。壺の胴部片である。頸部との境に低い段をつけている。外面はヘラミガキを，内面はナデによる整形である。胎土は粗砂粒を含む。

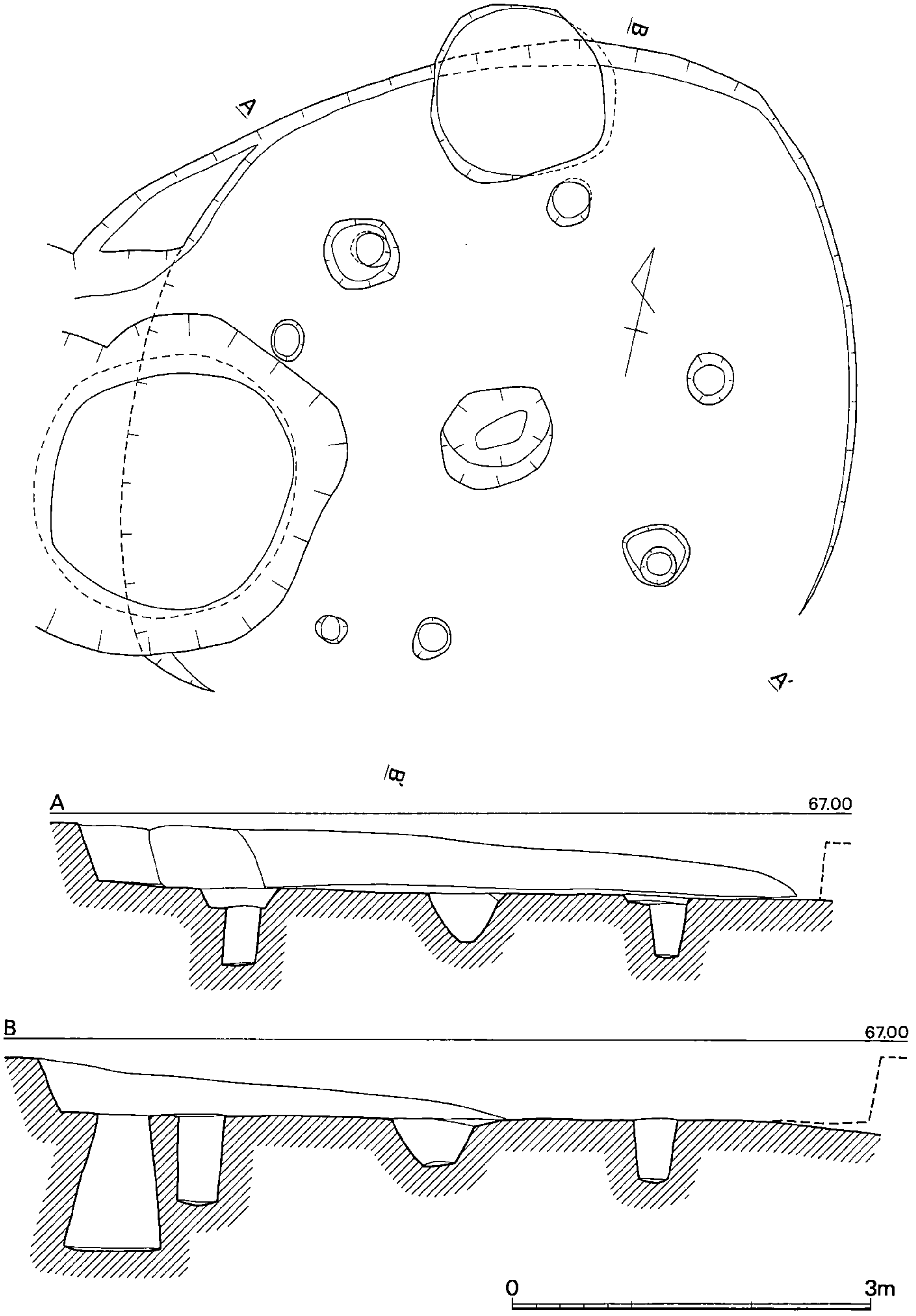
この土器から，弥生時代の前期に属す住居跡である。



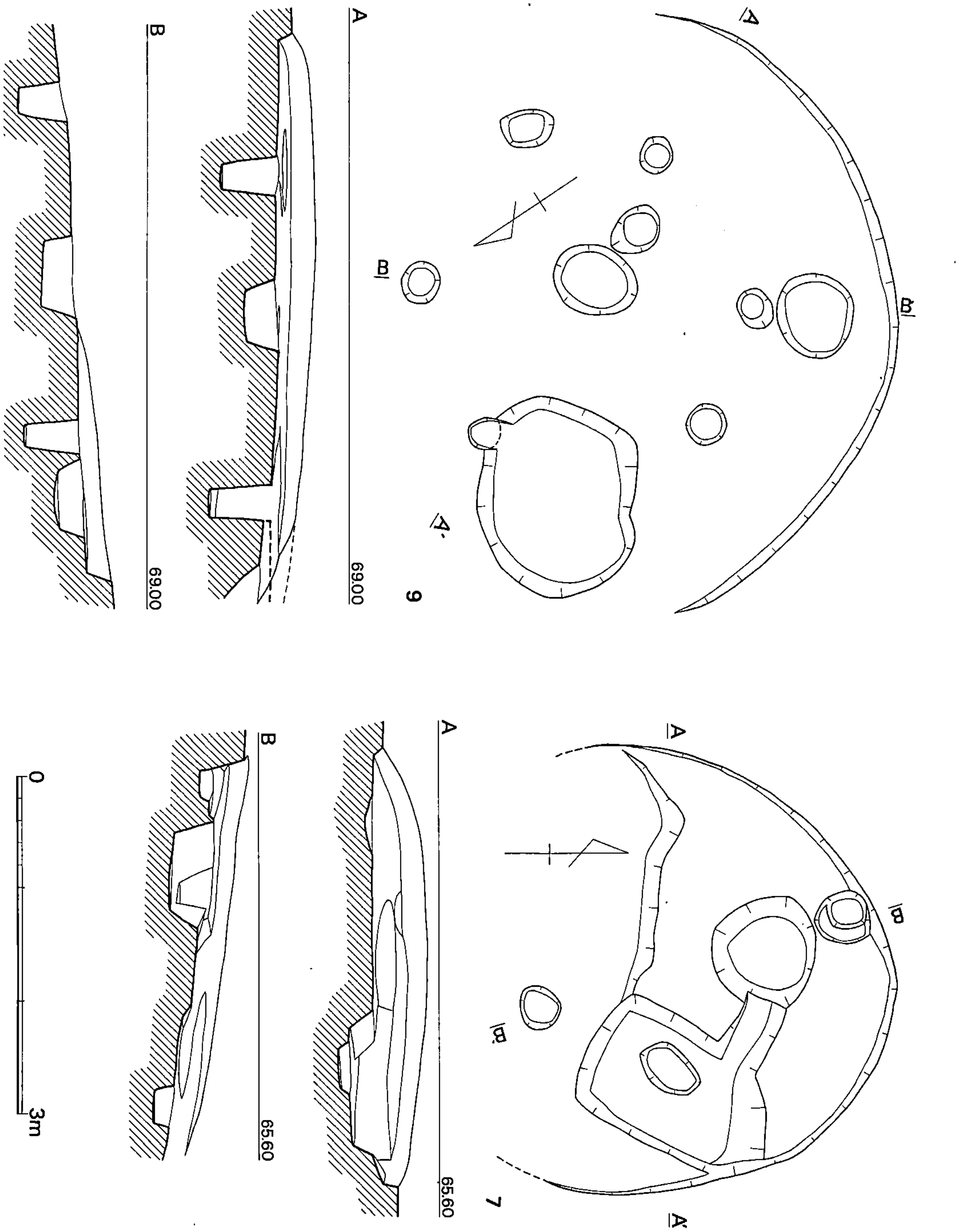
第 71 図　4・6号住居跡出土土器実測図（1/3）



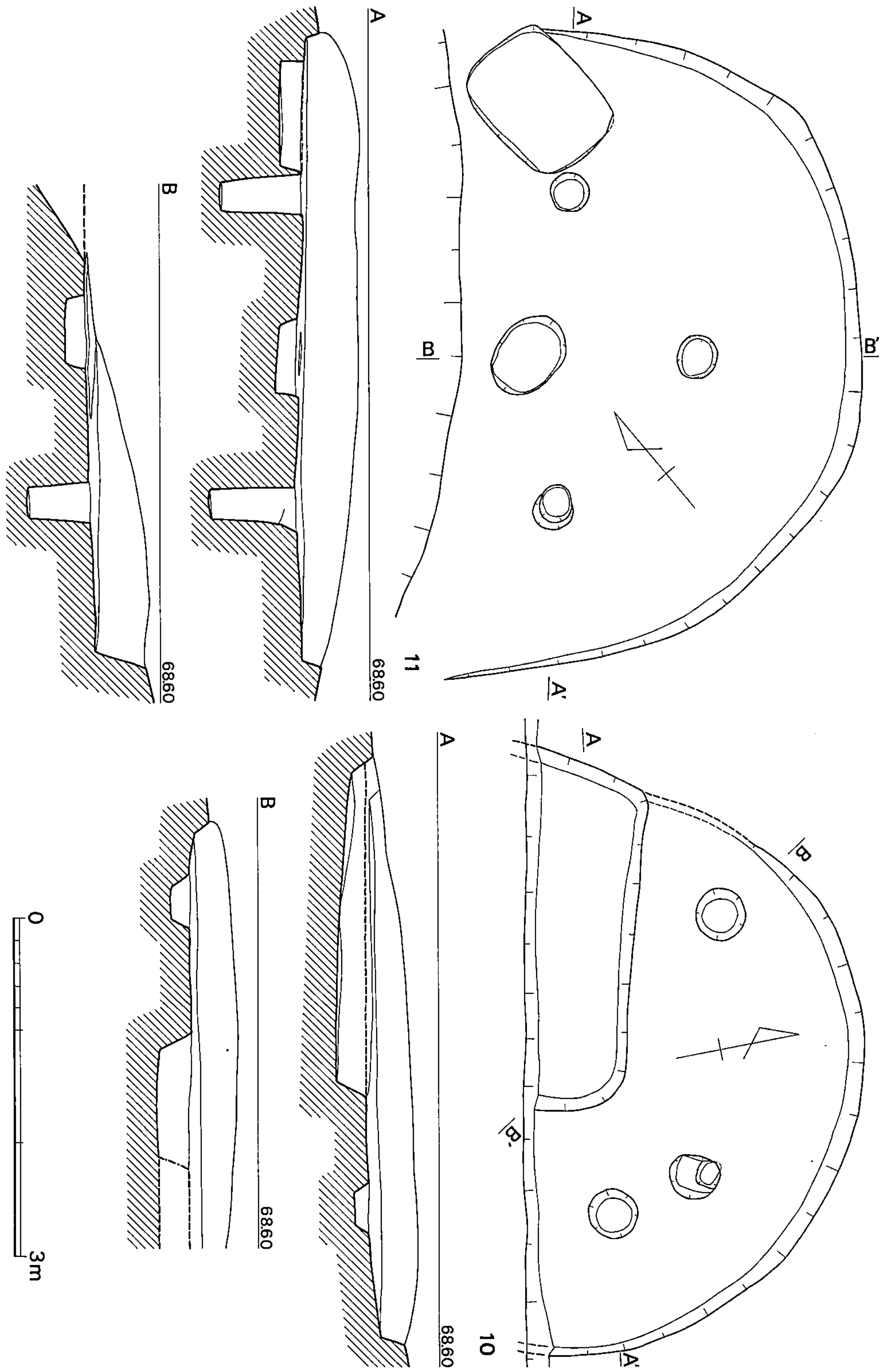
第 72 図　6 号住居跡実測図 (1/60)



第73図　8号住居跡実測図(1/60)



第 74 図　7・9 号住居跡実測図（1/60）



第 75 図　　10・11 号住居跡実測図 (1/60)

7号住居跡（第74図，図版45—１）　6号住居跡の南側，すなわち，南面する斜面に遺存する。やや不整な円形プランを呈するもので，床面は斜面傾斜とかわらず南に低くなっている。南半部の周壁および床面は崩壊している。床面には柱穴と考えられるものは２ヶ所で確認されたのみで，これ以上の柱穴は確認できず，円形および方形の浅い壙が検出された。

遺物の出土はない。時期不明の遺構である。

8号住居跡（第73図，図版45—２）　丘陵稜線よりやや南側斜面に寄った位置にあり，南側の周壁の一部が崩壊し，34・36号袋状竪穴によっても一部崩壊している。当住居跡も長円気味の平面形を呈するものと考えられ，長径約７ｍ，短径６ｍを測る。主柱は６本と考えられ，うち１本の柱穴は32号袋状竪穴により位置不明である。周壁は，深い部分で47cmを測る。34・32・33号貯蔵穴より新しい。

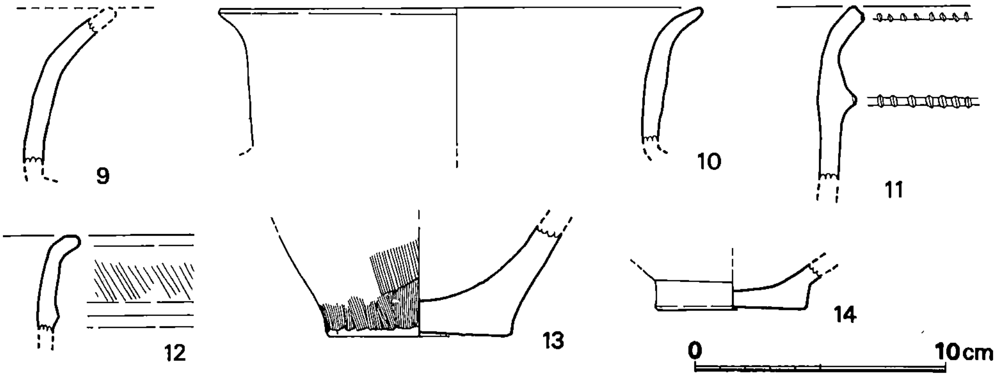
遺物は，土器と石器が出土している。土器は細片ばかりで，量的にも少ない。石器は砥石（23）や石皿（26・27）が出土している。

重複する袋状竪穴との関係から，弥生時代の前期に属す住居跡である。

9号住居跡（第74図，図版46—１）　丘陵稜線より北側の斜面に位置する。北東側の周壁が崩壊し，平面規模は定かでないが，恐らく円形プランを呈するものと考えられる。床面中央に長円形の浅い壙を配し，６本の主柱穴を配す。柱穴はいずれも45cm前後の深さである。37号袋状竪穴が柱穴の一部を削って掘られており，同袋状竪穴が住居跡より新しいものである。

遺物は，少量の土器細片が出土している。９は，壺の口縁部片でラッパ状に開く形状のものであろう。内外面ともナデ整形を施す。胎土は粗砂粒を若干含む。弥生時代の中期に属す土器である。この他に磨製石鏃（１）が出土している。

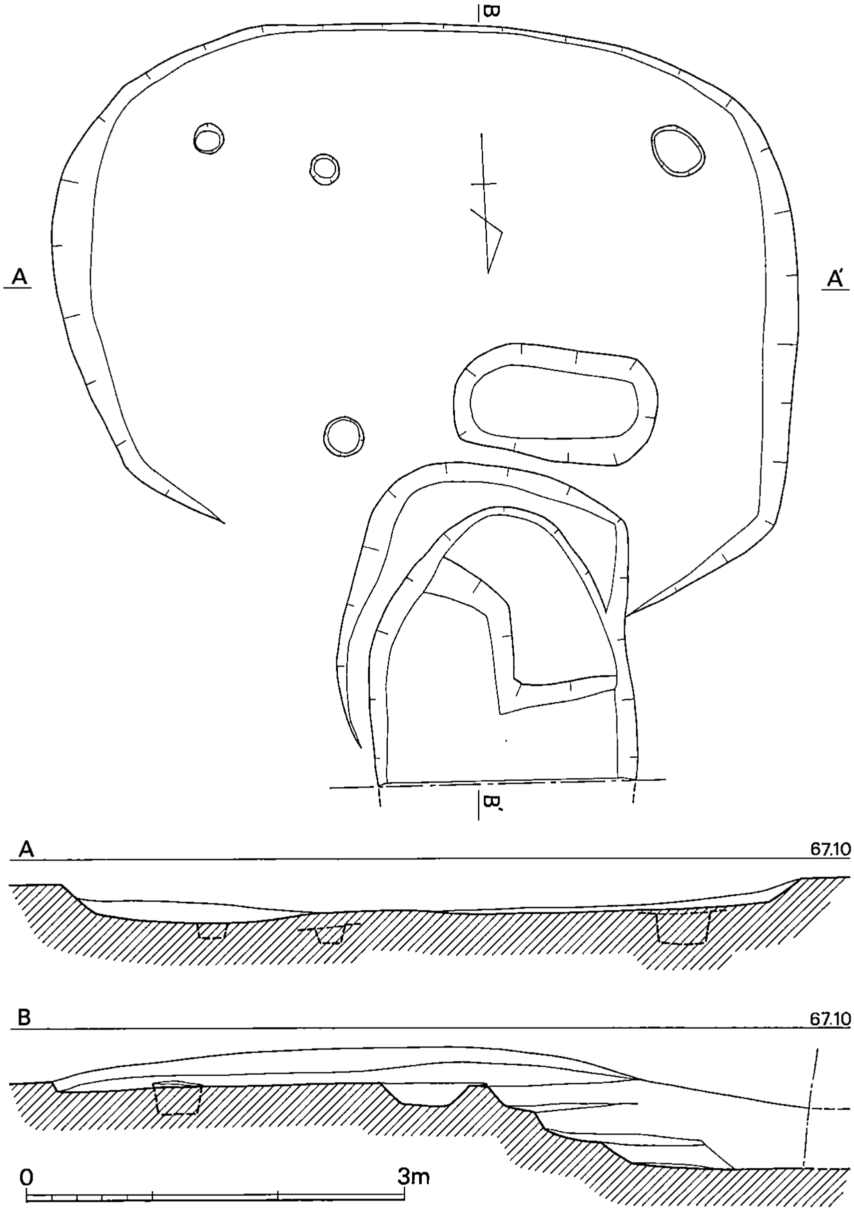
10号住居跡（第75図，図版46—２）　丘陵稜線の南側斜面に位置する。住居跡の約半分が調査区外に広がるため，その規模は不明である。床面中央から西側に浅い落ち込みがあるが，これは最初，中央部の壙と思われた部分を堀っているうちに，やや軟質土壌を取り除くこととなり，図に示すような落ち込みとなった。土層断面を見ると住居跡床面と同じレベルで土色お



第 76 図　9～12号住居跡出土土器実測図（1/3）

よび土質の変化が認められ，床面レベルで整地している。このため，住居跡はこの落ち込みより新しいものである。また，住居跡の柱穴は完全に把握できないものであるが，その間隔から4本柱とも考えられる。

遺物は極めて少ない。土器は10がある。壺の口縁部である。胎土は砂粒が多い。二次加熱を受ける。この他に，土製紡錘車（3）と砥石（22）が出土している．土器は，弥生時代の中期前半に属すものであろう。



第77図　12号住居跡実測図（1/60）

11号住居跡（第75図11，図版47―１）　10号住居跡とは丘陵稜線の反対側にあり，北側の斜面にかかった位置にある。北西側の周壁が遺存しない。中央部に長円形の壙を配す。主柱は４本と考えられ，うち１本の柱穴は抜根により崩壊し，その位置は定かでない。東西径5.7ｍを測る。恐らく円形プランを呈すものであろうが，４本柱の４・５号住居跡に比べ，やや規模が大きい。53号袋状竪穴より古いものである。

遺物は極めて少ない。土器（11）は甕の口縁部片である。如意形口縁をなし，口縁下に突帯をめぐらす。口縁部と突帯に刻目を施す。胎土は粗砂粒を含む。弥生時代の前期に属す土器である。

12号住居跡（第77図，図版47―２）　丘陵鞍部の非常に稜線の狭いところに位置し，北・南側の床面に中央より低くなっている。柱穴と考えられるピットはいくつか確認されたが，いずれも浅いものである。４本柱とも考えられるが，北東側の柱穴が見当らず，住居跡としてよいものか不確定な要素がある。

床面の北側には長方形の土壙らしきものがあり，その北には長方形の有段の壙底を有す落ち込みがある。

遺物は，土器が若干出土している。いずれも弥生時代の前期に属すものであろう。12は短く外反する甕の口縁部である。口縁部下に斜位の粗い刷毛目を施し，その後に断面三角形の突帯を付す。胎土は粗砂粒と雲母を含む。13は甕の底部である。胴部下端に細い刷毛目を施す。胎土は粗砂粒が多い。14は壺の底部で，円盤貼付状をなす。外面は横ヘラミガキである。胎土は精製土で細砂粒を若干含む。

(1)　袋状竪穴（第78～94図，図版48～66）

袋状竪穴は，調査区の全域で発掘されたが，特に調査区西端に最も多く遺存し，密集している。82基を確認し，うち29基が西端のわずかの面積の中で重複し掘られていた。

袋状竪穴は，割りあいもろくなった花崗岩バイラン土の地山に掘られており，周壁の崩壊したものがほとんどであった。平面形は円形のものが多く占める。

袋状竪穴の埋土中には，灰，炭，焼土などが認められるが，他遺跡でみられるように，多量の混入は認められなかった。また，出土遺物もきわめて少ない。

なお，各袋状竪穴の計測値は，４表に示すとおりであり，数値は全て現存値である。

１号袋状竪穴（１）　円形プランを呈す。１号住居跡の西に隣接して遺存する。断面形は極めて内傾する袋状となる。上部の一部が崩壊す。床面の中央が深くなっている。

遺物の出土はない。時期不詳。

２号袋状竪穴（２）　円形プランを呈す。浅く遺存するもので，従来より他のものに比べ浅く掘られていたものであろう。

遺物の出土はなく，時期不詳。

3号袋状竪穴（3）　円形プランを呈す。わりあい深く遺るもので，周壁の上部が崩壊しているものの，断面はやや袋状をなす。

遺物の出土はなく，時期は不詳。

4号袋状竪穴（4）　円形プランを呈す。上辺の一部が崩壊しているが，断面は袋状をなす。2号住居跡内で確認されたが，同住居跡の柱穴との切り合いから，同住居跡より古い時期のものである。床面は，おおむね平坦である。

遺物の出土はないが，2号住居跡が弥生時代の前期に属すところから，少なくとも当竪穴も同時期と考えられる。

5号袋状竪穴（5）　円形プランを呈す。上辺の一部が崩壊するが，断面は袋状をなす。4号と同じく2号住居跡内にて確認されたが，同住居跡の柱穴との切り合いから，同住居跡より古い時期のものである。床面は，おおむね平坦であるが，北側の一部が深くなっている。

遺物は，土器が少量出土している。図示できるものは1点のみである。15は壺の頸部片である。口縁部は頸部に較べ肥厚するもので，その下位に段をつくっている。内外面とも横ヘラミガキである。胎土は砂粒が多い。弥生時代前期の土器である。

6号装状竪穴（6）　円形プランを呈す。2号住居跡の南に隣接して遺存する。それとの前後関係は不詳である。貯蔵穴としては，規模は小さく，断面も袋状をなさない。床面は，中央が若干深くなっている。

遺物は，土器は出土していないが，砥石（21）が出土している。時期は不詳である。

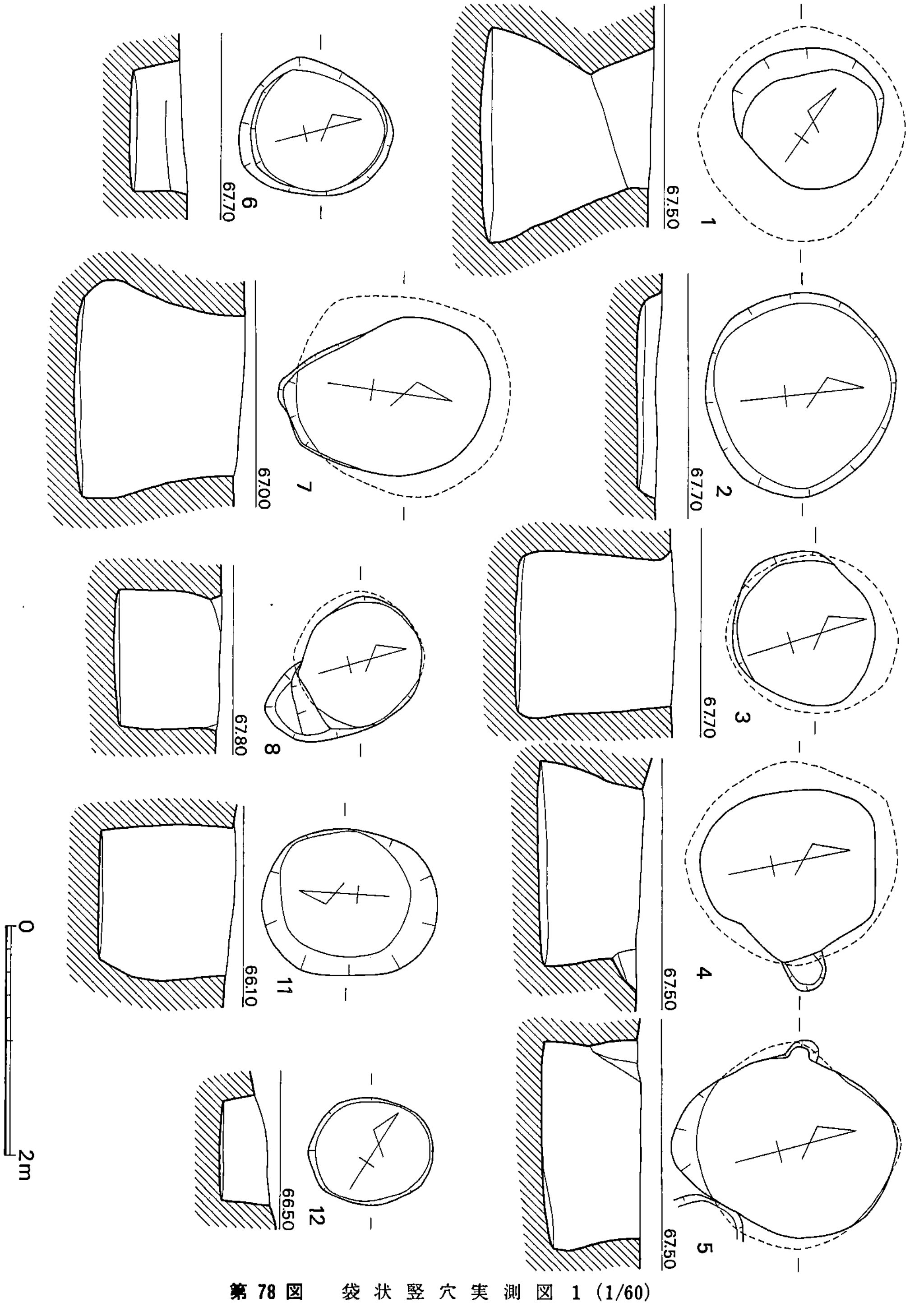
7号袋状竪穴（7）　長円形プランを呈す。上辺の一部が崩壊するが，断面は袋状をなし，下方の膨みが顕しい。2号住居跡と重複し，これより新しい時期のものである。床面は，中央が深くなっている。

遺物は，土器の細片が出土している。器種は甕・壺がある。弥生時代の前期に属すものである。

8号袋状竪穴（8）　円形プランを呈す。上辺の南には浅い落ち込み部をもつ。周壁は，ほぼ直立し，上部がやや内傾する断面である。小型の規模のものである。床面は，中央が深くなっている。

遺物は，土器の細片が少量出土している。16は甕の口縁部片である。如意形口縁をなす。胴上部に膨みのある器壁の厚い土器である。器の内外面ともナデによる整形であると思われる。弥生時代の前期に属すものであろう。

9号袋状竪穴　4号住居跡と重複するもので，斜面にある。非常に深く，平面規模も大きいもので未完掘のものである。長円形を呈するものと思われ，周壁は非常にもろい地山のため崩壊が顕しい。4号住居跡より新しい。

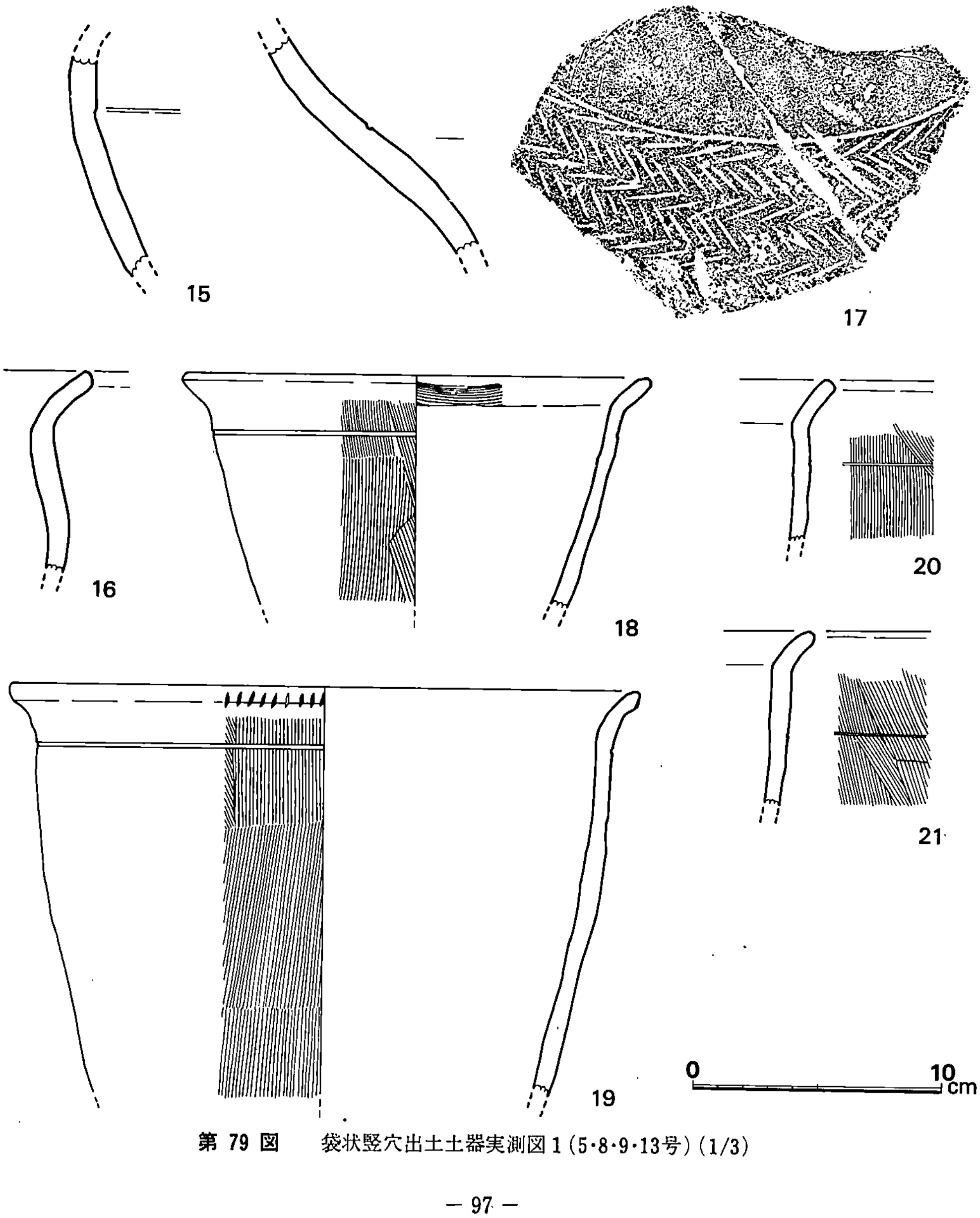


第 78 図　袋 状 竪 穴 実 測 図 1 (1/60)

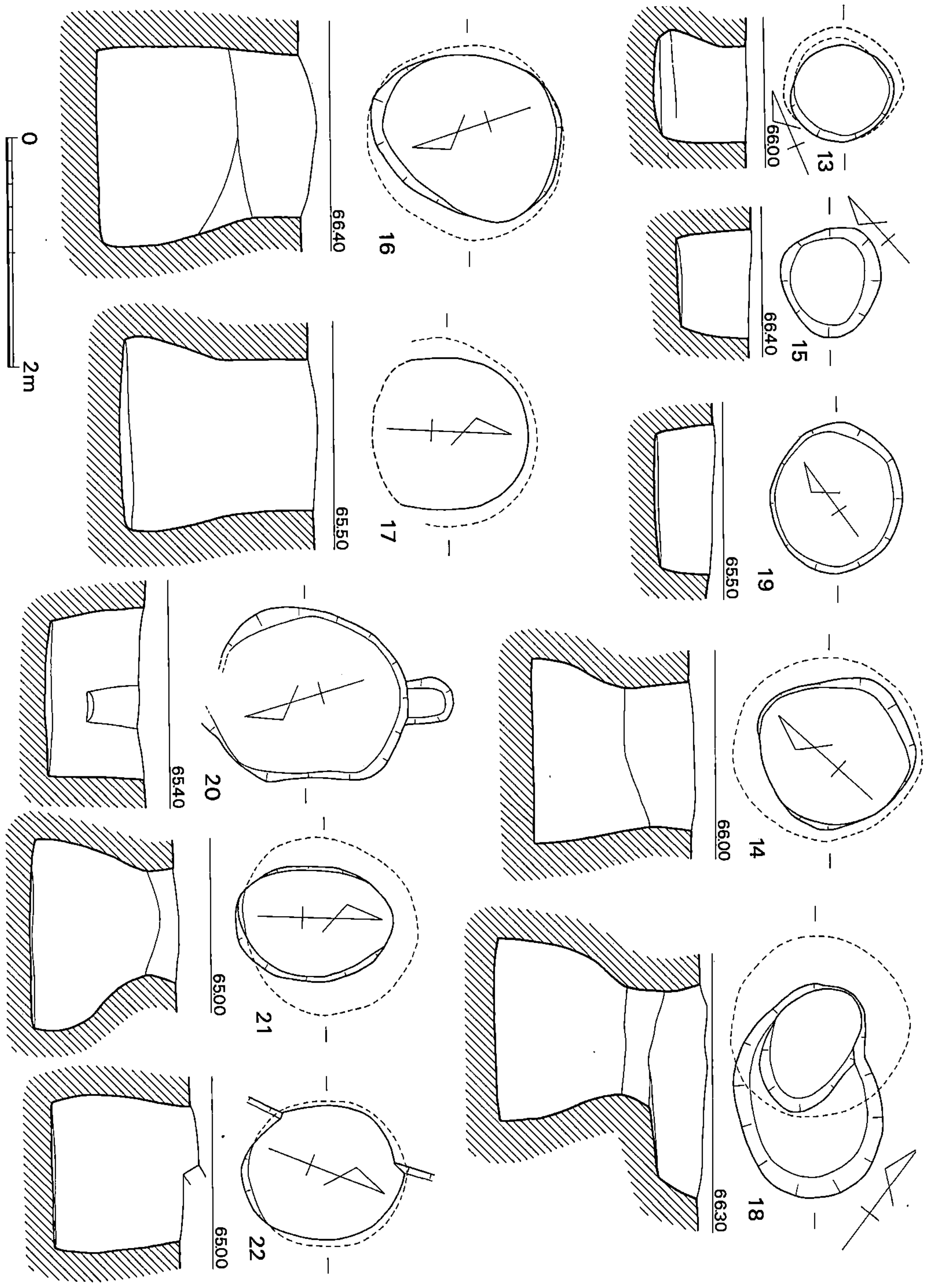
遺物は，土器の細片が少量出土したが中には羽状文を施す土器片がある（17)。壺の肩部付近の破片である。１条の沈線をめぐらし，その下位にやや粗雑な羽状文を施す。器面は内外面とも丁寧なナデ整形である。胎土は粗砂粒を含む。弥生時代の前期に属す竪穴である。

10号袋状竪穴　４号住居跡の西に遺存する。これも９号と同様，その規模と地山の弱さから未完掘に終った。円形プランを呈す。深さは180cm以上のものであろう。断面はゆるやかな袋状をなす。

遺物の出土はなく，時期不詳。



第 79 図　袋状竪穴出土土器実測図１（5・8・9・13号）（1/3）



第 80 図　袋 状 竪 穴 実 測 図 2 (1/60)

11号袋状竪穴（11）　円形プランを呈す。上部の崩壊が著しい。断面はところによりやや異なるも袋状をなす。小型の規模のものである。床面におおむね平坦である。

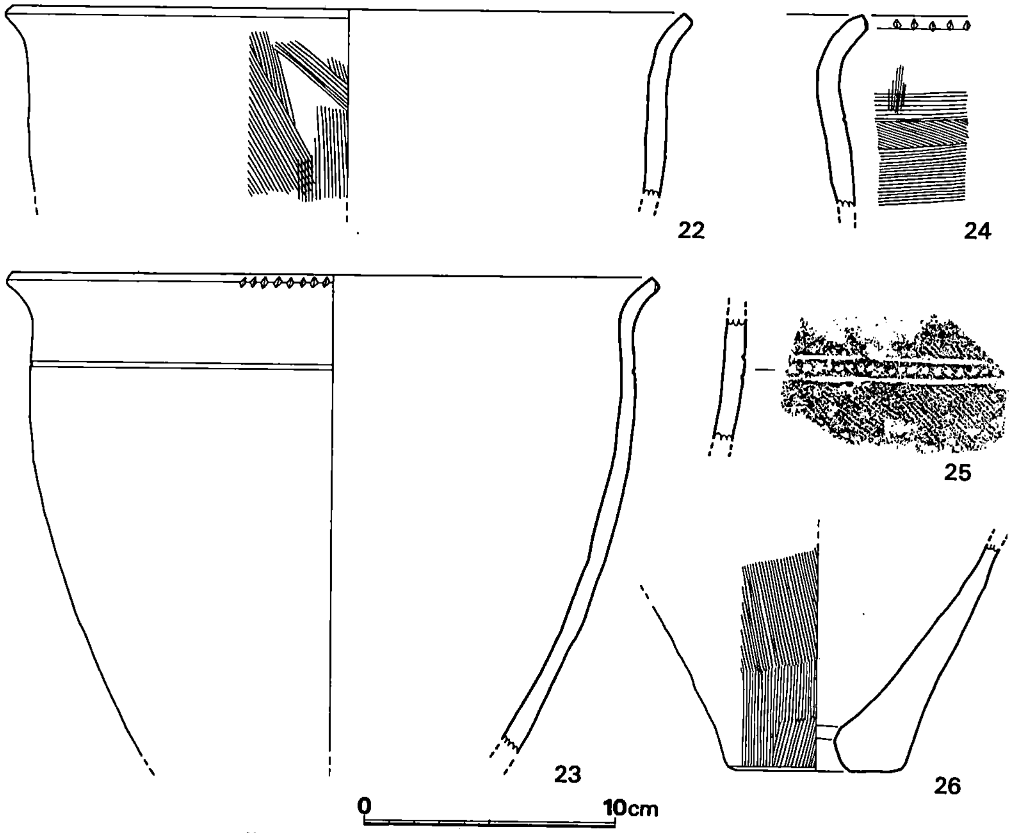
遺物は，土器の細片が少量出土しているが，時期の判別できるものはない。この他，扁平片刃石斧（２）が出土している。

12号袋状竪穴（12）　長円形プランを呈す小型の規模のものである。稜線斜面に遺存する。床面は中央が若干深くなっている。

遺物の出土はなく，時期不詳である。

13号袋状竪穴（13）　円形プランを呈す。規模は小型のものである。断面は袋状をなし，一部が直立する周壁である。床面の中央が深くなっている。３号住居跡より新しいものである。

遺物はかなり出土し，甕が多い（18～21）。18は小型の甕である。外反する口縁部の内面には横位の刷毛目を施し，口縁下外面には縦位の刷毛目を施し，１条の沈線をめぐらせる。胎土は粗砂粒を含む。外面の一部に煤が付着する。19は外反する口縁部で，口唇部に箆による細い刻目を施す。口縁部下の外面には縦位の刷毛目を施し，口縁下に１条の沈線をめぐらす。口縁部は横ナデ，胴部内面はナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。外面の一部に煤が付着する。



第 81 図　袋状竪穴出土土器実測図２（14号）(1/3)

20は外反する口縁をなす。口縁下の外面には刷毛目を施し，細い沈線をめぐらす。胎土は砂粒を含む。外面には煤付着。21も外反する口縁部である。口縁下外面には刷毛目を施し，細い1条の沈線をめぐらす。胎土は粗砂粒と雲母を含む。これらの甕口縁部は如意形をなすもので，口唇部に刻目を施し，口縁下に沈線をめぐらす特徴がある。弥生時代の前期後半に属す土器であろう。

14号袋状竪穴（14）　円形プランを呈す。上部が崩壊するが，断面は袋状をなす。床面は北側に傾斜し，平坦である。3号住居跡より新しい時期のものである。

遺物は，土器や石器が出土している。土器は甕・壺がある。22は如意形口縁の甕である。器面の剥落がみられるもので，口縁部の内面にも刷毛目を施しているようだ。胴部外面には，やや雑に刷毛目を施し，煤が付着する。胎土は粗砂粒を含む。23は如意形口縁の甕である。口唇部に篦による太い刻目をめぐらす。口縁下には篦描きの沈線をめぐらす。内外面ともナデによる整形である。24は如意形口縁をなす甕で，厚味のある土器である。口唇部には篦による刻目をめぐらす。胴部外面は横位の刷毛目を施し，細い沈線をめぐらすようだ。また，口縁部内部面にも刷毛目を施すが，器面の剥落で明瞭でない。胎土は粗砂粒が多い。25は甕の胴上部片である。刷毛目を施し，2条の沈線間をナデ消して刺突文を施している。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。この種の土器は遠賀下流域の北部九州でみられる。26は甕の底部である。底部には，焼成後に両面より孔を穿っている。甑となすものであろう。外面は刷毛目，内面はナデによる整形である。胎土は粗砂粒が多い。このほか，肩部に段をつくり，細い羽状文を施す土器片がある。これらの土器は弥生時代の前期に属すものである。石器は抉入片刃石斧（13）が出土している。

15号袋状竪穴（15）　3号住居跡の西側に遺存する。円形プランを呈す小型の貯蔵穴である。断面は袋状をなさない。床面は，やや傾斜があり平坦である。

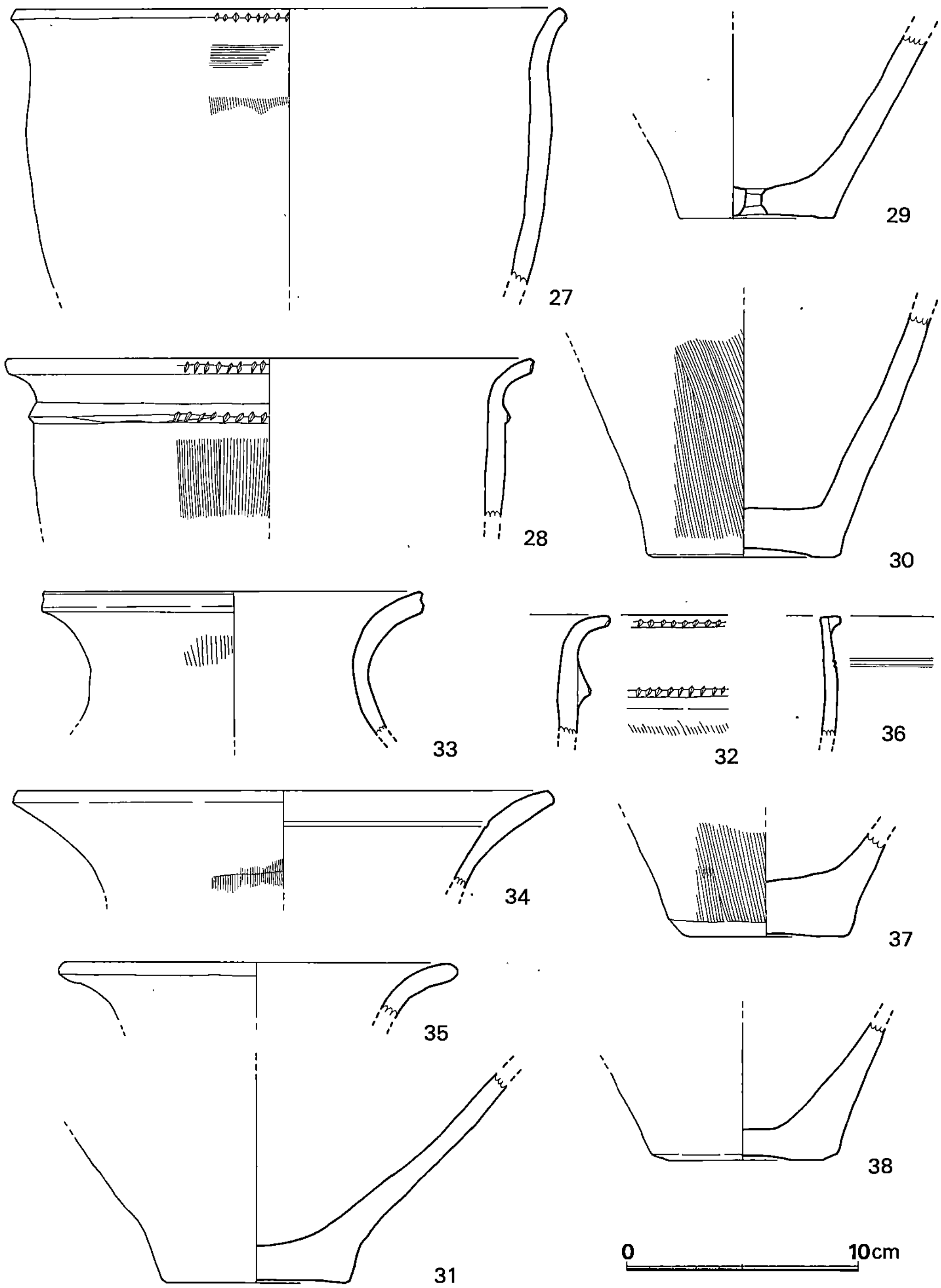
遺物は，土器の細片ばかりで，時期の判るものはない。

16号袋状竪穴（16）　円形プランを呈す。上部と壁の一部が崩壊するが，断面は袋状をなす。床面は平坦である。

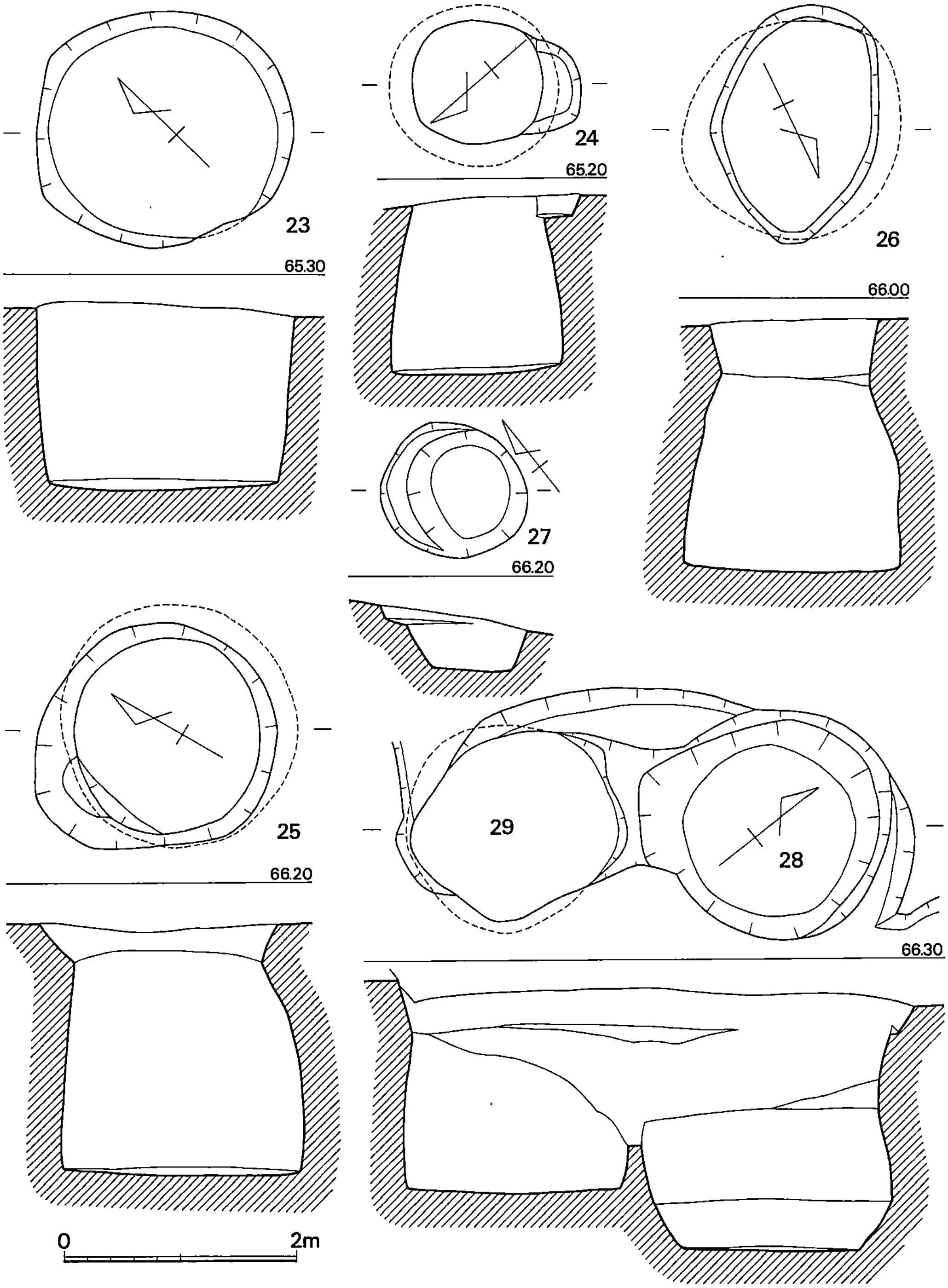
遺物の出土はなく，時期不詳である。

17号袋状竪穴（17）　大木の抜根により一部が崩壊し，全容を把握できないが，円形プランを呈すものと思われる。断面は袋状を呈す。床面は中央が深くなっている。

遺物は少量の土器がある。27は如意形口縁の甕である。口唇部には細い刻目をめぐらす。口縁部は横ナデを施すが，外面には刷毛目が残る。胴部外面は細い刷毛目を施すものと思われるが，使用による加熱により器面は剥落する。口縁部外面には煤が付着する。胎土は粗砂粒が多い。28は口唇部と口縁部下の突帯に篦による刻目を施す。突帯より下面には刷毛目を施す。胎土は粗砂粒が多い。29は焼成前に穿孔された甕の底部である。胎土は粗砂粒が多い。30は甕の



第 82 図　　袋状竪穴出土土器実測図 3 (17・20～24号)(1/3)



第83図　袋状竪穴実測図3 (1/60)

底部である。外面には刷毛目を施す。内面には擦過痕が認められる。胎土は粗砂粒を含む。これらの土器は，弥生時代の前期に属し，後半のものであろう。この他に砥石（7）が出土している。

18号袋状竪穴（18）　　二段掘りの貯蔵穴で，長円形の壙の北側にさらに深い貯蔵穴を掘る。全体に遺存の非常に良好なものである。上部構造もよく遺り，断面は袋状をなしている。当遺跡で最も遺りの良いものである。

遺物は，土器の細片が少量出土している。器種は甕，壺がある。弥生時代の前期に属するものである。

19号袋状竪穴（19）　　円形プランを呈す。小型の規模のものである。断面は袋状をなさず，床面の中央はやや深くなっている。

遺物の出土はなく，時期不詳である。

20号袋状竪穴（20）　　4号住居跡の発掘時に確認されたものである。長円形プランを呈するもので，断面は袋状をなさず，床面は中央が深くなっている。4号住居跡や9号貯蔵穴より古い時期のものである。

遺物は，土器の細片が少量出土し，このほかに壺の底部がある（31）。平底のもので，内外面ともに丁寧なナデ整形である。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。弥生時代の前期の壺である。

21号袋状竪穴（21）　　円形プランを呈すもので，上部構造の遺存のよいものである。断面は袋状をなし，18号と同様，貯蔵穴の典形というべきものであろう。床面の中央はやや深くなっている。

遺物は，土器の細片が少量出土した。図示できるものは1片のみである。31は口唇部と突帯に刻目をめぐらしている。突帯下位には刷毛目を施す。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。弥生時代前期の土器である。

22号袋状竪穴（22）　　円形プランを呈する。上部が若干崩壊しているが，断面はゆるやかな袋状をなす。

遺物は，土器の細片が出土している。甕，壺の器種がある。33・34は壺の口縁部である。33の口唇部は肥厚し，大きく外反する口縁部である。外面は刷毛目をナデ消すが一部に残る。内側は，全面を横位の細いヘラミガキである。胎土は粗砂粒や雲母を含む。34は大きく開く口縁部で，やや肥厚する。内面に1条の沈線をめぐらす。内外面とも横ヘラミガキで，外面下位は細い刷毛目を施す。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。

23号袋状竪穴（23）　　大型の貯蔵穴である。円形プランを呈す。周壁は大半が崩壊しているものと思われ，断面は袋状をなさない。床面は平坦であるが，中央がやや深くなっている。

遺物は，土器の細片が多いが，図示できるものは数点である。35は壺の口縁部片である。器

壁が厚く，大きく外反する。胎土は砂粒が多い。36は短い平坦な口縁部をなす甕である。口縁下に２条の沈線をめぐらす。内面は横ヘラミガキを施す。外面は不明。胎土は砂粒が多い。37は甕の底部である。平底で厚味のあるもので，外面は刷毛目を施す。胎土は粗砂粒が多い。これらの土器は，弥生時代の中期初頭に属すものであろう。

24号袋状竪穴（24）　円形プランを呈す。上部には浅い掘り込みが付設されている。断面は袋状をなす。割り合い遺存の良いものである。床面は中央がやや深くなっている。

遺物は，土器の細片が少量出土している。38は甕の底部である。胎土は粗砂粒が多い。他の土器片から，弥生時代の前期に属すものであろう。この他に太型蛤片石斧（15・16）が出土している。

25号袋状竪穴（25）　大型の貯蔵穴である。円形プランを呈し，上部の遺りも割り合いよい。断面は袋状を呈す。床面は平坦である。

遺物は，土器がかなりあるが細片が多い。39は壺の肩部片で，羽状文を施す。外面はヘラミガキを，内面は丁寧なナデ整形である。40は39と同一個体片である。いずれも胎土に粗砂粒を含む。41は如意形口縁の甕である。口縁部内面に粗い刷毛目を施す。外面は胴部に粗雑な刷毛目を施して，１条の沈線をめぐらす。胎土は粗砂粒や雲母を含む。42はやや大きな甕の底部である。内外面とも板状工具による擦過痕がみられる。胎土は砂粒が多い。これらは，弥生時代の前期に属すものである。この他に，石庖丁（４）と石材剥片（12）が出土している。

26号袋状竪穴（26）　円形プランを呈す。上部は一部崩壊しているが，断面は袋状をなす。床面は中央がやや深くなっている。

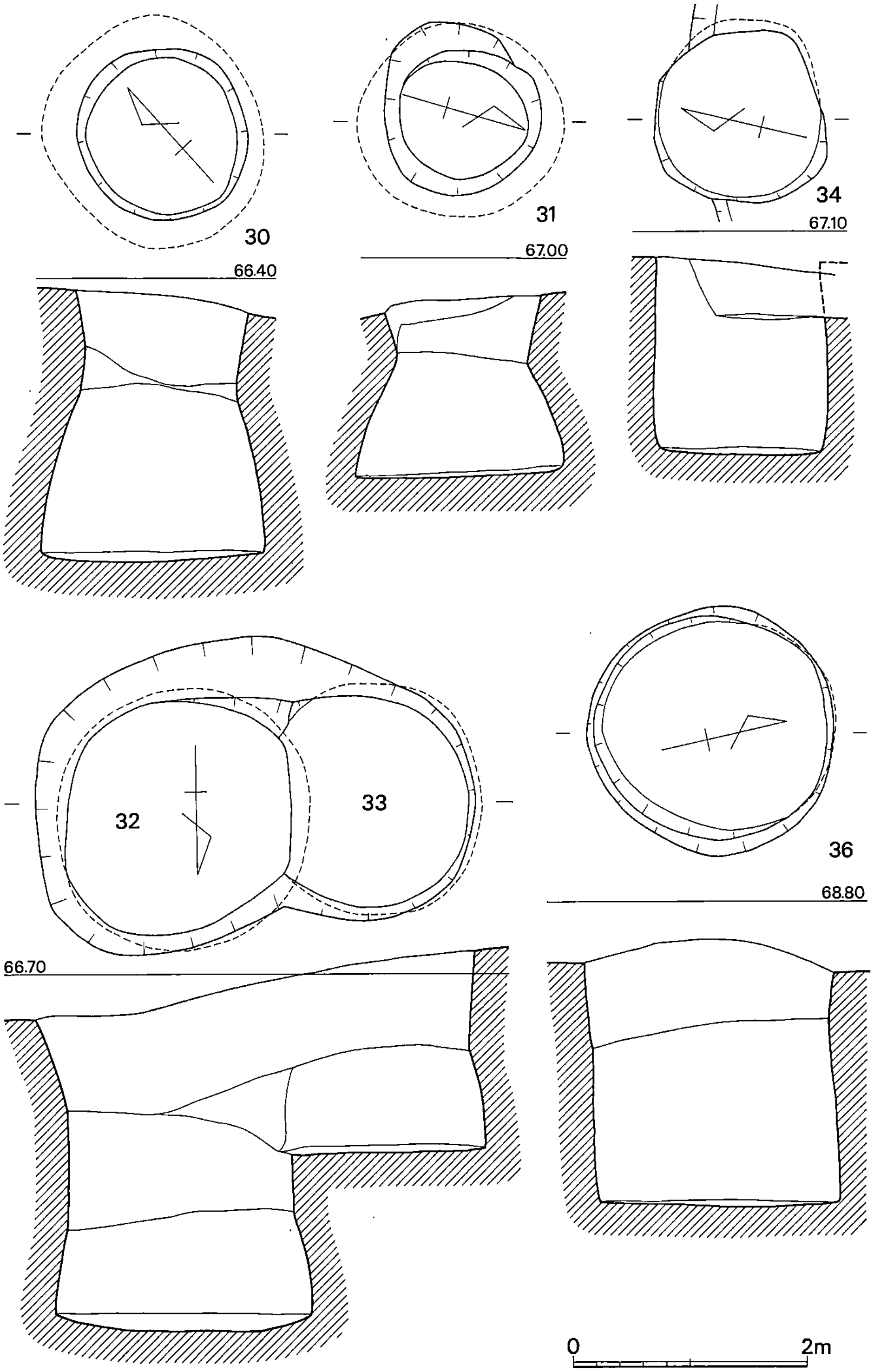
遺物は極めて少ない。43は口唇部と突帯に細い刻目をめぐらす甕である。胴部には刷毛目を施すが，口縁部下の突帯間はナデ消すも，一部が残る。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。弥生時の前期に属すものである。

27号袋状竪穴（27）　円形プランを呈す。１段を有す小型のものである。貯蔵穴といえるものか判断しがたい。　掘削中途の可能性もある。

遺物の出土はなく，時期不詳である。

28号袋状竪穴（28）　当初，29号をも含め住居跡と考えて発掘を始めたものである。稜線よりやや下位の南斜面にある。広く浅い落ち込みの中に35号を含め３基の貯蔵が確認され，そのうちの１基である。円形プランを呈す。大型のもので，上部が崩壊するが，断面は袋状をなし，最大径が床面より上部にある。他とはやや異なる断面形である。床面は平坦である。29・35号袋状竪穴より古い。

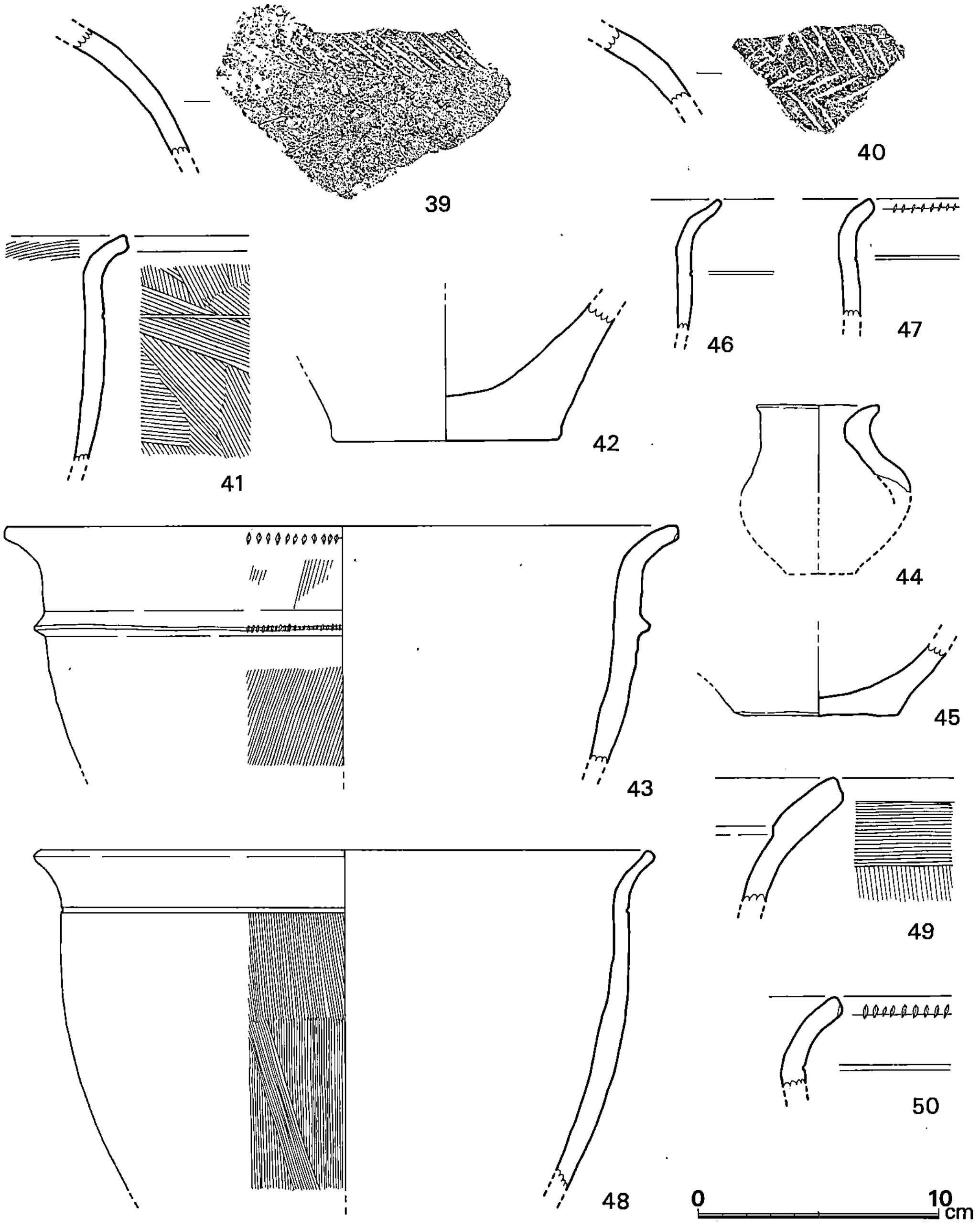
遺物は，少量の土器があるが，いずれも細片である。口縁部下に沈線をめぐらす甕の口縁部片があるが，このほかに手捏ねの小型壺がある（44）。器壁は厚く，ナデによる整形である。古い形式の形状をなす。胎土は砂粒が多い。弥生時代の前期に属すものである。



第84図　袋状竪穴実測図 4（1/60）

29号袋状竪穴（29）　円形プランを呈す。上部が崩壊するが，断面はゆるやかな袋状をなす。28号より新しい。床面は中央がやや深くなっている。

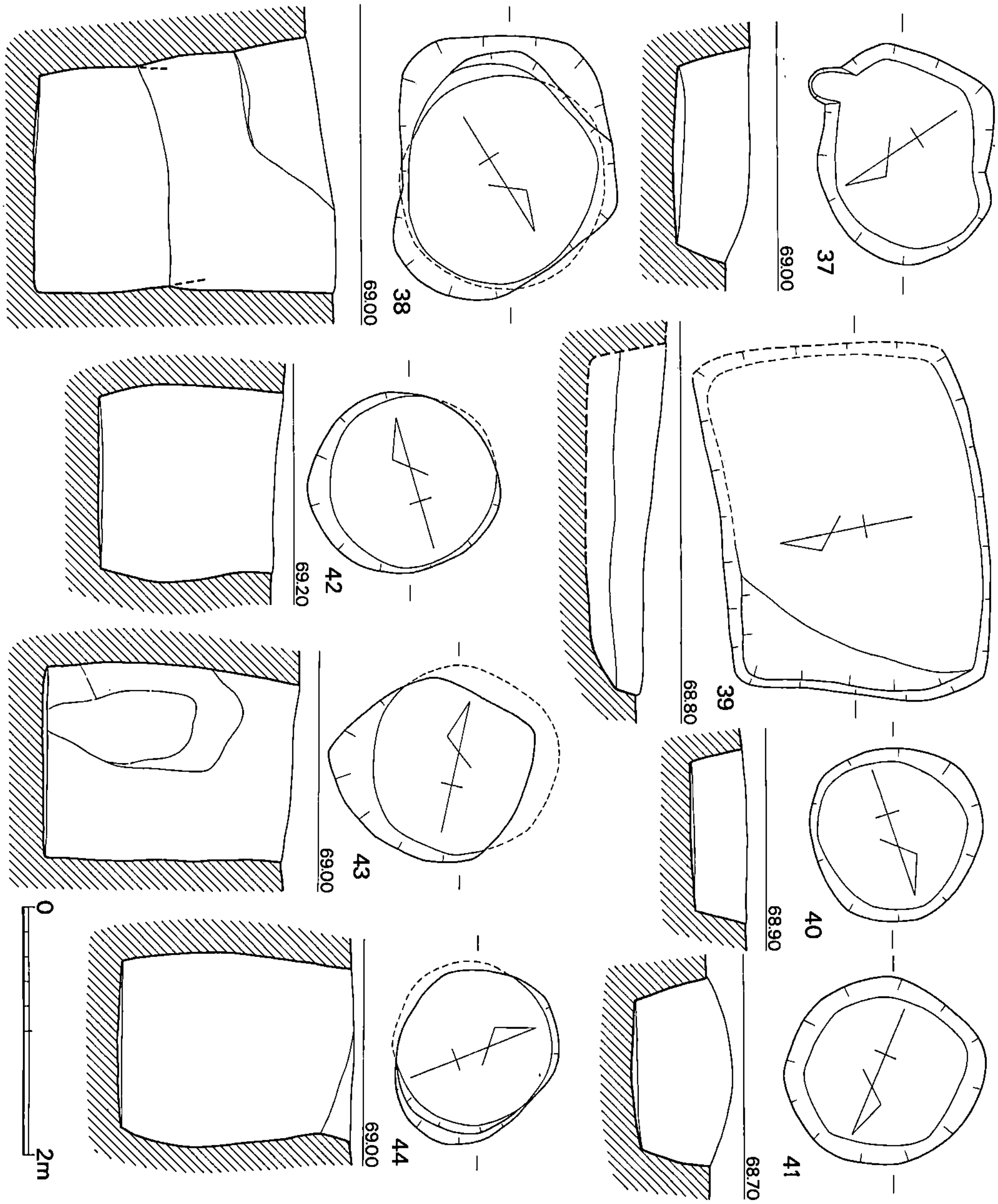
遺物は，少量の土器細片が出土する。45は壺の底部である。胎土は粗砂粒が多い。他の土器片からして，弥生時代の前期に属すものであろう。



第 85 図　袋状竪穴出土土器実測図 4（25・26・28～30号）(1/3)

30号袋状竪穴（30）　円形プランを呈す。断面は袋状をなす。床面は中央がやや深くなっている。大型のものである。

遺物は，土器片が少量出土している。46・47は甕の口縁部で如意形をなす。46は口唇部がやや薄くなるが，剥落した可能性がある。口縁部下に1条の沈線をめぐらす。胎土は粗砂粒を含む。47は口唇部に刻目を施し，口縁下に1条の沈線をめぐらす。胴部内面に擦過痕がみられる



第86図　袋状竪穴実測図5（1/60）

ほかは，ナデによる整形である。弥生時代の前期に属すものである。

31号袋状竪穴（31）　円形プランを呈す。上部が一部崩壊する。断面は袋状をなし，遺存状態は良好である。床面はやや傾斜するも平坦である。

遺物は，土器の細片ばかりである。時期不詳。

32号袋状竪穴（32）　円形プランを呈す大型の袋状竪穴である。上部の壁の崩壊は顕しい。断面は袋状を呈す。床面は中央がやや深くなっている。８号住居跡や33号貯蔵穴より新しい。

遺物は，甕・壺の細片ばかりで少ない。中に羽状文を施す土器片あり。弥生時代前期である。

33号袋状竪穴（33）　円形プランを呈す。上部壁は崩壊するが，断面は袋状をなす。床面は平坦である。32号貯蔵穴より古い。

遺物の出土はないが，32号との切り合い関係から弥生時代の前期の竪穴と考えられる。

34号袋状竪穴（34）　円形プランを呈す。断面はゆるやかな袋状を呈す。床面は平坦をなす。８号住居跡より新しい。

遺物は，土器片がある。いずれも細片で時期を正確に判断しかねるが，甕口縁片から弥生時代前期末頃と考えられる。この他に抉入片刃石斧（14）が出土している。

35号袋状竪穴　28号袋状竪穴に接して遺存する。円形プランを呈す。上部は崩壊するが，断面は袋状をなす。28号より古い。28・29号と共に大きな落ち込みの中で検出された。

遺物の出土はないが，切り合い関係にある28号が前期に属すことから，少なくとも弥生時代前期の竪穴と考えられる。

36号袋状竪穴（36）　円形プランを呈す大型のものである。丘頂平坦部から傾斜部にかかる位置に所在する。上部が崩壊し断面は直線的ではあるが，若干内傾する袋状を呈す。床面は中央が若干深くなる。

遺物は，若干の土器片が出土するが，図示できるものは１個体のみである。48は如意形口縁をなす甕である。口唇部には刻目を施しているものと思われるが，剥落により詳細にはわからない。口縁部下には箆描きの沈線をめぐらし，その下位には細い刷毛目を施す。胎土は粗砂粒多い。弥生時代の前期に属す土器である。

37号袋状竪穴（37）　９号住居跡の調査で確認した。同住居跡の柱穴を切ってつくられており，同住居跡より新しい。不整円形のプランを呈す。断面は袋状をなさない。床面は中央がやや深くなっている。

遺物の出土はないが，９号住居跡との切り合い関係から，弥生時代の中期以降のものである。

38号袋状竪穴（38）　円形プランを呈す。大型のもので，上部が崩壊しているが，断面は袋状をなす。床面はやや傾斜をなす平坦面となっている。

遺物は，土器の細片が少量出土している。49は壺の口縁部片である。頸部に較べ肥厚し，内面に一段を有す。内面は横ナデ整形し，外面は上位を横位の，その下位には縦位の刷毛目を施

す。胎土は砂粒が多く，若干の粗砂粒を含む。50は口唇部に刻目を施し，口縁部下に1条の沈線をめぐらす。横ナデの整形を内外面に施す。これらは，弥生時代の前期末に属すものである。

39号袋状竪穴（39）　長方形プランを呈する唯一の袋状竪穴である。地山が不明瞭で正確にはその規模をつかめえなかった。床面は中央より北側が深くなっている。平坦面が少ない。

遺物は，土器が若干量出土した。甕が多い（51～53）。51は直口する口縁の外側に2条の粘土紐を貼り付けて口縁部をつくっている。口縁の上面はややくぼみ，口唇部の突帯は刻目をめぐらす。突帯より下位の外面は細い刷毛目を，内面に横位の細い刷毛目を施す。胎土は砂粒が多い。52は如意形口縁をなす。口唇部には，箆による太い刻目をめぐらす。口唇部下外面には細い刷毛目を施す。胎土は砂粒を含む。53は甕の底部で，上げ底となる。外面は刷毛目を施し，内面はナデによる整形である。胎土は砂粒が多い。色調や焼成度から51の底部となるものであろう。これらの土器は，弥生時代の前期に属すものである。

40号袋状竪穴（40）　円形プランを呈す。規模的には深さの面で小型のものである。断面は袋状をなさない。床面はおおむね平坦である。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

41号袋状竪穴（41）　丘陵の斜面にかかった位置で確認された。円形プランを呈す。深さの点から小規模なもので，断面は袋状をなさない。床面は中央がやや深くなっている。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

42号袋状竪穴（42）　円形プランを呈す。断面はゆるやかな袋状をなす。床面は中央がやや深くなっている。

遺物は，土器の細片ばかりであるが，なかに羽状文のある細片があり，これより弥生時代の前期に属す竪穴であろうか。

43号袋状竪穴（43）　円形プランを呈す。上部が崩壊し，変形プランをなすが，断面はゆるやかな袋状をなしていたものと思われる。床面は平坦である。周壁の一部が崩壊している。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。石器では石皿（25）が出土している。

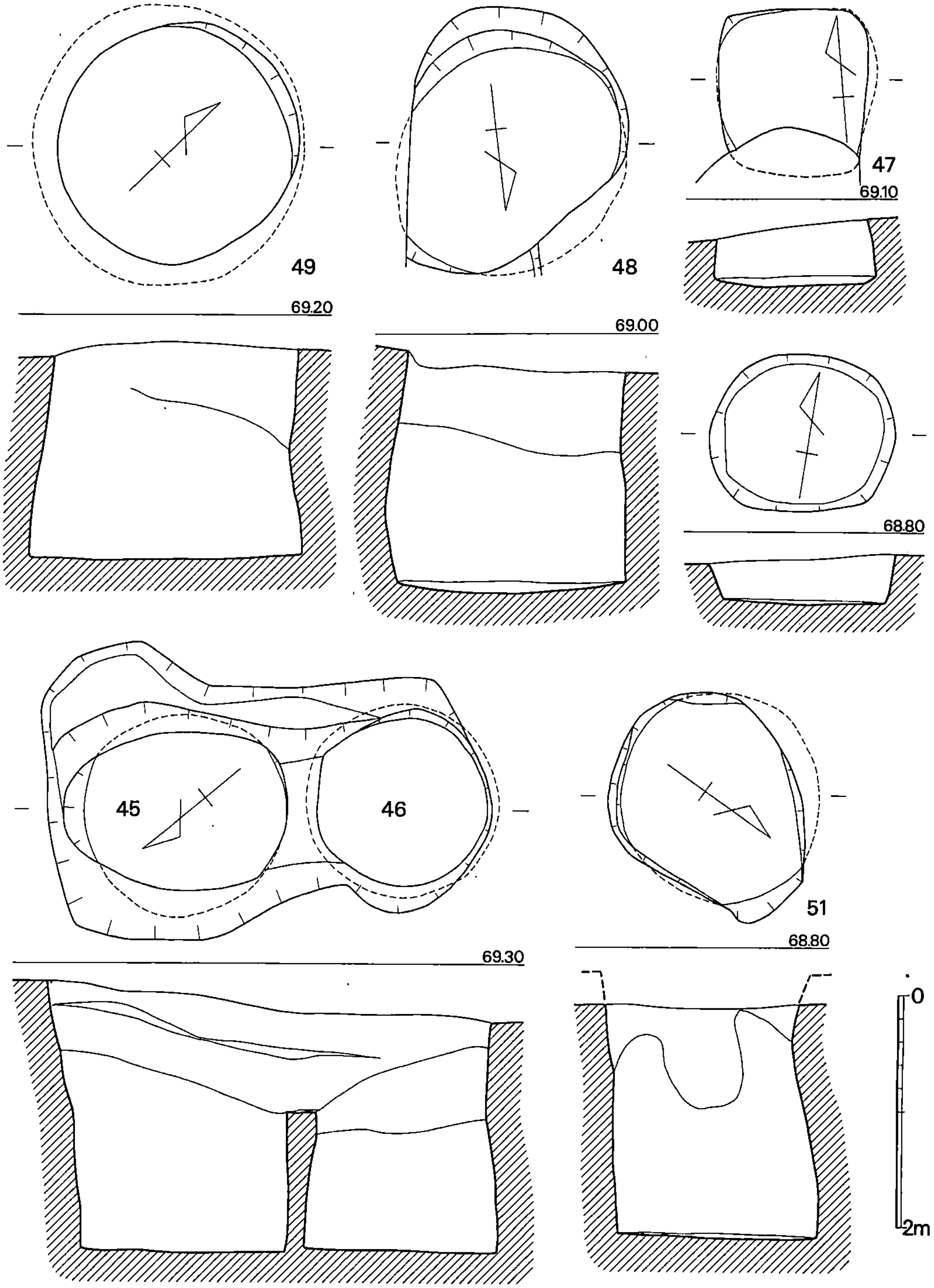
44号袋状竪穴（44）　円形プランを呈す。上部の一部が崩壊する。断面はゆるやかな袋状をなす。床面は平坦である。

遺物は，54の甕底部が出土している。平底をなし，焼成後に穿孔している。外面は刷毛目をナデ消し，内面には擦過痕がみられる。胎土は砂粒が多い。

45号袋状竪穴（45）　46号と共に一つの大きな落ち込みの中で確認された。円形プランを呈す。上部の崩壊が著しく，断面は袋状をなさない。床面は平坦である。46号より新しい。

遺物は，石皿（24）が出土するのみである。

46号袋状竪穴（46）　円形プランを呈す。上部が若干崩壊するも，断面は袋状をなす。床面は平坦をなす。45号より古い。



第 87 図　袋状竪穴実測図 6 (1/60)

遺物は少なく，いずれも細片であるが，弥生時代前期に属するものと考えられる。この他扁平石斧（17）が出土している。

47号袋状竪穴（47）　48号と重複するもので，一部が崩壊する。方形プランを呈す。浅い掘り込みであるが，断面は袋状をなす。床面は中央がやや深い。

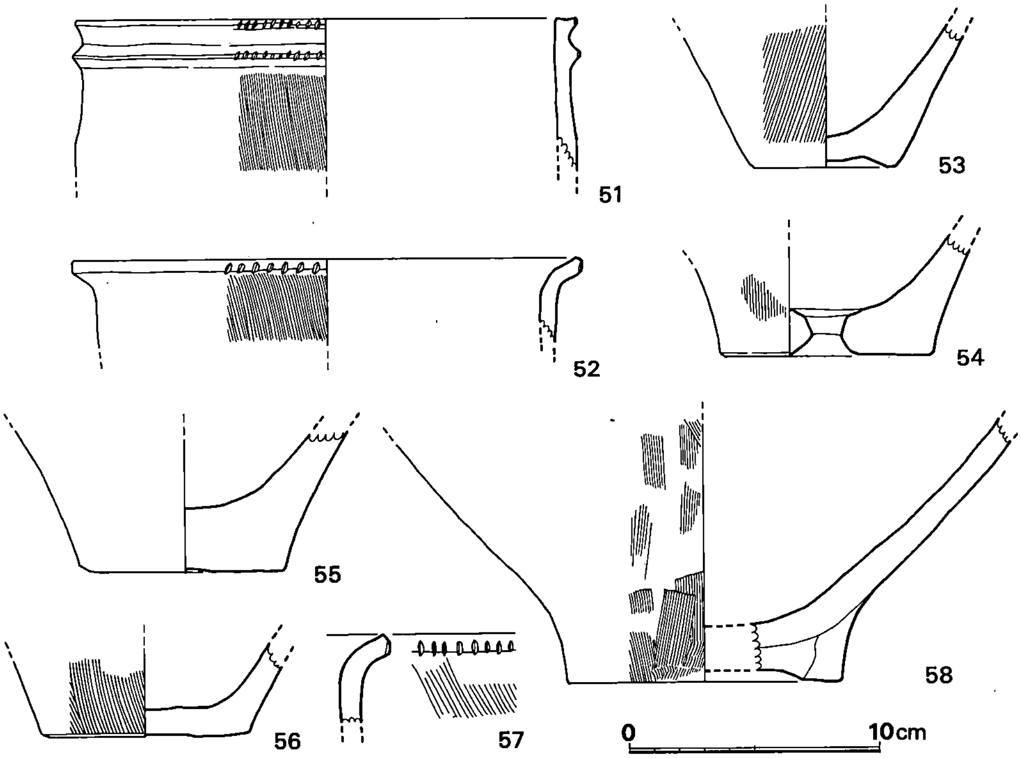
遺物の出土はなく，時期は不詳である。

48号袋状竪穴（48）　円形プランを呈す。上部の崩壊の顕しいものである。断面は袋状をなす。床面は中央が深くなっている。47号より新しい。

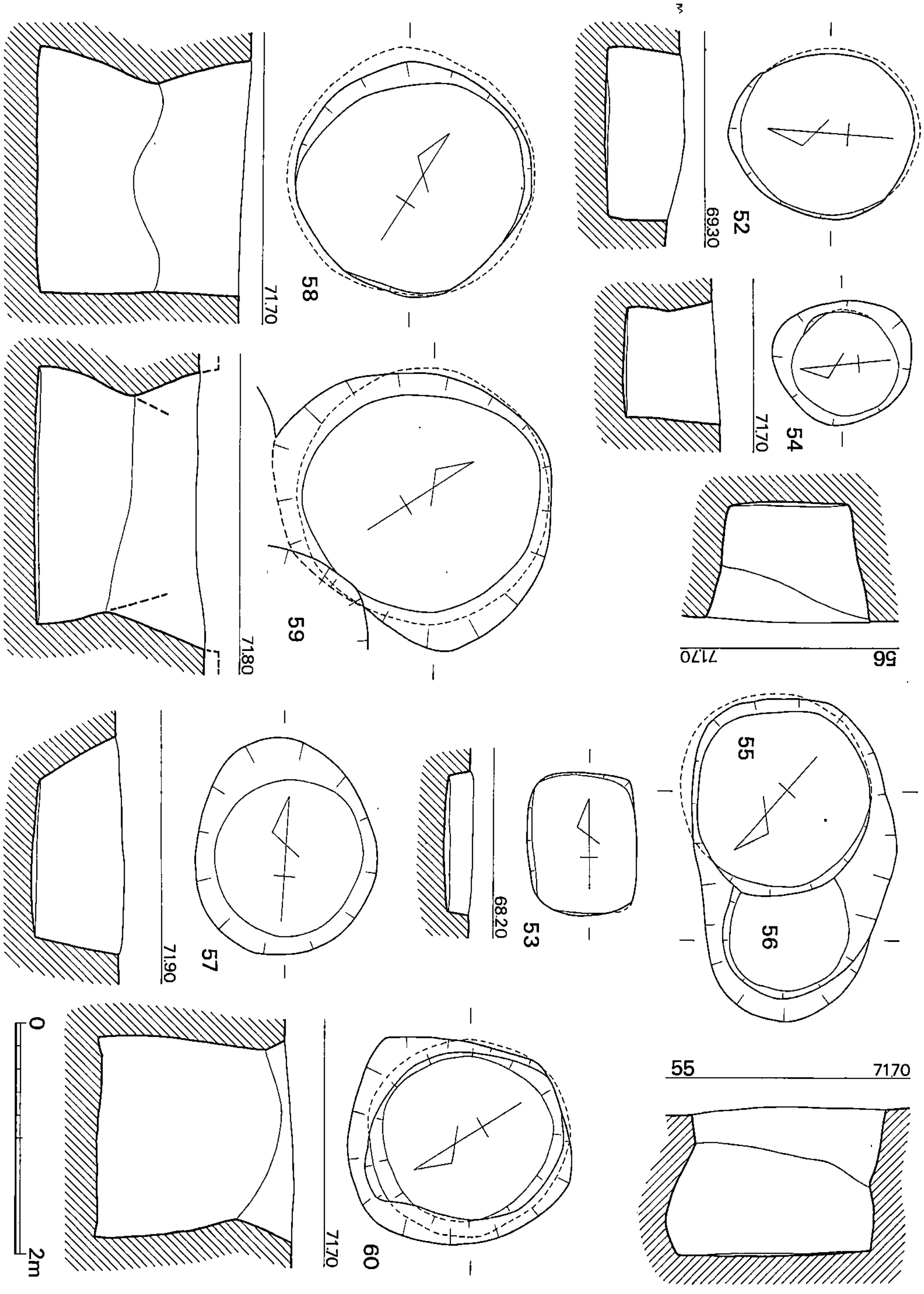
遺物は，土器と石器がある。土器は口縁部のものは全て細片であった。55・56の甕底部が出土している。55は平底をなすもので，中央部がややくぼむ。外面は縦位のヘラケズリのあとナデている。胎土は粗砂粒が多い。56も平底をなす。外面には刷毛目を施し，他面はナデを施す。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。弥生時代の前期に属すものであろう。石器は凹石（19）が出土している。

49号袋状竪穴（49）　円形プランを呈す。平面規模では最大のものである。上部の一部が崩壊する。断面は直線的な袋状をなす。床面は中央が若干深くなっている。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。



第 88 図　袋状竪穴出土土器実測図 5（39・44・48・55号）(1/3)



第89図　袋状竪穴実測図 7 (1/60)

50号袋状竪穴（50）　長円形プランを呈す。小規模なもので，深さも浅い。断面は袋状ではなく，床面も中央が若干深い。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

51号袋状竪穴（51）　円形プランを呈す。上部の崩壊の顕しいものである。断面は袋状をなす。床面は中央より北側が深くなっている。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

52号袋状竪穴（52）　円形プランを呈す。深さの非常に浅いもので，断面はゆるやかな袋状をなす。床面は，中央が若干深くなっている。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

53号袋状竪穴（53）　11号住居跡の調査時に確認された。11号住居跡の壁を壊しているので，これより新しいものである。長方形プランを呈す，小型のものである。断面の一部は袋状をなす。床面は，中央がやや深くなっている。当初，規模からみて屋内貯蔵穴かとも思えたが，住居跡の壁を崩しているところから，時期が異るものと判断した。

遺物は極めて少なく，細片である。弥生時代前期に属するものと考えられる。

54号袋状竪穴（54）　調査区の西端の丘陵平坦部に遺存する。円形プランを呈す。小型のもので，12・13・15号などと同類のものであろう。断面は，一部で袋状をなす。床面は，中央が若干深くなっている。

遺物は，土器の細片が若干出土するが，時期は判別しがたい。

55号袋状竪穴（55）　円形プランを呈す。上部が崩壊するも，断面は袋状をなす。床面は平坦であるが傾斜する。56号袋状竪穴より新しい。

遺物は，土器が若干出土している。57は甕の口縁部である。口唇部には太い刻目を施す。口唇部下には刷毛目を施す。胎土は粗砂粒を含む。弥生時代の前期に属す土器である。

56号袋状竪穴（56）　円形プランを呈す。上部が崩壊する。断面は袋状をなすもろであろう。床面は，中央がやや深くなっている。55号より古い。

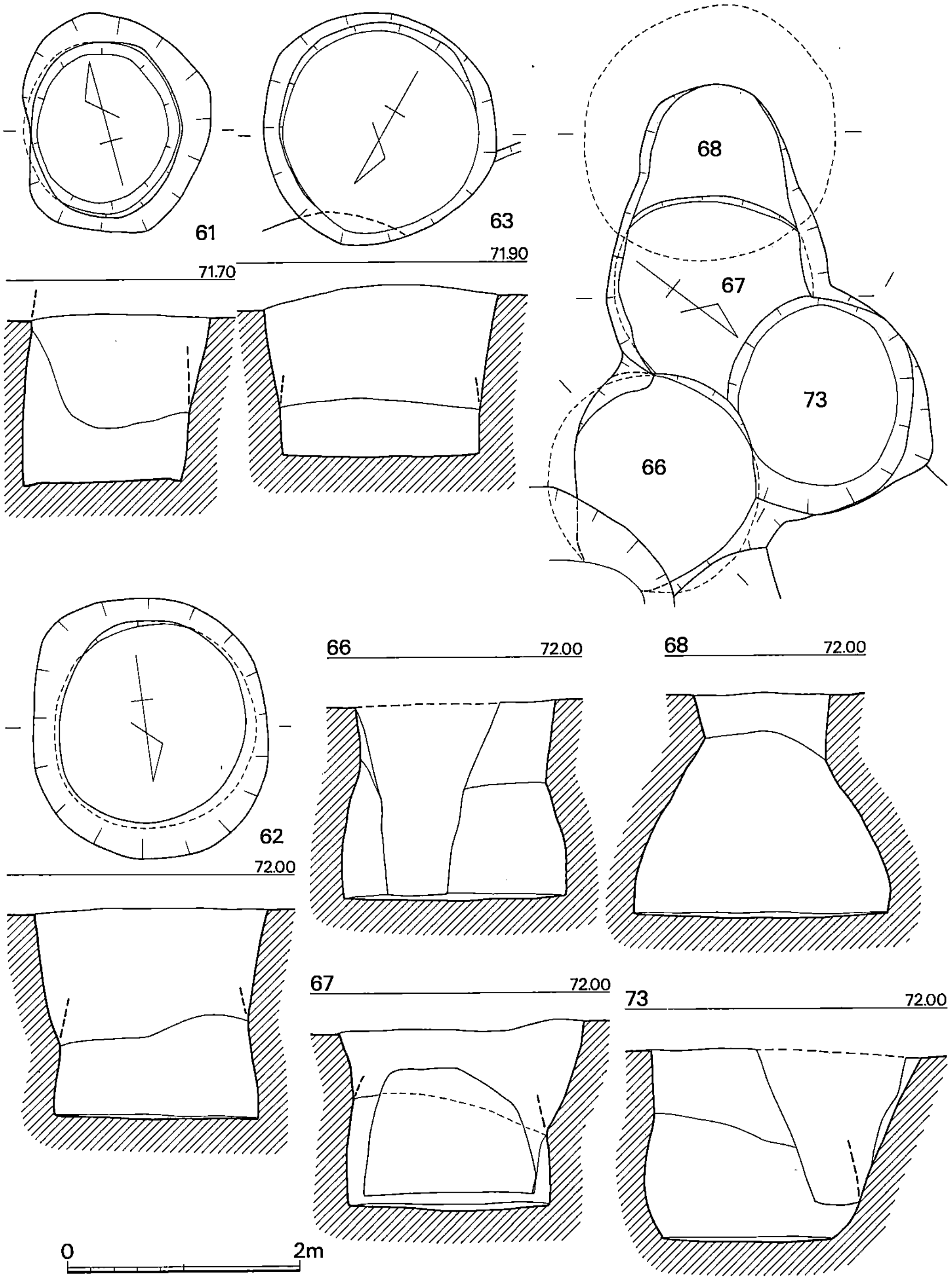
遺物の出土はないが，55号との関係から，弥生時代の前期に属すものである。

57号袋状竪穴（57）　円形プランを呈す。断面は袋状をなさない。床面は，中央が若干深くなっている。

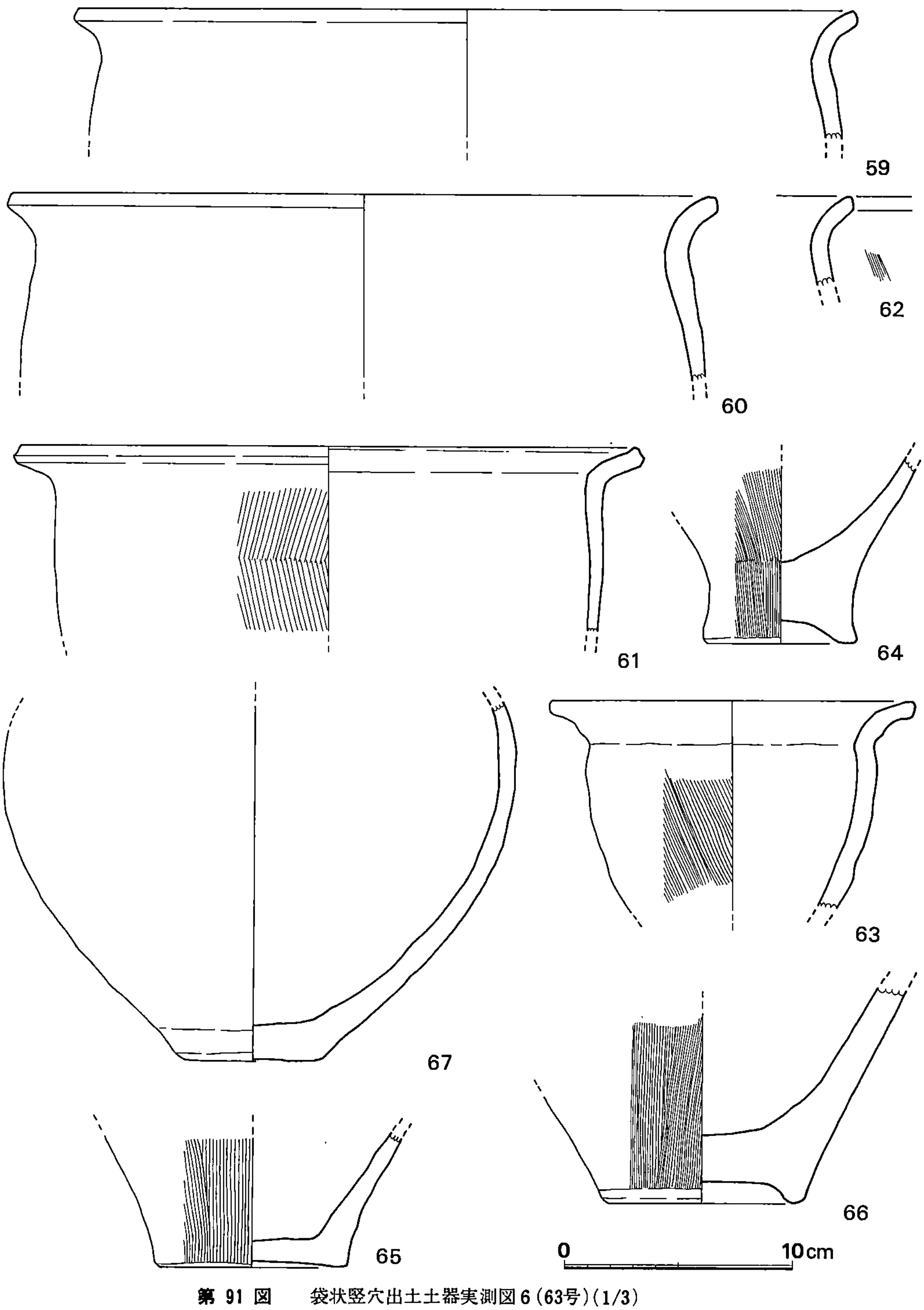
遺物の出土はなく，時期は不詳である。

58号袋状竪穴（58）　円形プランを呈す。上部が大きく崩壊する。断面は袋状をなす。床面は平坦である。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。



第90図　袋状竪穴実測図 8（1/60）



第 91 図　　袋状竪穴出土土器実測図 6 (63号) (1/3)

59号袋状竪穴（59）　円形プランを呈す。平面的に規模の大きなものである。上部が大きく崩壊するも，断面は袋状をなす。床面は平坦をなす。62・63号よりも古い。64号との前後関係はよく判定できなかった。

遺物は，土器の小片と共に壺の底部が出土している（58）。やや大きな壺となるものであろう。胴部外面は細い刷毛目を施し，これをナデ消している。内面は丁寧なナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。弥生時代の前期に属すものである。

60号袋状竪穴（60）　円形プランを呈す。上部が若干崩壊する。断面は，ゆるやかな袋状をなす。床面は，中央が若干深くなる。壁沿いに，深さ3～5cmで，幅15cmほどの溝がめぐる。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

61号袋状竪穴（61）　円形プランを呈す。周壁の崩壊が顕しい。断面はゆるやかな袋状をなす。床面は平坦であり，やや傾斜する。壁沿いに浅く，幅10cmほどの溝が巡る。

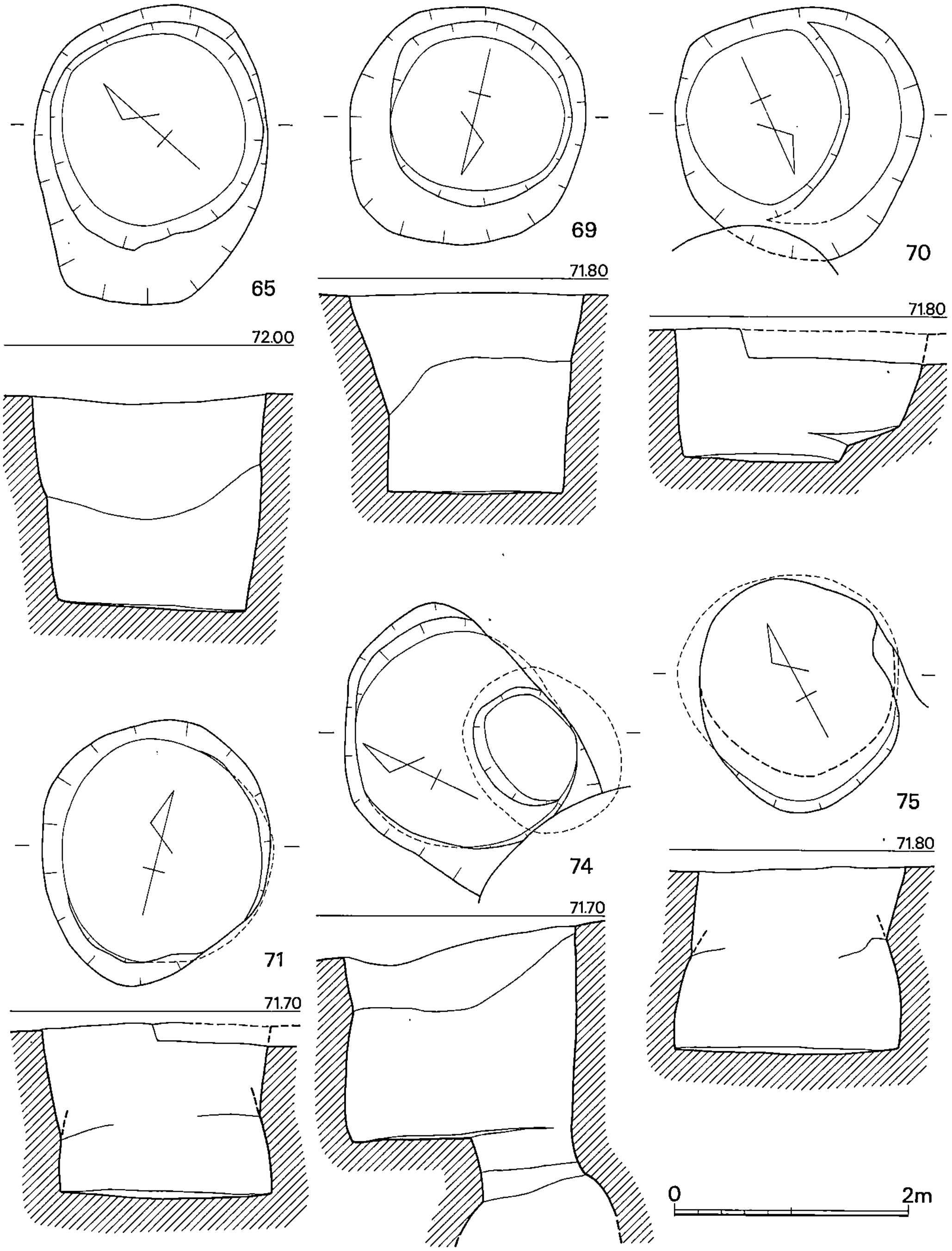
遺物の出土はなく，時期は不詳である。

62号袋状竪穴（62）　円形プランを呈す。周壁上部の崩壊が顕しい。断面はゆるやかな袋状をなす。床面は平坦である。59・64号より新しい。

遺物は，土器の細片が若干出土しているが，時期の判別はしがたい。

63号袋状竪穴（63）　円形プランを呈す。周壁の崩壊がはなはだしい。断面は，ゆるやかな袋状をなすものと思われる。床面は平坦である。

遺物は，土器がかなり出土した（59～67）。59・61・65は上面で出土している。59は如意形口縁をなす大きな甕である。口縁部の内面は横へラミガキであるほかは，ナデによる整形である。胎土は砂粒が多い。60は如意形口縁をなす甕である。口縁はやや肥厚する。やはり口縁部内面は横へラミガキを施す。胴部外面は細い刷毛目を施すが，剥落により不明瞭である。胎土は粗砂粒が多い。61は外反する口縁部で，口唇部は跳上げている。胴部外面は粗い刷毛目を施す。内面はナデ整形である。62は如意形口縁部片である。口縁部下外面には細い刷毛目を施す。胎土は粗砂粒や雲母を含む。63は小型甕である。大きく外反する口縁部で，内外面とも横ナデを施す。胴部は外面を刷毛目整形し，内面はナデ上げている。頸部付近は全体に煤が付着する。胎土は粗砂粒が多い。64～66は甕の底部である。64は細身のもので上げ底をなす。外面には細い刷毛目を施し，内面はナデ整形である。胎土は砂粒が多い。65は薄手の底部で，やや上げ底となる。外面には刷毛目を施し，内面はナデによる整形である。66はやや大きな甕の底部で，上げ底となる。外面は細い刷毛目を施し，内面はナデ整形である。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。67は壺の口頸部を欠損するものである。最大径が上位にあるもので，器壁は厚い。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。これらの土器は，古い様想を残すものもあるが，61・64のように新しいものもある。全体的にみて弥生時代の中期前半のものであろう。この他に石器に磨石（18）が出土している。



第92図　袋状竪穴実測図9（1/60）

64号袋状竪穴　62・63号と重複し，大半が調査区外にあるため，調査不可能であった。63号よりも深い床面をもつものである。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

65号袋状竪穴（65）　円形プランを呈す。周壁上部の崩壊がはなはだしい。断面は，ゆるやかな袋状をなす。床面は平坦であるが，傾斜をなす。66号より新しく掘られている。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

66号袋状竪穴（66）　65号により，一部が崩壊するも，円形プランを呈するものである。上部も崩壊するが，断面は袋状を呈す。床面は，中央が若干深くなっている．65号より古く，67号より新しい。

遺物は，甕の小片が出土している。弥生時代の前期末に属すものである。

67号袋状竪穴（67）　66・73号により損壊がはなはだしい。円形プランを呈するものであろう。周壁上部の崩壊も顕しいが，断面は袋状をなす。床面は，中央が若干深くなっている。

遺物の出土はないが，66号との切り合いから，弥生時代の前期のものであろう。

68号袋状竪穴（68）　67号により一部崩壊するが，周壁上部の遺存状態は良好である。断面は典型的な袋状をなす。床面は，中央が深くなっている。

遺物の出土はないが，67号との切り合いにより，弥生時代の前期に属すものである。

69号袋状竪穴（69）　円形プランを呈す。上部が大きく崩壊する。断面は，一部でやや内傾するものの，袋状をなしていない。床面はおおむね平坦である。70・73・83号袋状竪穴より新しい。これより当竪穴は，弥生時代の中期に属すものである。土器等の出土はない。

70号袋状竪穴（70）　円形プランを呈す。床面は２段となる。断面は袋状をなさず，床面は平面規模に比べ浅い。69号袋状竪穴より古い。

遺物の出土はないが，69号との切り合いから弥生時代の前期に属す。

71号袋状竪穴（71）　円形プランを呈す。上部が大きく崩壊するも，断面は袋状をなすものと考えられる。床面は中央がやや深くなっている。

遺物の出土はなく，時期は不詳である。

73号袋状竪穴（73）　66号袋状竪穴により一部崩壊する。円形プランを呈するものと思われる。断面は袋状をなし，28号袋状竪穴に類似する断面をなす。床面はおおむね平坦である。67号より新しく，66・69号袋状竪穴より古い。

遺物は，土器の細片が若干出土しているが，時期は不詳である。前述の切り合い関係により弥生時代の前期に属すものである。

74号袋状竪穴（74）　円形プランを呈す。上部が若干崩壊する。二段掘りの袋状竪穴で，当遺跡の唯一のものである。一段目は，ゆるやかな袋状をなし，北にやや傾斜する平坦な床面となり，この床面の中央より南に，二段目を掘っている。二段目は，その上部は極めて狭く，

断面は袋状をなす。かなり深く，作業を実施する上で，非常に危険であるため，中途で断念した。73号より古い時期のものである。

遺物は，土器の細片ばかりである。他に石器で石錘状石器（10）がある。

他の袋状竪穴との切り合いから，弥生時代の前期に属すものであろう。

75号袋状竪穴（75）　円形プランを呈す。上部の大半が崩壊するも，断面は袋状をなす。床面は，中央が若干深くなっている。81号より新しい時期のものである。

遺物は，土器の細片ばかりで，時期の判断はしがたいが，弥生時代の前期に属すものであろう。

76号袋状竪穴（76）　円形プランを呈す。上部および周壁が崩壊するも，断面は袋状をなす。床面は中央がやや深くなっている。

遺物は，土器が若干出土している（68～70）。68は壺の胴上部片である。沈線をめぐらし，その下位に羽状文を施す。内外面ともナデによる整形をなす。胎土は粗砂粒が多く，雲母を含む。69は壺の胴上部片である。1条の細い沈線をめぐらし，その上位に羽状文を施す。器外面はヘラミガキをなし，内面はナデ整形である。胎土は砂粒を若干と雲母を含む。70は壺の底部で大型のものである。胴部外面は刷毛目をナデ消し，下端は指先による押し引きである。胎土は粗砂粒が非常に多い。これらの土器は，弥生時代の前期に属すものである。

77号袋状竪穴（77）　円形プランを呈す。上部が若干崩壊するも，断面は袋状をなす。床面は中央が高く，壁沿いに幅約15cmの浅い溝を巡らす。78号より古い。

遺物の出土はなく，時期の判断はしがたい。

78号袋状竪穴（78）　長円形プランを呈す。断面は，ゆるやかな袋状をなす。床面はやや傾斜をなすが，おおむね平坦である。深さの浅いものである。77・79号より新しい。

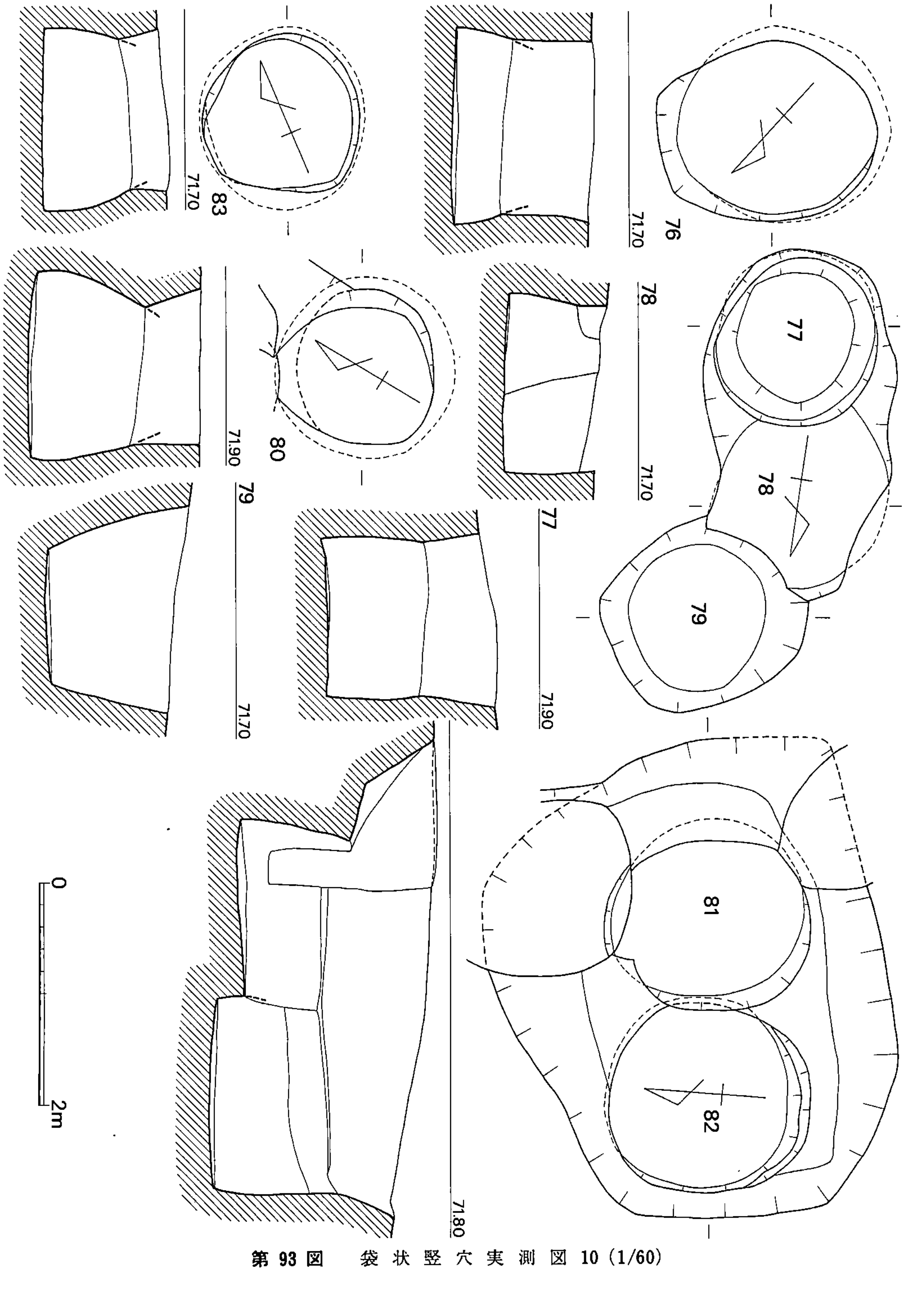
遺物は，土器が少量出土している（71～73）。71は甕の口縁部で，口唇部に刻目を施し，口縁部下には1条の沈線をめぐらす。内外面ともナデによる整形である。胎土は砂粒が多い。72は壺の口頸部である。口縁部は肥厚し，内側に段がつく。口縁部の内外面は横ナデ整形で，口縁下外面は，細い刷毛目のあと細いヘラミガキで消している。胎土は砂粒が多く，雲母を含む。73は蓋の身受け部片である。厚みのあるものである。胎土は砂粒が多い。

当竪穴は弥生時代の前期末から中期初頭に属すものである。

79号袋状竪穴（79）　円形プランを呈す。断面は袋状をなさない。床面は中央が若干深くなっている。78号より古い時期のものである。

遺物は，少量の土器片が出土している（74・75）。74は短く外反する甕の口縁部である。内外面とも横ナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。75は74の底部である。平底で，下胴部外面は丁寧なヘラケズリであり，内面はナデ整形である。弥生時代の前期に属す土器である。

80号袋状竪穴（80）　円形プランを呈す。上部が崩壊するも，断面は袋状をなし，床面は中央が深くなっている。81号より古い。



第 93 図　袋 状 竪 穴 実 測 図 10 (1/60)

遺物は，土器の細片が若干量出土する。弥生時代の前期に属する土器である。

81号袋状竪穴（81）　82号と共に大きな掘り込みの中に掘られている。円形プランを呈す。断面は袋状をなし，床面は中央がやや深くなっている。80・82号より新しく，75号より古い。

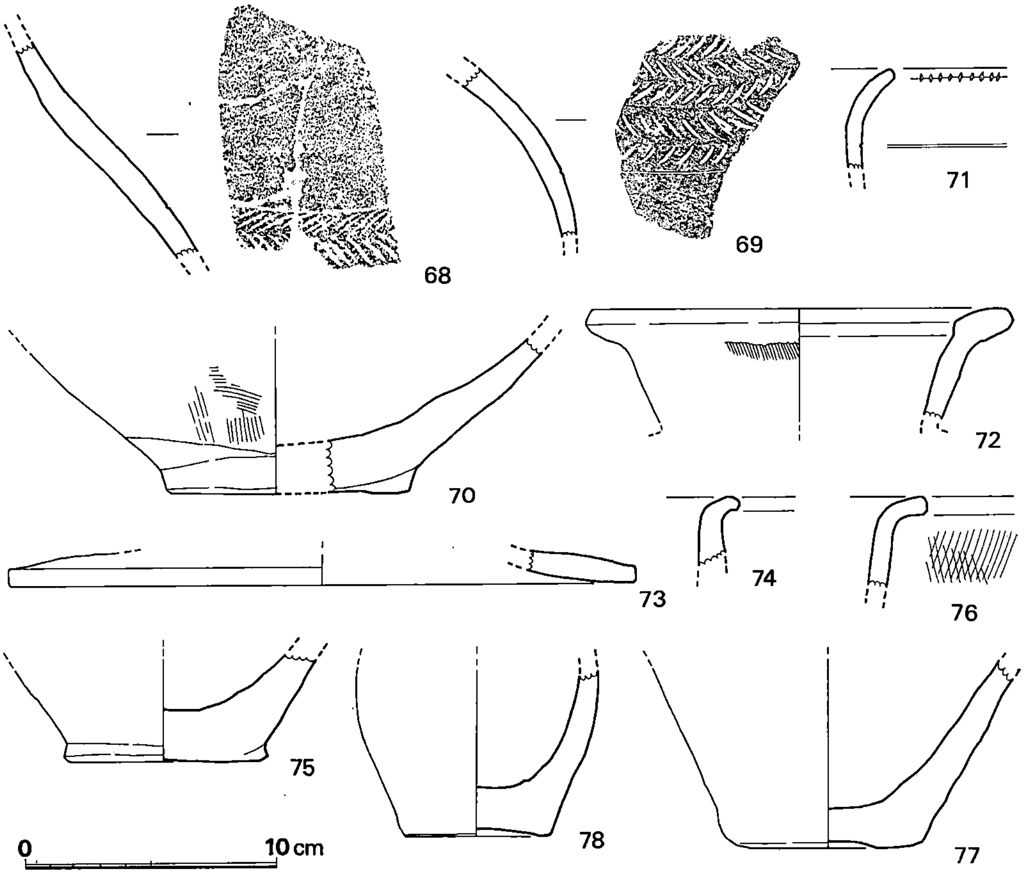
遺物の出土はないが，切り合い関係から，弥生時代前期に属すものであろう。

82号袋状竪穴（82）　81号と共に大きな掘り込みの中で検出された。断面はゆるやかな袋状をなす。床面は中央が深くなっている。81号より古い。

遺物の出土はないが，切り合い関係から，弥生時代の前期に属すものである。

83号袋状竪穴（83）　円形プランを呈す。上部が若干崩壊するが，断面は袋状をなす。床面はおおむね平坦である。69号より古い。

遺物は，少量の土器が出土している（76～78）。76は大きく外反する口縁部である。口縁下外面は粗い刷毛目を施す。胎土は砂粒が多い。77は甕の底部である。やや上げ底気味のものである。胴部外面は丁寧なナデを，内面はナデ整形を施す。胎土は粗砂粒が非常に多い。78は小



第 94 図　袋状竪穴出土土器実測図 7（76・78・79・83号）（1/3）

型壺の下胴部である。厚味のある器壁で，底は浅い上げ底となる。内面はナデ整形を施す。胎土は粗砂粒が多い。これらの土器は弥生時代の中期初頭頃のものである。

表4 袋状竪穴一覧表　単位 cm

号	平面形	口辺形	底辺形	深さ	出土遺物		時期	摘要
					土器	石器		
1	円形	112 × 122	188 × 181	152				
2	円形	179 × 167	153 × 154	21				
3	円形	134 × 125	137 × 150	141				
4	円形	148 × 153	180 × 185	94				2号住より古
5	円形	157 × 198	180 × 179	90	⑮		前期	2号住より古
6	不整円形	113 × 131	100 × 110	50		㉑		
7	長円形	148 × 131	175 × 188	147		⑪	前期	2号住より新
8	円形	117 × 102	119 × 115	94	⑯	⑪	前期	
9	円形	170 × 205	185 × 200	(180)	⑰		前期	4号住より新 20号より新
10	円形	180 × 195	170 × 150	(180)		⑥		
11	円形	128 × 155	111 × 97	120		②		
12	長円形	34 × 109	86 × 101	43				
13	円形	84 × 88	97 × 105	81	⑱～㉑		前期	3号住より新
14	円形	130 × 136	162 × 166	142	㉒～㉖	⑬	前期	3号住より新
15	円形	95 × 87	76 × 65	65				
16	円形	136 × 172	154 × 177	194				
17	円形	132 × —	165 × —	173	㉗～㉚	⑦	前期末	
18	円形	112 × 72	157 × 152	186			前期	
19	円形	131 × 115	116 × 103	52				
20	長円形	147 ×(180)	135 × 167	86	㉛		前期	4号住より古 9号より古
21	円形	100 × 138	154 × 151	131	㉜		前期	
22	円形	117 × 132	130 × 134	129	㉝㉞		前期末	
23	円形	221 × 202	197 × 180	161	㉟～㊲		中期初	
24	円形	113 × 104	147 × 137	152	㊳	⑮⑯	前期	
25	円形	205 × 192	204 × 211	218	㊴～㊷	④⑫	前期	
26	不整円形	139 × 205	187 × 190	217	㊸		前期	

27	円　　形	135 × 114	66 × 79	57				
28	円　　形	(192)× 149	197 × 149	220	㊹		前期	29号より古 35号より新
29	円　　形	(178)× 160	183 × 180	183	㊺		前期	28号より新
30	円　　形	147 × 145	189 × 199	231	㊻㊼		前期	
31	円　　形	134 × 145	177 × 165	155				
32	円　　形	— × 257	217 × 222	270			前期	8号住より古 33号より新
33	円　　形	— × 210	— × 189	174				32号より古
34	円　　形	144 × 143	139 × 150	168		⑭	前期(末)	8号住より古
35	円　　形	200 × 225	170 × 157	231				28号より古
36	円　　形	212 × 212	198 × 180	229	㊽		前期末	
37	不 整 形	176 × 141	148 × 113	63				
38	円　　形	207 × 175	173 × 166	246	㊾㊿		前期末	
39	長 方 形	(283)× 216	(268)× 197	(60)	51～53		前期	
40	円　　形	142 × 141	122 × 121	46				
41	円　　形	152 × 164	120 × 131	82				
42	円　　形	145 × 153	138 × 134	151			前期(末)	
43	円　　形	144 × 166	155 × 152	210		㉕		
44	円　　形	138 × 131	132 × 129	193	54			
45	円　　形	196 × 137	176 × 172	234		㉔		46号より新
46	円　　形	152 × 176	168 × 168	198		⑰	前期(?)	45号より古
47	方　　形	129 × —	140 × —	49				48号より古
48	長 円 形	138 × 240	215 × 185	208	55 56	⑲		47号より新
49	円　　形	210 × 207	237 × 240	186				
50	長 円 形	161 × 135	138 × 120	42				
51	円　　形	168 × 176	173 × 178	202				
52	円　　形	143 × 162	145 × 156	68				
53	長 方 形	124 × 95	120 × 90	25			前期(?)	11号住より新
54	円　　形	107 × 121	92 × 91	185				
55	円　　形	167 × 171	166 × 169	128	57		前期	56号より新
56	円　　形	140 × —	103 × —	103				55号より古
57	円　　形	190 × 157	137 × 127	80				
58	円　　形	203 × 206	215 × 215	186				
59	円　　形	238 × 236	221 × 218	150			前期	63号より古

60	円形	173 × 195	172 × 171	172				
61	円形	155 × 185	136 × 146	144				
62	円形	202 × 223	175 × 174	181				59・64号より新
63	円形	201 × 196	170 × 171	146	㊻～㊼	⑱	中期	59・64号より新
64	円形 (?)							未完掘 62号より古
65	円形	200 × 253	158 × 163	186				66号より新
66	円形	166 × —	189 × 176	172			前期(末)	65号より古 67号より新
67	円形	194 × —	170 × —	162			前期	68号より新 66・73号より古
68	円形	115 × —	215 × 216	194			前期	67号より古
69	円形	202 × 203	150 × 131	172				70・73・83号より新
70	円形	214 × 130	220 × 139	113			前期	69号より古
71	円形	195 × 223	181 × 190	149				
72								欠番
73	円形	188 × 188	150 × 137	165			前期	66・69号より古
74	円形	198 × 230 83 ×(120)	186 × 183 104 ×(146)	182 (100)		⑩	前期	73号より古 二段構造
75	円形	175 × 197	185 × 170	160			前期	81号より新
76	円形	164 × 198	175 × 193	129	㊼～㊾		前期	
77	円形	169 × 154	153 × 140	158				78号より古
78	長円形	— × 135	— × 150	96	㊿～(72)		前期末 ～中期初	77・79号より新
79	円形	172 × 185	131 × 122	124	(73)(74)		前期	78号より古
80	円形	138 ×(124)	166 × 163	155			前期	81号より古
81	円形	153 ×(160)	160 × 174	106			前期	75号より古 80・82号より新
82	円形	170 × 181	170 × 164	107			前期	81号より古
83	円形	136 × 135	165 × 150	115	(75)～(77)		中期初	69号より古

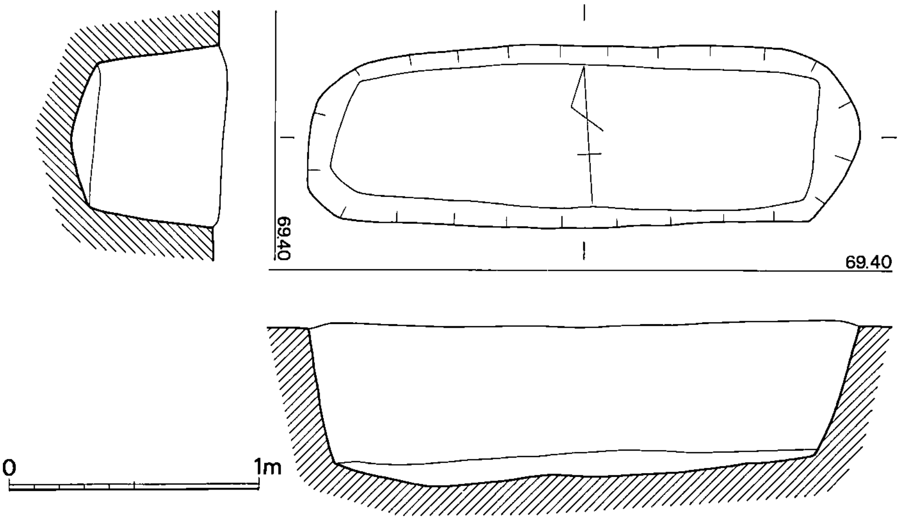
計測値は現存値である。

(3). 土壙墓（第95図，図版67－１）

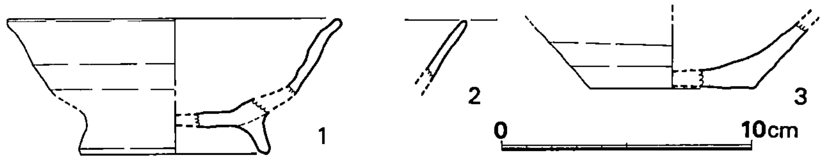
調査区のほぼ中央，42～50号貯蔵穴の所在する丘頂平坦部に遺存する。42・46号袋状竪穴間の北側にある。長軸2.2ｍ，短軸0.72ｍを測る。壙底は平坦でなく，中央が深い。全体的に東より西側が深くなっている。小口の幅は，東がやや広くなっており，この点から東側が頭位ではないかと推定される。

遺物は，壙内の埋土中より土師器小片が小土した(第96図)。いずれも副葬品となるものではない。１は高台の付く椀で，復原径13.4cm，同高さ5.4cmを測る。器の内外面とも横ナデを施す。高台は付け高台である。胎土は細砂粒を含む。２は杯の口縁部片である。直線的に外反するもので，内外面とも横ナデを施す。胎土は精製土である。３は杯の底部である。底部と体部の下位はヘラ切りである。体部上位と内面は横ナデを施す。胎土は細砂粒を若干含む。

３は古い時期のものであるが，１の高台付椀からして，10世紀初頭頃の時期が考えられる。



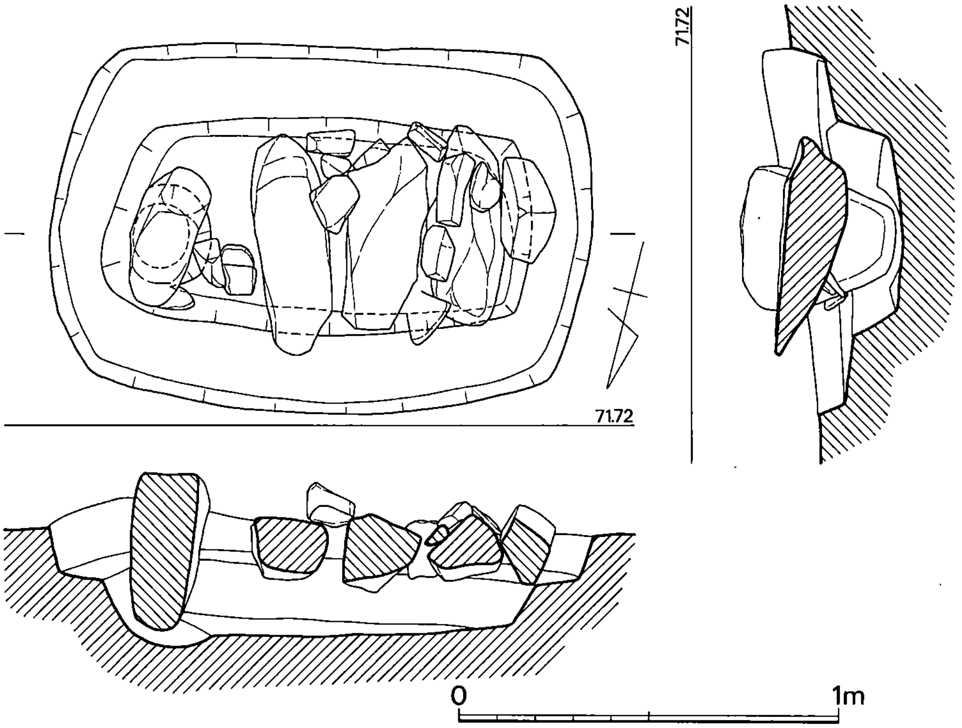
第 95 図　土 壙 墓 実 測 図 (1/30)



第 96 図　土壙墓出土土器実測図 (1/3)

(4). 石蓋土壙墓（第96図，図版67－２・68）

調査区の西端の丘頂平坦部で発見された。この丘頂平坦部は，調査開始前には，先年の調査で箱式石棺の発見された位置から近く，ここでも箱式石棺等の墳墓の遺存が考えられていた。



第 97 図　石蓋土壙墓実測図 (1/20)

結果は,袋状竪穴群で平坦部を占められ,石蓋土壙墓は,やや斜面にかかった位置で発見された。

土壙は小型のもので，二段掘りとなっている。一段目は，長軸143cm，短軸96cm，深さ13cm前後を測る。２段目は，長軸113cm，短軸57cm，深さ15cm前後を測る。この２段目の幅にかろうじて足りるような長さの石を蓋石として置いている。蓋石は全て残っておらず，主要となる３個の柱状の石を配し，この間隙には角礫を充てており，粘土による目貼りはみられなかった。壙内東側小口部には，壙底の浅い掘り込みに厚い石を据え立てている。この石が何を意味するものか不明である。

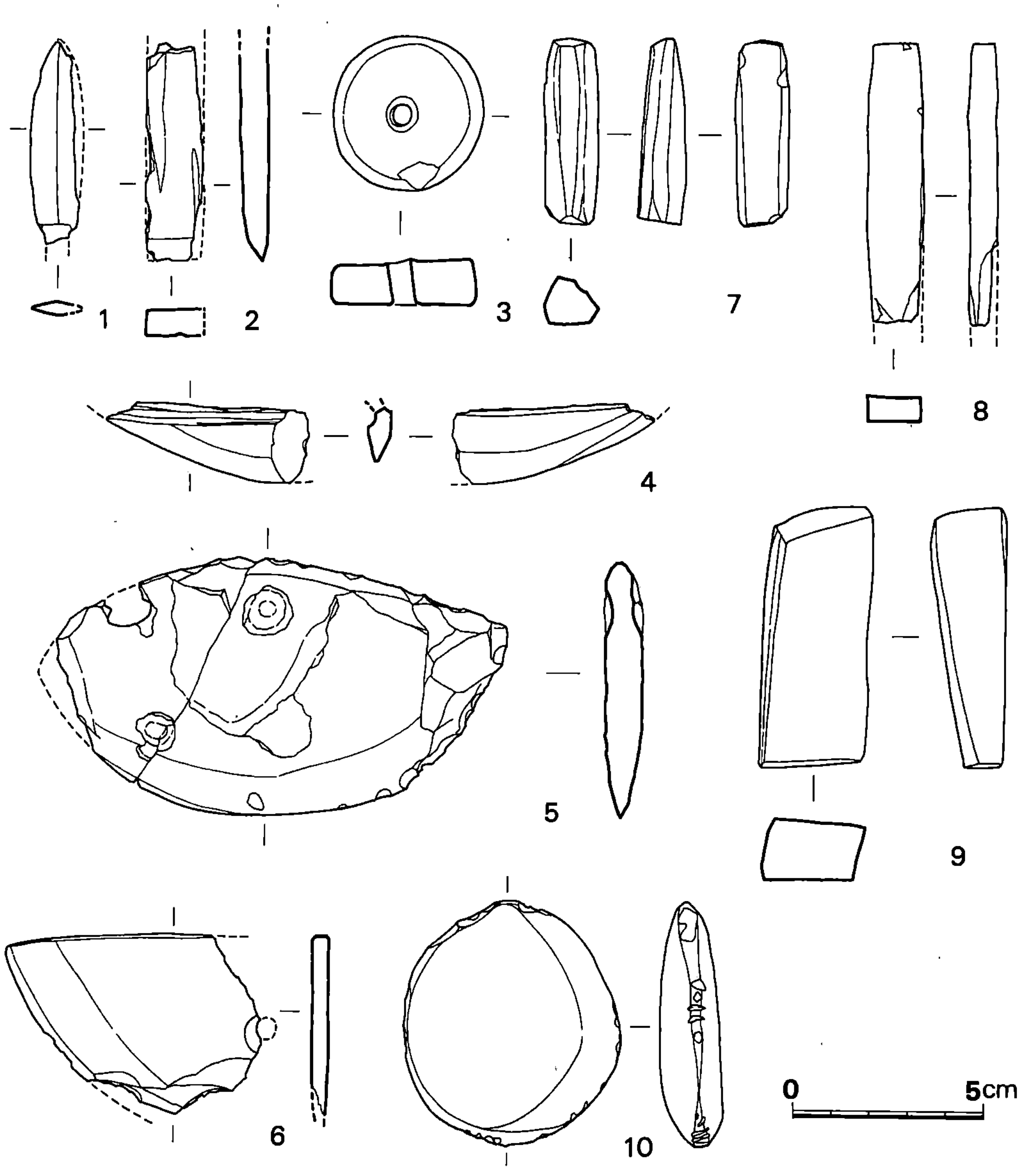
遺物はなく，時期を判断しかねる。

4．遺　　物

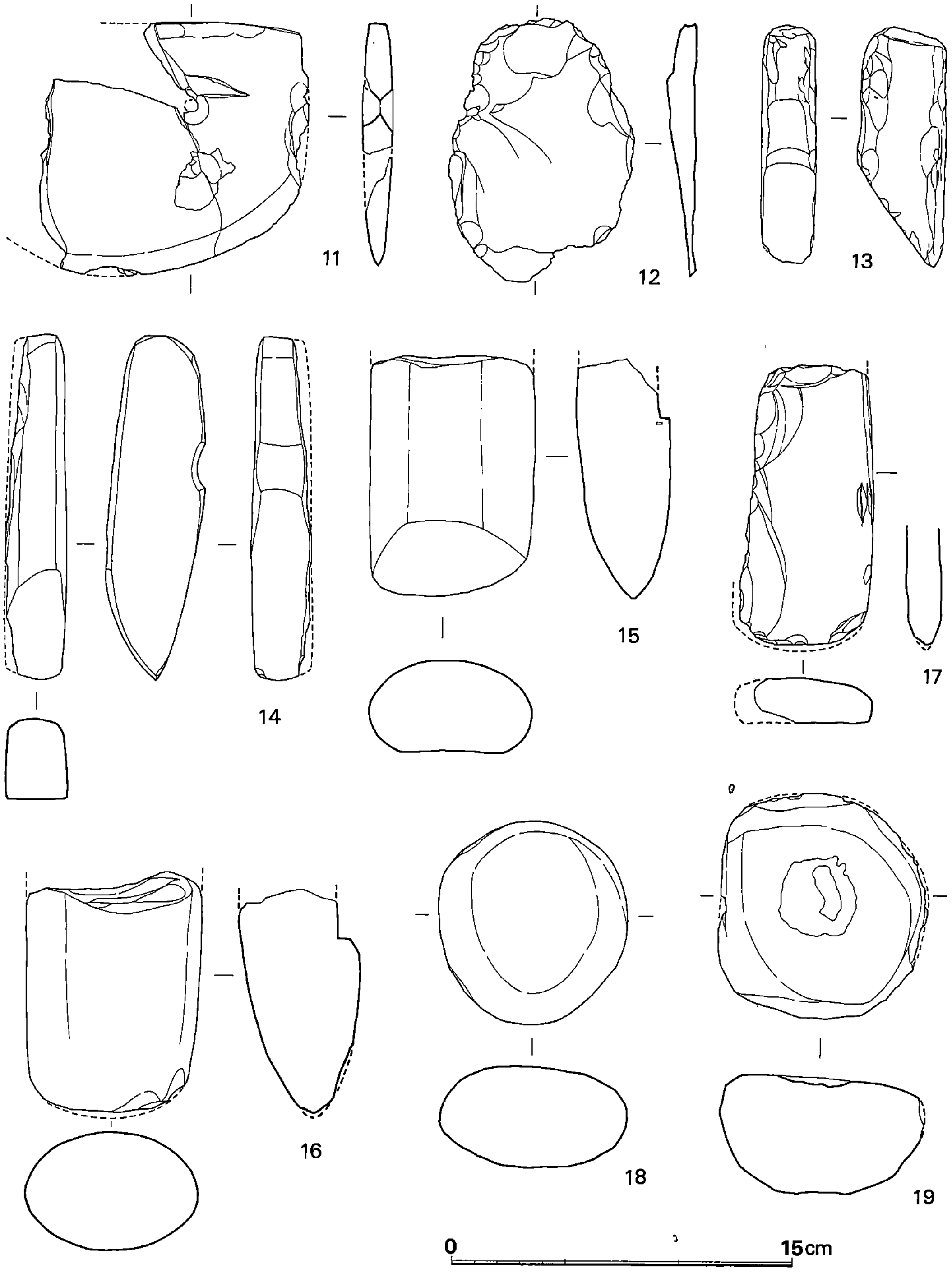
この頃では，土器以外の遺物について記述する。詳細については一覧表を参照されたい。

石鏃（第98図）

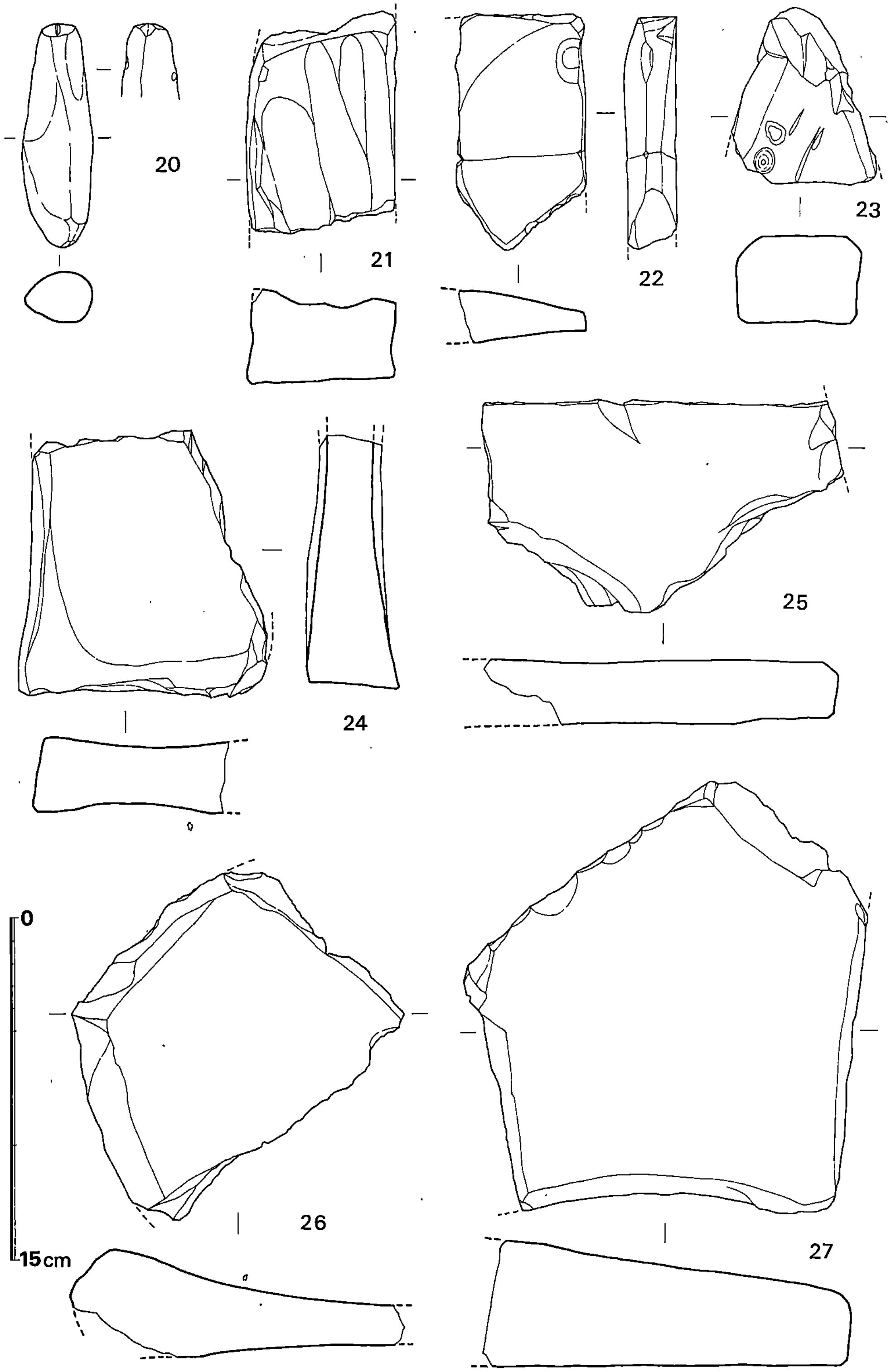
磨製石鏃（１）が出土している。細身で無茎のものである。刃部は研ぎ出しが鈍いことから未製品か。灰色を呈す。



第98図　石　器　実　測　図　1（1/2）



第99図　石　器　実　測　図　2（1/3）



第100図　石　器　実　測　図　3（1/3）

表5　石器・土製品計測一覧表　　　単位　cm・g

番号	出土遺構	器種	材質	法量 長(高)	法量 幅(径)	法量 重量	特徴
1	9号住居跡	磨製石鏃	粘板岩	(5.3)	(1.1)	(2.9)	
2	11号袋状竪穴	扁平片刃石斧	流紋岩	(5.7)	1.5	(11.3)	
3	10号住居跡	紡錘車	土製品	1.2	3.9	25.1	
4	25号袋状竪穴	石庖丁	凝灰岩	(5.3)	(1.9)	(7.1)	石庖丁の再利用品か，灰黒色
5	4号住居跡	石庖丁	凝灰岩	(11.8)	6.8	(113)	未製品，1孔のみ，小豆色
6	10号袋状竪穴	石庖丁	凝灰岩	(6.2)	(4.7)	(21)	完成品
7	17号袋状竪穴	砥石	硬質砂岩	5.9	1.4	11.4	緻密な石材
8	38号袋状竪穴	扁平片刃石斧(?)	安山岩(?)	(7.35)	1.45	(14.5)	砥石とも考えられる
9	2号住居跡	砥石	硬質砂岩	6.9	2.7	54.9	緻密な石材
10	74号袋状竪穴	石錘(?)	蛇紋岩	6.4	5.7	86.6	
11	7・8号袋状竪穴	石庖丁	凝灰岩	(11.7)	(11.2)	(213.6)	小豆色
12	21号袋状竪穴	剥片	凝灰岩	11.5	8.1	118.3	小豆色
13	14号袋状竪穴	抉入石斧	頁岩	(10.7)	3.9 2.4	(160)	
14	34号袋状竪穴	抉入片刃石斧	頁岩	15.0	4.1 2.6	(273)	
15	24号袋状竪穴	太型蛤刃石斧	玄武岩	(10.5)	4.2	(565)	
16	24号袋状竪穴	太型蛤刃石斧	玄武岩	(10.6)	7.2	(671.7)	
17	46号袋状竪穴	扁平蛤刃石斧	玄武岩	(12.2)	(5.2)	(224.7)	
18	63号袋状竪穴	磨石	花崗岩	9.0	8.3	437	
19	48号袋状竪穴	凹石	蛇紋岩	10.0	(8.9)	430	
20	3号住居跡	石錘	蛇紋岩	9.8	3.0	98.1	粗い石材
21	6号袋状竪穴	砥石	砂岩	(9.7)	6.5	(390)	緻密な石材，中砥用
22	10号住居跡	砥石	砂岩	(10.2)	(5.6)	(173)	荒砥用
23	8号住居跡	砥石	砂岩	(7.8)	(5.8)	(214)	緻密な石材，中砥用
24	45号袋状竪穴	石皿	流紋岩	(11.6)	10.8		緻密な石材
25	43号袋状竪穴	石皿	砂岩	(9.3)	(15.8)		硬質
26	8号住居跡	石皿	砂岩	(15.1)	(14.6)		硬質，緻密な石材
27	8号住居跡	石皿	流紋岩	(18.8)	(17.6)		硬質，極めて緻密な石材

(　) 内数値は現存値である。

石庖丁（第98・99図）

４点が出土している。４は小片で，条溝が走る。条溝の断面はＵ字状を呈し，摩った痕跡が認められる。刃部には使用痕が認められず，欠損品を再利用したものであろうか。５は研磨工程に入った未製品である。背部は浅い弧を描き，その中心に１孔を穿とうとしている。刃部はおおむね研ぎ出されている。研磨痕が細い条痕となって認められる。６は完成品である。薄手のもので，背部は直線状をなすものであろう。11は大型のもので，体部長とあまり差のない，幅２cmほどの柄がつく。厚手のものである。欠損品で，使用中に壊われたのであろうか，7号と８号袋状竪穴から出土したものが接合された。

扁平片刃石斧（第98図）

２点出土している。２は小型のもので欠損品である。よく研磨されている。８は一端が欠損するもので，石材も異質なものである。中央部がやや窪み，小型の砥石とも考えられる。

抉入片刃石斧（第99図）

２点が出土する。13は欠損品の再利用品であろうか。折損面はよく研磨し，やや鈍い刃部をつくっている。抉り部は非常に浅く，器面には調整剥離痕が残っている。14は完成品で，側面の剝離したものである。丁寧に研磨されたもので，抉り部はやや浅く，Ｕ字状をなす。

太型石斧（第99図）

太型蛤片石斧（15・16）と扁平なもの（17）とがある。15・16は欠損品で玄武岩製である。器面の風化が著しい。17も欠損品である。恐らく短冊型をなすものである。刃部は使用により刃こぼれしている。体部はよく研磨されている。

砥石（第98・100図）

小型のもの（７・９）とやや大きなもの（21～23）がある。前者は手持ち用か。７は硬質の砂岩製で，全面が砥面となり，一部は浅い溝状に摩られている。９は全面が砥面となる。一端が薄くなるもので，よく使用されたものである。仕上げ用砥石であろう。21～23は目の細い砂岩である。21は断面Ｕ字状をなす溝状の幅広い窪みが３条あり，何か丸味のあるものを研磨したものであろうか。22は一端が薄くなり，かなり使用されているようだ。23は砥石の一部である。表裏面が砥面となる。細く短い条痕が数条入っている。

石皿（第100図）

４点出土している。いずれも硬質砂岩製で，緻密な材質である（24～27）。27のほかは，中央が窪み，薄くなっている。27は他と較べ石材の色調がやや異り，断面形態も相異がみられるので，砥石の可能性がある。

磨石（第99図）

１点出土している（18）。花崗岩の目の粗いものを使用している。側面は器肌が荒れている。表裏面を使用している。

凹石（第99図）

1点が出土している（19）。よく研磨された平坦面の中央に敲打によってつくられた凹みがある。石材は蛇紋岩を使用し，風化により全体にもろくなっている。

石錘（第98・100図）

2点出土しているが，相異する形状をなす（10・20）。10は円形をなすもので，4個所に数条の刻目あるいは敲打痕が認められる。器面はよく研磨されている。20は長い自然礫を使用したもので，上下端を若干磨いており，上端部には浅い刻目を入れている。

5．結　び

ウラン山遺跡は，彼岸原遺跡群とはやや離れた位置に所在し，その間には明星寺川の流れる大きな谷がある。彼岸原の遺跡群を中心とする地域集団を構成する一小集落として存在した遺跡であると思われる。

遺跡は，西から東に延びる丘陵上にあり，最高所は標高約71ｍを測る。遺構は，住居跡や袋状竪穴で構成され，住居跡の数からして小規模な集落であって，弥生時代の前期後葉から中期前半にかけて営なまれたものである。これらの遺構は，細い尾根上に造られており，中期の遺構が西側に多いことから，東から西へ造られていったものと推定される。また，中期中葉以後の遺構が存在しないことから，この時期には生活の場が低地へ移動したことが，この地域でもうかがえる。

弥生時代の前期から中期における丘陵上の遺跡のうち，住居跡や袋状竪穴からなる遺跡は，北部九州ではよく発見されているが，嘉穂地方では，彼岸原の日上遺跡や立岩丘陵の焼ノ正遺跡，下ノ方遺跡，甘木山遺跡と嘉穂町の堂の前遺跡が発掘調査されている。

当遺跡では，住居跡12，袋状竪穴82の弥生時代遺構と土壙墓・石蓋土壙墓各1が発掘された。

住居跡は，1つの方形プランのものを除き，他は円形プランを呈す。方形プランの3号住居跡は，前期に属すものである。柱穴がよくわからず，住居遺構としては不十分なものであるが，そのつくられた位置が，丘陵鞍部で不安定な場所であり，非常に苦心してつくられたものであろうと考えられる。また，住居内の南側は，ベット状の段があり，弥生時代の後期以後の住居跡と同種のベット状施設として解釈してよいものか一考を要す。いずれにせよ前期に属す住居跡でこのような施設をもつものは見聞したことがない。

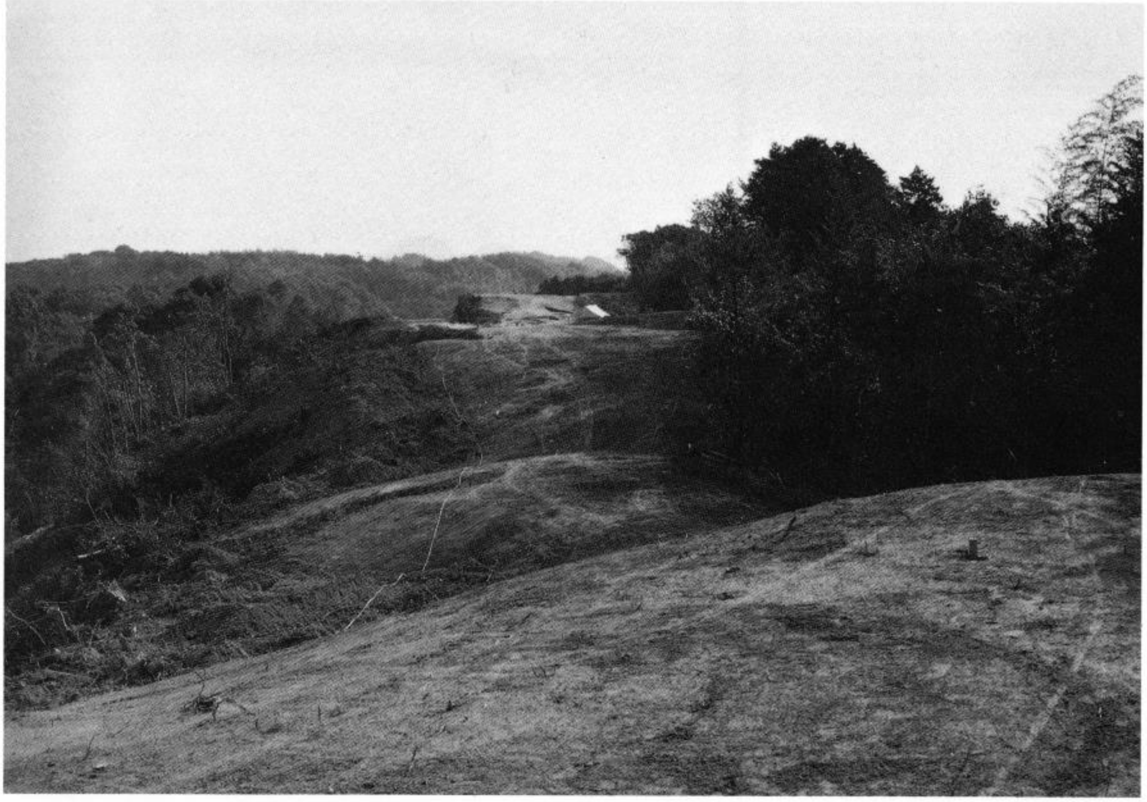
円形プランの住居跡は，大小の2種があるが，大型のものは前期と中期にあり，小型のものは前期に属するものばかりで，前期から中期にかけて住居が大型化することがわかる。前期の住居跡は，4・5号住居跡のように4本柱で，その間隔も一定しているが，中期に入ると平面規模に応じて柱数も増え，6～8本となっている。柱数の増加は，当然梁間の幅を縮め，平面形も多角形化し，より円形に近づくことになり，住居構造の進歩がうかがえる。

袋状竪穴は，貯蔵の用をなすものであるが，その使用方法を具体的に知る資料は得られなかった。袋状竪穴から出土する遺物は少なく，全くないものもあって時期を確定できないものも少なくない。時期を確定できるもののうち，前期に属すものが圧倒的に多く，中期に属すものは少ない。

平面形では，方形プランを呈するもの2基（39・47号）を除けば，全て円形プランを呈す。これらの竪穴は，その構造から崩壊しやすいが，廃棄後には土器等の破損品や焼土・灰等を投げ込むことが多く，当遺跡でも例外ではなかった。

当遺跡の発掘調査では，特に重要な事象の発見はなかったが，一つの丘陵のほぼ全域にわたって調査できた。このことは，弥生時代の前期から中期にかけての生活の場を知る上で貴重であり，嘉穂地方における弥生期の遺跡の立地を知る上でも好資料となると思われる。

この報告が，嘉穂地方はもとより，北部九州の弥生時代文化の研究の一助にでもなれば幸いである。



(1) ウラン山遺跡調査区全景（西から）

(2) 調査区全景（東から）

(1) １・２号住居跡周辺遺構群（東南から）

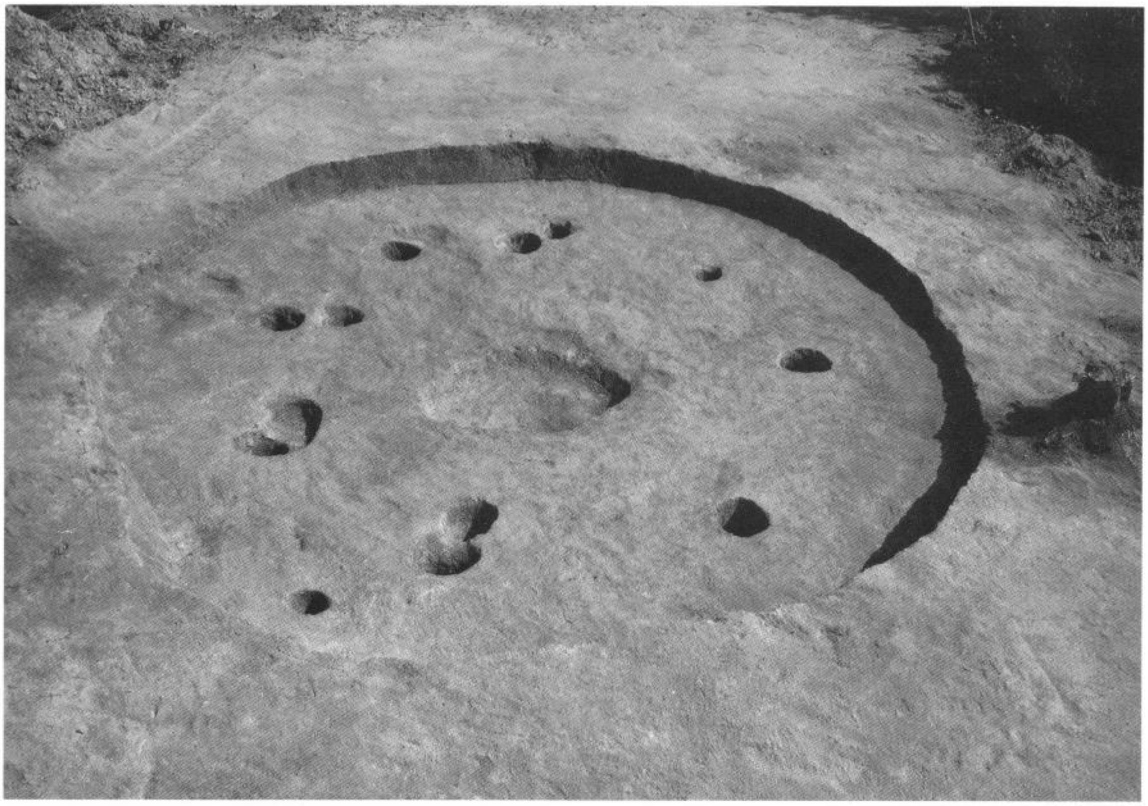
(2) ３号住居跡周辺遺構群（西から）

(1) 5～8号住居跡周辺遺構群（西から）

(2) 9号住居跡周辺遺構群（東から）

(1) 10・11号住居跡周辺遺構群（西から）

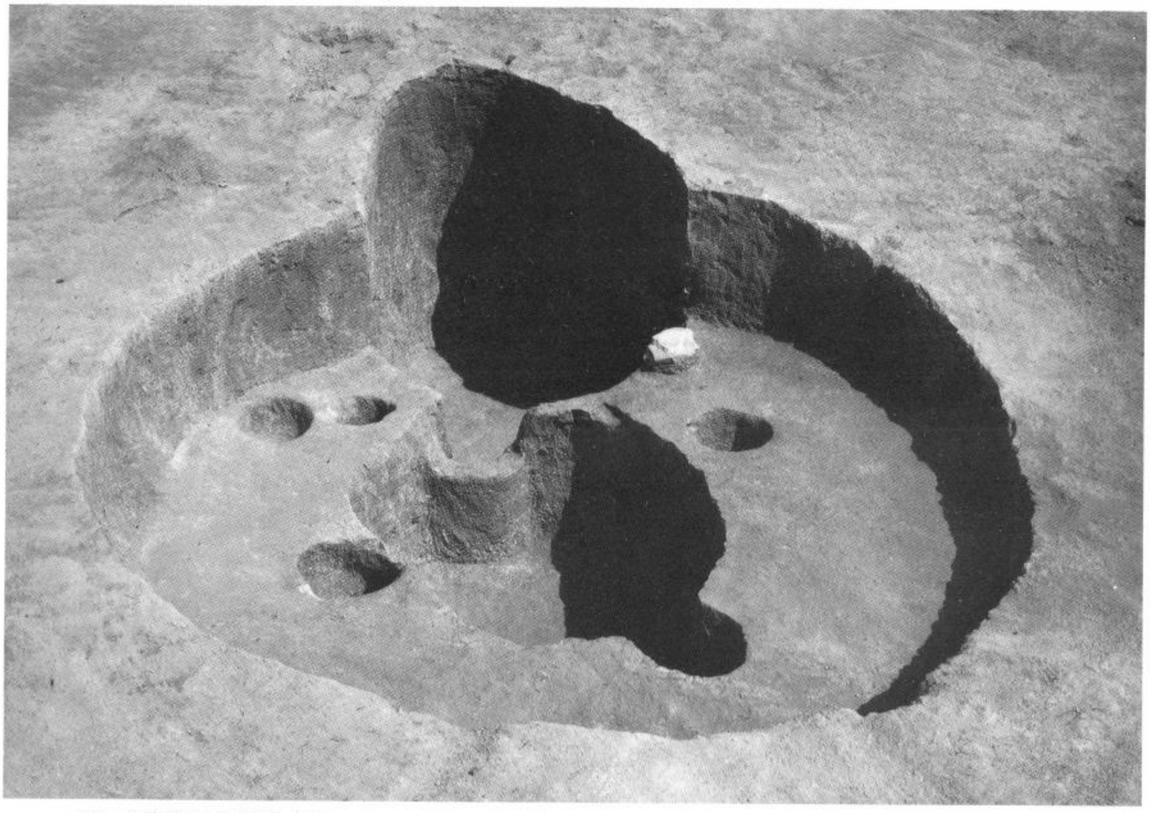
(2) 調査区西端遺構群（東から）



(1) 1号住居跡（北西から）

(2) 2号住居跡（東から）

(1) 3号住居跡（西から）



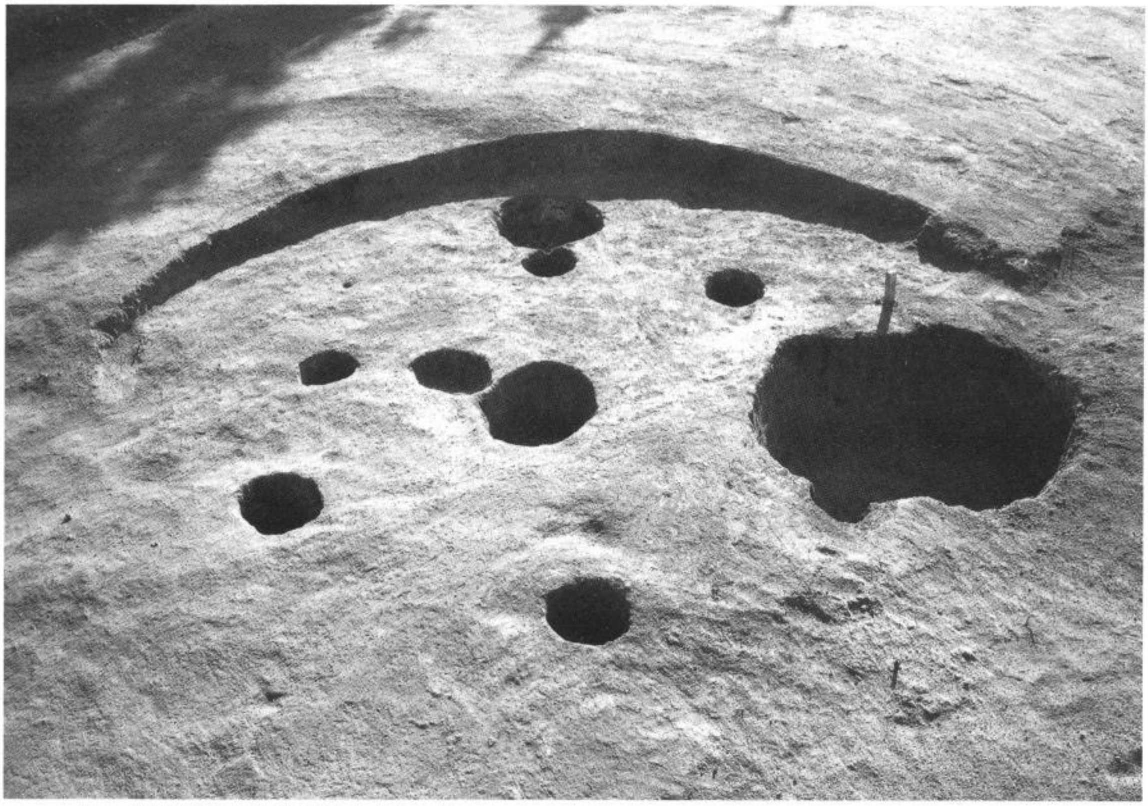
(2) 4号住居跡（南から）

(1) 5号住居跡（南から）

(2) 6号住居跡（東から）

(1) 7号住居跡（南から）

(2) 8号住居跡と32～34号袋状竪穴（西から）



(1)　9号住居跡と37号袋状竪穴（北から）

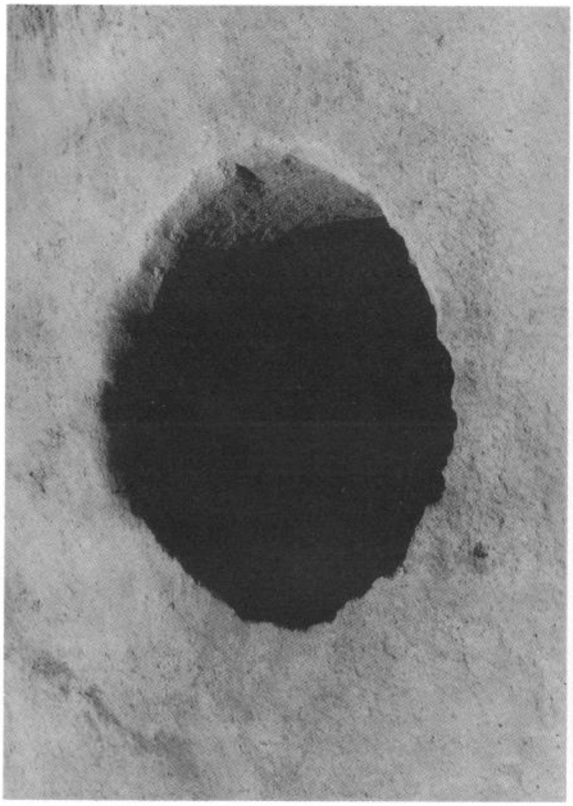
(2)　10号住居跡（西から）

(1)　11号住居跡（西から）

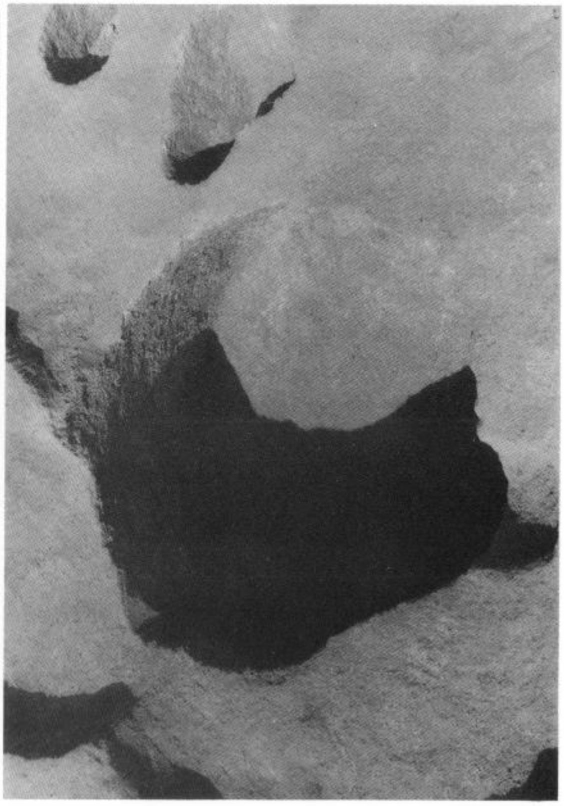
(2)　12号住居跡（東から）

(1) 1号袋状竪穴

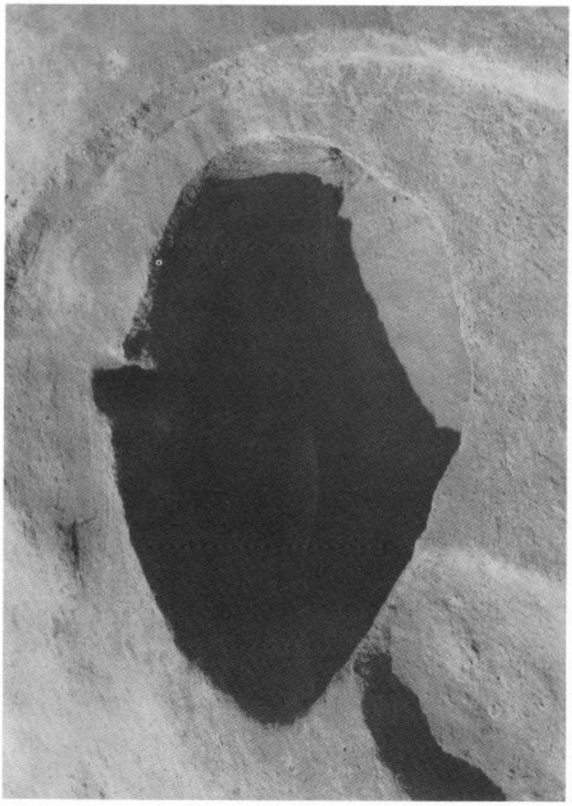
(2) 2号袋状竪穴



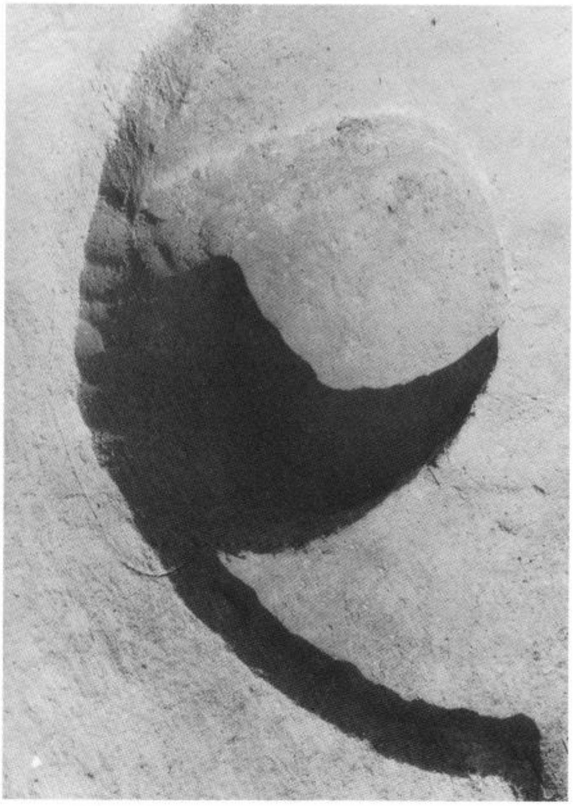
(3) 3号袋状竪穴



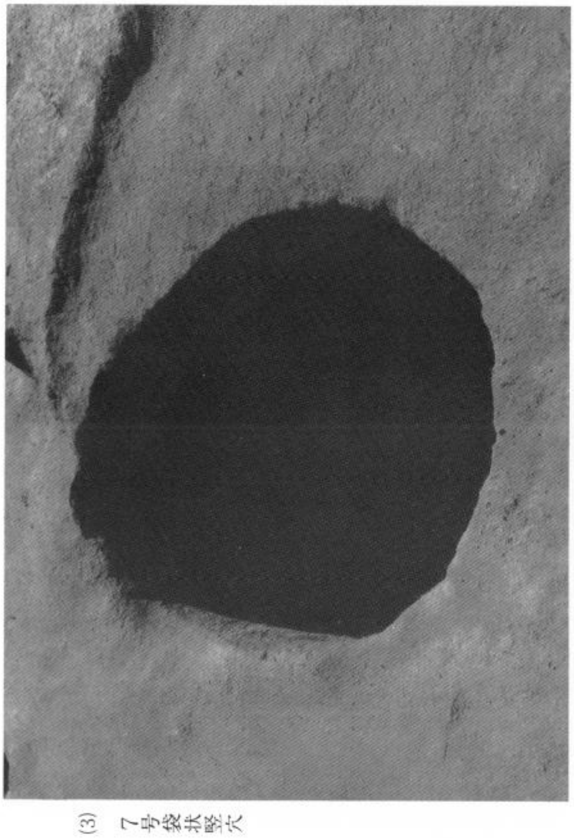
(4) 4号袋状竪穴



(1) 5号袋状竪穴

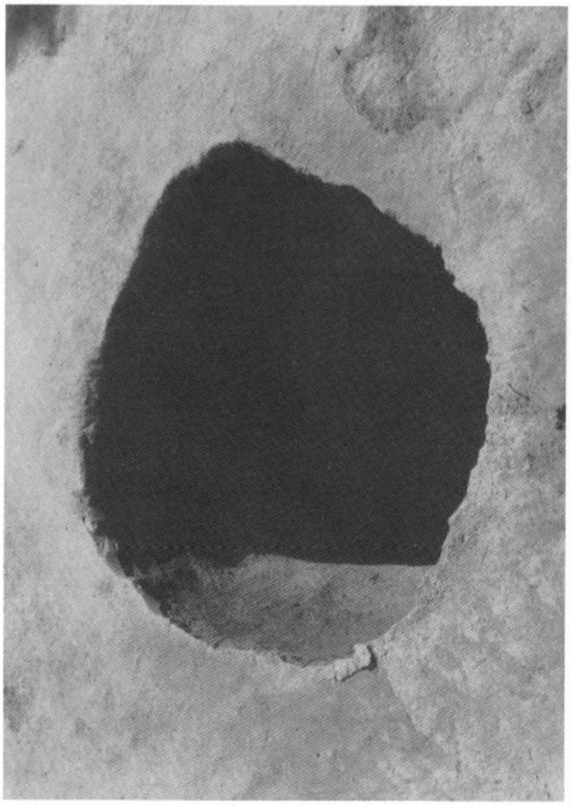


(2) 6号袋状竪穴



(3) 7号袋状竪穴

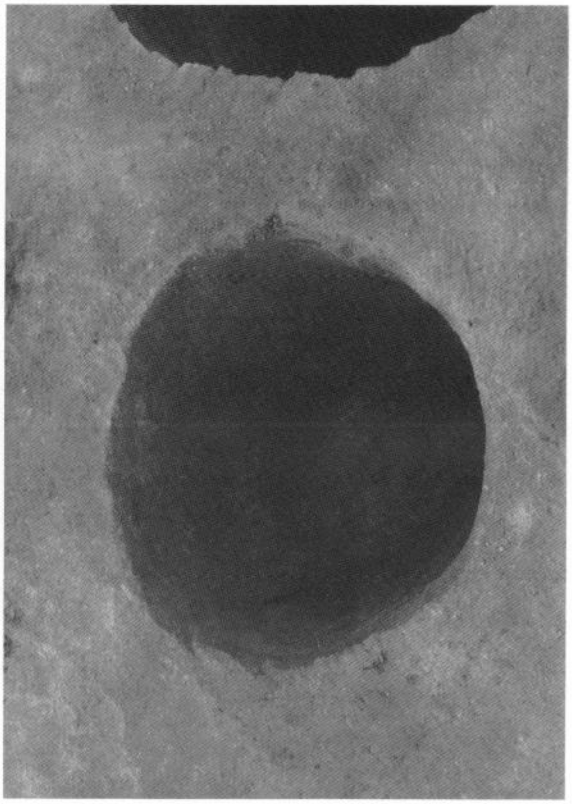
(4) 8号袋状竪穴



(1) 10号袋状竪穴

(2) 11号袋状竪穴

(3) 12号袋状竪穴



(4) 15号袋状竪穴

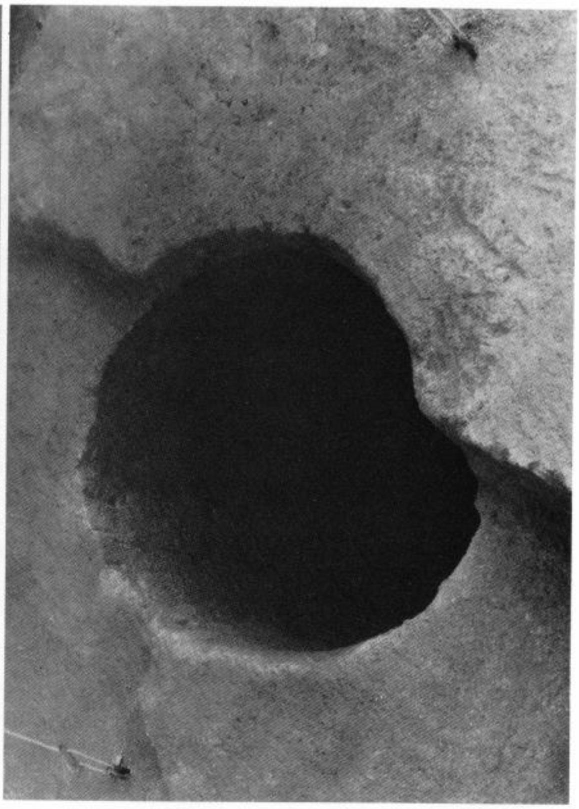
(1) 16号袋状竪穴

(2) 17号袋状竪穴

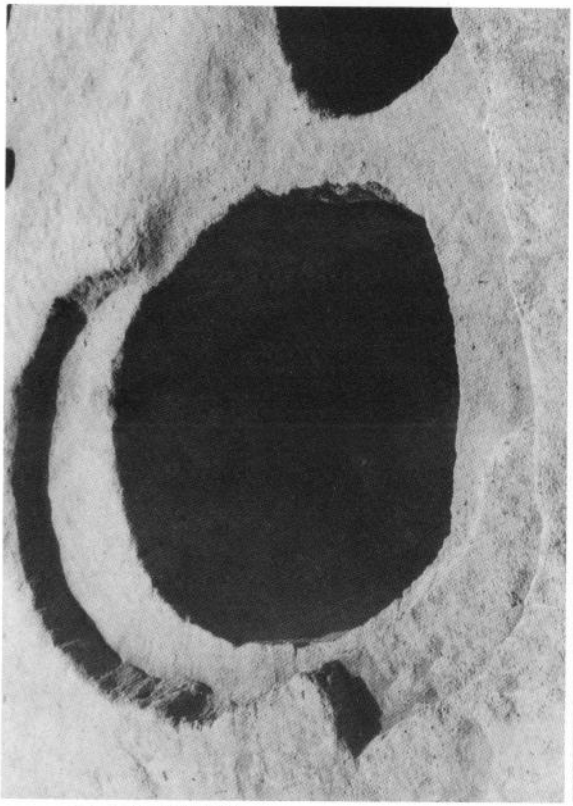
(3) 18号袋状竪穴

(4) 19号袋状竪穴

(1) 21号袋状竪穴

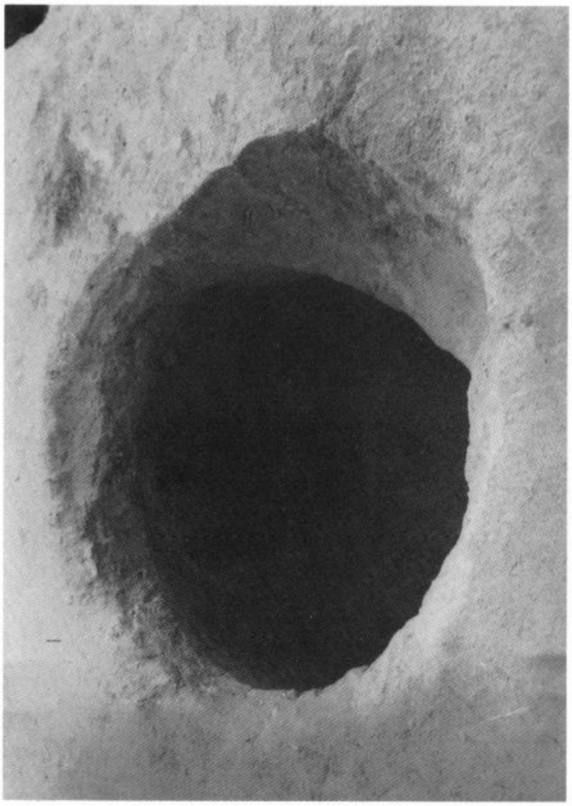


(2) 22号袋状竪穴



(3) 23号袋状竪穴

(4) 24号袋状竪穴



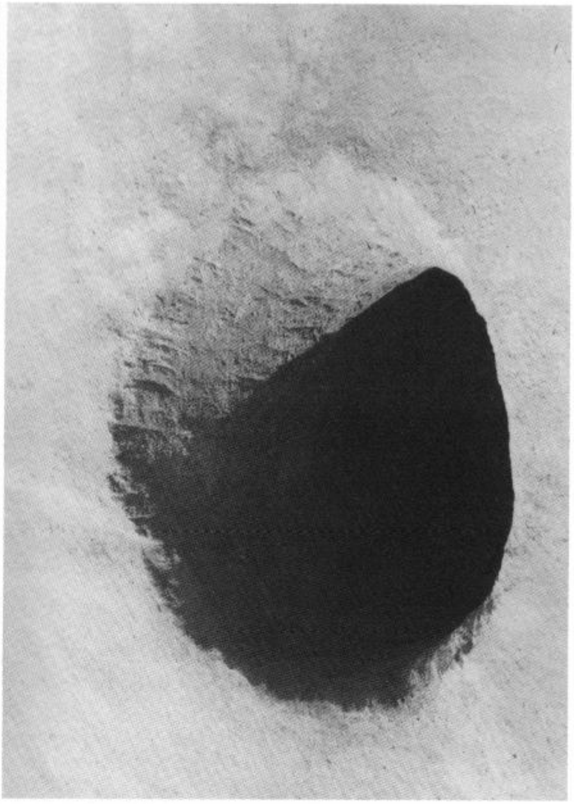
(1) 25号袋状竪穴

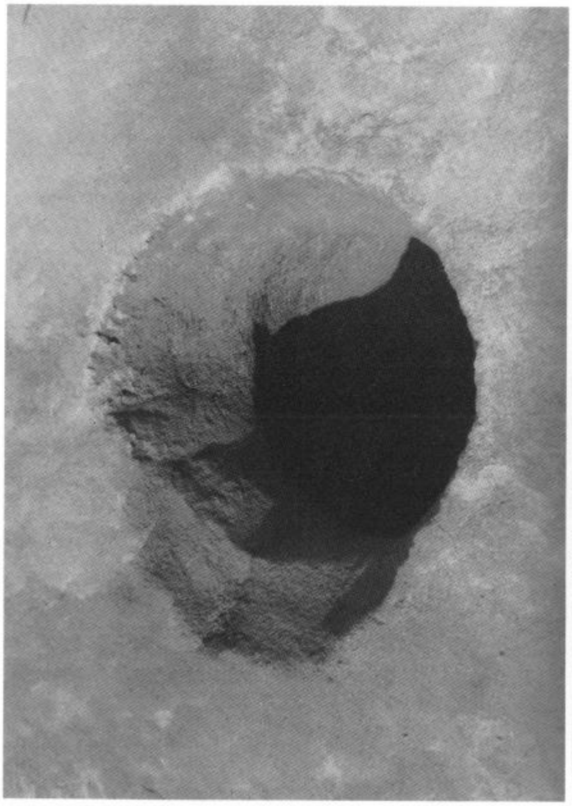
(2) 26号袋状竪穴

(3) 27号袋状竪穴

(4) 28号袋状竪穴

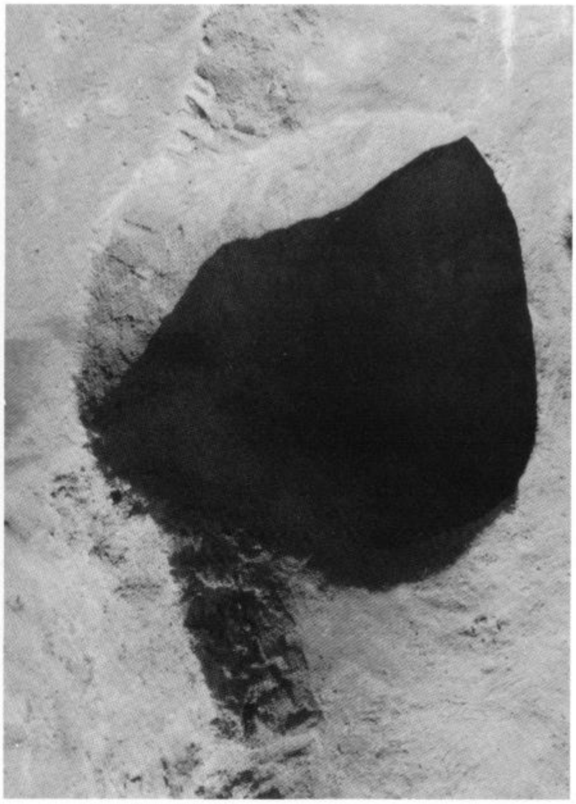
(1) 29号袋状竪穴


(2) 30号袋状竪穴


(3) 31号袋状竪穴

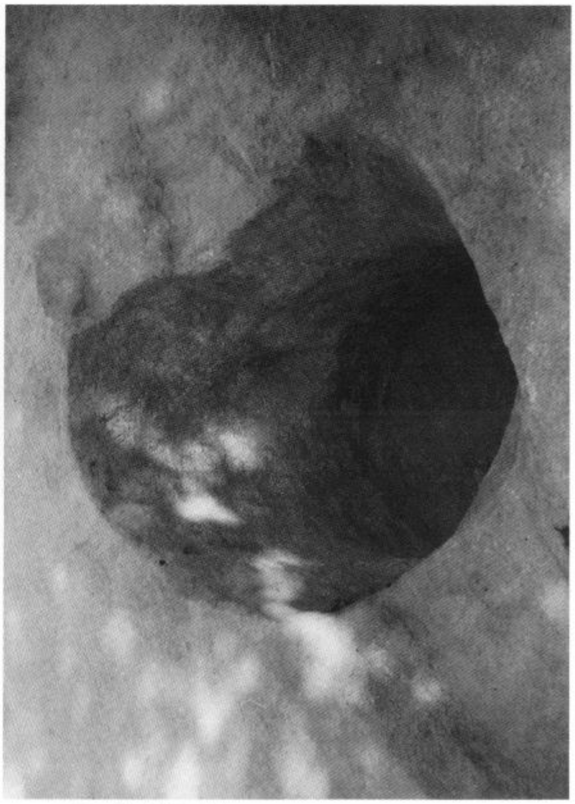
(4) 32号袋状竪穴

(1) 33号袋状竪穴



(2) 34号袋状竪穴

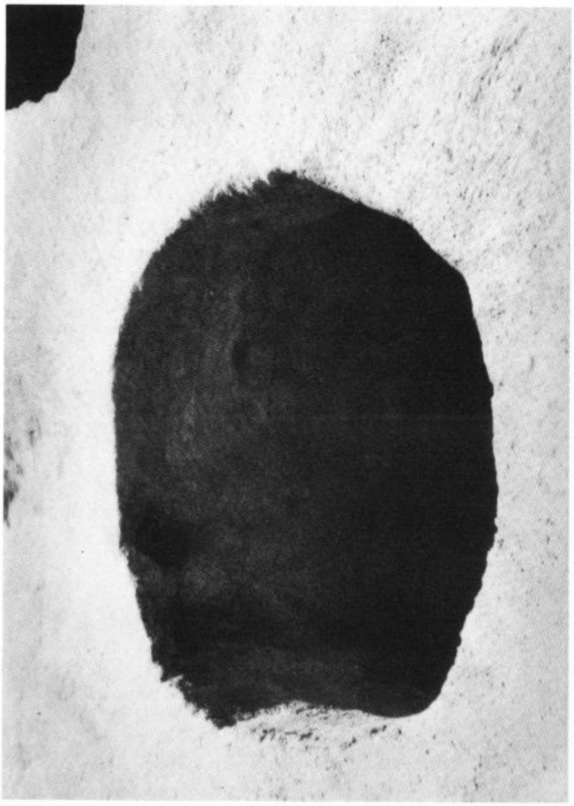
(3) 35号袋状竪穴



(4) 38号袋状竪穴

(1) 39号袋状竪穴

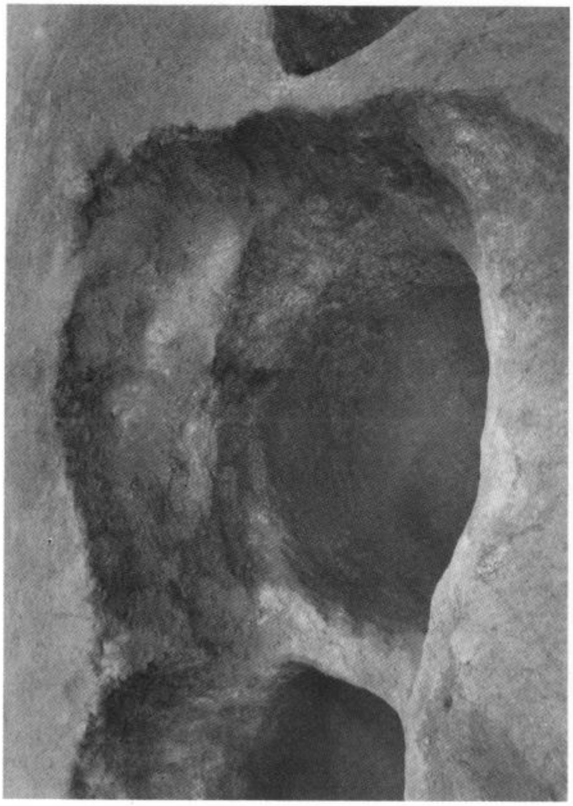
(2) 40号袋状竪穴


(3) 42号袋状竪穴

(4) 43号袋状竪穴

(1) 44号袋状竪穴

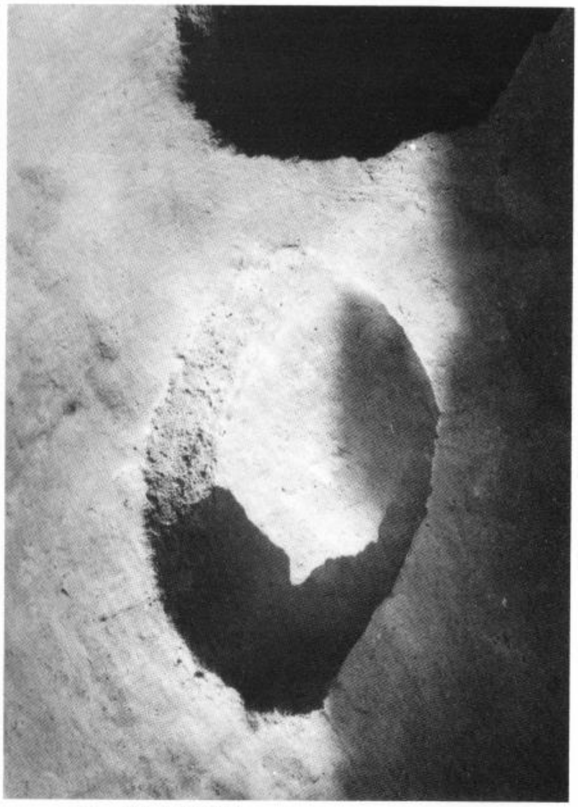
(2) 45号袋状竪穴



(3) 46号袋状竪穴

(4) 47・48号袋状竪穴

(1) 49号袋状竪穴



(2) 50号袋状竪穴

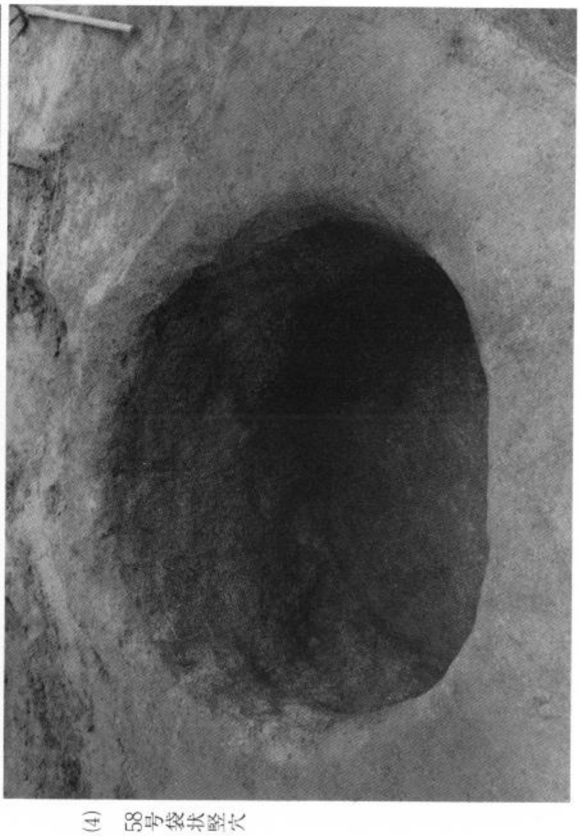
(3) 52号袋状竪穴

(4) 54号袋状竪穴

(1) 55号袋状竪穴

(2) 55・56号袋状竪穴

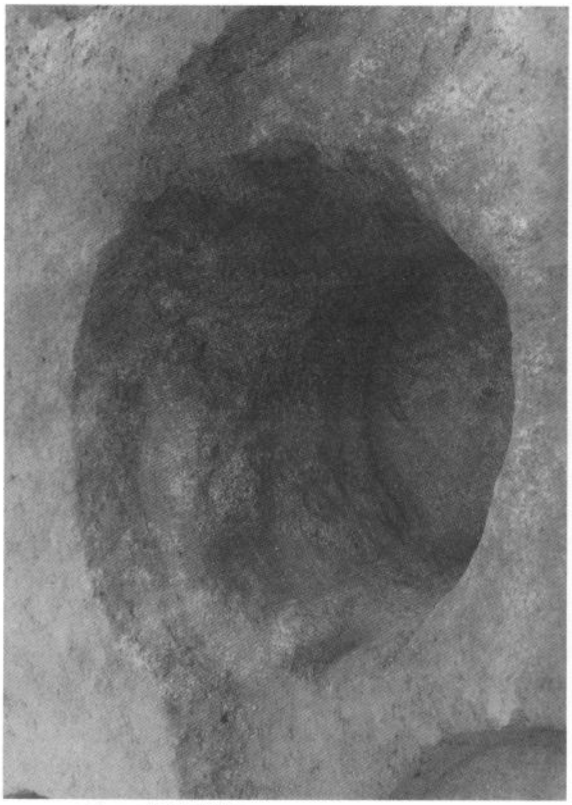
(3) 57号袋状竪穴



(4) 58号袋状竪穴

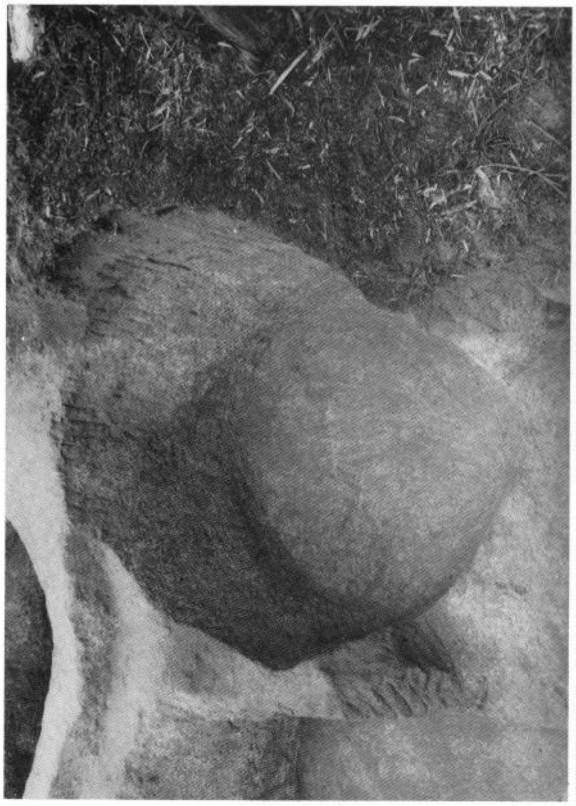
(1) 59号袋状竪穴

(2) 60号袋状竪穴



(3) 61号袋状竪穴

(4) 62号袋状竪穴



(1) 63号袋状竪穴

(2) 65号袋状竪穴

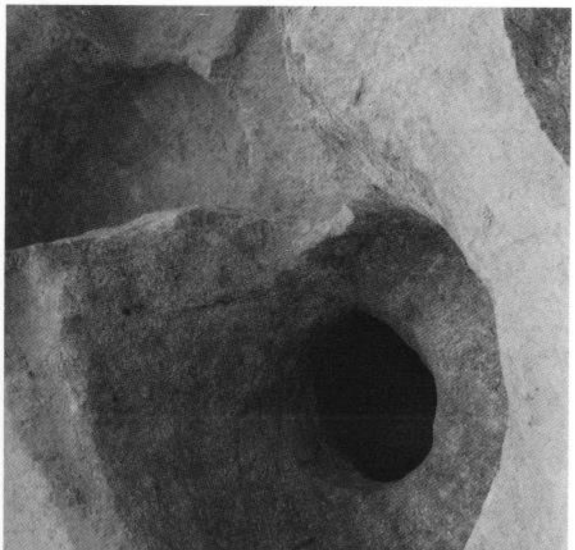
(3) 67・68・73号袋状竪穴

(4) 69号袋状竪穴

(1) 70号袋状竪穴

(2) 71号袋状竪穴

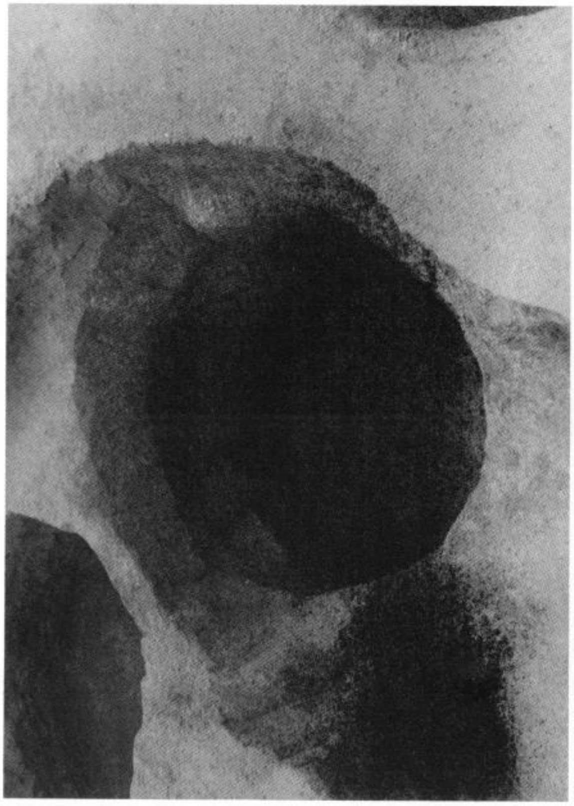
(3) 73号袋状竪穴



(4) 74号袋状竪穴

(1) 75号袋状竪穴

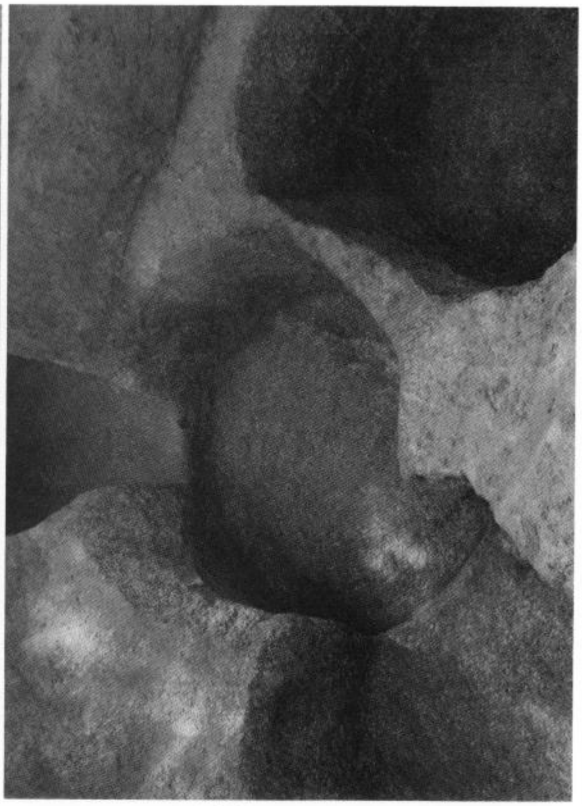
(2) 77号袋状竪穴



(3) 78号袋状竪穴

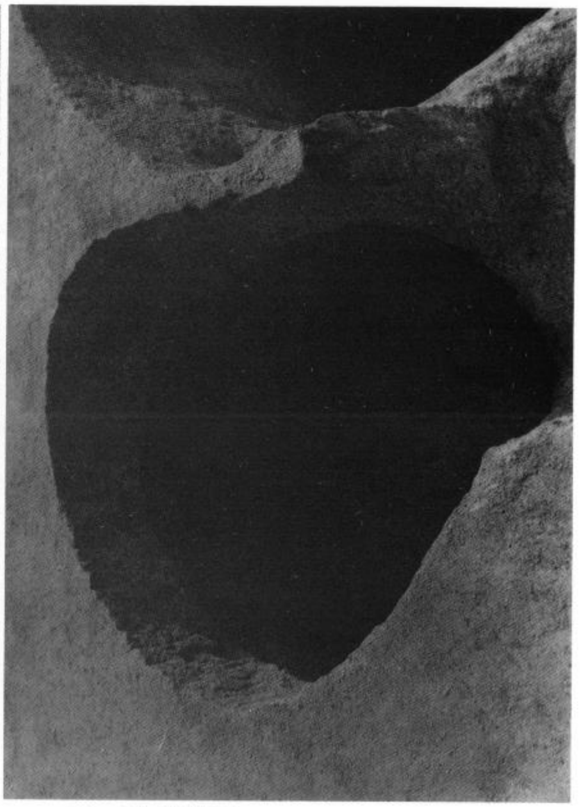
(4) 79号袋状竪穴

(1) 80号袋状竪穴

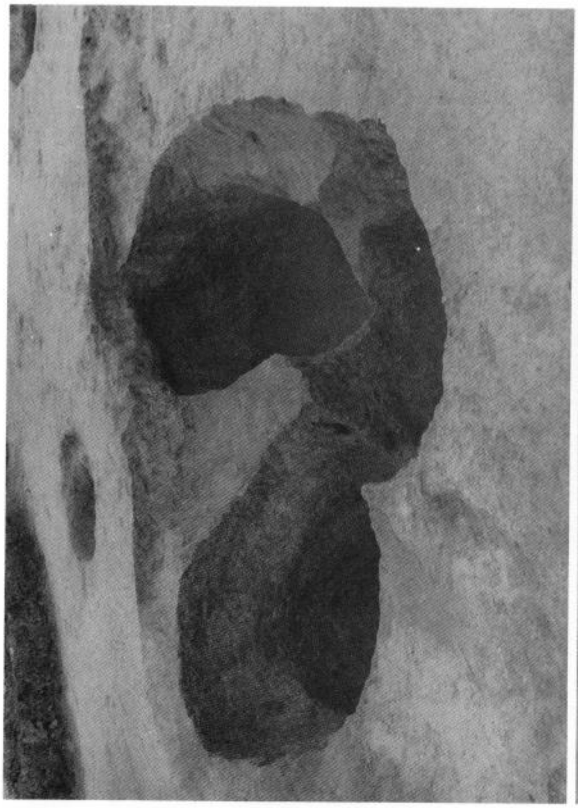


(2) 81号袋状竪穴

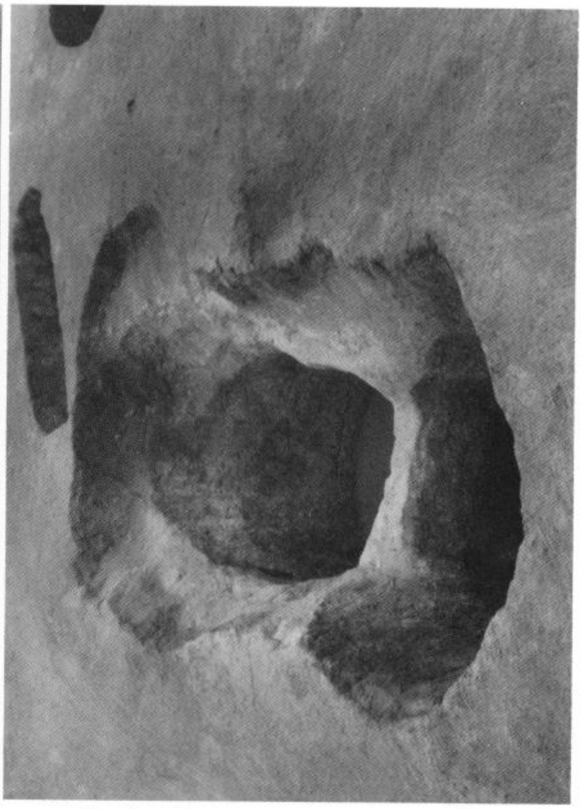
(3) 82号袋状竪穴



(4) 83号袋状竪穴

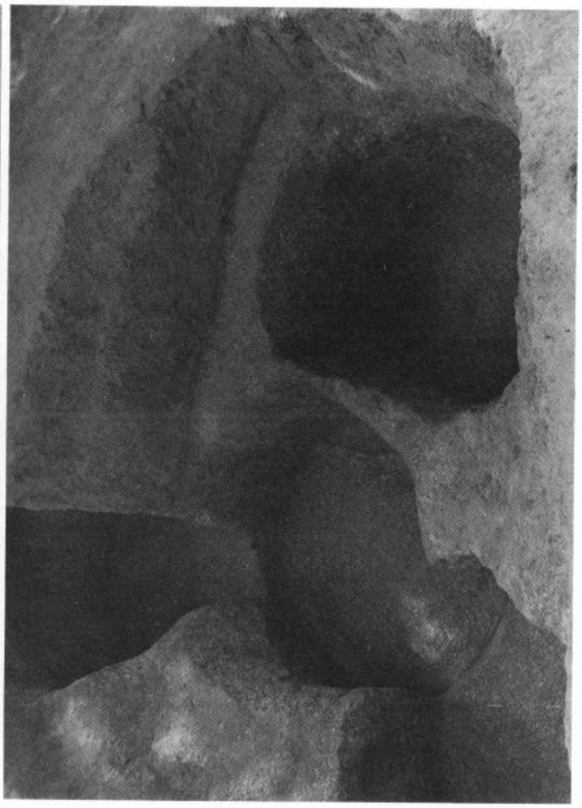


(1) 28・29・35号袋状竪穴



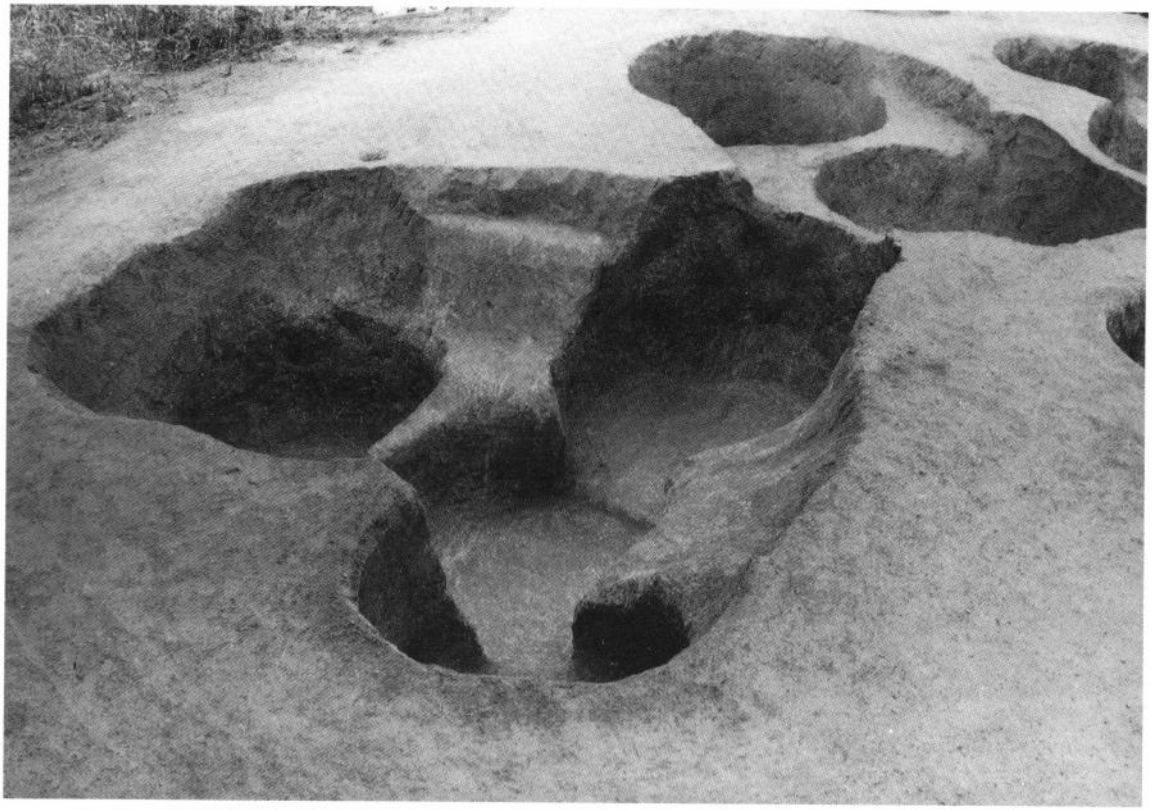
(2) 45・46号袋状竪穴

(3) 76－79号袋状竪穴



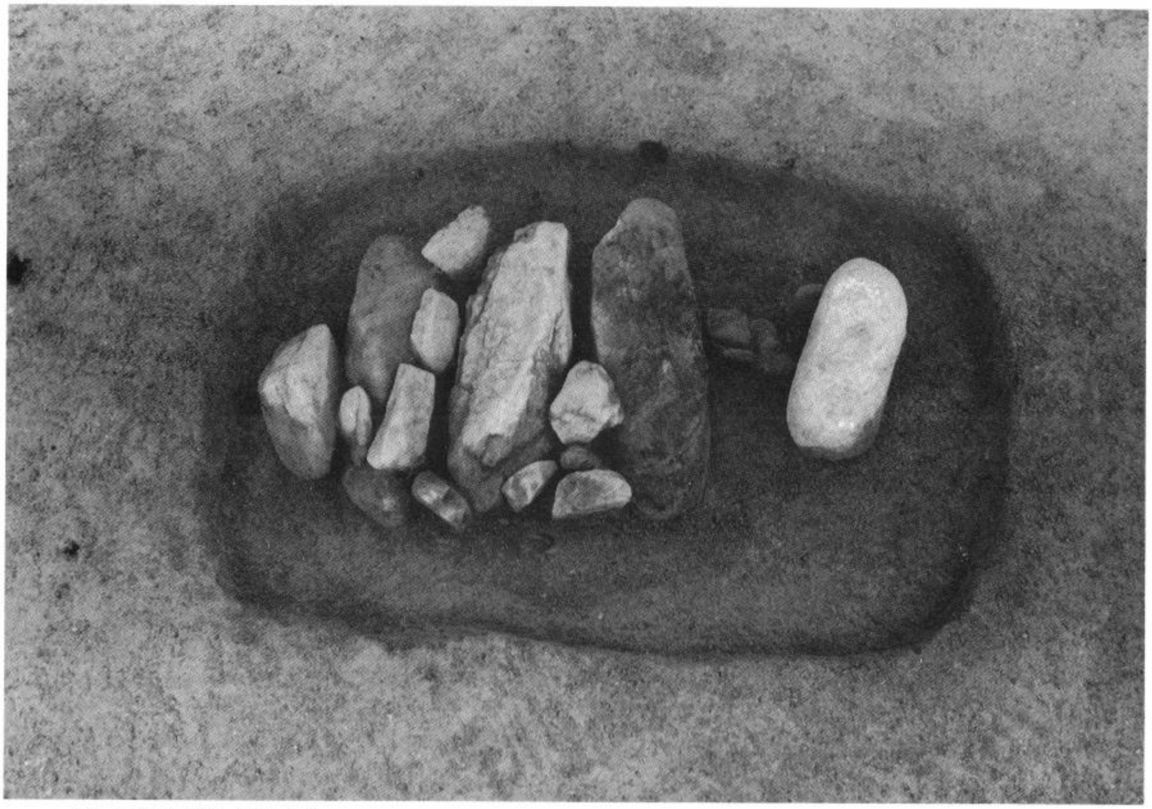
(4) 81・82号袋状竪穴

(1) 55～61号袋状竪穴群（南西から）

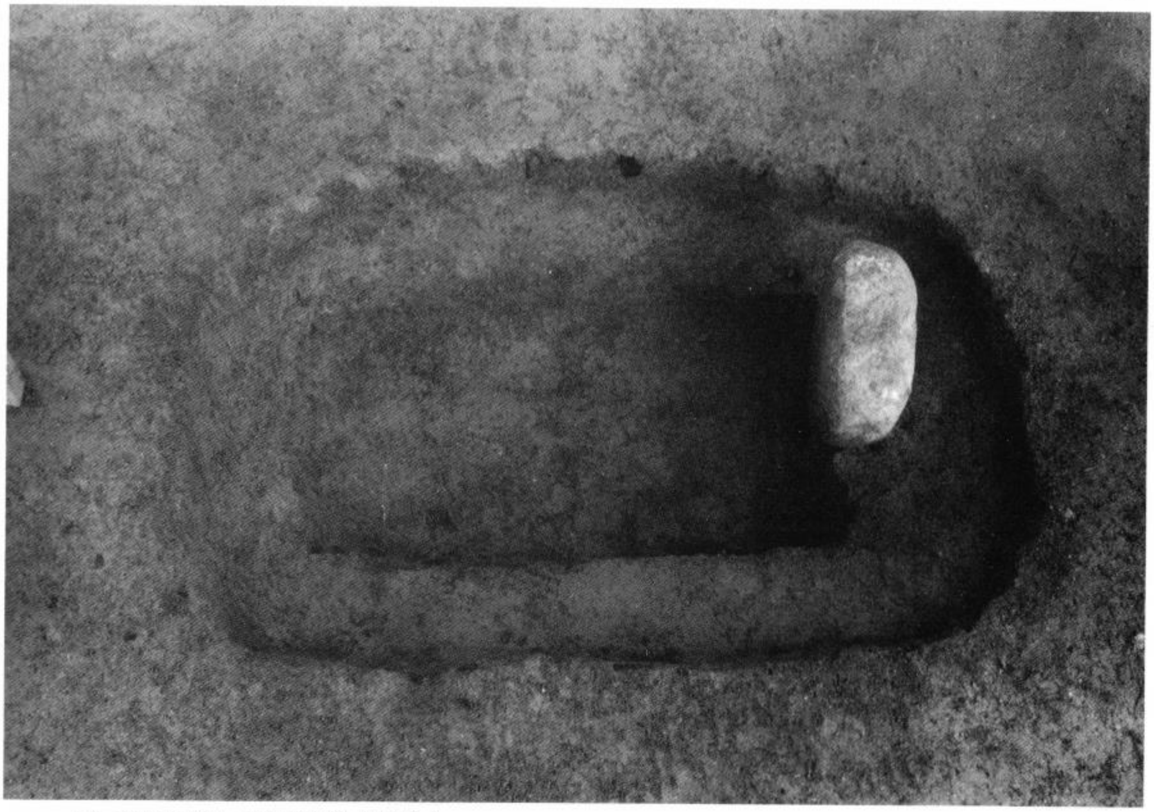


(2) 75・80～82号袋状竪穴（南東から）

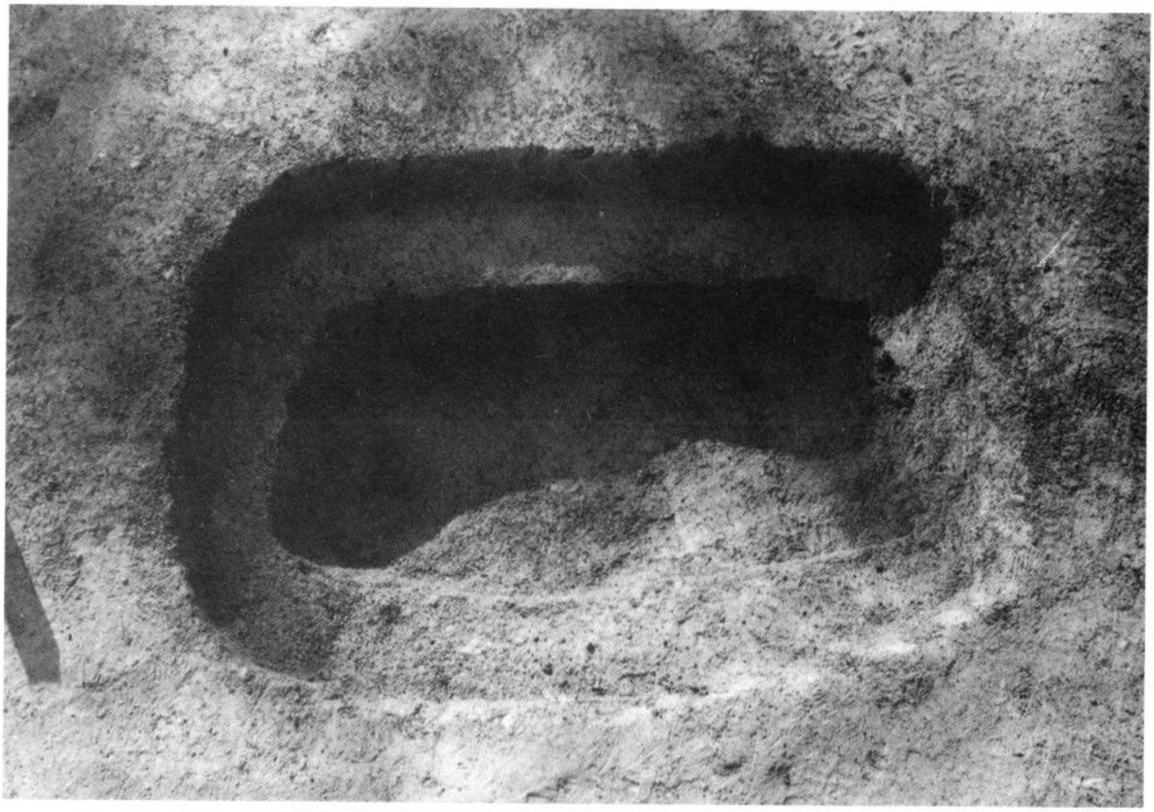
(1) 土壙墓（南から）



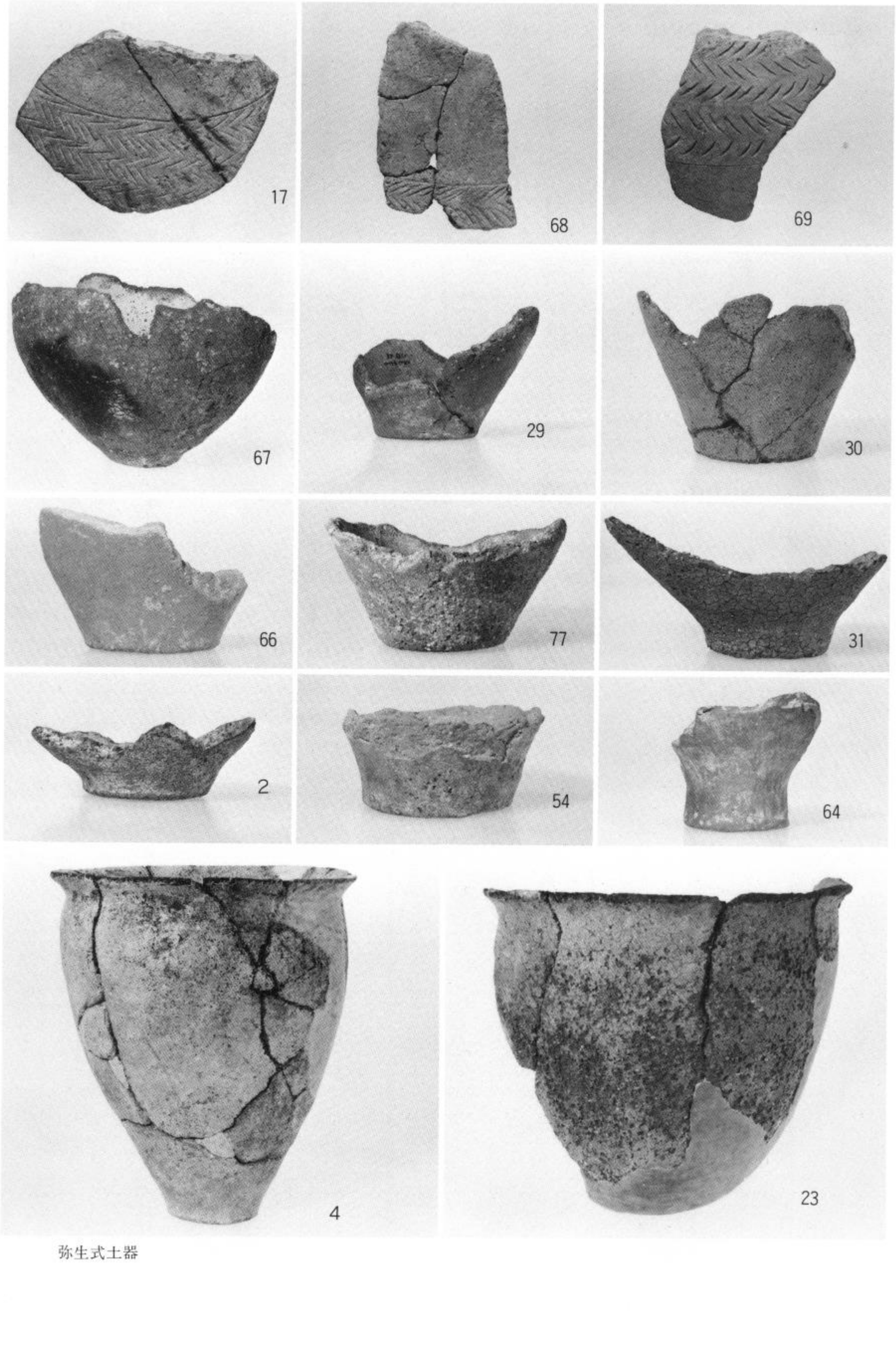
(2) 石蓋土壙墓（南から）



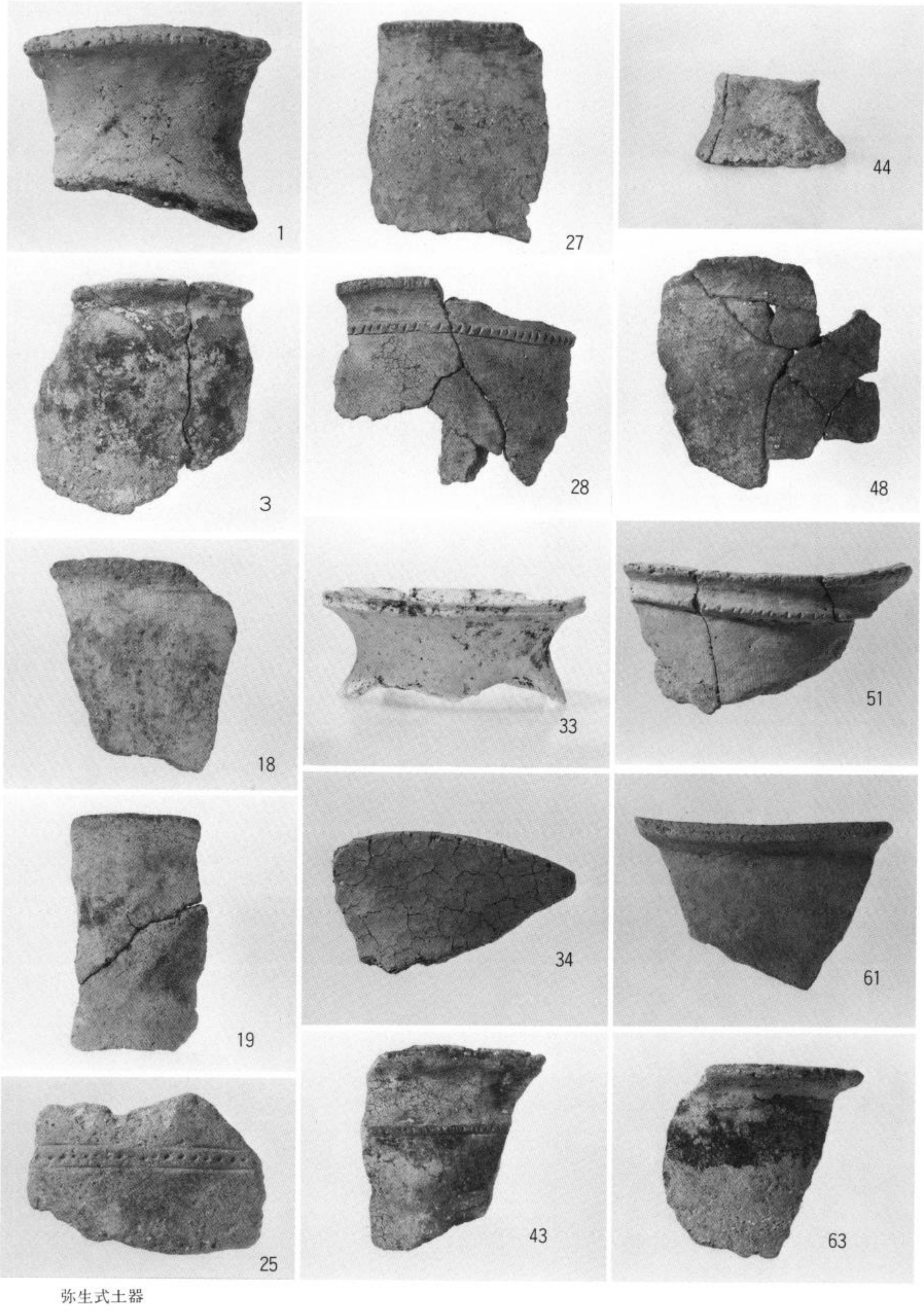
(1) 石蓋土壙墓・石蓋除去後（南から）



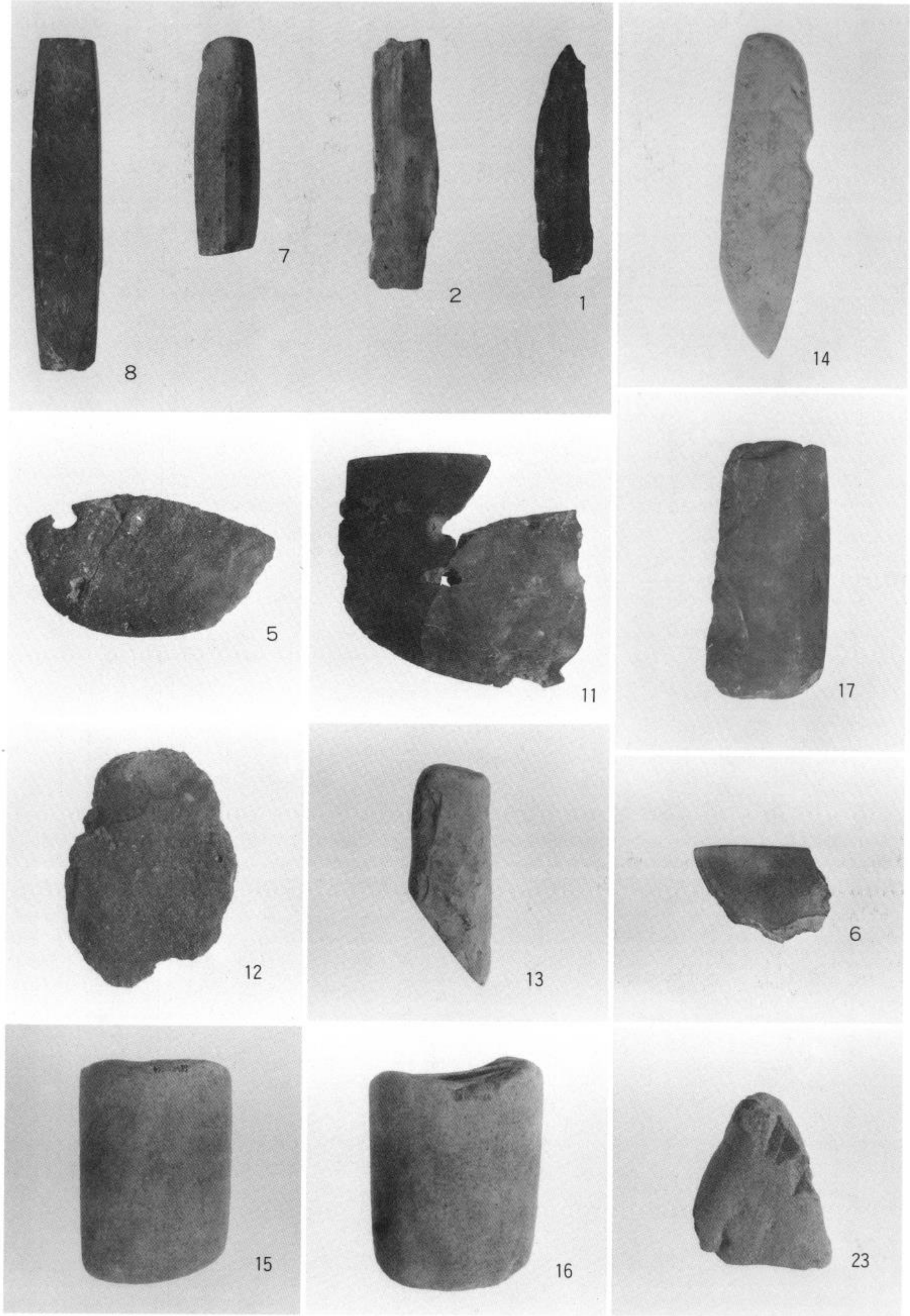
(2) 石蓋土壙墓・石材除去後（北から）



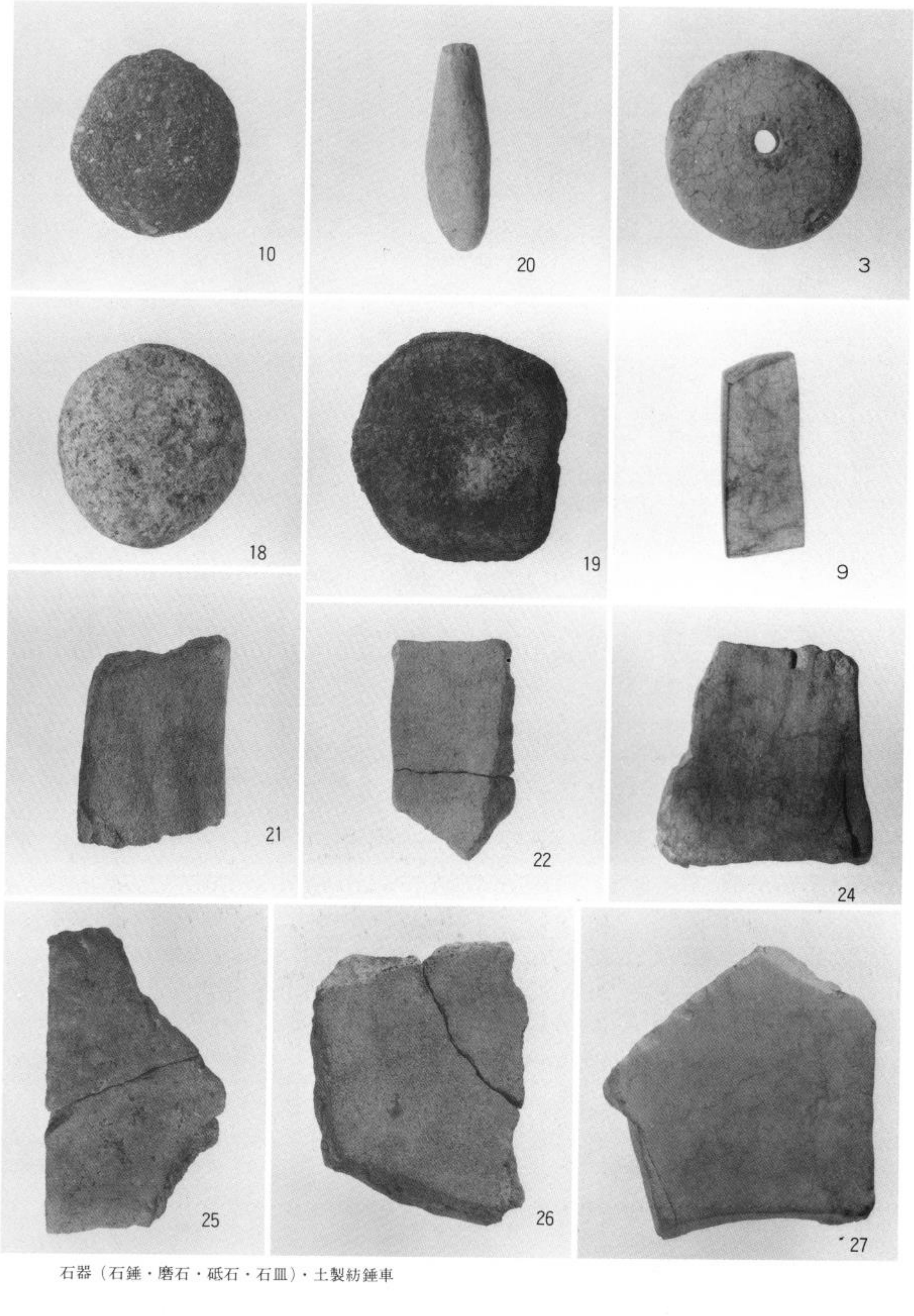
弥生式土器



弥生式土器



石器（石鏃・石庖丁・石斧・砥石）



石器（石錘・磨石・砥石・石皿）・土製紡錘車

付．穂波町所在長浦横穴の調査

付. 穂波町所在長浦横穴の調査

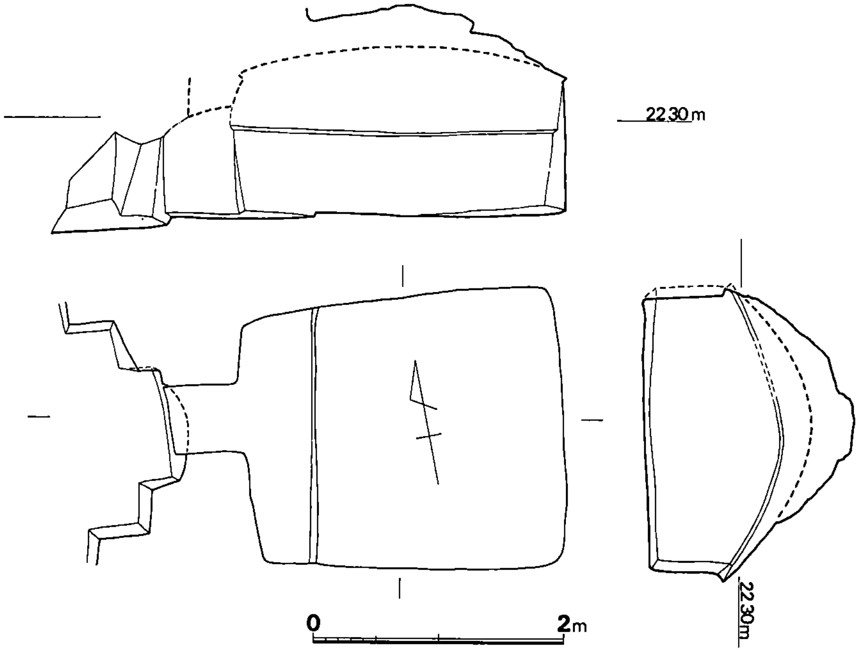
所在地：嘉穂郡穂波町大字枝国字長浦

1. はじめに

当横穴群の調査は，穂波町当局による町道拡幅工事に起因する。

昭和57年6月に，町道拡幅工事現場で横穴が崖面に露出しているとの報が福岡県文化課に入った。県文化課では穂波町教育委員会に連絡をとるとともに，調査第一係主任技師酒井仁夫と同技師伊崎俊秋の両名が6月30日に応急調査をするところになった。

すでに削られた崖の法面には数基の横穴の存在を認めたが，大半は玄室にまで削平が及ばないものであり，結果的に1基（1号横穴）を調査したにすぎない。1号横穴の周辺には，少なくとも10基は存するものと思われた。



第101図　長浦横穴実測図（1/60）

2．遺構と遺物

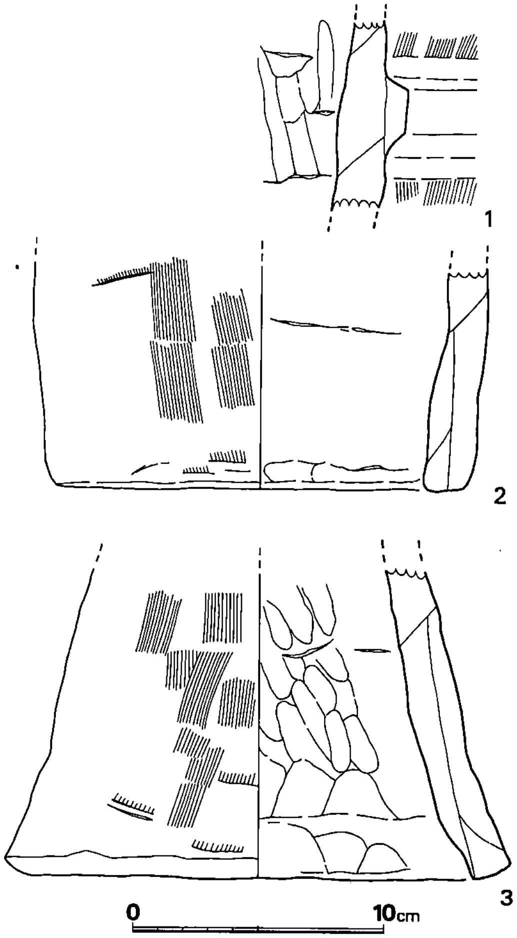
遺構（第101図）

主軸をS—79°—Eにとり西に開口している。主軸長2.5m，奥壁幅2.2m，前壁幅1.9mの羽子板状プランをなす。玄室は寄棟造の家形をなすもので，いま天井の一部が崩落しているものの，もとは整美なものであったと思われる。玄門から0.6m程奥壁側にあまり大きくない段を有する。周壁下に溝はみられない。

羨道は長さ0.6m，幅0.5m強の短簡なものである。前庭部は羨道との間に段をもって，平面が凸形に墓道へと開く。墓道はすでに削平されていて明確にできなかった。

遺物

玄室埋土中および羨道付近より円筒埴輪片が出土しており，最低2個体分はある。また，銅釧・玉類・鉄器が玄室より出土した。いずれも原位置を留めるものではない。



第102図　長浦横穴出土埴輪実測図（1/3）

埴輪（第102図）

1～3とも外面は縦刷毛目を施し，部分的になでる。突帯周辺は横ナデ。内面はナデにて調整する。胎土はやや粗く，焼成はふつう。淡褐色を呈する。復原の底径が1は16cm，3は17.5cmを測る。

装身具（第103図）

銅釧　約¼を欠失するが，復原径69.0mmを測る。断面形は長径3.8mm，短径3.2mmの卵形を呈し，外縁が尖り気味となる。一部に錆が吹き出ているものの残存状態は良好で，錆のない所は赤銅色を呈する。

管玉　（1～3）　碧玉製であるが，1・2については風化著しく白っぽくなる。

ガラス玉（4～52）　全部で50個以上あるが詳細は第6表を参照されたい。

鉄器

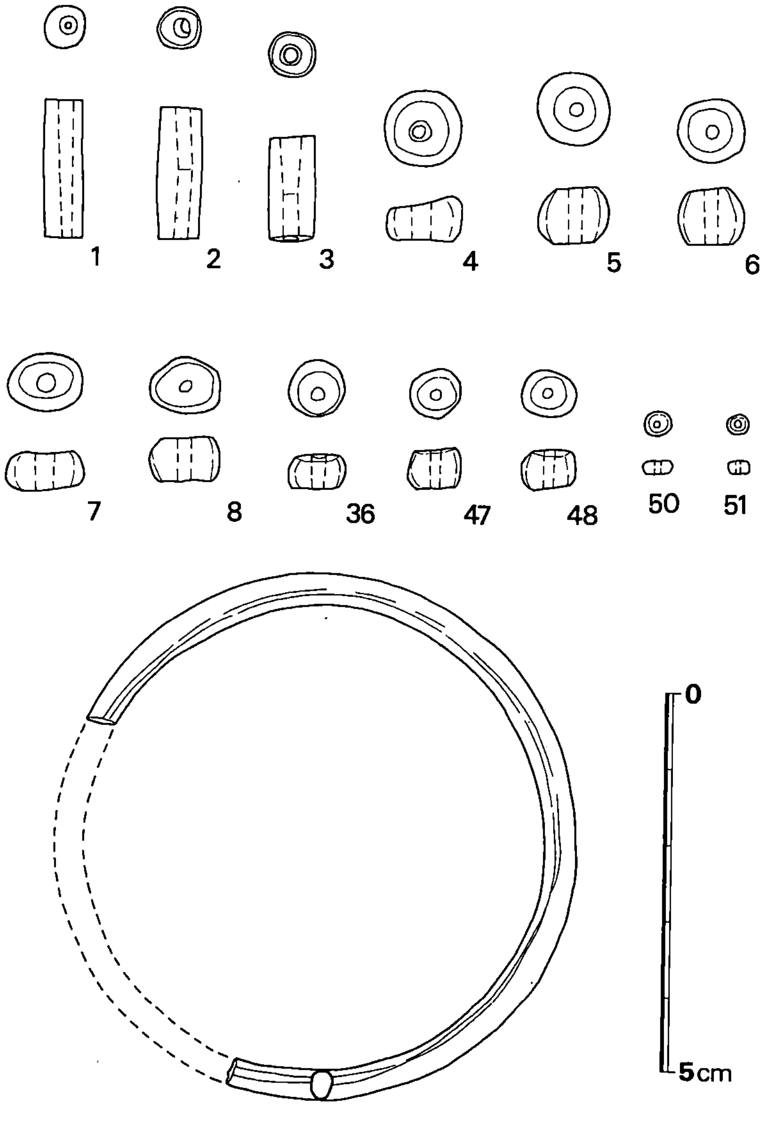
鏃（1～4）

いずれも破片で完形品はない。形態的には3種類がある。1の現存長9.6cm。

3．小　結

この長浦横穴群は1基のみを応急に調査したもので，全体の横穴群の広がりや群構成等については皆目わからないし，周辺を踏査する余裕もなかったから，全くこの1基のみについてしか言及できない。以下に気づいた点などを記し，まとめとしよう。

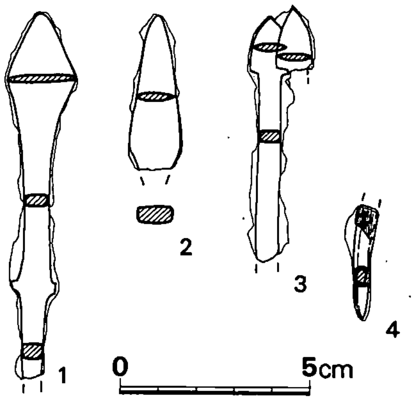
まずこの1号横穴の築造時期については，須恵器・土師器が出土していないので決め手に乏しいが，円筒埴輪がこの横穴に伴なうものであるならば，田川郡大任町狐塚古墳群出土（註1）のものと類似しているので，ほぼ同じ頃の所産としてよかろう。大略6世紀後半代の築造と考える。



第103図　長浦横穴出土玉類実測図（1/1）

横穴から埴輪が出土したことについては，それがプライマリーな状態で検出されたものでないことを考慮すると，次の二つが考えられる。一つは，横穴の造られた丘陵頂部に古墳が存しその古墳に巡らされていた埴輪が転落して横穴内に入りこんだとするもの。もうひとつは，も

ともと横穴自体が埴輪を副葬にしろ供献にしろ有していたとするものである。この長浦1号横穴の場合は丘陵頂部に埴輪を持つ古墳が存したかどうかは定かでない。田川市蛍ヶ丘横穴群(註2)でも横穴墓道から埴輪の出土がみられる。いまのところ横穴墓自体が埴輪を有するという明確な事例は見られないが，当長浦1号横穴，蛍ヶ丘横穴群はその可能性を持つものである。



第104図 鉄器実測図 (1/2)

註1．大任町教育委員会『狐塚古墳群』1976

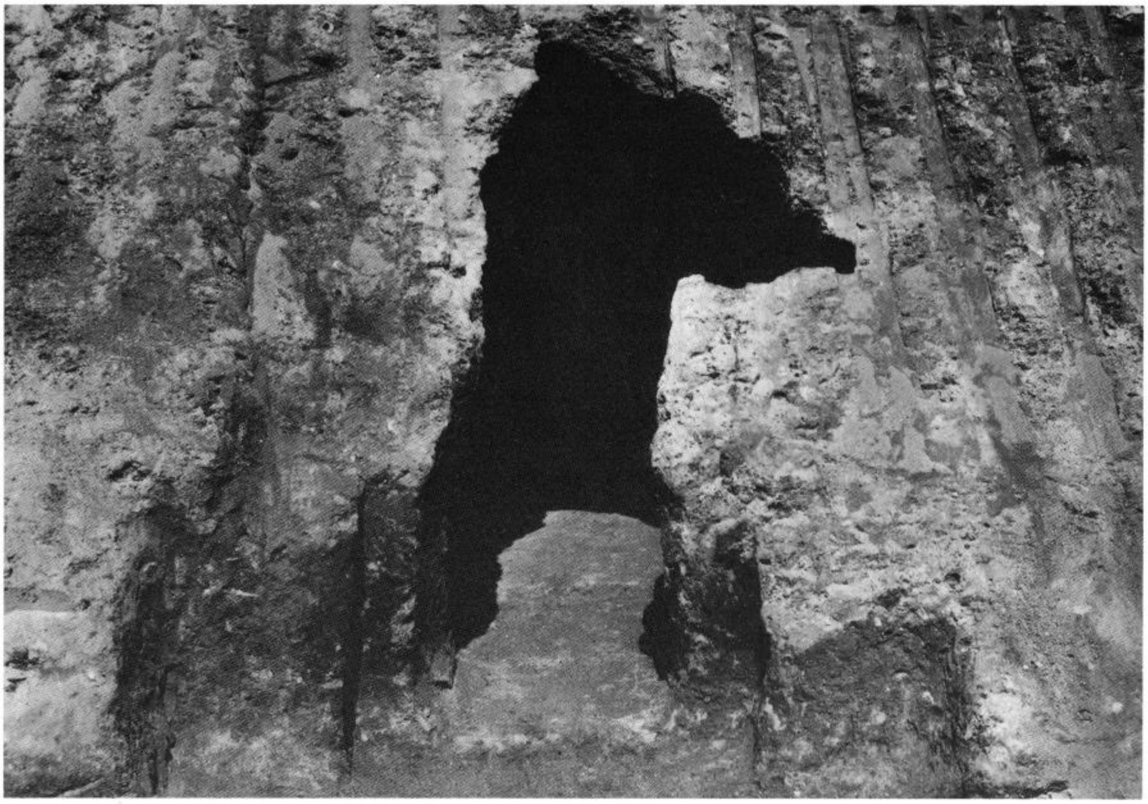
〃　『 〃 II』1978

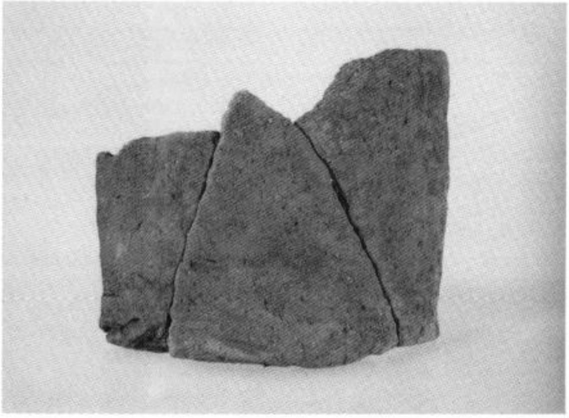
2．長谷川清之「蛍ヶ丘横穴墓群採集の埴輪」

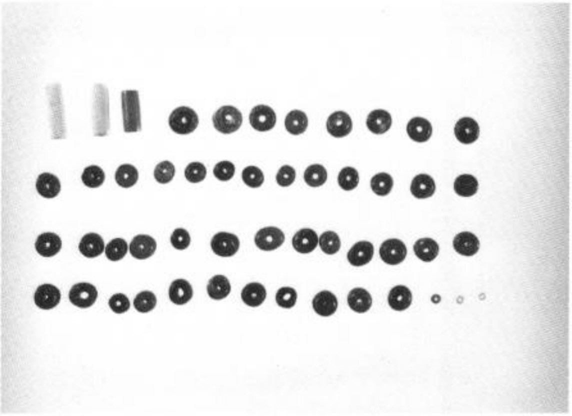
田川歴史資料集(1) ――古墳時代編1982

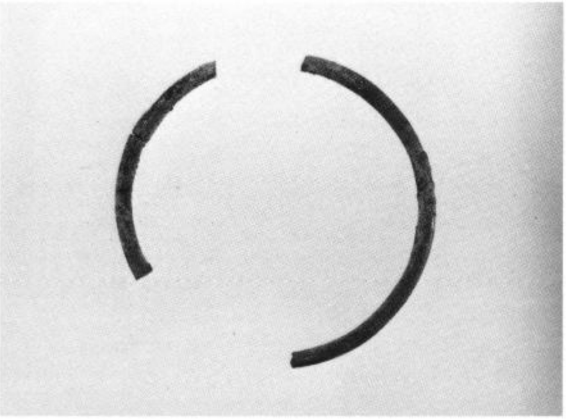
表6 玉類計測表

	名　称	高さ(mm)	幅(mm)	色　調		色　称	高さ(mm)	幅(mm)	色　調
1	管　玉	18.4	5.2	灰　青　色	27	ガラス丸玉	6.6	8.9	群　青　色(淡)
2	〃	17.4	6.0	〃	28	〃	6.2	8.3	〃
3	〃	13.5	6.1	グリーンブルー	29	〃	5.8	8.7	〃　(淡)
4	ガラス丸玉	6.0	10.0	群　青　色	30	〃	5.5	8.2	〃
5	〃	7.3	9.8	〃	31	〃	6.0	8.2	〃
6	〃	7.5	8.8	〃	32	〃	6.6	8.7	〃
7	〃	5.2	10.0	〃　(淡)	33	〃	6.4	8.0	〃　(淡)
8	〃	6.2	9.6	〃	34	〃	5.6	7.1	〃　(〃)
9	〃	6.4	9.0	〃	35	〃	4.9	7.7	〃　(〃)
10	〃	7.0	8.0	〃	36	〃	4.3	7.8	〃　(〃)
11	〃	5.3	8.8	〃	37	〃	6.0	7.8	〃
12	〃	7.0	8.6	〃	38	〃	6.5	7.4	〃
13	〃	6.6	8.0	〃	39	〃	5.6	8.4	〃
14	〃	7.1	8.8	〃	40	〃	4.7	7.4	〃
15	〃	6.6	7.7	〃	41	〃	6.0	7.8	〃
16	〃	6.7	8.8	〃	42	〃	4.6	8.6	〃
17	〃	6.8	9.5	〃	43	〃	4.9	7.8	〃
18	〃	6.3	8.6	〃	44	〃	4.9	7.1	〃
19	〃	7.4	7.9	〃	45	〃	5.4	6.8	〃
20	〃	6.0	8.9	〃	46	〃	5.8	7.0	〃
21	〃	5.8	8.8	〃	47	〃	5.4	6.9	〃　(淡)
22	〃	5.8	8.4	〃	48	〃	5.3	7.2	〃　(〃)
23	〃	6.6	8.5	〃	49	〃	2.8	3.9	〃　(〃)
24	〃	6.3	8.4	〃	50	〃	2.1	3.5	マリンブルー
25	〃	7.0	7.2	〃	51	〃	2.0	2.8	〃
26	〃	6.0	9.0	〃　(淡)	52	〃	1.8	2.5	〃









長浦1号横穴と出土遺物

八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告

昭和58年 6 月10日

発　行　　福 岡 県 教 育 委 員 会
福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印　刷　　株式会社　西日本新聞印刷
福岡市中央区天神 1 丁目 4 ― 1